女人藝術



新人小說號

附錄 女人大衆

長篇　三上於菟吉氏著

火刑

主婦之友社長　石川武美氏

千葉龜雄氏

『火刑』は一ケ年間の豫定で、『主婦之友』に發表し始めました。ところが讀者は、いま止めては困るといつて繼續を求めました　そこで二年といふことに延期されて、今その途中にあります。ところが、又も今年切りで終つては困るといふ要求が、盛んに編輯者の許に參りつゝあります。『火刑』が如何に歡迎されてゐるか。それを說明するものは、この事實でありませう。三年繼續の大長篇となつた曉、たしかに新レコードを作るものといへませう。

白熱しきつた藝術品の心臟と、冷嚴な科學者の澄んだ瞳孔を、わが三上君はいしくも具有してゐる。惡魔のやうな聰明をもつて、血みどろな現代情痴の世界へ突き進み勇敢なメスを下す外科的作家はない。これを尖銳な社會透察が裏づける。『火刑』何といふ三上的深刻な名題であらうか。名題が性格的に適はしい以上に、內容は、三上的個性のすぐれた完成を、讀者の前に妖花のやうに、さんらんと、もつと完全に、するであらう。

上卷　新刊

定價壹圓五拾錢

送料十八錢

淀君

婦女界主幹　都河龍氏

菊池寬氏

本當の意味でいふ才色兼備の女性－それは淀君である。その淀君は、日本一の本舞臺で、思ひの儘の大活劇をやつた女性である。その儘の小說である。この『淀君』の執筆を、現文壇の鬼才三上於菟吉氏に賴むと、『自分が豫てから書いて見たいと思つてゐた女性である』と言つて直ぐに快諾された。そして婦女界に連載されることになつた。果して大好評である。讀者は熱狂した。世評は愈々高くなつた。そこで單行本として出版されたのです。

三上君の歷史小說は、所謂大衆文藝とはその選を異にし、藝術的香氣に於て、奔放なる構想に於て、一怪奇なる藝術境を現してゐるものと自分は信じてゐる。『淀君』の如き書き古されたる史上の人物も、三上君の快筆に依つて現代的妖婦性を帶びて、その珠の如き肢體を讀者の前に曝してゐるものではないか。

上卷　新刊

定價壹圓五拾錢

送料十八錢

不壊の白珠

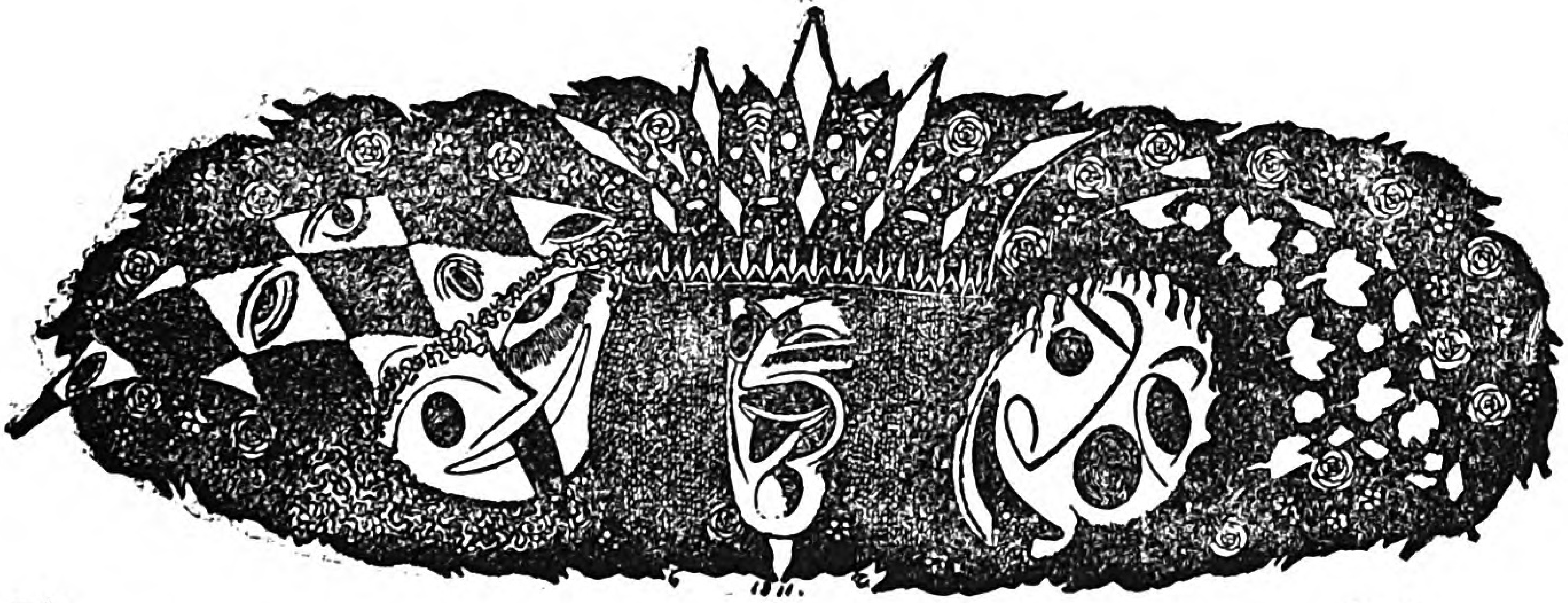
朝日新聞連載



菊池寛原作
村上徳三郎脚色
清水宏監督
佐々木太郎撮影

（片山）新井淳
（成田）高田稔
（俊枝）八雲恵美子
（母）鈴木歌子
（玲子）及川道子

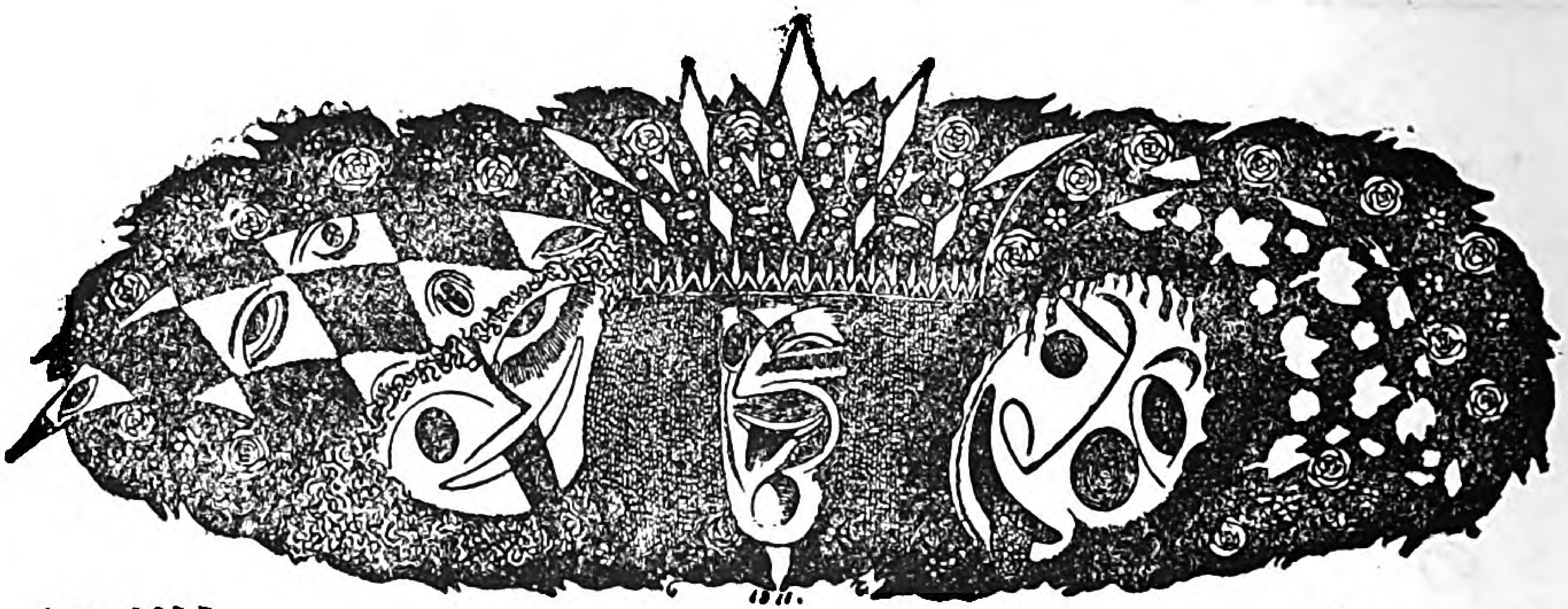
松竹キネマ特作映画



女人藝術十月號目次　―禁轉載―

創作十四篇

詩二篇



附錄　女人大衆



眞杉靜枝

小說は自身の血で書け、と教へられた　それにしては、まだ〳〵餘りに私には本氣さが足りない

六十になつて、飛行船の研究を初めたと云ふツェッペリン伯の話しは、愉快だ



中本たか子

まともに自分を見るのは
一番辛いことです
缺點だらけの私……
何一つとりえのない私……
でも……
今後を期待して下さい。



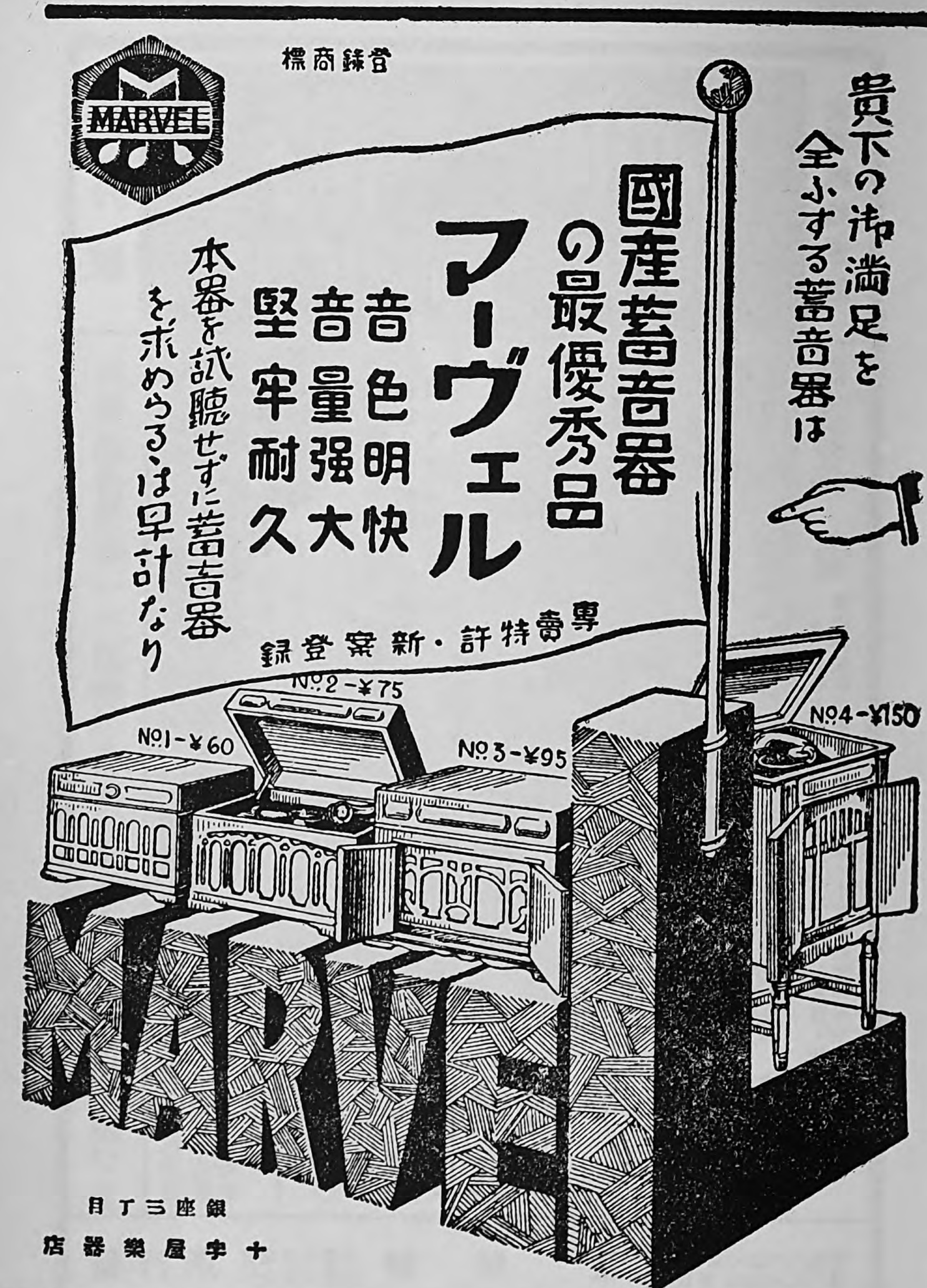
窪川いね子

寫眞屋さんに言はれたとほりにして草など取つてをります。



葵　イツ子

嵐の中で
心の家は
弱つてゆく
靜かになんか
とても。


登録商標
MARVEL
貴下の御満足を
全ふする蓄音器は
國産蓄音器
の最優秀品
マーヴェル
音色明快
音量強大
堅牢耐久
本器を試聴せずに蓄音器
を求めらるゝは早計なり
専賣特許・新案登録
No.1-¥60
No.2-¥75
No.3-¥95
No.4-¥150
MARVEL
銀座三丁目
十字屋樂器店



松 本 惠 子

四月馬鹿(エープリルフール)の前日に此寫眞を見て、急に惠に妥協を申込んだ友達があります。どんな酷い目に會はされるか知れなくて恐しいからださうです。そんなに惡戯をしさうな顏をしてゐるでせうか？





村山籌子

私の顔の中で
たつた一個所よい所は
額なのですが
私はそれを
黒い髪の毛の下に
かくしてあります。



戸田豊子

前略。左手に持つてゐるのが、「幸福な魔除黒猫」といふ
木製の玩具です。
この寫眞は私にしては頬が膨らみすぎてるといふ說もあり
ます。　敬具



大田洋子

つねに生活の胸底に寂しさが
あるせいか、私の顔は寂しげだ。
生活の裏書きが、いつも寫眞の
眼の中にある



山川朱實氏



水島あやめ

病み上りの或日、會社の都合で撮らされた寫眞です。あつちへ向け、此方を見ろ、手を組め、笑ひさうな顔をしろ、なんて澤山注文されて、仕方なく苦笑したところ、——丁度私達の仕事と同じ様な寫眞——。

長谷川時雨著

近刊

長篇 處女時代

定價金壹圓參拾錢

裝幀　三上於菟吉氏
口繪　池田輝方氏
挿繪　池田蕉園女史
挿繪　廣嶋晃甫氏

內容

處女時代

呪の家

「呪の家」――は古き時代の奇しき戀愛葛藤を描き、

「處女時代」――は現代の哀切なる悲戀を描く。

東京市麴町區下六番町十

平凡社發行

振替東京二九六三九
電話九段一六六四

文藝

責任編輯
菊池寛
山本有三
久米正雄

◇文藝創作の唯一最高指針◇

本社が先に刊行した「文藝講座」は劃期的な成功と信用とを得て、講座流行の先驅を成したことは諸君の熟知せらるるところであるが、今回創作文章に志す諸君の伴侶たらんがため、新たに文藝的創作を中心とした講座を開いた。講師は何れも各方面の權威者である。創作家志望者、文藝愛好者にとつては、唯一にして最高の指針たり得ると信ずる。

小說創作講座

主題小說論	菊池寛
小說の書き方	久米正雄
短篇小說論	小島政二郎
小說雜束	佐々木茂索
新感覺文學の研究	横光利一
プロレタリア小說の創作	片岡鐵兵

戲曲創作講座

戲曲作法	菊池寛
沠を樹てよ	山本有三
戲曲の創作に就て	久米正雄

シナリオの研究	北村小松
映畫脚本作法	村上德三郎
シナリオの書き方	村田實
映畫脚本精義	近藤經一

詩歌俳句創作講座

詩とその作法	室生犀星
詩について	萩原朔太郎
作詩講義	川路柳虹
短歌論叢	齋藤茂吉
俳句の創作	高濱虛子
新しき俳句の作法	荻原井泉水

大衆

大衆の實生活は激流だ。渦巻と飜亂と混沌と錯雜――それで一つの方向を取つて流れる。メチヤクチヤな姿の底に正確な律動が潜む。大衆の實生活の映出はノンセンスの外形と同時嚴然たる意力を捉えなければならぬ――本誌はそれをやらふとしてゐる。やつてゐる。

本誌獨特のプロ派大衆小說

蕎麥殼事件……井東憲

支那革命秘話 聞える曉鐘……藤枝丈夫

一つの骨が二つになつた話……霧島讓次

自由黨秘話 加波山事件……落合三郎

社會講座第一講 日本建國史 國民信仰の發生……本莊可宗

マクドナルド自叙傳……マクドナルド記

◇支那紛爭劇（滿洲里事件の眞相）……高橋利雄

◇テロリスト列傳

瓦斯問題戰線

◆闘爭の眞實の意味……

◆毒ガス發散史……

十月號

ゴーリキー

モスクワ印象記（六年目に歸つたその日の手記。赤都のカフエーを飲んで廻つた印象記。）

東健而譯

なぜ英國に共産運動が起らぬか……早阪二郎。後藤信夫。本莊可宗。其他數氏

新創案 大衆實話

愛兒殺し哀話……永松淺造

體刑希望者……竹内淚子

鐵條網と爆彈……和田隆

留置場物語……白井辰雄

定價三十錢

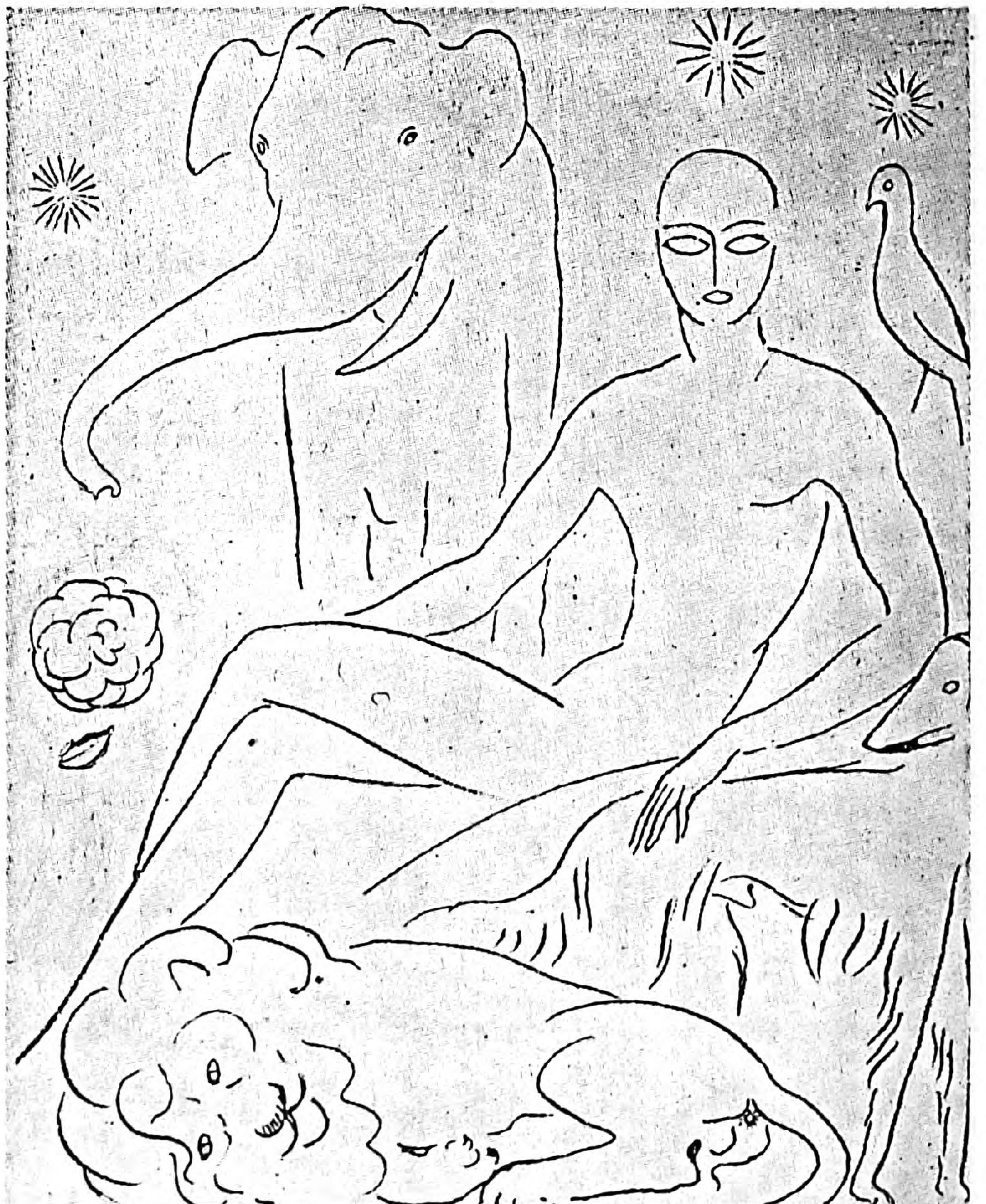
見本希望者は郵券五錢送れ

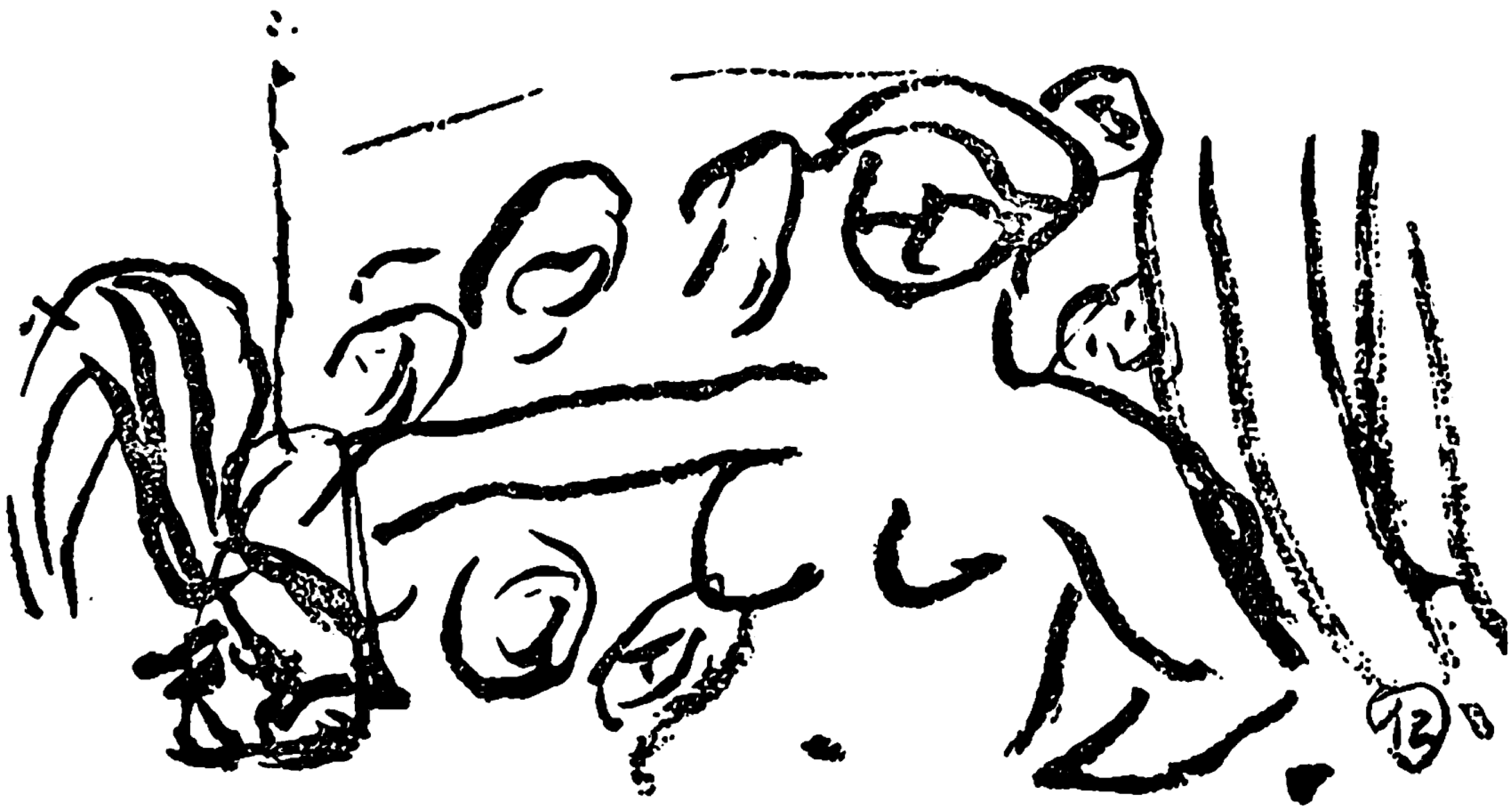
東京芝公園十號地四

振替東京八〇五〇一

大衆社

NYONINGEIJUTSU. 10





海外投資の一例

戸田豐子

一

チエッコの歸還兵や、ボロや袋を提げたアマ色の毛を持つたロシヤの避難民が何處でも彼處でも驛を埋めてゐた。

六月。大隊はニコライエフスクの街へ上陸し、舊守備隊と交替になつた。

六月——黒龍江は雪解けの濁水に膨れ、豐かに波紋を刻む。マストの林立。生ぬるい風がニコライエフスクの街中に擴がり、鮭や鱒のカマスが荷揚場へゴロタのやうに打ち揚げられる季節であつた。

白衣の鮮人が野菜車を押して郊外の部落から出て來る。コサックの長靴と拍車が馬上に光つた。板敷の歩道に日本の駒下駄が鳴つた。ロシヤ女のプラトークがひれのやうになびき、彼等は實に饒舌に市場（バザール）をあさつた。漁夫の逞ましい赫ら顔が街へ入りこんで來る。そこで日本女も諸所から狩り集められた。チタ、ハバロフスク、ニコリスク。

樫のやうな大男は、風のやうに女たちを薙ぎ倒してゆく。支那町には一番から十二番までの日本娼家があつた。天草女の販路は概して狹く、上海に於けるロシヤ女のやうに國際的な吸盤ではあり得なかつた。彼女等は味氣ない程、使用價値を減少されてゐたし、市場には白露産の新鮮な逸話づきの商品が豐富に出揃ひ、販路を競つてゐたから。しかも彼女等の使用價値をさへ絶大とする、虱のたかつた生ぐさい漁夫や、陰氣に眼を光らせる鑛夫、木材會社の下級社員、獵奇的な外國船員級の購買者が、女たちの白粉を一層荒ませていつた。そこへ持つて來て、兵士だ！

大隊がこの街に入つた時、街は朝霧に覆はれ、造船所のサイレンが呻めいてゐた。起重機の下へ荷揚人足が群れた。支那人の肉屋が鳴き喚く豚を屠殺所へ追ひ立てゝゐた。雇人が街路を掃き、ゴムホースで水を撒き、街角や廣場で犬が吠えた。郊外に近い街道では、獰猛に眼を光らせた鑛夫等が群をなして通り過ぎた。露・支・鮮・ギリヤーク、オロチヨンの各人種のとりどりな服裝――街には小じんまりした領事館があつた。

街は、常態的には、六十五人の日本娼婦を持ち、九百萬尾の鮭・鱒と、パーセンテイヂの上位を占める金鑛、林産の集散地である。だから各國人の漁夫、鑛夫、農夫、娼婦等の餘剩勞働を專らその燃料として膨脹してゐる街であつた。賃資の壓力は計り知ることの出來ない下層に陰蔽されてゐる。反過派の自治國主權及び日本軍隊は街のほんの表面的な權力を代表してるに過ぎなかつた。

二

兵士山中は、彼等の傍へ近づき、少し吃りながら云つた。

「俺は君に聞くがね、俺達は一體誰のためになつてゐるんだ！」

司令部の前で、山なす冬營の食料品を整理してゐた海軍防備隊の水兵は、呆然として彼を見た。丸顏で、眉の濃い男だつた。

「いや、人違ひぢやないんだ。俺は君の感想を聞きたいんだが、つまり、君達海軍は愉快かね。」

「愉快？　何だい、そりや。」シヤツ一枚で蠅を追つてゐた別の男が、やゝ喧嘩調子で起ち上つた。

「いや、不平がないかつて云ふんだ、吾々陸軍は、實に退屈で、苦痛だがなあ。」山中は相變らず丸顏の方を見乍ら云つた。

「さうか、近頃よく、君みたいなのがやつて來るがね、吾々は君達のお相手になつてゐる程閑人ぢやないよ。」相手が、桑の實色に熟した唇をふるはせるので、山中はあはてゝそこを離れた。

「彼奴はスパイか、宣傳者だぜ。」と、背後で、毒々しく云ふのを聞き流しながら。

「伐木、作業、歩哨、調練……そんな一日、錆びた歯車のやうに動

く俺達…、それもいゝさ。しかし、俺達は一體誰のためになつてゐるんだ！　チエッコ・スロバック・そいつは俺らの目の前で國へ歸つて行つたし、居留民つたつて高々酌婦か出稼人ぢやないか、だから國民は、俺たちがシベリヤに來てゐることすら忘れてゐるかもわからんよ。――第一憲政會ぢや、全然、シベリヤ出兵に反對なんぢや…」別の時、チヌイラフ砲臺の歩哨に出てゐた仲間に、さう云つて見た。

「ぢや、内閣でも變つたら、吾々も内地へ歸れるわけだね。その歸休兵は、山中の說を素直に受け入れた。「早くさうなつて吳れりやなあ。恥かしい話だが、俺は兄嫁と一緒になつたんでね。兄貴が子供を二人も殘して死んだもんだから…、しかし、俺の赤ん坊も今年中には生れる筈だよ。彼奴はゴム會社へ靴を作さへに行つてる。根が丈夫でない體だから、案じられてなあ。しかし、山中君、こんな話は誰にも云はないで吳れ給へ。」

しかし、三田といふも一人の男は、高飛車に嘲笑した。

「よしんば、山中！　お前の云ふ通り吾々が全く無意義に、でたらめに、シベリヤ三界に晒されてるもんだとしても、これはどうにもならない事さ。せめてお前が、原敬に匹敵する程の大政治家であるなら、その意見に對して大いに敬意を表するがね。ハッハッ…」

そこで我が山中はぺしやんこになつた。根が陽氣で、人懷つつこい性質だけに、彼のノスタルヂア は益々進行して行く兆候があつた。「女たち」に對してさう度々支拂ふ金はなし、だから彼はレストランの窓際で海綿みたいにウォツカを吸ひ取り、ロシヤ×の唇を食べかけてゐる將校を發見してびつくりすることがあつた。

所が、或る夕暮、街の毛皮屋の前を步いてゐると突然耳になじまない發音が彼を遮つた。

「ダナサン、ダナサン」

街燈の下で、女は白狐の様にほつそりした輪廓をかしげてゐた。ぼつと黑ずんだあたりから青い蟲のやうに光る眼！

「ふ、俺を將校と間違へたんか、御生憎さまだよ。」

彼は頸を振り、手を橫に振つた。

女はあつさり頷き、スカートを翻へすと、敷板を叩く靴音も慌しく遠ざかつて行つた。廣場の紫みが女の肩を呑むと、彼は靴で踏みしめてゐた紙片を拾ひ上げた。何故ともなく、帽子を目深かに下し、口笛を吹きながら營所へ歸へつた。

「奴等はほんとのドン百姓の寄り集りだ。機關銃一つ持たず、鐵砲を逆さに擔いだりしてやがる。未だ十七八位の子供上りも居れば、よぼ／＼の爺もゐたな、俺が殺した奴はボロ／＼の日本の軍服等着込んでゐやがつた！」と一人が云つた。

九月、河口に近づいた一隻の定期船がパルチザンの略奪に遇つた。乘客中に三十名ばかりの白軍がまぎれ込んでゐたので、――

急報によつて守備隊が出動した時、敵は船に歩み板をかけ、岸の杭にワイヤーロープを結びつけながら悠々と作業をしてゐた。「まるで自分の品物のやうに」船内の小麥粉、鹽鮭、毛織物等を車へ積みとつてゐた。

「で、その圖々しい奴等を殺せるだけ×して來たよ、」とも一人が云つた。

銀のやうに艶をなくした小ッぽけな太陽が空にかゝり、鈍く孤を畫くやうになつた。

結氷期が近づいた。

狼のやうに鬚の伸びた伐採夫が筏に乘つて街へ歸へつて來た。績いて赤や青の毛シャツを着た鑛夫等が銅色の脛をむき出して街へ這入つた。一文なしに使ひ果した漁夫が僅かにくすねた鹽鮭や女の手紙を行李の底に隱して内地へ歸へつて行つた。

――黒龍江へ古綿のやうな雲が近づき、河面と速力を競つて流れた。空と地面の距離がぐつと近づいた。

「なんだ！　見せろ！」

炊事場へ雪のついた白樺のまきを運んで來た山中はまきを土間へほうり出して猛然ととびかゝつて行つた。

「馬鹿野郎！　パルチザンめ！」

吉田は不意を打たれて怒りに燃えた。彼はしやがんでゐたので、よろけながら土間へ手をついて眞直ぐに立ち上つた。

「何をするんだ！」

「見せたつていゝぢやないか、なあ、おい、」

「見せるつて？　何を？」

山中は相手のまきのやうに堅い肩へ手をかけた。

「隱さんでもいゝぢやないか、俺も知つてるよ、それ位の事は。」

「見せてやつてもいゝが、お樂しみな畫でなんかないぞ。」

皺くちやに丸めた紙片を渡されて山中は體中がかつと熱くなつた。

「これは俺が何時かあの女から貰つたのと同じだぞ、お前、何處で手に入れた」

「そんなものあ何處にだつて落ちてらあ、――××軍人たる友へ、××軍は過激派討伐のため最早二年間を經過し、而も人民と勞働者を殺してゐる。吾人の希望は××軍がこのシベリヤより撤去することと是なり――か。俺はもう大體暗記しちまつたよ。虫のいいことを言つてやがるな、併し之があの音に聞くパルチザンつて奴だらうか」

「奴等はどうして日本字を知つてるんだらう」

「そりや、支那人か朝鮮人が書くんだらう、宣傳文、宣傳文つてばかに大さはぎするからどんなもんかと思つたら、案外だつたよ」

「しかし、お前は氣がとがめると見えて、一見それとわかる様な恰好で讀んでゐたよ」

「どれ、俺は燃すから！　邪魔しやがつて、薪をあんなとこへおつ

ぼり出して飛びかゝつて來る奴があるか」

この頃から、そろ〳〵街は不吉な豫感に脅え出した。

遠くで森が燒かれた。コサック村が一週間も燃え續けた。

「ブラゴエへパルチザンが這入つたさうだ。」「ブラゴエぢや、奴等恐ろしく幅を利かせてゐるさうだ。」「首領は胸に黑いリボンを結んでゐる。」

近くの森林が燒かれ出した。ハバロフスクとの通信機關は敵の電信線切斷によつて屢々斷れた。保線作業が最も重大な使命を果す樣になつた。しかも、敵は後から〳〵電信線切斷を行ふので「敵は結氷期を待つてニコライエフスク方面に向ふらし警戒せよ。」この情報を最後に街は完全に通信機關から孤立して仕舞つた。

マゴ方面へ保線工事に向つた兵士は、フットボールみたいに膨れて擔ぎ込まれてきた。心臟だけが、薄紙を鳴らす樣に生きてゐた。繃帶に埋れてデス・マスクの樣な彼のベッドの傍で、マグネシユームが幾度もたかれた。村へ歸へつたら靑年團支部長にでもなりさうなチヨビ髯の生へた看護卒が、彼の理解し得ない言葉を繰り返すのだ。

「君一人が助かつたんだぞ、後のは一人殘らずやられたのだ、君は武運が强かつた、その時の樣子が一つも記憶にないかね。勇士君！敵も三人死んでゐた。負傷者は橇で運んで行つたらしい。味方のものは橇も銃も軍服も皆掠奪された。死骸は素つ裸に剝がれ、さうさう君だけはシャツを剝がれずにゐた。」

病兵舍の二重窓が氷つた。短册のやうに狹い寢臺を二列に並べて負傷兵や流感患者が臭い息を吐き合つてゐた。勇士君は二日目の午後屍體室へ運ばれた。

パルチザンは益々尼港（ニコライフスク）へ迫つて來た。一月下旬短かい戰鬪の後、砲臺を奪はれ、海軍無線電信所を破壞され、遂に、尼港守備隊は敵の包圍に陷ちた。

この頃、コルチヤック政府は深淵を目がける投下物の足どりで沒落を急ぎ、一九二〇年一月、遂に完全に崩壞した。

これは××帝國主義にとつて恐ろしい誤算である。白露援助の代償として期待し得るものが多きかつただけに、この目算はづれは我が投資者諸君にとつて、大々的の脅威であつた。しかも事態はますます「惡化」した。

二月、浦鹽に端を發した極東革命の巨濤はチタ、ブラゴエ、ニコライエスク等をまきこみ、ハバロフスクにまで、氾濫した。各市街では戒嚴令下の軍政が布かれる樣になつた。取急ぎ「內政不干涉」と看板を塗り替へたものの相變らずそこらにごろ〳〵してゐる日本派遣軍を尻目にかけ乍ら。

市民の××軍に對する增惡、反感は漸次高まつて行つた。兵士等は何處でも壓迫を感じた。

「通行人は肩や腕や尻にまで赤い布をびら〳〵飾つてゐる、街角へ五六人が立止る、白い息を吐き、頭を振り腕を突き出して喋る。群はだんだん大きくなる。馬車屋は橇をとめる、支那人！　朝鮮人！人々の肩や肘が搖れる、女が白い歯を見せて笑ふ、醉ひどれ馬車屋が橇の上に立ちはだかり、ウラー、ウラーと歡聲をあげる、」

それからデモが始まり、日本字の宣傳ビラが撒かれる、

「外國の仲裁を要せず」「露國は××軍と戰ふことを欲せず」「勞農政府萬歲」それからボイコットで執拗に對抗した。

結局、四日、武裝解除戰の正面的衝突となり、××軍は夥しい建築物を破壞「全市白化」のカムフラジーを見て、僅かに日頃の鬱憤をはらすことができた。

尼港救援隊の出發は空しく、解氷期を待つの他はなかつた。

三

雪解けの黑龍江は急速に氷塊群を消化しやうとしてゐる。泡立ち、コーヒー色に溷濁した河面のベルトは、ゆるく、ゆるく廻轉して行つた。

そして河口の市街はビスケットのやうにもろく崩壞してゐる。黑焦げの肌、蜂の巣のやうな傷痕、ボロ、ハンテン――街全體が燒死體のやうにみにくゝ横はつてゐた。波止場や森林帶に近い諸所に赤旗を振る樣な火焰がちらつき、煙が風に壓されて、低く四散した。

偵察機上の將校は、唾でぬれた四Bの鉛筆を「尼港市街略圖」の上に押し當て、碁盤型の街路を辿る。日本領事館……要塞司令部……大隊本部……米國公使館……島田商會……

しかし、今地上は、破壞物の堆積、鐵、煉瓦、ナマコ板等の起伏であるに過ぎない。木造家屋はアッサリ炭化し、消滅した。不燃質建築物は食ひかけのパンのやうに外廓だけを殘して……

燒け殘つたペーチカ、折れた起重機、鐵骨の類が、僅かに蒼空へ抵抗する。墓標の樣に、又は、奇妙な植物の樣に。

電線は不消化な纖維體のやうに崩壞物の上に沈着し、瀰蔓した。棧橋は十二支腸の樣にあやふやに河面を匍伏してゐた。

おい、見ろ！

眼下は、かり殘された頭髮のやうな密度で隆起し、家並と家並の間隙が蚓蚯のやうに蠕動した。支那町の矩形の一角――こゝだけが無事で助かつてゐる。いよ〳〵もつて奴等も敵の片はれに違ひないのさ。――同じ東洋人であり乍ら、實に情ない奴等だ。これで、口を拭つて知らん顏をしようてんだから。

機上では、こんな會話があつた。しかし彼等は用意の爆彈を投下する代りに、不淨物へ唾を振りかけるやうに考へて、白い宣傳ビラをバラ撒いて行つた。

「××軍は絕對にロシヤ人及び其他の在留邦人の生命財産に危害を

及ぼさゞることを保證す。暫く當隊の許可なく當地より各方面へ航行することを嚴禁す。もし以上の趣旨を誤解し、××軍に對し反抗的行爲及び此の禁止を犯す者ある時は何人に對しても斷呼たる處置をとることを宣言す。」

支那町では、避難民の小供等が宣傳ビラを追ひかけて走つた。彼等はひしやげたバケツを拾ひ、崩壞した取引所や死骸の傍からロマノフ紙幣や、オムスク紙幣その他の有價證券を探して來る。大人は、街から煙に迫ひかけられて逃げ込んで來る豚や家禽の分配を爭つた。彼等は屋内から敷布やテーブル掛け、シャツ――ありつたけの白布を持ち出して竿をくゝりつけた。

白旗！

四

軍隊は新占領地へ闖入した。小銃一挺が各自の武器であつた。野營と行軍に疲勞困憊した一團りの兵士等と、手工業的な武器と――勿論彼等は戰鬪することを豫想してはゐなかつた。「マゴを越え、カロマ一帶を偵察したるも敵影を認めず。」といふ偵察飛行隊の報告を信じてゐたので。

軍隊は空しく煙りの中を彷徨した。人間や豚の死骸を跨ぎ、灼熱した堆積物を乘り越え、頭上の崩壞物を避け乍ら、茫然と街を歩いた。しかし、尙一個の軍隊であつた。街が濃霧に閉される頃、彼等は征服者の威容を銃劍に閃めかし支那町の隅々へ吸込まれて行つた。

「……ニーナは女の大將で、何時も皮の服を着て馬に乘つて街を歩いてましたわ。女の跨を裂かせたり、みもちの奥さんのお腹を潰させたりしたのは、皆彼奴の指圖だ相ですよ。……それから彼奴等は街中へ石油を撒いて火をつけたんです。チヌイラフの砲臺から持ち出した爆烈彈をそこら中の穢物へ押しこんで歩いたんです、……それからどんなに多勢が殺されたことでせう。……あの悲鳴が耳について離れませんわ……眞夜中……島田鐵工場裏の第三アドミラル街でも隨分むごたらしい殺し樣をした相です……」

訊問されたのは白粉やけのした片頰に傷痕のある天草女だつた。

隊長はペンを取つて情報を書いた。

「各方面の情報を綜合するに、この古今未曾有の邦人大虐殺は五月二十四日より二十七日に亘つて行はれたもの丶如し。生存者は僅かに支那人の妻たれりし婦女二名のみ。」

石田は濕つた地面へ腹這ひ、眼を閉ぢた。焚火の煙りが咽喉をからむ、二つ三つ咳をした。五、六人の靴音が彼の前面を通り、闇の底へ消えていつた。

「豚だ！　シッシッ」

「豚か！　シッシッ」

聲もやはり闇の底からである。交代だな、と思つた。誰かが齒ぎ

しりをした。誰かが聲をひめて語り合つた。しはぶき。豚の鳴聲。

石田は小銃のやうに痺れた肘を伸し、仰向きになつた。冷たい霧が鼻へ、口へ、耳へ、しんしんと流れ込む。土地の濕氣が厚いラシヤを通して、無氣味に皮膚へ粘着した。……………崖下の雪は肉桂色に染まつて、シヤツや長靴や、外套や、外套のやうな死骸が散亂して、……無數の鳥が群がり下りて、ハムの樣な肉片を啄んでゐた……第三アドミラル街――そこには又夥しい刺殺體が重り合つて臭氣を發してゐた。煙りを除けて顏を近づけると、何萬といふ蠅群が飛沫のやうに顏を打つた。……

石田は、惡夢のやうに記憶へ反撥しながら、焚火の方へ轉がつて行つた。

「何だい！」誰かが顏をねぢむけてゐる石田を探つた。

「咽喉が乾くんだ、ひどく、」彼は不必要な程、目を瞠つて焚火を見つめた。霧が濃い。誰も答へて呉れなかつた。

石田は乾草へ顏を埋め、食ひ縛つた歯の間で口笛を吹いた。秋虫のやうに細く、か弱く――

「……我が××飛行機が爆彈投下をやつたのは二十二日二十三日だらう……それで、虐殺は二十四日さ、だから俺たち將軍の來やうが遲かつたといふのは間違ひだぜ。俺達が早く來たら、それだけ事が早く終つてゐるだけの話さ」三村の聲だ。

「……俺あ近頃まるで眠れないんだ、とろとろつとすると、直ぐおふくろの奴、耳つたぶへ粘着いて國言葉で吸鳴りやがるんだ、足を洗へつたら足を洗へ！ 何を云つてやがるんだ。足どころの騷ぎか、こゝへ來て、俺達の有樣を少し見て呉れ！ それから色々なことを吸鳴り合ふんだ。そのうちにおふくろはきまつてめそ／＼泣き出す仕末さ。その泣き聲が聞きたくないので、俺は一生懸命力んで目を覺ますんだ。目を覺ました時は、胸が早鐘をついて、汗びつしよりなんだ――考へて見りや、全く馬鹿々々しい話だが」

「誰だい！ その馬鹿くさいことを平氣で辯舌つてる奴は、おい！ その焚火の下の奴！ お前は確か臍ん中へ虫が湧いてんだぜ、セメソエンを飲んで早々下しちまへな、」

「そういふ北村、お前こそ、豚に臍を甞められた事もある癖に、」

「喧しい！ とに角、みんな眠れ！ 吾々はもつと睾丸(キンタマ)をしめてかからなくちや不可ん。」

「おやぢ」といふ綽名(アダ)を持つてゐる特務曹長が云つた。

「まるで、空氣枕のやうな頭だ。」

「俺の頭は石の樣だ」

それからも尚、皆がガヤ／＼云ひ合つてゐるのを、半睡の頭腦で聞きとめてゐた。石田は、俺のはゴムの樣だと云はうと思つた。

「彼處には、ロスケの死骸がまだ十八も轉つてゐるよ。」

通りかゝりの水兵が陽氣な顏でその話を聞いた。泥濘から足を拔

いて勢よく歩いていつた。海陸の兵隊が續々入港した。掃海作業が進涉した。彼等を頑强に拒み續けてゐたのは河口を閉塞した十八隻のバルチの敷設水雷だつた。

兵隊は死骸をかゝへてダラ〳〵坂を降つた。トタンを組合せてバラックを拵らへた。ナマコ板の四隅を摑んで死體を運搬した。砂を掘つて埋葬した。

兵隊は青縞のシャツや軍隊用長靴、銃劍の折れ、お守札等を拾つて茫然と河岸を歩いた。

街の商人は支那砲艦の掠奪を告發した。牢獄は蒼ざめた、丸太造りで、陽の目がささなかつた。側壁を削ぎとられた出納局。兵士は鐵片や瓦礫の下から歪んだ金庫を掘り出して擔ぎ上げた。オムスク紙幣やロマノフ紙幣、その他の有價證券は飛散するに任せた。避難民の子供等が、それを追つかけて走つた。汚れたプラトーク、裂けた上衣、麥粉袋を見る樣な鈍い表情。通行券を下附されるまで避難民は棧橋の上で長い行列を造つた。荷物へ腰かけてる赤いルパシユカ。——鼻の低い額の狹い男が「ロスケー」と呼んで腕を振り上げる。その度に列が少し宛、動搖していつた。

汚れた白旗を揭揚した漁船はどれにも避難民が充滿してゐた。不潔と食料欠乏のため、彼等の間に、腸チブス、惡性感冒などの病菌が瀰蔓してゐるのだ。デッキへ凝集した歸來民は、チョウクの樣に細い腕を擡つて、口々にわからない事を叫ぶ。

「つまり、早く自分等を上陸させて呉れ、」といふ意味なんで、と背の低い商人が金齒を見せて薄笑ひをした。避難船にまぎれ込んでいち早く、アレキサンドルスクから渡航して來た男だ。彼はホテルのマネジヤーのやうに後手をして波止場を歩き廻つた。

彼はアレキサンドルフスク港の恐ろしい景氣のよさを語つた。女たちがチタやハバロフスクから貰ひ集められて飛ぶやうな賣れ行きを示してゐることなども。

「今に、この街へ恐ろしい金が降つて來まさ、大したもんでさ」

「ふん、こんな血に汚れた緣起でもない街へ何處から金が降つて呉れるんだい」

兵士は、この男を少々薄足りない奴だと思つた。

「ところが、あんた、權利つて奴でさあ、こいつは恐ろしく當りますぜ。何一つとつたつて、一身上も、二身上も出來ますぜ。ハッハッヽヽ」

それから彼は「滅多にお手に入らない」ロシヤ製の「美麗な寫眞を賣りつけることに巧みだつた。

歸來民は忽ち町中へ吸ひこまれていつた。諸所に散在する物置、豚小屋はまたたく間に充滿し、彼等は何處へでも附着して眠つた。燒土や甲板や人糞の傍で眠り、チブス菌と蠅と病人が日夜培養されてゐた汚れた白旗を揭げた避難船が來る度に、コロンブスを迎へたニユーイングランドの土人のやうに、腕を振つて波止場へ殺倒した。

ハバロフスクやニコリスクから、特派員がやつて來た。彼等が避難民を物珍らし氣に眺め、同胞の愛國心を饅頭のやうにふくらすべく、誇張的なエンピツを用意した。

內地では——

殉難者の遺族が國民的同情の的となつたのは言ふまでもなく、可憐な子役は睡眠不足になる程諸所の追悼會へ引張り廻された。

「殉難者追悼會」——

陣羽織を着た義足の老俠が侍者に援けられて演壇に立上つた。

「……——あらゆる階級を網羅した同胞六百の犧牲者は我々六千萬國民に代つて死んだものである。彼等の靈を滿足させる方法は取りもなほさず我々六千萬同胞が滿足する方法をとつて初めて目的が達せられるのである——」

への字に口を結んだ。

「內閣糺彈野外政談大演說會」

鼻の低い目尻の下つた男が立上つた。

鼻のそり返つた、口の大きい、輪廓のいかめしい男が叫んだ。

平たい顏にブラシのやうな髯を蓄へた熱情家らしい男が立つた。

「……！　……！　パルチザンの殘虐！　この猛獸毒蛇を狩るに何ぞ諸國の鼻息を窺ふの要あるか！」

傍ら、サガレン・沿海兩州の經濟的價値がしきりに計算された。

いち早く、ロシアの地質調査所の二技師が石油利權買込運動のため入京した。彼等はゲイシヤガールを饗應されながら「燃料、重油、氣球ガスとして最も適當であり、熱量は內地炭をしのぐ程の——アスファルト油系に屬する、オハ地方の豐富な理由——」に就いて說き、我が企業家連を無暗に唾涎させた。

「アメリカのシンクレーヤ會社からも內々の交渉がありますが！！」

とこの技師等は外國人らしく見通しのつかない表情にかくれながら言ふ。

「英國でも理由調査隊を寄こしてゐます」

「しかし、この北カラフトをめぐる、國際的な石油爭奪戰で、日本が斷然優位に立つてゐることは明かである。「尼港事件」は「國家の權威・國民の感情」に賭けても賠償を要求せずにはをかないと我企業家連は餘りやきもきもしない。

我國石油年產額	七一、〇〇〇、〇〇〇ガロン
同消費量	一六六、〇〇〇、〇〇〇ガロン

この不足額は、例の油價協定による海外に高い石油となつて年々米國から輸入されてゐるのだ。然るに北カラフトの石油含有量は實に約八百萬噸。我が、不足額だけの十萬噸を、年々採掘し續けても約八十年は採油し得る勘定である！　石炭、森林、漁業等に對しても——同樣な統計的な證明があげられ「北カラフトの無盡藏な寶庫へ！」といふスローガンが一大輿論を捲き起すに至つた。

夏になると尼港の守備隊はあつさり、亜港（アレキサンドロフスク）へ引上げることになつた。全く、「から壞されて」ゐてはどうにも仕樣がなかつた。のみならず、亜港を中心として「北樺太のムジンゾウな富源」の方へ勢力を集中する事が必要であつたから。

この夏、アレキサンドロフスク港は全く不思議な町であつた。内地から入こんで來る人々のため、波止場は何時もゴッタ返した。寫眞製造者、千三ッ屋、材木屋、雜貨屋、食ひつめ者、女の周せんや、設計屋――やゝ上層の範疇に屬する代議士、新聞記者、企業家――ありとあらゆる種類の人間が入込み、街の疊代を急速に暴騰させた。卵、酒、女、ハミガキ――あらゆる日常品がプレミヤム付きでなくては手に入らなくなつた。

カーキ色の服を着て、頸へ手拭を捲いた軍夫等が、波止場へ群がり貨物の汎濫を食ひとめてゐた。軍馬をまき上げる起重機、檢疫官を乘せたランチ、チタを引上げた一打（ダース）の娼婦、利權屋を追ひかける宿引、御用船の軍夫の肩から、拋物線を畫く軍事郵便行嚢、――それらが、埠頭の風景を成してゐた。

街頭では「官有土地貸下規則」に關する掲示板へ人山がバリケードを築いた。傍らには通行人を一々推何する軍用自動車が頑張つた民政部の大佐は夥しい願書の堆積に欠伸し乍ら腹を叩いた。――視察團の代議士や、新聞記者を案内させるために運輸部の自動車を呼ばなくてはならない……晩には宴會も開かなくてはならない……あの妓も呼んでやらなくつちや……、

冬ごもりまへは街の景氣もやや落付を見せて來た。

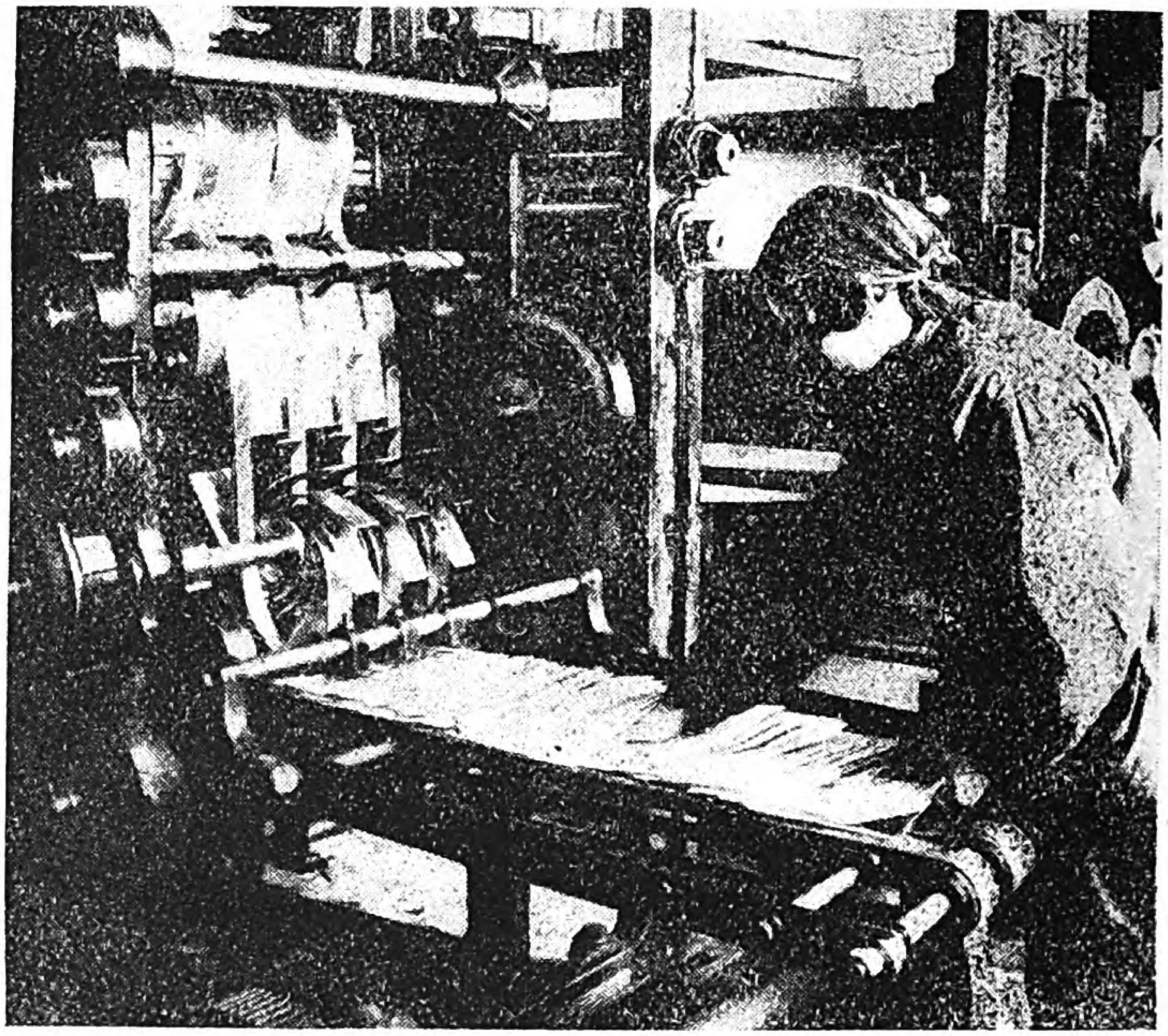
「石油石炭その他の鑛業權出願は當分許可せず！」

突然はり出されたこの鑛業取締規則は一攫千金を夢みて乘り出して來た小企業家連を頗る落膽させた。彼らは布巾のやうに艶のない女たちの皮膚を睨みながら、ヤケに酒を呷り酒場の器物を破壞した。しかし、多少とも殖民地から吸ひ上げ得た金で面々が蛭のやうに滿服し乍ら、内地へ引上げて行つた。

そして、最も近い「アレクサンドル炭坑」を陸軍が直接に採掘しやや南方の「ヅーエ」炭坑を三菱會社が經營することになつた。

また我海軍渇望の的である石油は、ツイミ河口、ヌイスキー灣附近――ヌイスキ灣そのものが原油であると言はれてゐる――に於て例の久原を盟主として資本家合同の北辰會と海軍との同共事業として、採掘を開始することになつた。

この、腕によりをかけた、殖民地的二重搾取圏へ同じく被搾取の好標的たる、支那、朝鮮、白露の勞働者、内地の自由勞働者が殺倒し、吸收されて行つたのは言ふまでもない。



一歩

逢川いね子

一

郊外の省線の驛のプラットフォームに、ひろ子は暗い顔をして腰掛けてゐた。ぢつと前を見てゐる眼が憂鬱さうに光つてゐる。ある爭議の寄附金募集に、名士の家々をたづねて坂を登つたり下りたり、その疲れの故もあつた。寄附金募集などといふその仕事の性質からも來てゐた。

　彼女の前の、プラットフォームから見渡す大きな立木の間に、早春の午後の柔かな陽ざしをあびて、黒土色の落ちついた家々が日本畫の様に靜かに立つてゐた。ぢつと見つめてゐると、ひろ子の氣持は泣きたい程、靜止を願ふ懶惰の思ひにづる〳〵と落ちこんで行くのだつた。……

　ひろ子の今までの生活は、決して小さな安逸の中に夢を見てゐた様な、そんな生活ではなかつた。會社員であつた彼女の父は、周圍から來る生活の重み自分の力が堪えきれなくなつたとき、自ら意識して、つまり身を落とすことに決心したのであつた。彼女は、父の失業

と同時に、小學校さへも終へぬ痩せた小さな身體を、金をとるために働かされねばならなかつた。併し今まで彼女を育てた家庭の雰圍氣は彼女にしみ込んでゐた。彼女は奉公を嫌つて女事務員になつた。白粉などはつけたくもなかつたが、ヴイオリンを習つた。祖母と二人暮らしの四疊半の部屋には更紗のカーテンを引いた。そして貧乏と時間に絶えず脅され追ひ廻されるこの何年かであつた。然し現在は、彼女は新しく出來た文筆的派出婦として、口述筆記に原稿清書に、幾分時間のゆうづうのきくのを幸ひに、やつと糊口をしのいでゐた。

ひろ子は、小さな風呂敷包みを胸に押しつけて抱き、ツッとベンチを立ち上つた。彼女のおろかしい哀れな夢、それは結極夢でしかなかつた。ひろ子は自分の心の中に、幾分誇張的にわざと叫ぶやうに言つた。

「さうだわ。今の社會は、私たちの生活から、陽の光まで奪つてゐるんだ。」

そして涙の一杯溜まつてゐる眼を、涙を拂ひ落とす樣にわざと大きく見開いて元氣に歩き出したのであつた。

二

市電の終點の雜閙の上に、忘れられた樣に妙にそぐはなく淡い夕陽がさしてゐた。空になつた電車が、先がつかへてゐるらしく五六臺續いてゐて、窓から顔を出して話し合ふ車掌たちの、聲だけが人波の雜音の上を飛んでゐる。後から走つて來た電車が仕方なく、停留所のずつと手前で客を下ろすと、その人々の隙間をねらふやうに、幾臺もの自動車が焦々と警笛を鳴らす。反對側の電車がしつきりなしに鈴を鳴らして通り拔ける。それらの襲ひかかるやうな車の間を多くの男女が右往左往する。

狹い人道には、夜店が丁度屋臺を組み立ててゐてのろ〳〵と一とかたまりになつて動いてゆく人たちが、その屋臺の柱や汚れた色の幕など踏みつけてゐる。それらの頭の上に、小間物屋や吳服屋の赤い幟がはた〳〵と風にあふられてゐる。吳服屋の店先に吊り下げられた赤や青の布きれは、日燒けと手垢に薄ぼんやりとなつてゐる。フルツパーラーの飾窓の中のパイナツプルは、食べたら口の中が埃でざら〳〵しさうだ。バーの生ビールの空樽は軒先から轉がり出てゐる。大きな食料品店の奧では着飾つた奧さんたちが番頭を相手に思ひ〳〵の罐詰めをあさつてゐる。

その日は日曜の故か、いつもより盛裝した女が多いやうだつた。赤や、青や、紫や、長い絹の袖をひるがへし、桃色に化粧した自分の顔を、始終意識して歩いてゐる。

ひろ子はその日、組合の用事で、松江と二人方々を歩きまはり今歸るところだつた。二人は、春先きの風に吹きつけられて、唇が妙に熱つぽく引きつり、顔は埃でばさ〳〵になつてゐた。その顔に、艶

けのないおくれ毛も始終まつはつてゐた。二人の着てゐる羽織の肩は垢つぽく日に燒けて、こまかい模様が地色のなかに崩れてゐた。

「今日は何だかずい分奇麗な人が通ると思つたら日曜なんですね。」

通りすがつた若い女をやりすごして、ひろ子が松江をかへり見た。

「さうですねえ、もう春になつたら、みんな着かざつて歩いてますねえ。」

松江は老けた口調でさう言つて、いつものやうに口元に薄笑ひを浮べた。ひろ子は幾時間かを二人きりで歩いて、何か女同士の打ちとけた氣持でしみじみと云ひ出した。

「私たちはやつぱり駄目ですねえ、プチブル根性が出て、奇麗な着物がやつぱり目につくんですよ。もつともこの頃では、それは、違つた世界のものとして見えるので、別に欲しいつていふやうな氣ぢやあないんですけど、何だかそんな氣持を更めて考へると憂鬱になつてねえ。」

「あ、さうですかねえ、私、そんなことありませんよ。」

松江はさう言つて、同じ言葉の調子で續けた。「だけど、考へますねえ。」

「さうですねえ。」ひろ子は松江の後の言葉を自分流に解釋して、そこに見出した二人に共通なものを、打ち開け合ふお互ひの氣持をいたはる様に答へたのであつた。

然し松江は前を行く女の薄色の絹の羽織を見て、やはり口元に薄笑ひを浮べたまま言つた。

「一體、あんな盛裝して歩いてゐる人達は、どんな氣持でゐるんでせうかねえ。何も考へないんでせうねえ。」

松江のその言葉で、ひろ子の顔がハッと緊張して赧くなつた。松江は、ひろ子のさうした狼狽に氣づいた風もない。赤く燒けた松江のその顔には、愛嬌といふ媚びた女の表情が、影だになかつた。彼女はつい先日郊外の或る乘合自働車の車掌を首切られて、工場の口を探しながら組合へ働きに來てゐるのだつた。ひろ子は松江をうらやましく思つた。

三

夕方のラッシュ・アワーで、あはただしく多くの人間の入り亂れる交叉點であつた。一方の角に、ひろ子は一抱への新聞を抱いて立つてゐた。新聞を抱えた手に一枚のポスターを下げてゐる。『無産者新聞　一枚五錢』小商人風の男がポスターを讀みながら彼女の顔をじろ〱と見て新聞を覗いた。

「無産者新聞を……」

ひろ子がさう言つて差し出すと、男は默つて向ふをむいて行き過ぎた。他の角には同じやうにして松江と操が立つてゐた。今日の辻賣りは或る爭議へ應援資金を送る目的なのであつた。

ジヤラジヤラと夕刊賣りの鈴の音が、丁度交錯する電車が同時に止まつて、乘り換への電車めがけて傍見もせずに馳けてくる一團の人の間を、縫ふてやけに突つ走る。夕刊賣りはさつきからひろ子を見てはにやく笑つてゐる。赤い電柱のかげに後手をして立つてゐる市電の信號手も、始終意味あり氣に、ほゝ笑みかける。勤め歸りの中には、折鞄を抱へた黄色い肩章の警部らしい姿もちよいく交つてゐた。彼らは一寸ひろ子を白眼に見て、すぐ向ふをむいた。この辻賣りは管轄の署に屆けを出してあつたのだ。――然し去年の夏無産者新聞が新聞紙法違反として起訴されてからは、この當時とは全く事情が異つて來てゐる。

電車を待つ間、わざとひろ子の前を行つたり來たりして、じろじろとひろ子を見る者もあつた。引き返して又そのまゝ歸つて行く女もあつた。詳しく申込所を聞いた男もあつた。一枚、二枚と新聞は賣れて行つた。その新聞一枚の賣買の交渉にも、ひろ子は何か親しい氣持を感じるのだつた。それは彼女らしい感傷的な感じ方でもあつた。

ひろ子はふと目の前を通り過ぎる小柄の婦人に氣づいた。それは有名なB夫人である。ひろ子はつと夫人の前に新聞を差し出した。

「いくら。」

振りかへつて、夫人はぶつきら棒に聞くと、蟇口から五錢出して新聞を受取り、そのまま見向きもせずさつさと行き過ぎた。ひろ子はさあつと赧くなつて、厭な氣がした。B夫人は、今は右翼の無產黨幹部の妻である。彼女は新聞を差し出されて、つけ込まれたやうな氣がしたらしかつた。又ひろ子は突嗟にそんな氣が起きたことは事實だつた。

――それにしてもずい分厭な態度だつた――ひろ子は行き過ぎたB夫人とは反對の方を向いて一寸ぼんやり考へ込んだ。しかし彼女はすぐ元氣に顏を上げた。

「構ふもんか。」自分のお體裁ぶつた羞恥の氣持を嘲笑ふやうに呟やいてあたりに目を配つた。

電車から降りた一とかたまりの人が線路を渡つてこちら側へ移つて來る。その中に埃で白くなつたやうな印絆纏を着た朝鮮の勞働者が多勢交つてゐた。鮮人たちは赤く燒けた疲れた顏を向けて、ひろ子を見てゐた。しかし彼らにはあまり日本の字が讀めないらしかつた。ひろ子もぢつと鮮人達を見てゐた。住む國を奪はれ、そしてそれが故に思ふ存分に搾られる彼等。――その時、彼女の横手から、やはり皆と同じ汚れた絆纏を着た背の高い鮮人が近寄つて來て五錢差し出した。ひろ子は優しく微笑んで新聞を渡した。

その鮮人は、外股にヒタヒタと線路近くへ歩いて行つて、その新聞を展げた。仲間三四人が大人のものを子供が覗くやうな表情で、彼の兩肩からさし覗いた。

無產者新聞は本年の八月になつて上告棄却になり、遂に發行を禁

止された。そして九月からはそれに代つて『第二無産者新聞』が發行されてゐる。

四

あたりはまだ夜明けから朝へ置き代へられたまゝにひつそりとしてゐて、白々とした空氣が靜かに動いてゐた。そこは或る製菓工場の門の近くである。工場の塀に向つて丁字形になつた道の角に、ひろ子は操と二人しやがんでゐた。

まだ工場のコンクリートの煙突も冷々として見える。尾を引いて流れる省線電車の音が時々聞える外、人通りも無い。さつきひたひた足音をさせて牛乳配達が一人通つただけである。ひろ子はその配達の下げたまつ白な牛乳の色にふと食慾を感じて、清爽な朝の食卓を想像した。「厭だな。私は。」と彼女は自分をほんとうに哀むやうに言つた。

可成り長い、丁字の足にあたる道の先が驛前の通りに出あつてゐて、そこに時々人の通るのが、こちらからもちらりと見える。ひろ子はその方を向いてしやがんでゐたが、やがて立ち上りながら、

「なかなか來ませんね。」と、操に言つて襟卷を首に卷きつけた。

「來ませんね、だけども來るでせう。」

操もさう言ひながら立つて、「今朝は寒いなあ。」と男のするやうに肩をゆすつた。

二人は袖を羽織の八ツ口へ突つこんで、胸の脇にビラを抱えてゐるのだつた。操は二三歩動きながらひろ子に言つた。

「こゝの女工さんはみんなこの道を來るんですからね、こゝ位ビラを撒きいゝところはありませんよ。人通りはないし。」

道の兩側の家も、中では微かに人の氣配がするやうに感じられたが、まだどこも戸が開いてゐない。たゞ製菓工場の塀に貼つてある、眞ん中に縦に赤い線を二本引つばつた無産婦人デーのポスターが、それはさつきひろ子達が貼つたものだつたが、そのポスターがあたりの靜かな空氣を破つて動いてゐるやうに見える。

そのうちに驛前の通りからこの道へ出つて來る娘の姿が一人二人見えはじめた。

「來ましたね。」操はひろ子に傳へてビラを持ち直した。

ひろ子も同じやうにビラを持ちなほしながらちよつとそのビラへ目を落とした。ビラは特にその會社の女工さん達を目あてに書いて、昨夜ひろ子達が謄寫版で刷つたものである。かうして街の眠りの覺めきらぬうちに出て來て日の暮れるまで、薄暗い工場の中で立ちづめにこき使はれる彼女たちの、そして僅かな生活慾にまぎらしてはあきらめてゐる彼女たちのその苦痛を、諦めのうちから引き出さうとしたビラであつた。折りたたんで家へ持つて歸つて、默つて、くり返し讀んで貰ひたいとひろ子はそんなことを思つた。ひろ子はまだ、このやうなビラが工場に持ち込まれると直ぐ其處で直接

に、従業員の活氣ある問題になればいゝといふ風に正しい理解は持てないのであつた。

近づいてきた娘たちは、前の日の夕方その同じ場所で、無産婦人デーのビラを貰つてゐるので、角に立つてゐる二人の姿にそれと氣づいたらしかつた。娘たちは二人の持つてゐるビラへちらつと視線をなげた。その顔は少しあらたまつてゐるやうに見えた。ひろ子たちは默つて少し自體を前に曲げてビラを差し出した。娘たちも默つてビラを受けとるとその儘ビラを讀み／＼行き過ぎた。

道の向ふを見るともう、後へつゞいて娘たちの姿がこつちへ近づいて來る。操はたまにガードの下をぬけて橫の道を來る人にも氣をつけることにした。ひろ子はいくらか活氣づいてふと見ると、いつの間にか工場の煙突は音もなく煙を吐いてゐるのだつた。

もう娘たちは四五人くらゐ連れだつて來るのもある。ひろ子と操は一人も殘さずにビラを手渡すようにした。またその製菓會社へビラが撒かれるのはひろ子たちが始めてだといふので、二人はそのことにも注意しなければならないのだつた。自分たちが彼女たちの仲間であるといふことが彼女たちにも分るように、優しく氣を配つてゐた。娘たちの中には、ビラを受けとる手の出し方にその好意を示すものもあつた。たど／＼しく聲を出して讀み上げて行く娘もあつた。しかしみんな、二人の前を通り過ぎて行く時は、誰もが妙にあらたまつて外のおしやべりをするものがなかつた。辨當の包を胸の上にかゝへた兩手で、ビラをひろげて讀みながら歩いて行つた。伸びた毛糸の襟卷がその首の上によれてゐた。

またその中には、かなり年增の人もまじつてゐたが、彼女たちも渡されたビラをおなじやうに讀みながら行くのだつた。そうしたおかみさんたちの中にひとり、袢纒の袖で辨當包を蔽ふてうつむき勝ちに急ぎ足で來るおかみさんがあつたが、彼女はビラも無意識に受け取つてそのまま元のやうに下を向いて通り過ぎて行つた。ひろ子は默つてその後姿を見てゐた。そのおかみさんの姿には、眠つてゐる間にもなほ胸にのしかかつてゐる心配のあるのが見えた。しかし彼女は工場の門限に間に合ふように出掛けて來なければならないし、その心配を背負ふたまゝ、長い仕事時間中をかけ廻らなければならない。――

そんな感傷的になりさうな氣持をおつ拂ふようにしてひろ子が後を振り向くと、筒袖の染絣の袢纒を着た娘が二人連れで、ひろ子達の方を見てちよつと肩で突ッつき合つて妙に反抗的に元氣に歩いて來るのだつた。二人共その工場の中では年少者であらう、まだ引詰めの桃われに結つてゐて、艶のない髪が櫛の歯も入れないらしくささくれだつてゐるひろ子は左手からビラを二枚とつて娘たちの行手に差し出した。娘たちはつうつうと肩を曲げてひろ子の前を通りぬけた。その先きにゐた操がそれを見て少し歩み寄つてビラを渡さうとした。

「いらないや！」
二人の娘はさう言つ操の前も馳けぬけた。そして角を曲がるとこちらを振り返つて顔を突き出して言つた。
「馬鹿！」
そして身體を曲げてくゝつと笑ひながら二人で又何か言つた。操とひろ子は判然とした意味なしに顔を見合せた。ひろ子は何か羞恥と焦燥が湧いてくるのを覺えるのだつた。
二百人位の女工たちが三十分程の間に工場へはいつてしまふと、後はぴつたりと絶えてしまつた。あちこちの家で、戸を開ける音がしてゐる。ひろ子たちの頭の上でも窓が開いて、はたきを持つた女が怪訝さうに糊の包を下げて歩き出した二人を窓から覗いた。豆腐屋のラッパが入り亂れて聞えてくる。ある家の門口では親父さんが出て薪火をしてゐた。二人はその前に立ちどまつた。火は薄い煙を上げてぱち〱音をたてながら燃えてゐる。下駄をぬいで足を差し出すと、石でたたかれたやうに、冷えきつてきり〱する爪先が薪火の熱にむづがゆく。ほぐれてゆくその家の窓の障子に朝日が光るやうな黄色い㨾をなゝめにゑがき出してゐる。
ひろ子も操もさつきから言葉少くなつてゐた。しやがんで爪先を撫でながら、
「工場へ入らう。」
と、ひろ子はつくづく思つた。薄く涙がにじんできた。

くだらぬ自己紹介

村田千代



隨分と躊躇の後、遂に胡麻粒のやうな目をお目にかけます。この胡麻目が、何を見て來て、何を見附け出さうとして居るか。うんとお笑ひ、おけなし下さい。常に胡麻目を閉ぢて、イヤ〱と首ばかりふつて居ましたのに。
明治四十一年七月二十一日、こんな日を私は知りようもないのに、忘れてはならない時にされました。生地は信州赤穗で日本一と自稱する大村。學校は松本で何でもふやしたい根性市。その修學の途中、十六歳の時、胡麻目にシケをくつて滿一箇年の乾燥法をよぎなくさせられました。その間に讀むこと、書く事の道樂をおぼえたのであります。
小學校時分、家人に閨秀畫家と綽名されたのを思ひ出して、畫ばかりかいて居ました。ですから今でも自分で畫いた帶などしめて、ゆかたの腰上に袷の具をつけたり、とんまなことをしてゐます。
大正十五年十二月に上京して昭和一年に東京女高師を受けて、昭和二年に美事にすべつたので有りました。
和昭三年になつて、運試しのつもりで、婦人公論の婦人論壇へ三、四時間で、書いたものを投書しました。運よくか惡くかそれが當選して、ちよつぴりしたものに過分の稿料を送られたので又それからコツコツとたゝきはじめたので有ります。ですけれど私の本業はまだ〱依然と針仕事、草むしり、家事雜用で有ります。



古いかまど

大石千代子

ふるいかまどの火よ、消えずに
今宵も燃えよ、
私の廢屋は暗くしめつぽくて
朽ちた寂寥の窓邊にはいこふ寐椅子さえない
かまどよ、消えずに明るく燃えよ
私は今、悲哀に荒らされた床に座つて
かくも冷めたい感觸の底から
かまどよ、汝のうら枯れた
殘り少い火をみながら
霧雨の樣に落ちこくる
果敢ない涙を綴つてゐる。
火よ燃えよ、消えずにもえよ
かつて、私の朗らかな早春の夜の饗宴は
夜光石のやうに燃えあがり
紘のやうに張り切つた健康な熱情は
紅ばらの褥で踊りをおどつた。
その夜、高々と捧げし理念の透明な盃は

今は落ち砕(くだ)けて破片(かけら)さえなく
私は今宵此處に坐つて
犬の樣に伏匐ひ、慘めにも兩腕をたれて
はるかに遠くいつてしまつた
その朗らかな匂ひを嗅いでゐる。
かまどよ、燃えよ
今宵、胸の奥つき遙るかに
斷れたヴウイリノは追憶の音律をさぐりながら
破れ、はかなくも壞れた序曲(プレリュード)から
盲目になつた三部曲(トリオ)を彈かうとしてゐる
かまどよ、もえよ
私の體はヒソ〱と冷えて
唇はふるい
寂寥の暗雲に閉ざされた眼は
いまは只、汝(そなた)のうら枯れた殘り少ない光を
戀ひながら
霧のやうに落ちてくるはかない涙を綴つてゐる
燃えよ、かまど
せめて今宵だけは
光をこめて、燃えよ焔！

（一九二九、四、二、夜）（リオデジヤネイロの偶居にて）



町の一風景

大谷藤子

低い平凡な山が、鈍重に匍つてゐた。中腹から頂上にかけて、赫土が食み出て幾つかの斑點を描いてゐた。それが頭髮を侵した腫物の痕のやうに見えた。いぢけた松や雜木が、食み出た赭土をめぐつてイんでゐた。

蛇のやうに細長い町は、山の麓で尾を鍵の手に曲げ、直ぐ點々と崩れ散つてゐるのであつた。鍵の手のあたりに、此の町の貧困が暗く澱んでゐた。そこでは、體を窄めて入るために出來てゐるやうな燐寸箱程の家が風雨の垢に汚れ歪んで老婆の樣によろめきかけながら押し並んでゐた。此の家々はすべて小さな全身から激しい惡臭を發散させてゐた。便所も溝も塵箱も露路も、あらゆるものが特殊な息を吐いてゐるやうに思はれた。どんな新鮮な空氣でも此處を通り過ぎれば、一秒間に饐えたやうな臭氣で重たくなるに違ひなかつた。

小學校は町外れにあつた。朝になると子供たちの饒舌が、騷然と此の貧しい一角を突き拔けて行つた。町の富裕者たちは、小學校移轉説をしばしば提議した。かれらの子供たちにとつて現在の學校の位置は距たりすぎてゐると云ふのであつた。

——打ち明けて云へば、あの貧乏通りを毎日通はせるのは教育上よろしくないと思ひますわ。

町長夫人は學校移轉が話題に上るたびに、薄い唇を技巧的に引き緊めてから斷言した。

——それに學校を訪ねるお歴々の方に、求めて町の恥を御披露してゐるやうなものですわ。云はゞ、あの邊は掃溜ですからね。

これらの言葉は、町の上層階級に屬する夫人達にとつては共通に重大な意味をもつて響いた。校舍は早晩改築すべき必要に迫られてゐた。改築と同時に移轉をも實行すれば、この貧しい街角が失ふものは單に通學する子供たちの騷音だけではなかつた。かれらはそこで突きつけられる貧困の無力を受け取らなければならないのだ。その時の想像が、かれらの心の中で激しい反撥力を孕ませて行つた。

學校が新しい敷地を物色してゐると云ふ噂は、少しづつ流れ初めた。この街角は耳を峙て、俄かに生々と動搖し眼を剝き出して身構へしたのであつた。

その日、氣短かな町長夫人は派手な長襦袢の裾を蹴つて、玄關へ走り出した。書生が直した下駄を苛々と爪先きへ突つかけた。一間ほど門の方へ向いて歩くと、突然クルリと引き返して書生に聲をかけた。

——ちよいと。

書生は其の時、兩手を伸ばして無遠慮な欠伸をしてゐたので、すつかり狼狽して續けざまに無意味なお辭儀をした。

——ちよいと、私の襦袢の衿が後の方で出過ぎてゐやしない？

——は？

——何を魔胡ついてるんです。襦袢の衿を見て呉れと云つてゐるぢやないの。

若い痩せた男は顏を赭らめて、遠慮深い視線を夫人の衿元のあたりへ流した。

——別に何ともございません。

——出過ぎてゐないの？

夫人はちらりと青年を見直すと、四十五歲の熱のない瞳を少しばかり光らせた。

——お前の着物の着方は、どうしたと云ふのです。まるで胸を曝し出してゐるぢやありませんか。訪ねていらつしやるお客樣に對して失禮な。

から浴びせかけると、大急ぎで門の方へ歩いて行つた。書生は其の時、夫人の短い衿足に絡みつくやうにして、娘の欲しがるやうな若々しい襦袢の衿が六七分も覗き出してゐるのに氣がついた。かれは自分が、眼も定まらないほど魔胡ついたのであることを知り、激しい自己嫌惡に囚はれた。

暫らく街路を歩いてゐるうちに夫人は手帖を忘れて來たことを思ひついたので、左側の文房具屋へ斜に辷り込んで、手帖を出させた。

——まあ、こんなに澤山！

町長夫人と見て、店にありつたけの手帖の種類を並べた小僧に、かの女は不機嫌な視線を投げた。

——私は一冊でいゝのよ。選り好みなんかしないたちだから。

そこで、かの女は最初取りあげた手帖の値段を聞いて財布を開い

た。事實、かの女にとつては手帖は講演會場での裝飾品に過ぎないのであつた。

――鉛筆も頂戴。

――手帖用のでございますね？

――えゝ。私、いつそ赤い色のを買ひませう。

小僧が素早く鉛筆を削つて呉れた。夫人は滿足して、少しばかりの微笑を此の店へ落して立ち去つた。

――全く、こゝは掃溜だわ。子供たちは、いろんな悪いお行儀に此の邊で取り憑かれて來るのだらう。

街角を曲る時、夫人は冷たく唇を結んで義憤と云つた感じで、此の貧しい家並の存在を心の中で彈き飛ばした。

講演會は、小學校の講堂に開催された。來賓席へ案内されると、夫人はユツクリと新しい手帖を取り出した。そして二三度、靜かに頁を繰つてみて鉛筆を拔き出して間へ挾みこむと、そつと膝の上へ置いた。それが、儀式のうちに小さな一つの形式を行ふやうに或る技巧を帶びてゐた。

「生活改善について」と云ふ演題であつた。赭ら顔の樽のやうな太つた男が小馬鹿にした冗談を撒き散らして婦人の聽衆を笑はせた。

――婚禮調度の節約。

――買物は、すべて主婦自ら選擇し、現金拂ひにすること。(八百屋、魚屋などへも主婦が出かけて買へば、安價に濟むこと多し)

町長夫人の手帖へは、こんな文句が瞬く間に十頁も費して記入された。かの女の走り書きは、五六字で一頁を埋めるほど壯大なものであつた。やがて、かの女は斯うした講演を誰からか聞いた記憶があるやうに思ひ出した。かの女は筆記を中止し、短い太い首を少し捻つた。すると、かの女の瞳に聽衆中の一人の娘の欠伸が映つた。娘たちはかうした刺戟のない講演から解放されたいと熱望してゐた。その氣分が場内に物倦い沈滯を充滿させた。そして町長夫人も其の氣分に捲きこまれ眠氣を催して來た。かの女は手帖を閉ぢ、婚約中の娘の支度を胸で計算してみた。そして娘の婚禮調度を、心の中で制限なく膨脹させた。かの女は聽衆の娘たちを見廻し、そこで微笑が胸元から突きあがつて來た。

學校へ行くと、キヨは石塊のやうに默つてゐた。先生は、キヨに注意しなかつた。おとなしくて、學課が出來なくて、中背のキヨから先生は何一つの印象を引き出すことが出來なかつた。尋常五年生だと云ふのに、かの女は「朝」と云ふ字さへ知つてゐなかつた。

キヨの級には、町長の娘がゐた。この娘は全級の勢力を背負つてゐた。かの女は、いつも首席であつた。快活で猪のやうに自分勝手に振舞つてゐた。

中風症に憑かれたやうなふらつき易い家の間に押し挾まれて、潰れさうにキヨの家があつた。雨が降ると、どこからか汚水が土間に

滲みこんで來て家中が臭かつた。キヨが或る日、跣足で鷄に餌を投げてゐると、町長の娘が通りかゝつて立ちどまつた。

――あんたの家、こゝなの？

――えゝ。遊んで行かない？

娘は返事の代りに、肩を聳やかした。キヨは其の時、輕蔑された感じで悄氣た。そして汚れた前垂れを、そつと解らないやうに捲りあげた。キヨは、娘の機嫌をとるために狼狽してゐた。

――この鷄、とてもよく卵を生むのよ。

――さう。だけど、私もう歸るわ。母さんが此處で道草を食つてはいけないつて云ふの。道草を食へば私のからだの匂ひを嗅ぐと直ぐ解るんですつて。

町長の娘が、さつさと歸つて行くのをキヨはぼんやり見送つてゐた。その翌日、キヨは理科の試驗の時、町長の娘が細い小さな紙片を隱して見てゐるのに氣がついた。キヨは答案が書けないので、何の氣もなく娘の方を放心したやうに眺めてゐた。突然、町長の娘は顏を上げてキョト／＼と周圍を見まはした。そしてキヨの視線に打つつかると、火を點けたやうに眞赤になつた。キヨは、其の小さな紙片に試驗問題に出さうな理科の筆記がしてあるのではないかと、初めて胸を衝かれて眼を外らした。

その時間が濟むと、町長の娘が珍らしくキヨの側へやつて來た。そして默つて、一册の手帳をキヨの手に摑ませた。

――これ、母さんから頂いた手帳よ。私、澤山持つてゐるから、あんたに一册あげませう。

キヨは吃驚して、暫らく相手の顏を凝視した。そして、次第に朧ろ氣ながら娘の心を讀んだ。

――婚禮調度の節約。

キヨが手帳を開くと、こんな文字が赤く躍つてゐた。町長の娘はキヨの顏を窺ひながら不安げに少しばかり作り笑ひをしてゐた。

それから後、キヨは町長の娘を見ても今までのやうに壓しつけられるやうな感じがしなくなつた。石塊のやうに默つてゐても、心は木の葉のやうに輕く浮いた。キヨは校庭の隅で、ぢつと町長の娘の姿を蛇のやうな視線で追ひかけることがあつた。それに氣づくと、娘は明るい顏を反向けて泣き出しさうにするのであつた。

小學校移轉は、いつか確定した事實となつた。貧しい街角から代表が選ばれて、町長まで抗議したけれど、何等の反應もなかつた。かれらは既に完全に、町の有力者、富裕者と逆行しなければ自分たちの權利を發見することは出來ないと知つて來た。この移轉問題に對して街角の人々は、無視された自分たちを最も鮮やかに全町民の目前に突き出し、此の存在を身に泌みるほど富裕者たちに感じさせやうとして策をめぐらせた。手帖と赤色の鉛筆を持つたキヨは、忘れずに町長の娘の姿を眼で追ひかけてゐた。



華やかな危機

大田洋子

一

酒場の一時である。

嬌笑を浮べた女達の聲は、美しくも疲勞した蒼い舟だ。

そして油の溶けた樣な倦怠は、彼女たちを浮べた酒場の波だ。

かあッ、かあッと、靴の音を遠くまで響かせて。銀子は歸つて行つた。嘗ての日には、高等的賣淫をやつてゐたと云ふ彼女は、季節の變り目になると、腕に注射をしながら、その關節の痛みをかくして、更らに美しくよそほつてやつて來た。彼女は一つぶ五十圓はするといふ、栗つぶ程のダイヤを、無數にちりばめたヘヤピンをさしてゐた。彼女は素張らしい巧みさを持つて、男から男へ渡つてゐた。それが今、彼女の知つてゐる唯一の生き方なのだ。

二

「何ぼ飲んだかて、こたえへんわ。わても、もう、歸らして貰ひまつさ」

そう云ひ乍ら、奥のサロンから、ぽうッと櫻いろに眼尻を染めた女が、流れるやうに、廊下へ出て來た。彼女は、妾としての生活を二ケ月で見限りをつけて、カフエーに來た女である。どうにもあがきの取れない、藝者家業の末路を、高利貸で百萬長者だと云ふその男のところへ持つて行つた。そして莫大なものを身につけてしまふと、彼女はさらりと、手を切つた。赤新聞はそれを、彼女と、その情人との計畫的な共謀作業だと書いた。

『ひどい奴や、云ふてますて？　そうだんがな、無い奴から取つたんやあらへんし、あるところから取つたんだすよつてにな。當り前のことだつしやろ』

　と彼女は云つた。彼女は、自分達の生活に最も濃厚に附隨するものは、男と金だと云ふことを、イヤと云ふ程わきまへてゐた。彼女たちは、自覺症狀を持たない階級病者なのだ。

　粂子も又、そうした一群の中に、巣喰ふ女だつた。生きるためには斯うもして見なければならないのだ。內臓は食物を入れなければ、飢えるのだ。飢餓の苦痛が、賣淫より苦しくないとは云へない。

　カフエーの女たちは、その辛い諦觀を背負つてゐた。

三

　二時の新聞電車は若い男と女とを滿載して、アルコールに、ニコチンの汗臭を發散させ乍ら、ひた走りに走つてゐる。粂子は天下茶屋で降りた。降りるとすぐ、腐敗し初めたブランデーの香が、苦い紐のやうに咽喉へ這ひ上るのを感じた。彼女は蹌踉として、灯のついた二階へ歸つて行つた。二階へ上ると、そのまゝ窓へもたれて、げろりと吐いてしまつた。次の間には同棲の山瀨が、未だ起きてゐて、繪の具をといてゐた。白麻の彼女の帶に、阿蘭陀船が殆ど描き上つてゐた。山瀨は、薄綠の繪の具で波を染めてゐた。

　二人の眼が、きかッと喰ひ合つた。そして瞬間に離れたが、冷い憎しみと、悲しみが、二人の空間へ露出した。

『大かた出來上つたよ』

『何がなの』

『帶がさ。醉つぱらひ！』

　彼女は山瀨の側へごろりと横になつた。朱色の阿蘭陀船の肩の處に、DUTCH．GALLEON‥‥と横に流して描いてある。彼女は横目で、じろりとそれを眺めてゐた。すると、その字の上を、小さい眞黑な煤煙のつぶが、無斷に轉つてゐるのが見えた。彼女は煤煙を吹いた。帶は風をはらんでふくらんだ。

『何をするだ』

　山瀨は初めてじつと彼女を見た。

『白い眼をむいては何なの。煤煙が、ころころころがつてるからよ。情痴と煤煙とだ。世の中なんて』

『ぼん〳〵云はないで、寢てくれよ。眞蒼な顏ぢやないか。何だつてそう飲むんだ』

『人に酒をのませてさ、百圓紙幣を幾枚も幾枚も、ひら〳〵見せてドライブしないかですとさ。おまけにたつた五十錢づつの番外を皆に吳れてやつて、こう然としてるのよ。それからね、大阪中を自分のもの見たいに吹鳴り散らして、表へ出て行つたの。丁度ね、表でみどりが愛人と話してゐたのをつかまへちやつて、送つて行けつて聞かないの。とうとうね、近くの交番へ引つ張られたんぢやないの。その男はね、數へ切れない程の肩書きを持つた人なんだけど、

連れの人つてのが、一人は檢事で、一人は辯護士なのさ。だから、いよ〳〵となると、あべこべに、巡査をさん〴〵にやつつけてしまふの。うんとも、すんとも云はせないやうにしておいてね、鼻唄を歌ひ乍ら行つちやつたわよ。私、巡査の顏が可哀相だつたの。職權が、あの人達のたつた一つの武器ぢやないの。だから、あのブルジヨアの男達を、巡査や私たちと同じやうな生活しか出來ないやうにすれば文句はないのよ』

彼女はもつと、管を卷かうとしたが、不覺にも、深い眠りの中へする〳〵と落ちた。彼女の消化器は、彼女の放浪第一期の夢をはらんで酸素の如く快くねむり初めた。

四

赤い軒燈のついた石の門が入日に濡れてゐた。入日は追はれて、女たちはその門の中へ、華やかな危機をまきにやつて來るのだ。チヤツプリンの喜劇よりも、悲しい辛い世渡を、若い彼女達は、笑ひと醉ひと、虚僞とで、誤間化して生きるのだ。彼女達は、女工になるよりは自由で明るい生活を選んだのだ。

奴れい的な女中の生活よりも、カフエー女の生活の方が、いゝ生活だと云ふことを、彼女たちは如實に知つてゐた。

桑子は、黒つぽい紗の着物に、ダツチガレオンの帶を締めて、輕快な足どりで、カフエー、火群の家の門を入つた。玄關にみどりが若い外人のやうに美しい横顏を見せて、柱に寄つて立つてゐた。彼女はいきなり桑子の手をつかんで云つた。

『昨夜のあれね、私、癪だから、あれから追つかけて行つてね、須磨まで送つて行つてやつたのよ。そしたらね、やつぱりそうだつたわ。變なことゝを切り出したぢやあないの。私、うまくこなしてやつたの。接吻一つさせて、あと誤間化してさ、三十圓なまで取つて來てやつた。須磨の停留所んとこへ下りて、馬鹿見たいに立つてたわよ』

巡査をやつつけた紳士の話しなのだ。みどりの顏はめづらしく櫻色に輝いてゐた。

『そりやあ一寸、痛快だつたわね』

と桑子はそう云ひはしたが、黒い血の地獄のやうな渦の中に喘ぐ自分達仲間の寂しさが、どろりと胸にこみあげて來た。

みどりは、このカフエーの地下室に子守女と一緒に棲んでゐた。彼女も幾年かの昔、本當の名前を捨てゝ、一人で喰つて生きた。

彼女の心に今在るものは、その月だけの享樂觀念だつた。明日の日を誓へない人生を彼女は知り拔いてゐた。男の持つてゐる物質は彼女の接吻で換算することが出來た。それは資財のない女の踏む一つの舞踏病だと彼女は考へた。

二階へ上ると、レコードでハワイヤンギタをかけ、酒場の前で女たちが互にもたれ合つて踊つてゐた。かつての日の、血のしたゝるやうな青春からいちはやく突きはなされた、眞暗な諦觀が彼女たち

の肩を還つてゐた。

けれど、男たちはどの女でもいゝ。萬年娘のよそほひをこらしたたゞそれだけの財産しか持たない彼女たちの、どの肩をでも優しく愛撫し爪の美しさをほめてくれるのだ。

槃子は客を相手に、二回ばかり踊つてゐたが、三階のスペッシャルルームへよつて、ベランダへ出た。一組の客が、アラスカ色のカクテルを飲み、あんずの實を嚙んでゐた。

ベランダの眞下は、堂島大河の靜かな水面だ。湖水のやうに蒼々と澱んだ水に、赤い提灯をつけたボートが、惱ましげなラブシーンを乘せて音もなく流れて行つた。三ケ月形の水門を、くつきりと描いた水晶橋のダムには水色のシグナルがともつてゐた。堂島風景は今、灯と水の霞だつた。

そこへギヤバジンの脊廣を着た長身の青年が上つて來た。新聞記者杉屋である。槃子はきらりと眼を輝かせたが、ベランダは薄いむらさきの光で仄かに霞んでゐた。杉屋は默然と歩み寄つて槃子に握手を求めた。彼女は杉屋の手を輕く握つた。

『誰の受持ち？　槃ちやんぢやないかな』

『私かも知れないけど』

そこへボーイが彼女の順番だと云ふことを知らせて來た。

『やつぱり私だわ』

彼女の聲はうはづつてゐた。

『よかつたな』

杉屋は落ちついて腰をかけ、マッチを摺つた。杉屋は、槃子が女學校の生徒である時分から、カフヱーへ來るまでの彼女の運命の路を、じつと見て來た男の一人だつた。

『この間はありがとう。皆よろしく云つてゐた』

『そう』

『そう、つて相變らず冷いんだね。あの朝四時頃眼をさまして見たら居ないんで、皆、どうして歸つたのかなつて心配してゐたよ』

『どうしてつて、別にあれ以上ゐなくつてもよかつたぢやないの』

『いや、そうぢやないよ。どうしてつて云ふのは、なぜつてんぢやないや、電車でか、タクシーでか、どこから乘つたかつてことだ。』

『電車の音を聞いたからすぐ飛び出しちやつたのよ』

『そうか。それからがコンパクトさ。忘れて行つたなと思つたんだよ。それで、パチンと開けて見たら、白粉ぢやなくて、ゲルが十圓入つてるんだ。前の晩、みんなで、さんざん金がないつてこぼしただろう？　だからあゝやつておいて行つたんだつて、皆、馬鹿に感激しちまつたのさ』

『その場の氣まぐれね。何も私、山氣はないのよ』

『僕は山氣かとも思つたがね』

『戀愛的にならね』

杉屋の家では、その二階へ未熟なソシヤリストの連中が巣を作つ

て、遠き世界への夢を語り合つてゐた。たゞ杉屋は不鮮明な態度で彼等へ、傍觀的な愛情を持つてゐるにすぎなかつた。粲子にしてもそうだつた。何としても彼等自身は、もし次によき時代が來るとするならば、それへの階段にすぎないのだ。粲子は山瀬と一緒によくその二階へ遊びに行つた。杉屋は山瀬の從兄弟だつた。

『あの朝、山瀬は何とか云つたの』

『別に何も云はない。歸つて見たらよく寢てゐたの。私あれから味噌汁を作つて一人で食べちやつたの』

『一人でかい。何故起してやらないんだ』

『起したくないからだわ。なぜそんなことを訊くの』

『人には話すことがないからさ。よせよ、もう。どれだけ飲むんだい』

さつきからジンを飲み續けてゐる粲子を、杉屋は苦々しい眼で見詰めた。彼女は眼で微笑した。杉屋の冷澄をよそほつた眼の底に、惱ましげな一抹の感傷がうごいてゐるのではないかと粲子は思つた。この聰明な美貌の男を自分は愛してゐるのだ。粲子は心の底が燒けたゞれるやうだつた。

その頃、山瀬のために、杉屋は手際よく粲子を口說き落してしまつた。その場合、山瀬を絕對に拒否することは、杉屋をも永劫に拒否する結果になるかも知れなかつた。それを思ひ返す時、彼女は馬鹿々々しかつた。彼女は山瀬との生活の初めに明らかな破綻を描き、杉屋に持つてゆく言葉を思つた。

『ねえ杉さん、この帶ね、描いてくれたの』

彼女は阿彌陀人を描いた帶の前を見せ、今度はくるりと廻つて脊を向けた。

『あゝ、結構だ。この頃仲がいゝんだね』

『仲はどうでも描くのよ。あの人は私よりうまく生活しますよ。なるたけ波風を立てないやうに、そつとね』

『女房を働かせてゐるせいかも知れないね。俺もあんまりあの時山瀬が、粲ちやんを望むから、あゝは事を運んだもののね、今になつて、粲ちやんが可哀相だ』

『どんな意味で？』

『いづれの意味でも。粲ちやんの生き度がつてる生き方をみだりに犯したわけだつたよ』

『分つてはゐるのね』

『粲ちやんは何を指して云つてるのか知らない。けれど俺は今にして云ふが、あの時實に君を欲しかつたのだ』

『今にしてだわね――』

彼女は、マドロスパイプを握つた杉屋の手首を見乍ら、胸に這ひ上る情炎を斷つやうに云つた。

『ねえ、戀愛を感じなくても、一緒に棲めば何かゞ生れて來るものだわ。存在を忘れる程、無視してるものでも、何か、離れてしま

へないものがあるのね。人間だけが持つ苦惱だと思ふと下らないわ』

『肉慾が支配してるのぢやないか』

『私は、あの人に、機械以上のものを感じない場合だつてあるの』

川の面にサイレンが鳴り渡り、ダムの水色のシグナルが赤に變つて徐々に水門に鐵鋼が下りてゐた。

『ねえ、杉さんは、新しく出來た芦屋のダンスホールへ行つて見た？』

『二度ばかり行つた』

『私、チケットを持つてるの』

『俺も持つてるよ』

『これから行きませんか』

『醉つてるからお止しなさい。今度又、山瀬と一緒に行つてやるのだ』

『いやあね。山瀬がそんなことを嫌ひつてことを、杉さんはよく知つてるくせに』

『二人だけでゆくことを、よけい嫌ふさ』

『いゝのよ、いゝのよ。たつた一晩だけ、そうしてくれたつていゝのよ』

五

ダンスホールは、色彩の洪水に渦卷いてゐた。花びらのやうに、ダイヤモンドライトがくる〳〵廻り、黄と桃色と、紫と青との光の斑點が、天井を、床を、空間を、脚を、腕を髪を這ひ廻つた。ダンサーは、骨と肉と、神經とがばら〳〵に離散したかのやうに、踊り呆けてゐた。物狂はしいジャズにつれて、脊の高い、髪の毛を赤く染めた娘が、赤い線の入つた水兵服を着て、輕く眼を閉ぢ、男の體にからみついて、なめらかに踊つてゐた。相手の男は杉屋である。燦子の醉ひのさめた冷い胸に、山瀬への友情的な愛情が、水玉のやうに浮び上つた。

彼女は兎のやうに、ダンスホールを出て、タクシーへ乘ると、阪神國道を眞つ直ぐに走つた。だが、彼女の車が××まで着た時、うしろから疾走して來たタクシーが、彼女の車に竝行して聲をかけた。タクシーの中には白ソベロアの帽子が見え、蒼白い杉屋の横顏が見えた。二つのタクシーが同時に止つた。

『そつちへ乘せてくれ』

杉屋は、むつつりとして、彼女に竝んで腰かけたが、煙草を半分ばかり吸つてから、彼女を正面から覗き込んで云つた。

『こゝらで降りて歩くわけにゆかない？』

『もつとはつきりは云へないこと？』

『意地つぱりの駄々つ子、こゝらで降りろ』

二つの車は、呆然と走り去つた。月のない松林は、暗かつた。松林の中の細長く白い路へ二人は入つて行つた。

『何を怒つてるのか當てゝ見やうか』
『えゝ、だけど、私、怒つてはゐないことよ。たゞ、ふつと山瀬がいとしくなつたゞけ』
『それだけではないよ』
『さうかも知れないわ。でも、山瀬のためになげいてやつたの。ああ云ふ心になる場合もあるのね』
『女と云ふものは、實に、心が變るものだね。俺は今晩、二度しか君と踊らなかつた』
『そして、私よりも、あのセーラーの女を親しげに抱きかゝへてね』
『そいつも俺には分つてるんだが。つまり、粲ちやんは、この世の中の何ものよりも、俺が粲ちやんを愛してるつてことをよく知つてるくせに、知らないことにしてしまはうとしてるのだよ』
『馬鹿ね、あなたは。愛してゐれば距離を持たなければならないの。あなたは、古ぼけた子供だわ』
彼女は石をけつて口笛を吹いた。
『トリックは止してくれ。愛し合つてゐることに、何も文句はないぢやないか』
杉屋は彼女をむさぼるやうに抱きかゝへた。
『山瀬に君をやつた時から、いつか斯ふなるとは思つてゐた。山瀬が可哀相だから、とは二人とも思はないことだ。一つの轉機には必ずいくつもの犠牲があるものだ』
『私も思ふとほりに生きたいの。抑制の生活は私たちの前の何億人の女たちがやつて見せたのよ。私たちは、幸福らしいものの上へ生れなければならないのよ。死んでゐてはいけないのよ』
二人は、腕を組んで、松林の中を歩き續けた。杉林のつきた所までゆくと、目の前の地の上に、ろうそくの灯が、行列のやうに長々と竝んでゐるのが見えた。そして數人の半裸體の男が、ハンマーを振り上げて、大地を打つてゐた。男たちは、近づいて行つた二人をじつと見すゑた。
『あゝ、こはい！』
彼女はよろ／＼として立ちすくんだ。
『ガス工事だよ』
『だけど、私、凄かつたわ。鬼みたい』
この眞夜中に、彼女の思想の前で、茶色の肉體をさらけ出した一群の勞働者が、幾人かの生命のために、血みどろにうごめいてゐるのだ。
彼女はまるで、二人揃つて、地獄の門へ歩み寄つたやうな幻想の中へ墮ちた。



燕を摑む果報者

村田千代

1

天下の皆様、みんなは氣確かな秀才で有ませう。氣違ひの雜言も、秀才によつて、大いに理解下されい。

「あの人は秀才だ」と、相當な人が眞地目に言つたら、誠に一目おいていゝ、秀才と言ふものであるかも知れません。けれど、

「あいつは秀才でござつしやるそうな」と、其の人が道化た口調で言つたら、それこそは、綽名となる性質のものに違ひ有ません。

「あの人は氣違ひだ」、かう言はれたからには、眞面目に言はれようと、道化て言はれようと、これは綽名の秀才よりなほ以下であります。

それですのに、私は氣違ひになつてしまひました。

――なつた以上は、眞面目に言はれる、まことの秀才と、同格に

なりたい――

　なんて考へ始めたのは、狂人生活も有一年を經て、氣違ひになりすましてしまつた此の頃です。

　私はせまい橋の上にあをむけになつて、青空とむきあひながら、狂人の囈語をして居りました。

　腹の上に手わるさをして、キッ〳〵とはしやいで居た太郎が、川へのめりそうになつて、やつと我にかへつたのです。

　川幅は一間を一寸出る位の流れですが、兩岸の花をつけたものもまじつた雜草のしげりを、かつきりうつして居る清らかさです。川づたひの一方は半間幅の道路になつて居て、時々私の世界の靜寂を騷がせて困ります。それからは左右とも、田に畑に、せい〳〵と、綠の波が見渡せます。

　何と言ふ涼しさでせう。流れの音とともに、子供の唱歌を歌ひつづけて居ました。

「や！　こつちだつた。」

「何だ、またこつちに居たのか。」

　殘念そうな聲が並びました。

　――ハヽヽ、――　私は腹を波立たせて、太郎をゆすりながら上半身を起して見ると、三人の男達です。

　二人は家の近くの常公、武公の兄弟。一人は知らぬ人。だが、此の兄弟の家では去年の秋に、中娘を嫁らせて、その冬に母親を失なつたので、蠶室を半分に減して、後の桑の賣口を見つけて居たから、その買手と私はきめました。

「何だ、又笑ふのか、今日は急がしくて、からかつちやあ居られねえ、一寸のいて通してくれ。」

「な、おさきさ、後はいくらねてでもいゝで。」など聲を出す二人の口もとをぢつと眺めて居ましたが、私は默つて、太郎も横に、寢轉びました。

「チエッ、氣違ひにも程があるぞ。」

「わるさもいゝかげんにしろ！」

　――オホヽヽ、も一つ橋がございませう――

「すぐにこれだ。」

「急がしくて困るぢやねえか！」

　――お急がしければ、お早く、お廻りな――

「テッ、菰の前掛にも似合はねえ聲ばか出しやがつて、」

　弟の武公は遂に怒鳴りました。

　――見えるところは菰(こも)でも…おつと、その後に本心が出そうになつて

　――アハヽヽ――と、おどましました。

「困り者ですな、聞いては居たが、こんなふうだとは思はなかつた。」はじめて桒貫ひと見立てた男が言ひました。

「全く。ですが女なら直に通すんです。男と來たら、この通り一歩もゆづりません。前に妹と來た時に、妹の後に續いて渡らうとしたら、つき落されたと言ふ、仕末です。」

「ぢやあ、何か男が原因で氣違ひになつたのですか?」

「そんなふうぢやない、全くつまらない話です。これで此の女は立派な敎員だつたのです。此處の小學校で二年。向ふの、此處から五里ばかりある町の矢張り敎員の所に嫁入つて、其處で三年、そして昨年の正月その良人に死なれて、その後學校ばかりいやがつて、それを無理に舅姑が出しておいたら、揚句が、こんな、」

「この子供は?」

「此の子が生れて間もなく良人は死んだんです。何でも向ふでは長男だで離したくないが、おさきだけは復したいと言ふ。けれど、この通りに何にも頑張つて話は面倒のやうです。片時も子供は離しませんからね。何と言つても子供が可哀そうな、」

——知つたかぶりこくな!

私は大聲を張り上げました。

「ほれ又氣が立つた。仕方がない廻るとするか。」

「水が少なけりやあ、わけはねえんだがなあ。」

たかが牛米ばかりの水量を、武公は今更うらめしそうに草つ葉をなげつけて二人の先に立つて歩み出しました。

やつと、せい〳〵しました。

私がこれを納涼場と、陣取るやうになつてから、どうも都合が惡いと彼等は、も一つ川下に橋を作つたので有ます。その時、私はせめて半間に少し餘はある幅にした方がいゝと、注意してやりましたが、考へなしの彼等は「いくらお前が頑張つても、まさか、同時に二箇所にや陣取れまい。」と、嫉笑いて、親子で並べば通れないやうなものを、又備へたのであります。それからは私は至つて幸で、氣のむく方へ出掛けるのです。すると彼等は今度は、上に居るか下に居るかと案じながら來て、ひよつこり出合すと、殘念此の上なしで引さがるのです。

今に又、三ッ四ッと橋をふやして行くと、それだけに又、四ッの橋のうち、何處に居るかと、一そう思案が重るのです。全く氣確かな人は、つまらぬ所にも、心を使はなくてはならなくて、痛快であります。

——ねえ坊や。おや!

見ると太郎は、私の腕を枕に、スヤ〳〵と、一番安樂な所へ行き着いて居ました。

2

布團の寢床に太郎を運んで、私は家の椽側先に腰かけました。

何と言ふ殺風景な庭でせう。右手の植込みの立木に蟬がないて居て、庭と言ふ平な部分は殆んど、スイナ草と、小僧泣かせと、つみ切草が這つて居るだけです。

去年はこんなではなかつたにな――と、「確か」と言ふ世界から、「違ひ」と言ふ國に飛び込む、その間の一齣を、勇敢に蹴くづして騷變時の、追憶に入らうとすると、隣の姉弟の聲が來ました。

「姉さん、明日は俺の朝顏が廿三も咲くよ、今年ははじめてだよ、廿の上は。」

「本當。姉さんのは一寸もかまはないから、とても駄目。今度は負だわね。」

馬鹿に仲よしの話ぶりです。あの時は此の姉弟の喧嘩によつて、私は騷變の方法を得たのでしたのに。兄弟喧嘩と言ふものは役に立たないものでは有ません。大へんに藥になります。この時も他人に言はせれば、えらい毒藥と言ひますが、私に取つては、非常な妙藥で有ました。

坊やが生れて、太郎になつて、間もなく父さんは、坊やも私も結構忘れて逝つてしまひました。その時、實に私は、これから一そう「確かな確かな」人にならうと、決心したので有ました。けれど半年立たない中に、そんな素直な世でない事が解つて來たのでした。校長が丁寧にも誤親切になつて來たのです。ますく、ますますと。

遂に學校を引くより外はないところまでの危險さになつたのですのに、校長と言ふものを隱しての退職願ひは、此の頃の時、舅姑に許されようもないことで有ました。

そうした苦惱の或る日、裁縫教室の廊下を通ると、丁度此處を見廻つて居る校長の姿を見つけました。この校長、此の人のおかげにと、思ふと、

――女の中間に、男が一人！

まことに勇敢此の上なしの、豪聲がとび出したものです。彼の逃て方、職員生徒一同の驚き、あんな愉快なことは有ませんでした。此處で註文通り美事に退職となつて身輕になつたので有ます。そして家に歸ると退職の喜びに、前のとほりに正氣な人間に復ることが出來たのであります。

ところが、舅姑がきゝません。直に實家に還はれました。今度は早くも知つた近所の侮蔑の目、到底正氣ではたえられるものでは有ません。母と丁度歸鄕して居た兄の同情も、全く眞の狂人としてのあつかひでした。そして再ひ一そうの苦惱に考へつまつて居る時、隣家の姉弟の見本を見たので有ます。

最初、花畠の草を姉弟で一心に取つて居ました。その中に、知らず姉は弟の餘程のびた朝顏を、引むしつてしまつたのです。と、弟は憤然と立ち上つて、靴を高下駄に、はきかへて來て、傍の姉の

花壇の中を、目茶苦茶に飛びはね蹂みにぢりました。松葉ボタンも三色スミレも、撫子もあつたものでは有ません。下駄のはに蹂みへこみ、蹂み切られて、茶と綠の斑島になつてしまひました。其處へ來合せた姉弟の母が言つたので有ます。

「これが正氣の沙汰ですか。氣違ひとはこのことですよ。」

私は早速家の庭の中央に立ちもどつて、朝顔鉢を勢よく蹴りつけました。一つは其の場で割れてなくなりました。一つは轉りくねつて立木の根本で破裂しました。何と氣の晴れる仕事でせう。次から次へと、ますく勢こめて蹴りつけました。轉んだだけで、容易に何ともならないのは、かゝえてほおり投げてやりました。落ちる時は少しゆがむだけで平氣でありながら、飛び石に出合ふと、美事に、パツと鉢は破れて、木と土と鉢は平になるのです。

盆栽好きな父の殘して行つた、バラも、オモトも、水盤までも、忽ち、カケラと土の中にまぜられてしまひました。

そうして、うるさい世界を見限つて、私は完全に氣違ひの國におさまつたので有ます。

3

茶の間から裏の柿の木を見ると、蒂ばかり大きくて、小さな實がよくもついて居ます。見れば見る程、葉の蔭に、その又後にと、現れます。けれど、一つづつ行儀よく並び續いて居るのでもないのに數珠なりと坊子くさいです。メタなりで澤山であります。この柿がうまくなると稲も實のります。今は蠶が桑の食ひ盛りです。

米の飯食べたきやあ、一度は田をふんでめし上れ。
絹の布つけたきやあ、一度は蠶なでてめしなされ。

母と太郎と私と三人で朝飯をしながら、食卓の邊をたゝいて調子を取つて居る所へ、白裝束の髯漢が、のつそり上つて來ました。胸の數珠が眞先に氣がついて氣に食ひません。私は裝束をにらんで立ち上りました。

「おさき、お待ち。」母は袖をとらへて、きびしく先づ言ひました。

私は默つて、そこの大どんぶりに飯を盛り、汁をかけなげて、坊やと共にかゝえて、歩き出しました。

「母さんが困ると思はないかい。母さんを可哀さうと思はないかい。するだけのことはしなければね。」

今度はすつかり哀みを乞ふ目で見上げてゐます。私は此の目が一ばんかなひません。これに出合ふと一寸決心がぐらつきます。そして私も哀れ一ぱいの目で母を見返しました。すると母は安心顔になつて髯漢に目くばせしました。

「オー」と、すつくと立つた男の、何處に人の心を解く威嚴が有ま

せう。たゞ腕力を覺えたので有ます。何を、此の男が、と思ふと、私は面相をすつかり、とがらせて、

——朝つぱらから緣起でもない！

と、外に出ました。母の聲をかすかに、隣家の庭を突きぬけて、桑畑の石垣に腰かけました。

石垣はたゞ畑と庭のしきりと言つた位の低いものなので、丁度よい腰掛であります。背にした青桑は朝風にサヵ〳〵となつて、千兩の風は全身をつゝんでくれます。

目の前は、隣家のぢいさんの丹誠の花畑で、ダリヤ、グラヂオラス夏菊、など〳〵、よく咲揃つてゐます。勝手口の竹垣の朝顏は、又何と素晴しい美事さでせう。

——ね、太郎、此處で朝食にしませうよ。大どんぶりをかゝへて坊やと、私と一口、一口にと食べました。

食べ終つて出かけて行くと、裏の井戸端で、此處のばあさんが、丸い脊を眞丸くして、洗濯してゐました。

——まあ、おばあさん、おえらいこと。

「おや、おさきさん、早くからどちらへ。」

——お庭を拜借して、朝食をすませて來ましたの。——

「また白い着物の小父さんが來て？」

——ええ。——

「ね、おさきさん、一度、がまんして見ておもらひなさいな。」

「屹度、おさきさんなら、なほりますわ。」

「本當に、話しかたなんか、前と少しもかはつて居ないのに、何て氣の毒な。」

後のは一人言に言ひながら、手を休めて私を見つめました。私はソットその目をはづしてかけ出しました。

——ばばあ達はみんな死んぢまへ——

ひどい言葉が、思はずも、自分の咽喉から出て、すつかり愉快になつて家に向ひました。

母はまだ朝食を擴げたまゝの臺の前に、兩手で顏をうづめてゐました。

——あゝよかつた。——

私が高調子には入つて行くと、母は急いで箸をもつて、

「一人ではどうしても、おいしくないから、お前のくるのを待つてたよ。」と、元氣な笑顏で迎へてくれました。

叱つても、ためしても、常に溫めてくれるのは母で有ります。

——ね、母さん、又お金やつたの——

「たのんだからはね。」

——もうもうよしてね。今頃は彼の男、數珠なげ出して祖ぎになつて、うまくやつたと、酒でものんでるわ。——

4

目を開いて居ると、矢鱈にそこいらの物蔭から、贅澤の白裝束がヒヨイと出て來そうです。目をつむつても、一そう近く額のあたりに、ぞく／＼せい揃ひしてゐます。どうもあれが目について、胸が惡くて仕方が有ませんので、遠遊びすることにきめました。

停車場に向ふ大通りの大衆は、みんな私に捕はれます。犬までが大いに私に關心を起して呼びかけました。

その中によくも奇麗に着飾つた女が、行き會ひざま、遠のけしてツンと小走りにぬけました。これはおかしい、目に見えますよ。一つこの後をつけようと考へましたが、贅澤がまだ頭にあつたのでやめたので有ます。

汽車に乘りこんでやつと安心しました。

發車すると同時に私は逆に、機關車の次の車から、車内を次々へ通りぬけました。最後の室に來た時、これはてつきり箱を間違へたとしか見えない、老婦人が大トランクを開いて居る所でしたので、その見える所に席をしめました。

その四人席の一隅に勞働者風の男が居ねむつて居ます。後の三人分を一人でせしめて、老婦人はゾッシリした裝束を、ゆかたに着換へました。それから肌襦袢を、水色の濃淡で大きなバラを染め出した縮緬の長襦袢を、ネズと白の格子縞の明石の着物を、黒無地絽縮緬羽織を、博多のせま帶を、と、よろめきながら、たゝみました。そして其れ等を、トランクの中の幾つかの紙包の上にのせたり、下に入れて見たり。その中に大風呂敷をなげ出して、そつと包んで、ふんわりのせて、やつと蓋をしめました。

始めて腰を下すと同時に左手に出したのは小判なりの鏡です。右手でなでた髮に氣がつくと、これは何と、タッブリある切下髮で有ました。それも黒元結で結ばずに、幅は半寸程、形は七種もある、ベッコウの髻止で、はさんであるだけです。

それにむき合つて、勞働者の靴下の藁草履の間から、親指と、次の次の指まで出て居ます。眠つて居たと思つたら、額に皺をよせて目を大きくして、前の切下髮を見つめて居るのです。頭の上のトランクの中味はすつかりあらためて、見せてくれました。欲しい、取つてやりたい、と考へるのは無理有ません。何とも思はないのは番外の氣違ひだけで有ます。男の上着には何職か、白赤青黄まで、繪具のなれつけのやうに、てん／＼とついてゐて、ポケットは入れようもなく破れて居ます。

目の前には金ぐさりに、みどり玉の帶止。頭の上には大トランク。男は段々目を細めて閉ぢました。

車外の松林の綠、どての草のみどりの中に切下髮が一つはなれて浮いて見えます。着物ばかりが波模樣の裾ひろがり染で派手なんです。首から上ばかりが、六十以上のばあさんなんです。

鏡をしまふと、色紙細工の兵隊さんの表紙の厚い雜誌を出しました。片膝上げて、金緣眼鏡を今つけて、見る光景は、まことにイナ

もので有ます。

パッと開いて止まつた所は、

「花嫁の訂正」とあります。

ゆられて下つたトランクにつけた名札には――三毛田すや子――

と記して有ます。

私は勢よく腰を上げて一歩進みました。

――おや三谷さんでは有ませんの、私のお仲間でせう――

私はなれ〳〵しく言ひました。額と眼鏡のすき間から見上げた目は、解らないとばかりをしめしてゐます。

――私の仲間ね。貴女は。三谷さんの卅年後の標本？

「私、三毛田です。何を？」

――いゝえ、私は……――と言ひながら、私は糸をぬいた袖口を示して、次に前掛を引張りました。おや布のです。これはいけませんでした。少しばかり遠出だと思つて、莚のをよしたら、素情を口で説明しなくてはならなくなりました。

――氣違ひですのよ。――

「まあ、馬鹿らしい。」切下髪ははき出すやうに言つて後向きになりました。

――此れ、ぬいたらガールになれますよ――私が髷止にさわつたら、

「失敬な。」と、手を本の兵隊にはらはれました。

次の停車場で對象の男は下りてしまひました。私は早速其處に陣取つて、珍無類の對象をしめしました。眞向きからつく〳〵切下髪の顔を見ると、眉間に二ッの疵が有ます。これは此の人も大きな苦と戰つて來たに違ひ有ません。私とは反對の方法で發展してゐるのかもしれません。もつと何か話したくてたまらなくて居る中に、三毛田さんはねむり始めました。トンネルに入ると、太郎は泣き出してしまひました。これには如何ともかなひません。遂に三ッ目の驛で降りたので有ます。

一驛乘り越せば大きなケンツクを食ふのに、一驛手前では、ちよつぴりもほめてくれないので有ました。

5

曇り日は天が下つて來て、虫は低い所で、騒ぎます。鳥も近い所で歌ひます。

私は襟から胸を指でこすつて見ると、豫定通り、下手な繪書きの消ゴムです。直に例の橋の上に出かけました。

此處は町の中央でありながら、近くのものは何時か芥をもつて來てあけるに違ひなく、不潔でドブ臭くて、虫の増殖所です。

少時立つて居る中に私の周圍に虫が向つて來ました。だん〳〵多くなつて．わや〳〵して來ます。すると燕が勇ましく、はせつけて獲物を得てとびぬけます。次のが又來てとびぬけます。次にまた來

てとびぬけます。

氣がついて見ると、もうすつかり遠巻きになつて、確かな人々は眞面目に半圓を作つて居ます。

――さて。――と私は身構へました。

燕が何時ものやうに、向つて來ます。通りぬけるかの瞬間、私の右手が、クッとのびて、手の平の中にまるまつてゐるのです。

半圓は一せいに囃します。

捕へた燕を、首から尾つぽへ、丸くなるやうに摑んで、河に向つて投げつけると、水面近くまでたゞの品物のやうに落ちるが、ほんの少しの所でひるがへつて、鈎なりになつて、斜にとんで行きます。

半圓の聲が靜むと、又他のがやつて來ます。サッとのばして、捕へて、摑んで、投げて、鈎なりになつて、とんで行くのです。

いくらやつても同じことだのに、眞面目な人達は、いくらでも眞面目に見てゐます。その中、一人二人と、金と言ふものを投げるものが有ます。これは角にも丸にもなつてにげて行きません。いつも私が拾はずに行くと、屹度、追つかけて來て、太郎の胸と、私の脊の間になげこみに來る、殊勝な者が有ります。違ふものに一度與へたものは、違ふのでせう。

いくらやつても同じことなので、私の方がさんざになつて、太郎を下して乳をのませにかゝりました。

すると立派な紳士が進み出て言ひました。

「手に何をつけてるか?」

たま〳〵こんな研究心のある人がとび出してくるので、こんな仕事もやめられません。紳士からは藥の香がしました。

――手に何かつけてどうするんです、――

「燕をつかむんですよ。」

――まあそんなこと、貴方は醫者さんですね、それなら、一つお願ひが有ますから、直に聞かせて上げませう。私は今日の仕事の爲に前から心づけてゐますので、こんなに垢が出て、こんなに臭ひます。これで虫が寄るのです。そして燕が虫を取りに來るのです。あたりまへのことでは有ませんか。――

「だが摑むと言ふことは?」

――熱心と、なれると言ふこと――

「ホオ――それでお前は氣違ひか?」

――おやおかしい、私に氣違ひか? だつて。まあ先生、そんなことより、私のお願ひを聞いて下さい。ほらまた坊やが乳をのむのに、こんなにお腹が大きくなつつて困りますわ。

「腹が大きい? そんなことはない普通だよ」

――いゝえ、大きいわ――

「良人は何處に居ます?」

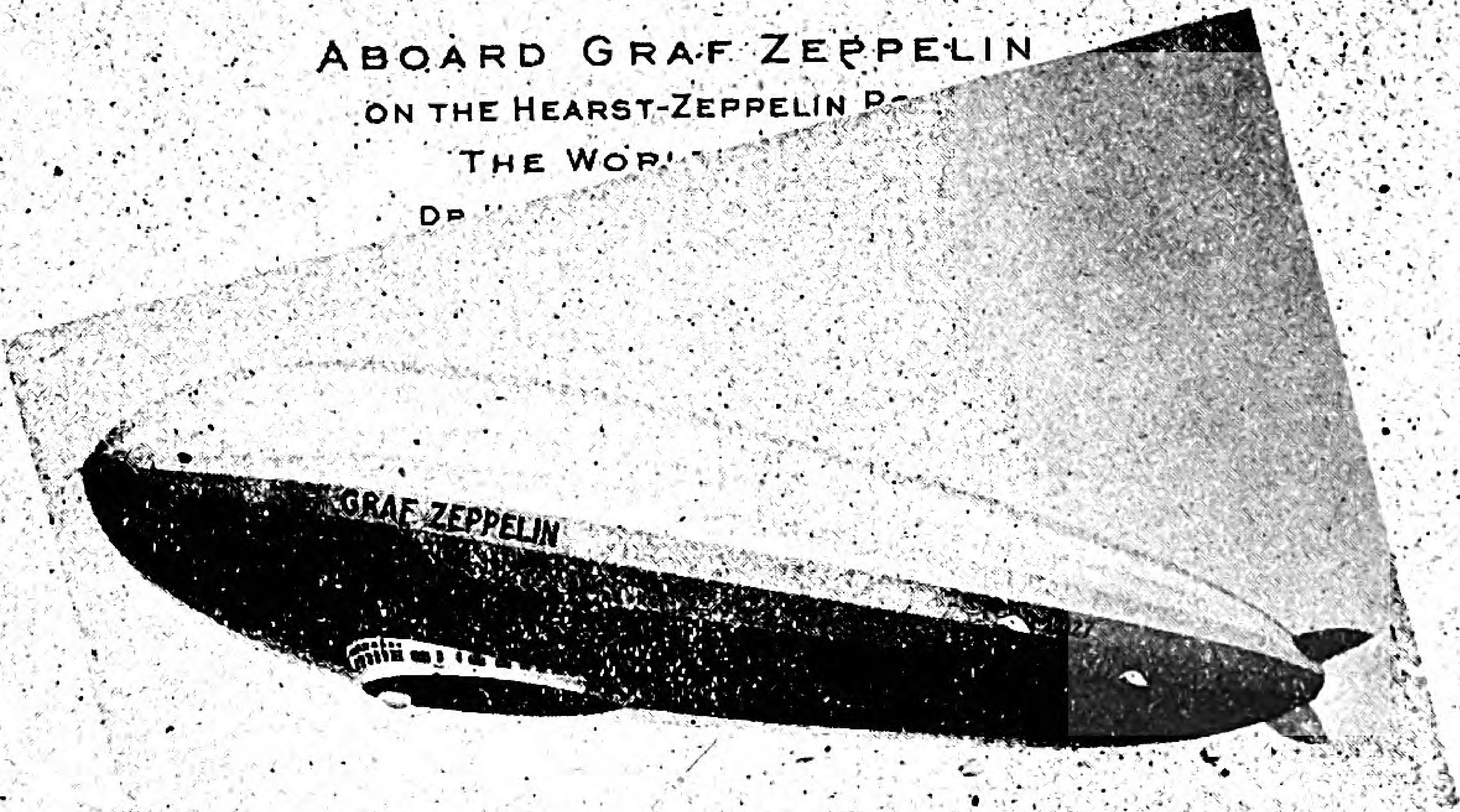
――昨年の正月死にました――

「ハアハアー―」しきりに一人でうなづいて居た先生は前と同じ
調子で言ひました。
「一人で腹は大きくならないよ。」
――だつて、死んでも目には見えるのですもの。そして、此の間
は、私の傍を默つて通つて行きました。
「ふん。だが一寸も大きくはないよ。」
――そんなこと有ませんわ、何だかこれからどん〳〵大きくなる
やうでたまりません。
「あゝ、それは帶をしめないからだ。何でもたるみがあると、もの
は常に一ぱいになりたい氣分があるからな。きつちり帶をしめて、
ちやんとして居てごらん、直になほつてしまふよ。」
――本當。――
この先生中々話せるわ。私は、ニツコリしてしまひました。
――お禮に歌を一つ歌ひます。――

思ふがありてや
さあらず知らず
花は好めど
色香のそふが
花に言ひたけ
されど甘し。
好みが酒で
あるならば
からくて強くて
思ふがまゝに
よひて染めたが
言ひたき心――

私はよく調子ばかりを尊んで、意味のわからないものを歌ひま
す。けれども自分ながら感心する程よい聲が出ますので、みんなう
つとりと、聞いて居るので有ます。
「可哀そうなものだ。」歌ひ終ると醫者は去りました。
――同情はきらひ――と、私は叫ばうと思ひましたが、すつかり
疲れたのでやめました。
燕の來る家は幸多いと言ひます。未亡人の得た若者を燕と呼びま
す。それは幸福を得たからです。そうさへ言はれるその燕を、私は
自由に摑めるのです。本當に私こそ天下の果報者でなくて何でせ
う。
これで此の氣違ひが、まことの秀才と同格でねえと言ふんなら
みんなは、みんな、秀才でござつしやるそうな。

ABOARD GRAF ZEPPELIN
ON THE HEARST-ZEPPELIN R...
THE WOR...
DR...



... much
...ing which could
...and that wouldbe to
... for them.

I look forward to returning to Japan some time in the future, and as soon as I come back I will call upon you as I feel we must have so many common interests.

Yours very sincerely,

Permanent address
76 Strand
London, England



ツエペリンに乗つて最初に日本を訪れたドラモンド・ヘイ女史は米國ハースト系の新聞記者でありますが、空から來た最初の文藝家であります、この手紙は、女史に美しい花束を贈つた女人聯盟へ寄せた女史からの謝状で、「近き日に御國へまゐりましたら、女人藝術社をおたづねする事をたのしみとしてゐます」といふ意味です。

一つの資格
——シナリオ——

水島あやめ

=街路、（夕ぐれ）

眞白に降つてゐる雨、雨、激しい夕立——。

右往左往に驅けて行く人々——。帽子をおさへた男、ハンケチを冠つた女、裾を高くからげた男、女、赤ん坊を袖で被つた若い母親、ベソをかいて驅けてゐる幼い子供たち。

そして、その間を、いとも傲然と疾驅して行く自動車、自動車——。はね返る泥——。

=或る家の内部。

洋服の一人の青年、急いで門の庇の下へ、雨やどりに驅けこむ。

青年、ホツとした様子で、帽子や、肩のあたりの雫を、ハンケチで拂ふ。

「ひどい雨だなあ」、といふ風に、眉をしかめて空を見上げる青年——木村（きむら）——の顔。

雨はまだ中々に止みさうもない。

木村、ちよいと憂鬱な氣持になりながら、仕方なく、門の所へ佇んでゐる。

一臺のタクシーが、門の方へ走つて來る。

木村がハツと思ふ間（ま）もなく、タクシーはピタリと門前へ止（とま）つて了ふ。

木村、ちよつともぢ／＼する。
と、タクシーの戸があいて、パッと花の咲いた様に、一人の美しい女の顔が現はれる。
T、「あなた。
そこでは雨が當りませう。」
木村、ハッとして、どきまぎしながら「いや、いやどうも——」と二つ三つお辭儀をする。
T、「相すみません。
何しろ、ひどいもんですから——」
女、木村のひどく恐縮した様をほゝゑんで、「そんな、あなた——」と云ひかけて何思つてか、フッと木村の顔に眼を据える。
木村、へどもどと眩しさうにうつむく。
忽ち、女の顔がパッとあでやかに輝く。
T、「まあ、あなた——、



水野さんですねえ。」
木村、「え？」と面喰つて女の顔を見る。
女「あゝ、やつぱり水野さんだわ。水野さんだわ」と一人で驚喜して、
T、「何て久しぶりなんでせう。
さあ——、さあ、早く行つてお話をしませう。
ほんとうにまあ、何て久しぶり…………」
女、何が何だか譯の分らない顔をしてゐる木村を、無理矢理、車内に引張りこむ。
タクシー、靜かに門内へと動き出す。
雨は大分小降りになつてゐる。
＝和洋折衷風の應接間。
木村、一人でゝぽつねんとソファの一隅に腰をかけてゐる。

やがて、思ひ出した様にポケットからシガレットケースを出し火をつけやうとして、やをら中央の丸テーブルの所へ行く。

木村、シガーをくはへながら、立つたまゝでグルリと室内を見廻はす。

すべてが、モダンがつた裝飾、調度――。

木村、再び、ドサンとソファに腰をおとし、シガーの煙りを眼で追ひながら思つてみる。

――あでやかな、咲き崩れた紅バラを思はせるやうな女の顔―

木村、うつとりとした眼に微笑を浮べる。

T、「悪くねえなあ。

――こんな間違ひなら、いつだつて大歡迎だが――」

扉がスーとあく。

木村、あはてゝキチンと姿勢を直し、神妙にかまへる。

さつきの女、洋酒の瓶とコップをのせた盆を持つて、あでやかに微笑しながら入つて來る。

T、「お待遠さま――」

女、室の一隅の茶テーブルに盆をのせ、それをいそ／＼とソファの所へ持つて來る。

そして、自分も並んで腰をおろし、すぐ、洋酒の瓶を器用な手つきで取り上げる。

T、「お一つ、いかゞ？」

木村、女の馴々しい態度に少し面喰ふが、すぐ度胸をきめて、コップを取り上げる。

女、なみ／＼と洋酒を注いでやり、自分も一つのコップに半分程充す。

女、コップを形よく唇にあてながら、媚を含んだ眼で木村を見て、いふ。

T、「あれから何年になるでせう。

あんな風にお別れしてから――」

木村、思はずドキンとするが、こゝぞと、つとめて自然に、感傷的な表情を作つて、いふ。

T、「何年になりますかねえ。

とにかく、僕には、淋しい長い／＼月日でしたよ。」

女、木村の溜息を少しも疑はぬ様子で、自分も引き入れられた様に、急に愁然として眼を伏せる。

木村、女の様子を見て、自分の芝居に、大いに自信の持てて來

た顔つきになり、再び、大きく溜息をついて、いふ。

T、「しかし――、全く偶然でしたねえ。
　僕はもう、二度と貴女の顔を見るつもりは無かつたんだが・・・・」

女、默つてうつむいてゐる。が、やがて、フッと氣のついた樣で再び晴々とした眼で木村を見上げる。

T、「ねえ。もう止しませう。それよか今を、思ひつきり、思ひつきり、樂しく過しませうよ。」

女、コップを再び唇にあて、木村にも進める。そして、木村が一杯を乾すとすぐ、殆んど木村の肩に手をかけないばかりにして、又なみなみと注いでやる。

木村、すつかりいゝ氣持ちになつて、思はず女の手を握らうとする。

女、スルリと手を外して、「お止しあそばせ」と媚を含んだ眼で睨む。

木村、ちよつと間の惡い顔。が、「ついどうも――」などとウヤムヤにごまかす。そして、矢鱈にコップをおほる。

扉あく――。

女中に案内された一人の女――年頃も、服裝も、化粧髪容も、すべて主の女と同じ樣な――客の姿が現はれる。

木村、さずがにハッとして、思はずコップを宙に捧げて了ふ。主の女は、「あら、ようこそ――」と、笑顔と共にスラリと立ち上る。

客の女、木村を見て輕くハッとするが、すぐさりげなく主の女と挨拶を交はす、

T、「お約束よりずつと遲れちやつてすみません。何しろ、出掛けやうとした時、丁度あの夕立で・・・・」

主の女、「ほんとにひどかつたですわねえ」と眉をしかめ、それから、チラと木村の方に眼を送つて、客の女に微笑みかける。

T、「だから、貴女はもういらして下さるまいと思つて、淋しまぎれに、ついこんな――」

客の女、意味ふかさうな微笑を浮べて主を見、又木村の方を見やる。

木村、すつかりテレてもぢもぢしてゐる。

主の女、輕やかに木村のそばへ歩みより、ぢつと木村を見つめて、「ね、ね」と眼で物をいふ。そして、囁く樣に

T、「今日はこれで歸つてね。

我儘だけど――、ね。」

木村、女の氣持ちをすつかり呑みこんだ風に、やはり眼でうなづき返し、默つて立ち上る。

木村、客に輕く會釋して、扉の方へ行く。

女は、客の見る前を少し氣に掛けながらも、木村を送つて扉口まで行き、親しみをこめた調子で聲を送る。

T、「では、またね。
さよなら」――

木村の姿消え、扉しまる。

二人を見送つてゐた客の女、主がテーブルに歩み寄るや否や、忽ち浴せる樣にいふ。

T、「りつ子さん。
素晴らしいわね」

りつ子と呼ばれた女、薄く笑つたまゝ、默つてソフアの方へ行き、茶テーブルから洋酒の盃を持つて來る。

T、「どう？　召し上る」？

客の女、まじ〱と洋酒の瓶を見、りつ子の顔を見、さて溜息をつく樣に、いふ。

T、「貴女、全く素晴らしいのねえ。」

りつ子、クスリと笑つて、事もなげな調子でいふ。

T、「とう〱、直接證據ね。」

客の女、「えゝ、全くよ、全くよ」と幾度も深くうなづいて、

T、「もう本當に分つたわよ。
貴女の生活が、こんなにも自由で、近代的だつて事、今までは全く半信半疑だつたんですもの」

りつ子、ゆつくりとシガーに火をつけながら、さも、そんな事と云はぬばかりの微笑を浮べて、

T、「だから、前から云つてるのに――。
貴女はよく〱私を馬鹿にしてるんですもの。
今の――の程度なら、まだ半打近くもあつてよ。」

客の女、心から參つた樣に、いきなりピヨコンと一つ首を下げる。

T、「お辭儀をするわ。ほんとうに貴女は近代的マダムになり切つたのね。
――だけど、ハズの方は大丈夫？」

りつ子、シガーの煙りを輪にふきながら、ふふと眼で笑つて、

T、「古いのね。
少し警戒した方がお互ひの爲よ。」

客の女、無言で、深いうなづきをみせる。

りつ子、思ひ出した風に時計を見て、

T、「とにかく出掛けませう。
急いで御飯食べれば、夜の部には充分間に合ふわ。」

二人、そゝくさと立ち上る。

‖りつ子の部屋、日本間。（夜更け）

奇抜な挨拶の外出着をつけたりつ子、今、よそから歸つたばかのり體で、だらしなく横座りに座つてゐる。

りつ子のうつとりと物を思ふ顔――。

T、「今日は何て愉快な日だつたか知ら。ひよいと考へついたトリックで、あんなにもみよ子さんを参らせて了つたし、うちはまだ歸らないから何にも知らないし、きくやの口留は要らないピンですんだし――」

りつ子、思はず微笑して了ふ。

が――、忽ち、ハッと顔を曇らせる。

しかし、その曇りも瞬間で消えて了ふ。

T、「なあに、もしやつて來たとしても、飛んだ人違ひで、とか何とか云へばすんで了ふ事だわ」

りつ子、再びはれ〴〵と微笑する。

‖街路

雨で洗はれた、すが〴〵しい夜の道を、木村が、ステッキふりふり夢中で歩き廻つてゐる。

木村、歩きながら、しきりにニタ〴〵ほくそゑんでゐる。

T、「――全く大したチャンスにぶつかつたもんだな。
マダムか、未亡人か、とにかくそんな種類の女と戀愛ごつこをするなんて、おゝ、何と素晴らしきモダンライフよ――だ。
奴等が聞いたら、さぞ嫉みやがるこつたらうな。」

いとも愉快さうに、胸を張り、ステッキをふり、踊るやうな足どりで、次第に遠ざかつて行く木村の姿――。 ――絞る――



恐慌

――けれどもそれは未來につゞく――

中本たか子

恐慌は常に、現存せる矛盾の瞬間的强行的な解決に過ぎず、攪亂された均衡を一瞬間だけ回復させる所の强行的な噴火にほかならない。」（マルクス「資本論」第三卷、第一册、二三一頁）

「恐慌の 法則は この制度の 必然的週期的平衡破 壞並びにそ の再建の法 則である。」（ブハーリン「轉形期の經濟學」邦譯二二一頁）

1

神前での結婚式がすむと、式場から出て來たこの珍しい新夫婦を追つて、待ち構へてゐた新聞社の寫眞班が先を爭つてカメラを向けて來た。式場の前の階段に立つ數多の一族が氣難しく唇を反らしてゐるのを背景にして、六十五の皺深い新郎と、まだ娘の線の彈けない十九の新婦とは肩を寄せて、カメラに吸ひとられた。新郎は紡績界に覇を唱へるT・S紡績の社長廣澤賢三で、新婦は美貌を以て鳴らした靖子といふ町娘だ。慌しいカメラの應接がすぎると、緑色の艶やかなパッカードに變形花婿と花嫁の姿は閉ぢ込められた。これから帝國ホテルの披露の宴に臨むのだ。二人だけの世界になると、廣澤賢三は愼ましく並んでゐる花嫁を顧みて、その善美を盡した婚禮衣裳が彼の出費によつて

なされたものであるのを、義眼を瞬いて滿足らしく眺める。そして豪壯な腹を搖つて濶達に花嫁へ笑つて見せた。

　朝野の名士を招いた帝國ホテルの宴會場は、廣澤賢三の巨萬の富を誇るに足るべく、壯麗に飾られてあつた。その隣室が花嫁花婿の控室に當てられてある。二人が控室に入ると、變形花婿はボーイに命じて夕刊を取り寄せた。夕刊の經濟欄を見ることは、彼にとつて一日の重大な行事である。頰を抱へてぐつたりソファに篏り込んでゐる花嫁の側で、この變形花婿は愛の囁きの代りに、がさつな夕刊の臭を擴げた。かねて彼の頭を惱ましてゐた――國内ブルジョアジイにとつて脅威である――金解禁は、その日の閣議で非解禁に決定したのだ。これで、動搖してゐたT・S紡績の株券が相場の安定を保ち、生産品は國内の市場價を依然として高く續け得ることになるかくて、まだ暫くは資本主義の安定が持續するのだ。廣澤賢三は先が少し赭い金魚鼻の廻りをハンカチで拭いて、その廣い肩を翼のやうに搖り動かした。

「は、は、は、は…とうとう非金解禁にしたな。戸部藏相も話せるわい。」

　そして彼は、新聞を隣の花嫁に差出して示した。俯いた十九の花嫁は、つんと鼻柱を横に向けると、細い指先でそつと瞼を押へた。指の下では雫がつぶれる。廣澤賢三は、自分の歡びが何故に相手の氣持を損ねたかと首を傾けながら花嫁の鼻柱を自分の方へ向け換へるのに一苦心せねばならなかつた。

2

　又激しく卓上電話が鳴り出した。廣澤賢三が義眼に添へて右の眼を開くと、カーテンの隙間から投げ出された數條の光の縞が額に落ちて來た。彼の隣では十九の新妻靖子が、商品のやうに固定した顏を仰向けて眼をとぢてゐる。廣澤は舌打して寢臺から拔け、電話を外づした。窓際に近づいてカーテンを繰ると、强度の光線に彼は眼先を奪はれた。瞬いて細眼に見直すと、窓の外の靑葉から反射する光が網膜をいたく衝いて入つた。その靑葉の間から石鹼位に海が見える。彼は昨夜直ちに海濱ホテルへ來て、一匹の處女を射とめた欣ばしさに心をはづませて寢臺へ飛んで歸つた。變形花婿の彼が、生理的に慄へる皺まみれの手でそつと花嫁の顏を抱へあげると、彼女はくるりと彼方向きに身體を廻した。廣澤賢三は失望して又窓へ寄つて來た。彼にとつて靑年のなすやうな愛の努力は臆劫だつた。窓に顏をつけて花嫁との遠い距離をはかつてゐたが、急に先刻の電話の激しさに變事を感じて、受話器をとりあげた。と、引續いて今まで切れてゐた電鈴が勇ましく鳴り出した。彼の左の耳に腹心の專務杉本の鼻聲が觸れる。先方は私宅からかけてゐるらしい。

「早くからお床を騷がせて濟みません。こんな失禮をするのも、實は一刻も早くお耳に入れたいことがあるからなんです。といふのは

關東州特惠關稅の影響が早くも現れて、無稅を幸に綿糸の逆輸入の徴候があるんです。我社にとつてはひどい痛棒ですぞ。」

會社の話になると廣澤賢三はその老體を忘れ、總ゆる感覺を集中し、昂奮して來るのが常である。彼は相手の鼻聲を聽きりきゝとる爲に、開いてゐる右の耳を指で封じた。

關東州特惠關稅案は、前期議會に於て關東州產業の發達を助長する目的を以て、提議された。これが實施されると、インド紡績業者に綿布關稅改訂の口實を與へる惧れがあるのみならず、輸入を促進される見地から、國內の紡績業者は一齊に反對運動を起した。だが遂に該案は通過し、五月一日から實施されてゐるのだ。

「ふむ、愈々始めたな。」廣澤賢三はもはや變形花婿の意識から完全に脫却して、事業の前にその酒肥りのした體軀を躍らせた。杉本は云ふ。

「先に我々は業界の先行不安に脅え、淸算の受渡品たる二十手の生產を制限し、それで現物二十手の市價を人爲的に釣上げようとしましたね。處が皮肉なことには、一度賣放された二十手が逆に滿洲から輸入して來たといふ現象です。こいつは一考へしなくては、今に支那糸の大量輸入が行はれて、紡績界を震憾させるやうな一大問題を起して來ますぞ。」

「ふむ、ふむ。で、どうだ、市場では全然內地品に手をつけんでゐるかね？」

事件が紛糾し出すと、常に反對に落着き出して來る廣澤だ。

「旗色はとても惡いですよ。內地品は高くつて輸出もきかず、さりとて輸入は加はるし、こりや慘落一方ですね。」

「昨日の相場はどうだね？」

「後場で太番糸が二圓方安くなり、豪割れです。」

「よし、ぢや、もう新婚旅行を一先づ切りあげて歸らう。その間に君は實際案を考へといて呉れ給へ。唯注意を要するのは、市價が下つた爲に勞賃の値下げをしても、株の配當は七割を缺かないやうにすることだ。好いかい、七割だよ。」

電話を切ると、昂奮を落着けるために、廣澤賢三は頭を抱へて室內を緩り步き廻つた。いまだ安定にある資本主義が絕えず恐慌に動搖するのは、資本主義それ自身の內的矛盾である。それを氣附くには、餘りに廣澤は資本を愛しすぎてゐたのだつた。昂奮がさめ、商路が胸に成立つと、彼はまだ寢臺の上で彼方向きに長まつてゐる花嫁の許へ寄つて來た。千金を投じて得た利潤を生まないこの商品に彼が跪坐して行かねば愛の生產が成り立たないとは、彼の經濟學への反語である。

結婚の夜から表情の化石した花嫁へ向ふと、六十五の老體で花婿を勤めることの難さを今更痛感する。だが、勇を鼓舞して彼は生理的に慄へる手で花嫁を抱へ、まだ體內に殘る若さを示す爲室內を步き廻つた。花嫁の靖子は相變らず喜びの線を顏に浮き立たさないば

かりか、抱かれた六十五の花婿の腕に顏を埋めて、さめざめと泣き出して來るのだつた。

3

石の角の尖りが目立つ新築の洋館の前に、つやゝかな綠色のパッカードが止まつた。運轉手が扉を開いて殷懃に頭を下げると、金魚鼻から先に押し出して廣澤賢三が現れた。十九の花嫁の爲に新築したこの宏莊な邸宅を出入する每に、廣澤賢三の吐息は增し、金で買ひとつた花嫁の顏に微笑々浮立すことを、金によつてなさうといふ決心が更に強く固まつて來る。

蕨のやうに腰を折り曲げて出迎へた書生へ、荒々しく麥藁帽とステッキを投げ渡すと、廣澤賢三は自分の書齋へ通つた。卓上に備へてあるコロナ・コロナを取つて尻を嚙み切ると、それに火を植えて壁に張られた世界地圖の下へ椅子を引いて行つて眺め出した。コロナ・コロナの紫の煙がのびやかに地圖の上を這ひ廻るにつれて、彼の空想も義眼を通して次第に擴つて來る。そして、今日會社でとつた斷乎とした方策を思ひ出す。

他會社は既に深夜業廢止を續々實行しつゝあるのに――それは七月一日から法令によつて實行されるのだが――T・S紡績會社だけは、斷乎として期日までこれを續けることにし、各重役達が齊しく鳴らし出した生產の減少にも、國內賣價の引下げにも肯じなかつた。且、工場の方はテーラーシステムによつて一分の休息もない勞働者から、更に搾取率を高めるやうに各工場へ訓令を發した。時節柄彼がこんな生產過多を敢て行ふのは、彼には或成算ができてゐたからだ。かねて關東州特惠關稅に影響されて逆輸入を生じ、國內市場に捌け口を失ひつゝある自己の生產品を、これ見よと許りに外國へ向けようとしてゐるのである。

扉の外にノックが起つて、小間使が銀盆に紙片を載せて這入ると、廣澤賢三の前に捧げて來た。廣澤は橫柄に顎を突き出して、それを一應眺めて取り上げた。電報！　急いで押し開くと、かねて機脈を通じて置いたボンベイの副領事からだ。今では、政治家は資本家の手代奉公をしてゐる。受信紙に走る片假名の亂れ、

一昨年半歲ニ亘ルぼんべいノ紡績總罷業ハ、一時鎭止セシモ、去ル四月二十日罷業指導者三十一名逮捕ヨリ再ビ、ぜね・すとヲ起シ、現在閉鎖工場三十ニ及ビ、ソノ他ハ部分操業ヲ僅カニ繼續シ、罷工數ハ約十萬ヲ算シ、解決不能ト目サレルマデニ到レリ。印度總督調停ハ失敗ニ終リ、罷業期間ノ見込立タズ。コノ地ノ綿布市場ハ閑散トシテ、獲得スルニハ今最モ有利ナリ。」

讀み終へた電報を卓上に投げて立上ると、彼は兩手を上に差伸して高らかに哄笑を打上げた。今は纖維工業の罷業は印度のみにとゞまらず、英本國ランカッシャーで數十萬の職工がボイコットしてゐる。色鉛筆をとり出した廣澤は世界地圖に近づき、赤道に向つて突

出した三角地帶印度の都會朱線を引いた。それから手を後に組み合せ、前屈みになつて檻の中の獅子のやうにぐるぐる室內を步き廻り初めた。驚喜すると始まる彼の癖だ。少時さうしてから、今度は卓上電話に口を當てゝ唸りながら腹心の專務杉本を呼び出した。杉本の鼻聲がレシーバーに流れて來ると、廣澤は一段高い聲で叫び出した。

「君、君、販路が見つかつたよ、印度へさ。」そして電文を敷衍して談してから「排日熱の益々惡化する支那方面への綿布輸出は全く斷念して、この際主力を印度に向けるんだね。」

此方が熱して來ると、今度は杉本の方が妙に沈着味を見せて來るのだ。

「印度とは占めたもんです。だが、今主力をその方へ向けると、採算上の不利はかなり大きいものになりますよ。ダンピングを行はなくちやならないでせう。」

「好いさ、行ふさ、多少の缺損を見ても。さうしてでも、この方面の販路を獨占するといふことは捨てゝ置けない問題だ。印度は君、英國の植民地だぜ。」

「ぢや、それに從ひませう。H分工場と、大阪のS分工場の製品をその方面へ向けませうか。」

「全生產の五分の三はこの方面へ向けて好いと思ふね。」

「そいつは無謀です。我々の破滅です。」

杉本の鼻聲が喇叭のやうにレシーバーで呻り出した。

「世界市場を獨占しようとして、各國の資本家が齎しく競爭してるぢやないか。だから君、一刻も早く一ヤールも多く、この際印度市場を占めとかなくちや駄目だ。考へても見給へ。我々の製品は今、國內市場を拒まれてゐるぢやないか。」

廣澤が舌を卷き始めたので、杉本は相手の不機嫌を素早く讀みとつた。

「委細承知しました。」

懸引について機敏な杉本——そこを以て廣澤は腹心にしたのだが——は、さつさと電話を切つてしまつた。電話から離れると廣澤は、毛の薄い額をしきりにハンカチで拭き、さてはしきりに義眼をこすつて、「馬鹿な—　馬鹿な—」と繰返し、今度は地圖を見上げてゆくりなくもコロナ・コロナの紫煙にその事業慾を膨張させてゆく。

かくて、彼が、印度方面の販路を獨占しさへすれば、世界の資本主義の自由競爭から來る世界市場の獲得を完全にするわけだ。もともと商品を賣り捌き、資本主義の基底內を擴げる爲、世界市場に相當の分前を確保する最良の手段は、獨占的に支配される領域を獲得することだ。それには、植民地を獲得することが最も都合が好い。併し、この廣大にして有爲な植民地を持たない日本の資本家は、かくして他國の植民地へ機會ある每に侵入して行かうとするのだ。

新販路を得た廣澤賢三は、一時低下してゐた市價が、急に昂騰し

てゆくのを白分の情熱にたとへながら、皺にまみれた六十五の手で十九の花嫁の膚を撫でて行く。

4

水の深い堀割に添つた尨大な赤煉瓦の中に、その資本に比例した莫大な地區を領してる工場がある。拂込五〇〇圓の株劵が、時價二四〇〇圓を臺としてゐるT・S紡績會社のH分工場だ。

歯車とベルトが全動力のテーマを奏し、ローラーが中音部の混雜を朗かに統一し、旋盤を叩く鐵棒とミユールを行く錘臺の快活な高音が速度とメロデイを生む、林のやうに繁る各機械の一軸、一梃杆毎から生れ出る金屬性の音響が、休止符のないジヤズ・バンドを無限に續け、全工場内に充滿してゐる。混棉部（ミキシング）、打棉部（スカチヤー）、梳棉部（カード）から男性的な力の籠つた打音を强調して來ると、練條部（ドロインゲ）、粗紡部（フライヤー）、精紡部織布部（ウヰービング）から噴霧をくゞつて女性的な透徹したメロデイが高まつて牽制する。

男女工合せて二千人を呑込んでゐる工場も、唯々機械の謳歌に抑壓されて、人聲は更に聞えない。

テーラーシステムに依つて一分も緩みのない精巧な機械の廻轉に、全身の神經と視力を集中して、女工達は脊を洗ふ汗と噴霧の中に立働く。住田シゲは精紡部にゐて、無數のバンドのかゝつた二本のチン・ローラーが高速度に廻轉する輪具精紡機22號の前で、數人の受持女工達と立働いてゐた。高い所から白い光線のやうに上り落ちる數多の管絲が、仕上ローラーを廻つて糸籰にからんで行く。その度に、右手近くにある長測器（メートル）が刻々に數字を高めてゆく。彼女は瞼毛に纒りついた噴霧を瞬き落しては、機械に精神を統制し、流れ來る絲の切れ目をつないで行く。

さもなくてさへ、密集した人體の熱と、機械の熱に苦しめられるのに、午後の沸騰した氣温は場内に充滿した噴霧に高度の熱を與へて、息づくのも並々ならぬ努力が要る。毎朝工場へ入る時清新な感動を持つ機械の音も、亂れた神經の尖りに觸れて苛々しい。油斷なく糸の流れを見詰めてゐるシゲは、喉が非常に乾いて、燃える頭の中を紡錘が走るやうな幻覺に襲はれた。と、ぐらぐらと眼前の事物が晦滅して、思はず前へのめつた。足で踏みしめて前へ傾く身體を維持したが、危く木管を臺の下へ落してしまふ所だつた。はつとして飛び上ると、角度を生じた木管の位置を直して胸を撫でた。若し、木管を臺の下に落し、チン・ローラーの下へ潜り込んでその運轉にひつかゝれば、隙間の狹い二本のチン・ローラーが彼女を挾んでその命を吸ひとることは造作もないことだ。住田シゲは深い息を切なげに繰返して機械を眺め返し、脊中に一條の冷い汗の流れるのを覺えた。休息を求めてぐつたりと疲れた身體に、噴霧で濕つた衣服の重味を鈍く感じ、もはや一分の勞働も拒否しさうになつた全身の筋

肉がら、終了時間までの勞働をいかにして搾り出さうかと考へねばならなかつた。

かねて、工場の粗食で消化器を毀してゐた上に、つゞく深夜業がこたへたのであつた。彼女は自ら叱咤して氣を取り直すけれど、どうも意識がふらふらして針で突つかれても倒れさうだ。彼女の後では、頬骨の尖つた臺持女工が、油斷なく見廻つてはひつきりなく叱言を浴びせてゐる。能率增進のために、最近成績の惡い受持臺へ赤旗を立てるやうになつたので、臺持女工はひたすら長測器の數字にばかり氣を苛立てる。シゲが今から休めば、臺持女工の顔がいか許りか險惡に曇つて將來に惡感をつゞけ、寄宿舎へ歸れば又鬼の世話婦が燒鏝をあてゝ來るのだ。そこで、シゲは太股を抓つて、終了のサイレンが鳴るまで我慢することにした。胸が切なくて、蒸れた機械の油に嘔吐を催したくなる。

シゲと肩を並べてゐる女工達も、同じく切ない息を力なく開いた口から吐き、肩をすぼめ、片手で額を抑へ、時々足踏をしたりする。彼女等が一寸でも顔も脇へ向け、手を休めると、後で見張る臺持女工のナイフの双のやうな聲が降つて來る。

「赤旗を貰つたんぢや、おまんまにもなりやしないよ。このおたんちん」

住田シゲの意識の統制が亂れて來ると、今まで彼女の眼前で秩序よく流れてゐた糸が、吹雪のやうに切れて來た。急いでつなぎ出すが、意識の亂れは次第に狂しく糸を亂し、切れを多くし、彼女は益々周章てさせる。と、砲彈が落ちるやうに、シゲの頭上から臺持女工の聲が飛びかゝつた。

「チェッ、何をしてるんだね、このおかめは先刻からお前さんはサボつてるね。」

頬骨の尖つた臺持女工はシゲを突き除けるやうにして長測器を覗き込んだ。

「御覧、メートルが他のより五ハンクも下つてるぢやないか。お前さん一人がサボればそれだけ、この22號の出來高が減るぢやないか。馬鹿！」

シゲは長測照を覆ひたい氣持で少し肩を張り、眼前がぐらつくので額を抱へて眼をとぢた。と、そこへ床を踏み鳴らして監督が近づいて來た。

監督は薄い唇の兩端をぐつと下げて口を結ぶと、立停つて住田シゲの作業狀態を見守つた。監督の揮ふ鞭は、手を拱いて他人の勞力で投資の繁殖するのを待つ株主に、依然として年七割の配當を持續しなくてはならない會社の思慮から起つて來るのだ。その爲に監督は、馴馬のやうに女工を鞭打つことを忘れない。彼の鋼のやうに手嚴しい聲が心臓を叩いて來る前に、狼狽と逆上とでかつとした住田シゲは、暗い眩暈に頭を毆られた。忽ち、自體を支へる力を失つて彼女が前へ傾くと、綿の如くチン・ローラーにかぶさつて行つた。

叫びを立てる暇もなく、監督や臺持女工の傍觀の前で彼女の身體は左腕から先にするするとチン・ローラーの高速度の廻轉に引き込まれて行つた。

5

サイレンが工場内にひゞき渡つて、夜業の組と交替するまで、岡村ハツは頭が湯のやうになつたことだけを覺え、仕事の始末をいかにして外へ出て來たかを瞭り記憶に上せることが出來ない程だつた。洗つた手先に殘る機械油の臭を嗅ぎ乍ら、腐つた肺を抱いて食堂を通つて通用門まで來た。内に向つて黑い鐵の扉を開いてゐる通用門は、常に一つの昂奮を勞働者達に與へる。まだ少し、おぼろ溫くはあるが、外を流れる風に觸れるのが何よりも嬉しい。彼女の自由になつた肩から、筋肉の凝りが油のやうにとけて來るのを覺えた。だが、そんな欣びといふものは、あまり苦しまされると、却つて歌でも唱ひだすあんな心持なのだ。

岡村ハツは、徒らに過剩な勞働の苦役と、いつまで經つても日の目の仰がれない生活を嘆きはしない。今は、立派に組織されて着々と地歩を占めて行く組合員であつたから。彼女には、物の裏面を見究める眼と、それに就いて考慮する頭とが出來てゐた。彼女はすつかり知つてゐる、下積みで苦しむ者の上層では、どんな生活が行はれ、どんな欺瞞が續けられてゐるかを。上層の者が蛛のやうな生活をしてゐる間に、地面を這つてゐる蟻共は着々と自らの組織を固めて行つてゐるのだ。

彼女は通用門の側で、圓筒から落ちる棉の瀧よりも激しく流れる男工、女工を眺めて、練條部（ドローイング）から出て來る安井カヨを待つた。日乾になつた桑つ葉にも似て、焦熱の工場内で終日の勞働になよなよした男工女工は、解放された欣びを疲れた顏に湛はせ、勝手に話し合ひながら、ハツの前を通つて行つた。佝僂のやうに背中の曲つた男が片手を首から吊つた男と並んで、激しく言ひ合つて過ぎるのを見送ると、ハツの肩を叩く手がある。

「どうしたの、ぼんやりして？」

安井カヨの聲だ。ハツが振向くと、姙娠窶れがして前髪の薄くなつたカヨは、喘ぎ乍ら微笑を向けてゐた。ハツは蒼くて嚴肅な顏に戸迷つたやうに二三度瞬くと、カヨは、歩き出したハツの足並に合せて門外へ出た。その後を追つて、小走りに來て聲をかけたのは、色の小黑い丸顏を持つ後藤ミヤだ。みんな組合員だつた。三人はしき詰められた小石の燒けた道を、工場の赤煉瓦塀に添つて通りへ向つた。岡村ハツは言葉を失つてゐた自分達に氣附くと、强く嚙みしめてゐた唇を解いた。そして、今日彼女と同じ精紡部内に起つた住田シゲのことを語りきかせた。

「だから、これから組合へ寄つてこのことを報告するの。左腕を肩からぐだ〳〵に折つて氣を失つてゐる住田シゲさんに對して、監督

はから云つてるのよ――お前がぼんやりだからさ、此方には責任はないんだよ。だつて、そんな馬鹿なことがあるもんかねえ。あの向きでは、會社は住田シゲさんに一月分の見舞料も出さないに違ひないわ。此方が强硬な態度をとらなくちや駄目よ、これぢや。」

小石を蹴りながら、昂奮して語るハツの話に惹き入れられて、安井カヨは眼を細めて今日の自分を憶ひ出す――練條機にかけたバンドが摺り切れた時、その彈ける大きな音に飛び上つた彼女は、臨月になつて胎兒の激しい胎動に突如襲はれて、精神と神經を攪き亂されてしまつた。Aセメント工場から馘首された良人が全く收入を失つてることに思ひ到ると、彼女は容易に仕事を休むことが出來なかつた。耐え〲てやつと終る時間が來ると、動くことの出來なくなつた彼女は、眼をとぢて少時靜止した機械に縋つてゐたのだつた。胎兒の健康な躍動は、一家の糊口を杜絶することが明日にでも來るだらうといふ深い脅威をもたらせる。

大通りへ出て、鑄物會社の灰色の塀を廻ると、岡村ハツと後藤ミヤは、彼女等に從つて組合まで行かうといふ安井カヨを强いてとめて別れた。

×島の組合本部へ着くと、數多の勞働者を吸ひ寄せてゐる掲示板を眺めて二人は慣れた勝手へ廻つた。六月の長い日が落ちて、夕闇が薄く迫つて來た裏縁に、幹事の緒方と濱松の二人が腰かけて話してゐた。岡村ハツが近づいて聲をかけると、二人は振返つて眼で答へた。ハツはその蒼い顔をひきしめて血の氣の薄い唇を慄はせて、今日の出來事を報告した。默つて耳を傾けてゐた緒方と濱松は、ハツが口を噤むと低く呻つて唇を反らした。四人はそれから座敷に通り、鈍い電燈の下に額を集め、會社の示す態度を如何にすべきかを考究した。此方の腰はいつでも据つてゐる。手段は單一にして全一だ。

6

翌々日の午後、工場内の掲示板に住田シゲの負傷について會社側の報告があつた。それにはシゲの職務怠慢を鳴らし、更に會社の恩惠を誇張して治療費として、四十日分の日給を與へるとあつた。その前に集つた女工男工達は、掲示板を叩いて口を鳴らした。

岡村ハツもその掲示板の前に立つてゐた。彼女は掲示板の數字が血管に針を注ぎ込むのを感じた。いつの間にか彼女の側に後藤ミヤが並んでゐたので、臂で小突いた。

「ねえ、なんて人を馬鹿にしたやり方と思はない？ たつた四十日分なんて、住田シゲさんは病院で乾度死にかゝつてるだらうにね。假令全快した處で、腕一本は會社へ寄附に決つてるわ、あの怪我だもの。」

色の小黑い丸顔を向けて、後藤ミヤは、岡村ハツの少し氣味惡い程に蒼い唇を視詰めた。

「あんた、これで、この儘默つてるつもり。」

「チッ、今頃、そんなお人好しは、お地藏様だつてやりつこないわ。」

昂奮すると益々蒼ざめる顔に細い眼を吊り上げて、岡村ハツは齒を軋しませた。後藤ミヤはハツの袖をひいて、人だかりの中から拔けて出た。そして相手の耳に口を近づけた。

「今晩、組合へ集らない？　みんなに傳へて歩いて。」

「さうよ、さうしなくちや。それで、私は今日歸りに住田シゲさんを見舞に行つて來るわ、病院へ。」

二人が手を分けて、仲間に告げて歩かうとすると、サイレンが鳴り渡つた。もはや短い休憩時間は切れてしまつたのだ。

終業後、岡村ハツはすぐ、柳島にある病院へ廻つた。T・S紡績會社專屬の病院だが、板壁で蔽はれたバラック建の粗末な病院だ。これだけを見ると、とても大會社T・S紡績を想像することは難しい。石の門を潜ると、そこにまで滲つてゐる消毒液の臭氣がすばやくハツの鼻を捉へた。受付で、住田シゲの病室を訊くと、小窓に草鞋のやうな顔を覗かせた受付係は、じろじろとハツの見すぼらしい服裝を眺めた。

「住田シゲ？」と云つて、入院者名簿を繰つてゐた受付係は、ぱたりと閉ぢると頰杖を突いてハツに向つた。

「住田シゲはもうゐないんだよ。」

揶揄はれてるやうな馬鹿らしさを感じたが、岡村ハツは一歩踏み出して受付の小窓にその蒼い顔を突込んで行つた。

「でも、一昨日の午後四時頃捲き込まれたんですがね、左腕を折られて。」

「さう、一昨日入院つたんだが、その夜遲く死んでしまつてね、今日、國許から親が來て身柄を引取つてしまつたのさ。」

「え？」

眼を瞠つて飛び退つた岡村ハツは、思はず口を開いて一點を見詰めた。少時その儘で呆然としてゐたが、彼女を押し除けて來る面會人と入れ代つて受付から離れた。啞然とした別の方から、それは頗る當然な氣がして來た。その代りに彼女の膨らんだ鼻から、憤怒が彈丸のやうに社長の胸倉へ飛んで行つた。

街路へ出て、沸騰したボイラーのやうに張り切つた胸から、詰つてゐた熱い氣體が徐々に拔けて來ると、次第に平常の冷靜に立還つて來た。地を瞶めて步き乍ら、彼女は考へて見た。一昨夜住田シゲが死んだことを、會社が隱蔽してゐるのは何故だらうかと。

「嗅ぎ出してやつたわ、あいつ等の腋臭を。」

容易ならぬ事態の切迫してゐることを感じて身慄ひすると、彼女の前に滿員電車がとまつてゐた。電車の向ふの赤電柱の根で、夕刊賣が鈴を振つてゐる。車內へ乾物のやうに詰め込まれた人々の頭上は、ともされた電燈にぼやけてゐる。岡村ハツは筋肉を緊きしめる

力を感じて電車に飛び乗り、こぼれ落ちさうな人々の間に身を押し込んで行つた。

7

組合の本部では、鈍い燈火の下に幹部連が額を集めてゐた。もう蚊が出るので、閉め切つた室内で蚊やりを燃してゐた。風がなくて蒸す夜だ。集つた人々の鼻の上に細い汗が浮いてゐる。岡村ハツは今夜集る人々が若しや尠くはないかと懸念したが、來て見ると既に多くの顔觸れに接した。

男工側では、緒方、清水、濱松等の尖鋭な闘志の他に十人餘り居り、女工側では安井カヨ、後藤ミヤの他に七人集つてゐた。岡村ハツは二人の間に割り込んで、病院での見聞を報告した。

彼等の組織は階級に必要な人々を育てゝ行く。今では婦人部の自覺は日を追うて深まり、男性と頭を並べて討論し、理解することが出來てゐた。そして彼女等の堅い信念は、宗教的色彩にまで强烈さを示すのだ。境遇が彼女等の眼を開いて行く。

一同は、右鬢に口位の大い疵を持つた緒方を議長に薦めた。彼はその秀でた赤銅色の額と濃い眉とが示す意志の强さを持つて、いかなる爭議と雖も、徹底的に押し通す男だ。だから右鬢の疵のみならず、彼の身體には到る所に疵がある。岡村ハツの報告に腕を鳴らし齒を軋しませた一同は、緒方の旋い額を見上げて、彼の口から洩れる力の籠つた言葉に信頼と尊敬を深めようとしてゐる。緒方は手にしたノートで時々蚊やりの煙を煽つては、會社側の態度に非難を擧げて行つた。彼が話してる間に組合員は續々集つて來た。

住田シゲが死に到るまでの會社側の處置、及びその死の隱蔽についての裏面を曝露し、能率増進を標傍して最近搾取率の高まつた理由を解剖し、他會社は既に續々と行つてゐるのにまだT・S紡績は女工、少年工の深夜業廢止を行はぬ原因を探り、やがて來る法令の深夜業廢止後會社側のとる態度を豫測した。

沈着にして熱辯を揮ふ緒方は、會社側の裏面を遺憾なく曝露した。一同は、頬を熱して傾聽した。緒方は續ける。

「好いかい、此處で最も氣を附けなくつちやならないのは、深夜業廢止の問題だ。愈々廢止されて一晝夜の正味勞働時間が十七時間となり、それを二交替制にすれば八時間半で、今までから見ると一割五分の減少になる。だから表面から見ると、一躍勞働時間短縮のやうに見えるが、そいはつ餘りおぼこい見方なんだ。何故なら、今まで月四回の休日のあつたものが、深夜業廢止により二回に減らされ操業短縮の規約にてらし、一晝夜の休業が四分に相當するといふのから推定しても八分の増産となる。そこで、結局時間に於ての生産減少は七分でしかない。が、この減少は勞働强化によつて、充分資本家が着々と利益を納めて行くんだ。現にこの頃急に反動的な能率増進を叫び出したのも、その根據からだ。だから深夜業廢止になつ

ても、資本家は少しも損害を蒙らないばかりか、むしろ搾取を高めて行くんだ。だが、會社側では深夜業廢止を口實にして、賃銀値下げ、馘首等を今に言ひ出すに違ひない。この際我々は充分に結束して、强硬に維持して行かなくちやらなないんだ。」

「さうだ、我々は餘りに會社側の欺瞞を多く眼にしてゐる。」

片肌抜いだいが栗頭の濱松が一膝乗り出した。そして急に崩してゐた膝を改め、抜いだ片肌を菜葉服の中に包み込んだ。固めた拳で膝頭を打ちながら彼は云ふ。

「我々は生温い態度をとるべきでない。徹底的に主張を押し通し、この際爭議に進むべきであると思ふ。事態は迫つてゐる。躊躇する餘地はない。」

「異議なし！」

頸の長い清水と岡村ハツが同時に叫び出すと、方々でも同じ叫びが上つて來た。

「議長、議事進行！」

「爭議對策に移れ！」

そこで、緒方の持出した爭議對策を考究し、要求條項を擧げて嘆願書を作つた。

一、任田シゲの死去を隱蔽したる會社側の態度を問責し、同人の遺族へ扶助料請求の件

一、女工少年工の深夜業撤廢の件

一、深夜業廢止の勞賃に輕減のなきこと

一、深夜業廢止の解雇絶對反對の件

一、七時間勞働、休憩時間延長、月四回の休日を請求の件

嘆願條項が纒ると、これを文書にし、一方從業員に配るビラを作製した。それから一同は更に、全從業員二千人の結束に就いて、緊密な手段を討議すべく額を集めて行つた。

8

雪白の卓子のクロースの上に、銀のナイフ、フォークの整列。折り疊まれたナフキン。整へられた食卓はシャンデリヤの煌々たる光を浴びて、粛然と鎮まつてゐる。棒砂糖のやうに白い服を着た給仕に案内されて、主人廣澤賢三の金魚鼻が這入つて來ると、その後に數人のいかめしい顔付の來客が續いた。廣澤は來客の席を一々指摘すると、自分は卓子マスターの席に納つた。そこへ妻の靖子も來て卓子へ着いた。一同が着席すると、給仕は早速シャンパンを抜いた。花火のやうな音をたてゝシャンパンの栓が飛ぶと、芳香の豐かな液體を給仕は客の間に注いで廻つた。

やがて、シャンパングラスのかち合ふ音。乾杯。そして、虎のやうな哄笑がつゞく。

主人廣澤賢三は新築の披露を兼ねて、内々自慢の新妻靖子の明眸を自分の最も親しい友人達に見せようがために開いた内宴だ。彼は

滿足さうに鼻腔をふくらませては、義眼を細めて新妻を見守る。頰髯が鐵條網を作つてゐる將軍は、シャンパンを水のやうに飮む。內務參事官は華奢な左手にダイヤを光らせてよく口を拭ふ癖がある。片耳のない銀行家は素晴しいギリシャ型の鼻を持つてゐる。L新聞社長はその崇高に拔け上つた額を振り〳〵よく饒舌る。醫學博士の鼻眼鏡は奇術を思はせる。新妻の靖子は笑ふ代りに卓子の下でナフキンの先を揉んでゐる。

サラダが出て來た時、靖子は口を押へて立上ると、一同に目禮して急いで室外へ走り出た。來客が眉を寄せて靖子の後を見送ると、廣澤はその虎のやうな哄笑を打上げて一同を制した。

「何、御心配には及ばぬが好い、あいつはもうこの頃度々吐瀉するやうになりましてな、は、は、は、は……」

彼は、十九の新妻が笑ふ代りに盛に吐瀉し出したことを內心深く歡んでゐる。醫學博士は鼻眼鏡を搖りながら、コールチキンにナイフを揮つた。

「そいつは何よりおめでたい。一體、現今の我國に於て、上流階級と下層階級との繁殖率は先づ、三對十の比に見て宜しいですね。實にプロレタリアの繁殖率は、恐るべき勢を以つて將來に開いて行きますよ。」

その後を受けて內務參事官が口を入れた。

「この繁殖の比は全世界を見ると、もつと開きを大きくしますね。それから生じて來る結果、內務省の昨年末の統計では我國の失業者が約四十萬、英國が百五十萬、米國が約四百萬といふ數を見てゐますがね、この失業といふ奴は政府が意識的にやつてるんです、といふのは、政府が彼等に職を與へるのは卽權力を與へることになるし、失業者が多いからと云つて彼等の產兒制限を行はしては兵役の義務者が尠くなるんだから。それに、產業豫備軍として重要ですからね。ま、百萬やそこらの人間を放つといたつて、何とかして行きますからね。だが、表向その儘に放つといては、之等の者が何をするか解らないから、失業政策といふ看板だけは出してゐますがね。」

そこで、將軍はその頰髯の鐵條網の中から洞穴のやうな口を開く。

「將來アメリカと戰爭するといふ風說が間々あるが、それよりもつと重大な軍備がこの國では必要である。それで、當局では、參謀本部以外には軍備の正しい數が秘してある。民間飛行の奬勵、都市計劃、青年訓練所、各種學校に於ける教練の強調等は此處に意がある。それに人間を使用しなくとも、機械それ自身によつて能率をあげるやうな秘密な軍器がある。例へば、電信隊へ行くとこんなのがある、人の乘らない自動車が目的地へ行つて爆彈を落して歸るやうなことが、無電裝置で出來るやうになつてゐるものが……」

素晴しいギリシャ型の鼻を持つ銀行家は、意識的にその鼻を突きあげて、

「アメリカと武力による戰爭は先づ出來ないでせう。それより各國の資本家は、經濟に於て世界再分割の形勢を示してゐるのです。ざつと云へば、アメリカは南北兩アメリカ大陸を占め、イギリスは印度洋方面に、日本は極東に、フランスは地中海にと勢力を張つてゐます。だがこれも現在では、二大世界列强、アメリカとイギリスとの二つに更に分割されて行く形勢が尖銳になつて行くんです。」

すると、L新聞社長は、その拔け上つた額を振子のやうに振り出した。

「さやう、我々はかういふ決論を得るのです。イギリスの勞働黨、ドイツの社會民主々義者、支那の南京政府等、益々資本主義化して行くのを見れば、資本主義の世界は一先づ安定だといふことをね。そこで我々は、世界の六分の一を占めるソヴエート・ロシアを徹底的にやつゝけることを問題とするのです。(だんだん昂奮して日頃の演說口調が高まつて來る)ヨーロツパ諸國をソヴエート聯邦に對抗するブロツクに結成せんとするイギリスの努力は、バルカン化された東部及中部ヨーロツパのすべての隱れた對立を、白日のもとに曝け出すのです。だが、直接ソヴエート聯邦と境を接してゐる國々は戰爭することを躊躇してゐる、一たび敗北せんか、忽ちにしてその支配權を失墜するに至るに相違ないから……」

そこまで來ると、今まで口角に泡をふかしてゐた彼も人々も急に默つてしまつた。彼等は僅かに感じてるんだ。或一つのことを。

いつの間にかデザートも濟み、フインガボールも片附けられて、卓上は沙漠に歸つてゐた。閉會の挨拶をしようとして廣澤賢三が立上つたところへ、給仕が銀盆を捧げて來た。電報―廣澤にとつては電報が戀人の顏になつてゐる。挨拶はそのまゝにして彼が急いで封を切ると、ボンベイの副領事からだ。

「當地向輸出綿布ニ競爭者現ル。K・F紡績、A・N紡績ノ出荷多シ。貴社ノ品八分ノだんぴんぐヲ行フ必要アリ。尙、當地ノ紡績總罷業ニ印度總督ハ彈壓對策ヲ實施セリ。」

9

庭木はまだ衣をつけてゐる。その剪られて僅かに殘つた枝を搖つて、六月の風は爽かに朝を吹き入れる。廣い邸の奧の方からはしきりに造作の音がひゞいて來る。廣澤賢三は書齋にゐて、朝刊に義眼を通してゐたが、釘を打つ音を耳にするのは愉快であつた。資本主義の牙城を益々堅固にする爲に打込む釘のやうに思はれて。彼は新聞に眼をつけながら、いつか笑はない新妻の身體に巢喰ふ生命に微笑を綻ばす。だが、昨夜醫學博士の云つた、上層と下層との繁殖率が、三對十であるといふ比は、痛く彼の心を脅かした。彼が、子孫繁榮の爲に數多の妾を蓄へるのは、ブルジョアの道德であるとさへ考へてゐる頭を叩いて、卓上電話が鳴り出した。この頃彼は電話の響きに異變を豫感する。周章てゝ電話に覗けば、腹心の專務杉本

の鼻聲。今日はその鼻聲が更にひどく、おまけに吃りさへする。
「社長、た、大變です。H工場の奴等は愈々おつ始めましたぞ。」
「うーむ。」
廣澤賢三は呻つて、送話器の中で唇を歪めた。やつたな！と頭を殴る力を感じたが、何故か聲を立てることが出來なかつた。そこには常に彼を脅かしてゐた幻覺が、愈々形を示したといふ當然な肯定も動いてゐた。杉本は聲を顫はせて續けた。
「午前十時に——ほんの先刻です。私が社へ出ると、H工場の職工代表者として五人の男が——腕つ節の强さうな逞しい男です——私を待つてゐました。そして、いきなり嘆願書を差出したのです。見ると、かういふ文書です。（そこで杉本は嘆願書を讀む）そして、H工場全從業員二千人の連名と捺印があるのです。これは昨日一度H工場長櫻木のもとへ差出してはねつけられたのです。それを執拗くも今度は私の方へ持ち廻つたのです。一應受取つて職工代表を歸しましたが。善後策はどうしたものでせう。」
「馬鹿！」
廣澤賢三は自分でも飛上る程大い聲を發した。レシーバーを持つてゐる手は絶えず慄へ續けるのに。
「そこで奴等は何をしてゐるんだね！　怠業か、それとも罷業かい？」
「早速H工場へ電話をかけて訊いて見ると、奴等は朝からビラを撒き、從業員大會を開き、そして今では怠業と決め込んでゐるんです。」
「馬鹿！」
もう一度呶鳴つてから廣澤は强く足踏した。
「君にも似合はない遣り方ではないか。」
すると、杉本は妙に落着いて來た。
「ですがね、世の中には懷柔といふ方法もあるのです。嘆願書を一應受附けておいても、氣に入らなきや揉み潰すといふことも出來るぢやありませんか。」
「なるほど。」
「至急御出社を願ひます。委細は御面談の上でなければ。」
「うむ、すぐ行く。」
電話を切ると、廣澤は背後に手を組んで疾風のやうに室内を歩き廻り出した。梅雨期になると出て來るレウマチの足が慄え、痛み出した。やがて自動車を呼ぶと、彼は直ちに會社へ乘りつけた。會社では既に急報に接した重役達が駈けつけてゐた。一同は會議室に集つて、職工長、工場長、事務の報告を一度詳かに聽きとつた。廣澤賢三は彼等の聲を耳に受けながら、嘆願書を眺めてゐた。又しても彼の頭を三對十の比が走る。二千人の連名と捺印を見ると、相手方の結束の堅さに彼は危く眩暈を起しさうになつた。二千人の後からT・S紡績全工場一萬二千人の職工の壓力が加はる。

事務の報告が終ると、緊急討議に移つた。廣澤賢三はその金魚鼻を矢鱈に揉みながら、この度の爭議に一切の假借を許さないことを主張した。

「ボンベイの紡績總罷業でさへ、十萬の職工を彈壓方法で片附けようとしてるぢやないか。二千人が何だ。徹底的に彈壓で臨んで好いさ。假令二千人を全部解雇しても少しも憂へることはない。その爲に産業豫備軍として國内に四十萬の失業者があり、植民地にも多大の失業者がある。それに訓練された軍隊は常に我々の兩手に續くんだ。煽動者、主謀者等の不穩分子は一切掃蕩して好いさ。やがて深夜業廢止になれば、生産が減少するから職工の數許り多くては、從來程に利潤が高められないだらうからね。この要求條項の中で、深夜業廢止だけは實行して好い、法令實施までに後幾日も餘さないからね。」

胸を反らして斷乎として言ひ切ると、今度は弱々しく聲を改めて來た。彼の義眼が彼の戰略の窓のやうに冷然と光る。

「だがね、今印度方面に綿布の活路を開いてゐる際なんだから、生産を減らすといふことは世界市場獲得に不利なんだ。それに昨夜ボンベイからの來電によれば、K・F紡績、A・N紡績等の手強い競爭相手が現れたんだ。今大事な時だから、一刻も工場を休ませては不可ん。そこで此方側に不利が行かないやうに、彈壓か懷柔か何とか好い工夫はないもんかねえ。」

10

六月の太陽は彼等の眞上に赤旗のやうに昇つてゐる。その強烈な光と熱を以つて、太陽は、職場の前に集つた全從業員の頰を燒いた。職場の板壁に塗つたコールタールが、炎熱にとけて蒸れ上つて來る。眞夏の紺靑な外海にも似て廣場に打寄せた勞働者達は、潮のやうに鳴り、どよめき、怒號した。男工も女工も入亂れて肩を犇しめき合はせた。その怒濤にも似たどよめきは、今まで機械工業の謳歌として全工場に漲り溢れてゐた機械のジヤズ・バンドを封鎖し、物質それ自身の無音と靜止の狀態に立還つた工場を壓服し、更に灰色の空を掃く黑煙を忘れはてた煙突よりも高く湧き上つて、工場の外へ溢れ出て行く。

群集の中心には、打棉部（スカチヤー）から足臺をとり出してその上に立つた色の黑い男が、腕を振り、足を踏鳴らし、枯聲で演說してゐる。その後の閉された工場の扉に、ポスターやビラが一面に貼られ、剝がされ、引裂かれてゐる。臺上の男の一言一擧手につれて、職場の前の群集は、靜まり、動き、叫び出す。やがて彼が飛び下りると、別の方から群集に押されて肩のいかつた男が登つた。群集は手を打つて喚いた。その男はけい〳〵とした眼光で隈なく一同を眺め廻してから口を切つた。

そこには、爭議の首腦者たる緒方、淸水、濱松などはゐなかつ

た。女工側の岡村ハツ、後藤ミヤ達もゐなかつた。今朝工場の門を入る時、夫等の外に百人の男工女工が、警官と職工長とに拒まれた。卽ち、彼等は、この爭議の首腦者として馘首されたのだ。そこで、危く入場を許された幹部派の殘りが策動して、此處に從業員大會を開き、彼等は自己の立場を鮮明してゐる。彼等に許されたのは唯、深夜業撤廢のみで、他の條項はてんで顧みようともされなかつた。だから彼等は會社側の非を鳴らし、更に新しいスローガンを立てゝ戰ひ拔かうとしてゐるのだ。

百名に近い顎紐をかけた警官と職工長とが、群集の間を叱鳴りつつ押し分けて來た。群集は彼等の通路を拒んで、波のやうに左右へ搖れ、喚いた。大波に揉まれる小舟のやうに警官達は群集の間で搖り返され、押し返されしながら、拔手を切つて中央の足臺まで進んで來た。と、更に又、警官の新手が後を取り圍んだ。

足臺まで來た警官は、上に立つて熱辯を揮ふ男を引ずり下した。代りに職工長が足臺へ飛び上つた。群集は「わーッ」と喊聲をあげると、警官にひかれて行く男の方へ雪崩を打つて通路を塞いだ。すると、後を取り卷いてゐた新手の警官が血路を切り開いた。男を引つ張つた警官は群集の間を拔けると、そのまゝ門の外へ出て行つた。足臺の職工長はその土色の顏を振り廻して一同を睨むと、蚯蚓のやうに蒼い唇を開いた。

忽ち群集の間に動搖が行き渡つた。職工長の後から足臺へ飛び乘つた男は、物も云はず一突きに職工長を突き落した。すると、足臺の下の警官が彼に飛びかゝつて捉へた。群集はその男をとり返さうとして雪崩れかゝつたが、又新手を加へた數十名の警官が立廻つて道を開いた。その男も亦警官にひかれて行つた。次に立つ男も、その次の男も皆警官の白い手に押へられた。

「行け！」

「同志を奪ひ返せ！」

「飽くまで鬪へ！」

今は、群集は沸騰した湯のやうに湧き返り、警官にひかれて行く男の後を追つて、門の方へ動き始めた。門には既に數十名の警官が控へてゐた。「わーッ、わーッ。」と喊聲を擧げた群集は、それへ襲ひかゝつた。毆り合ふ腕のひしめき。帽子が飛びあふ。服が裂ける。サーベルが鳴り、きらめく。

門を固めてゐた警官を揉み潰して群集が外へ雪崩れ出ると、門の外にも數十名の警官が、入場を拒まれた幹部派と戰つてゐた。先に警官にひかれて出た者達は、こゝでラグビーのボールのやうに奪ひ合はれてゐた。雪崩れ出た群集は門の外の警官へ打つてかゝつた。青服の海に這入つた警官の白服は波の穗のやうに沈み、浮き上り、飛び散つた。

すると、揉み合ふ群集の頭上から忽ち急激な勢で水が流れかゝつた。工場に備へつけてある消火ポンプが十數本、横手の塀から覗い

てゐるのだ。俄かな瀧に驚いた群集は、女工から先に悲鳴をあげて四方へ雪崩れ散つた。と、門內の警官はその隙に躍り出て、目ぼしい者達に飛びかゝつて行つた。ポンプは逃げ惑ふ群集を執拗に追ひ廻して、その上に尙も盛に放水した。その間にひるまず警官と戰つた數十名の幹部派は、警官の包圍を受けて、全くその中に包み込まれてしまつた。が、彼等は腕を組み、捕へられる味方を奪ひ返してよく戰つた。彼等の勢に辟易した警官は、もはや拔刀して斬り込んで來た。躍る肉體の上に降りかゝる白い刄がきらめく。忽ち悲鳴を擧げて靑服が倒れる。白刄は益ゝ躍り狂ふ。肩を組んでゐた者達は端から倒れて行く爲に遂にばらばらに崩れ、ポンプの水をくゞつて散つてしまつた。

ポンプの水はまだ群集を追つてゐる。

捕へた幹部派を整列させると、白服の警官達はサーベルを叩いてそのまゝ警察へ護送して行つた。

11

消火ポンプで散らされ、檢束に殘つた幹部派は組合へ引上げて來た。緒方、濱松、岡村、後藤等の首腦を失つてゐたが、左頰に傷を受けた淸水を殘留組の中に見出すことが來た。警官へひかれた者達は十七人であつた。

傷つき倒れた十三人が、若者達に運ばれて來た。彼等の傷は多く顏、首、腕などに深く喰ひ込んでゐた。それ等は直ちに近所の粗末な外科病院へ收容し、應急手當を講ずることにした。靑服を通して肋骨を貫かれた、瘦せ形の米田は、若者達に運ばれる擔荷の上で、絕え〴〵な息の中から胸を搔き掘つては、

「俺はまだ死なねえぞ、やるんだ、やるんだ……死ぬまでやるんだ！」と叫びつゞけた。

椽に立つて、聲の細まつて行く米田を見送つてゐた一同は、眼をこすり、洟をすゝりあげた。

負傷者を出し、首腦を引き拔かれたことは、彼等の組織の上に强い打擊であつた。だが、彼等は、それ位で力を落しはしなかつた。淸水は手拭を裂いて傷の頰を縛り、片肌拔いで眼尻を吊つて、集つた人々の顏を一々細密に眺めやつた。

米田を見送つて座についた一同は、容易に口を開かうともせず、昂奮し、そしてひどく疲勞してゐる。みんな頰や首や腕などに多少の擦傷を帶びて、血を滲ませ、或は赭らんだ皮膚が脹れてゐる。彼等の服の多くは裂けてゐる。放水を受けて濡れた服を脫いでゐる者は絞つたシャツだけをみすぼらしく着てゐる。淸水の傍で膝を抱いてゐる男は喘息で傷められた喉をぜい〳〵鳴らしてゐる。いつも考へ深さうな眼付をしてゐる波田といふ少年は、椽の端にゐて頰杖を突いてゐる。男達はみんな重い沈默の中で、或種の詰問的な顏付をしてゐる。それに比べると、女達はまだ昂奮がさめきらず、絕えず

身を動かし、息をはづませてそは〳〵してゐた。
淸水は、鏬つた額の傷をその大きな平手で時々押へて見ては、口を開いた。
「奴等はやつたんだ、我々が豫定してゐたプログラム通りだ。だから、ちつとも我々は打擊を受けたんぢやねえんだ。我々の本舞臺はこれからなんだ。奴等の欺瞞に眼を昏ませるな。奴等の權力にひるむな。この度の爭議で最も愉快なことには、憂へてゐた寄宿舍側が遺憾なく我々に結びついたことだ。それは恰度、住田シゲさんが寄宿舍側だつたといふことにわけもあるが、とにかくこの結束は大きな進歩だ。併し、我々のやつたことが會社側にとつては脅威の全部でないといふことを最初に氣附かなかつたのが殘念だ。といふのは奴等はちやんとかういふことを見透して、工場を諸所に分けてゐることだ。今、我々H工場が全部休んだとて、それは會社の生産の何分の一かに過ぎない。我々は今一度やらなくちやならない、今度はT・S紡績の全職工が結束することだ。この度、我々はあまりに急ぎ過ぎた。
「弱音を吹いて士氣を弱らせるな。」喘息で喉を鳴らしてゐる男が叫んだ「俺等はあくまで鬪ひ拔くんだ、裏切り者を出すな。」
「さうだ、君の云ふことは正しい。」淸水は落着いて云つた「併し、我々のとる行動は、常に大局から見透して、敵の陣容を偵察した上の策戰によらなくちやならないんだ。」
「ぢや、この度の爭議を、すつぱり會社側に賣らうつてえのかい。あんなに澤山の犧牲者を出しても。」
隻眼の靑年が肩を張つて淸水に詰めよつた。
「妥協は絕對反對だ。」
「待て、西鄕！」淸水は隻眼の靑年を制した「よく聽いてから物を云へ。味方を賣つたり會社側と妥協したりする奴は、此方から叩き潰すんだ。さあ、無駄を省いて善後策を講じよう。」
そこで、彼等は疲れた頭を傾けて協議した。この爭議はどこまでも此方の要求を押し通すまでは續けること。そして、濱松分工場、大阪分工場、岡山分工場、瀨戸內海G島分工場、靑島分工場等十一工場と機脈を通じて、この度の爭議の火を漸次全體に燃え移して、T・S紡績全從業員と手をつなぐ方策をとること。明日から無期怠業に入り、强硬に此方の態度を維持することにした。それが濟むと一同は印度及びランカッシャーの罷業に萬歲をとなへ、H工場の全員に配るビラを刷つた。

12

疲れはて、だが昂奮から冷めないで、淸水と少年の波田と喘息持の男とは、透明な凉を生む夜風に押されて組合から歸つて來た。街路の兩脇には、氷屋が明く店を張つて、硝子玉の簾が風にもつれてゐた。三人は肌にべたつく衣服を海藻のやうに感じながら、餘り光

の明くない方を選んで歩いた。喘息持の男は、冷えて來る爲に喉の鳴りを一層强めてゐた。

「これはな、隣のW鐵工場に出る奴が云つたんだが、この頃盛に部分品を作らせられてるさうだ。どうも、可笑しいぢやねえか、今、政府の方ぢや不戰條約案てえもんで騷いでるのにな。俺は思ふがそいつは俺等にぶつ放す爲の道具にするのさ。」

少年の波田が變聲期の皺嗄れた聲を出した。

「先刻からどうも可笑いんだよ、俺等の後にいつも同じ距離を以つて一つの足音がついて來るんだ。」

「後を向くな、スパイだ!」

清水は苦々しく言ひ切つて、足許へ唾を吐き棄てた。

三人は默つて、遙か彼方の大空に光芒を放つ街の上へ眼を向けて瞬いた。そして又唾液を吐いた。街のどよめきが彼等の耳に蜂の唸りにひゞいた。

「奴等は蜂のやうな毒を持つてゐる。俺等の組織はもつと堅固に仕上げなくちやならない。」

さう呟いて、露路の角で清水は連れの者に別れた。

共同長屋の入口では、近所の子供が摑み合つて喧嘩してゐた。この地帶へ足を踏み入れると、清水はいつも不安定な生活の動搖を感じながら、又一方には根强い力の地盤を感ずるのだ。表の障子が御幣のやうに破れた彼の家では、子供がしきりに泣いてゐた。傾いて跛になつた表の戸を軋しませて開けると、裸になつて泣いてゐた男の子が、べそを搔きながら彼の腕へ飛込んだ。清水が子供を抱き上げて濡れた頰を拭つてゐると、竈の下に屈んでゐた妻が近よつて來た。頭を包んでゐた手拭を取つて頰を撫で、微笑んで見せた。

「どうだつたの、首尾は?」

清水が頰を緩り、口を歪めてゐるのを認めると、彼女の顏の微笑は忽ち消えて、嚴しい眼付に還つて來た。清水は緩つた頰を妻の方へ突き出した。

「どうもからもねえんだ。奴等は豫定の行動を取つたまでさ。俺等の方は、これから面白くなるんだ。」

彼は一寸語を切つて後を振向いた。表戸でがさりと人の動く氣配がして、戸が軋り出したので。スパイだ! と感じた彼は口を噤んでしまつた。子供は怯えて、彼の腕にしがみついた。軋しむ表戸が開くと、角袖が入口に立つた。

「今晩は。」

と、その男は馬鹿に丁寧な聲を出して、這入つて來た。

「お客さんだ、行つて見ろ。」

清水は妻に顎で示し、腕の中の子供を搖り上げると、上り框に腰かけた。妻は來客の方をぢろりと睨むと、二三歩近づいて行つた。

角袖の男は家の中をじろじろ見廻して、破れた襖や壁に貼られたデモのポスターやビラなどに眼をつけてゐたが、やがて清水と並んで

上り框に腰かけた。妻は默つて竈へ引返すと、新聞を丸めてその下口へ投げ込み、燻べ出した。煙は綴り家の中を這ひ廻つて人々の面をかすめてゐたが、次第に猛烈になつて家の中に濃く籠つて來た。スパイはいろんな緒を以つて話しかけて來たが、淸水は子供と「我等が歩武の先登に――」をうたひ出した。五つの子供はもつれる舌を操つて亂れる節には構ひなくよく唄つた。妻は益々新聞紙を燻べた。その煙の密度と臭氣が窒息を强ひるやうになると、しきりにくしやみをしてゐたスパイは、顏を抱へて屋外へ飛び出した。

13

「で、どうだい、巧く行つたかい？」

「首謀者を十七人生捕りにし、極力切崩しに努めました。何しろ寄宿舍の千二百人といふ者が袋の中の鼠ですからね。脆いもんでさあ。嚴重な禁足を喰はし、この方から先に仕事へつかせました。通勤の方は高給職工を巧く買收し、强硬に反抗する奴は卽刻馘首し、一先づ切崩しが出來たのです。今日から一齊に機械が動き出しました。」

「さうか。そいつは御苦勞だつた。ことによつては軍隊の出動を願はうと思つたが……。皆で何日休んだことになるかね、工場を。」

「さやう。丸十二日になります。」

「可成り打擊を受けたね。ま、それでも納つてよかつた。何れ、祝宴を開いて、緩くり勞をねぎらうことにしよう。」

その後に虎のやうな哄笑を送つて、廣澤賢三はレシーバーを置いた。義眼を睨つて朗かに笑ふ程、彼の心は愉快ではなかつた。何故なら、彼はもはや勞働者の結束の强さと、その牽制に心を亂し、彼の施す搾取率の高さを自覺してゐたから。机に歸ると、彼は堆積した電報の中から、印度の綿布市場を報ずるのを拔き出した。

印度の綿布市場を最も早く占めた、T・S紡績の製品を凌いで、最近競爭者の勢力が次第に育つて來た。T・S紡績を追つて直ちにはせたK・F紡績が彼に遲れたのは、僅かに瞬領印度で五時間、カルカッタで二時間、ボンベイで三時間であつた。その差で實に十三萬八千ヤードの蹴落しを受けてしまつた。それに勢を得た廣澤賢三は全印度の綿布市場を自分の獨占に歸しようとその金魚鼻を蠢かし、かねて機脈を通じておいたボンベイの副領事に賴んで、他社の製品を牽制するやうに策を循らした。だが、K・F紡績は、最初七分のダンピングを以て當つてゐたT・S紡績に宣戰を布告して、八分のダンピングで現れて來た。周章てゝT・S紡績が八分に水準を下げると、遲ればせのA・N紡績がその地質の密度に好評を買つて、前二者を凌ぐ勢を見せて來た、尙他會社も、内地品の輸出は支那を投げて、印度方面へ皆頭を向けて來た。

そこで、H分工場の爭議は、T・S紡績の輸出高にかなりの痛手を負はせた。廣澤賢三の虛榮心は、それを極力糊塗するに努めたが

次第に他社の擡頭に形勢が亂れて來た。世界市場獨占にあせる廣澤は、前後に受けた强敵を、いかにして蹴散らすかを思ひ循らさねばならないのだ。

彼が眉の間に縱皺を挾んでコロナ・コロナをかみ碎いてゐると、新妻の室から出た醫學博士の船越が這入つて來た。船越の鼻眼鏡に出遇ふと、廣澤はいつも物の墜落する錯覺を受ける。廣澤の向ひのソファに腰を投げ込むと、ぶらぶらする鼻眼鏡をふいと突き上げ、胸を擴げて船越は、廣澤に新妻の症狀を述べ、轉地療養の必要を説いた。十九の新妻靖子の吐瀉は日を追うて激しくなり、今では食物を全く受附けなくなり、僅かに果物の汁を吸つて命をつないでゐる。廣澤はそこにも亦大きな障害の待つてゐるのを感じた。浮沈する製品に頭をなやまし乍ら、新妻のことになると、彼はその儘放擲しておくことは出來ないのだ。早速醫學博士の言を容れて、直ちに葉山の別莊へ行くことに決めた。醫學博士が鼻眼鏡を搖つて出て行くと、廣澤賢三は立つて新妻の室へ這入つた。

カーテンを下ろして光線を鈍くした室内の隅の寢臺で、靖子は石灰のやうに白けて横たはつてゐた。這入つて來た廣澤を、靖子は薄く眼を開いて認めると、くるりと身體を飜して、面を伏せてしまつた。妻へ手をかけて、ともすれば爆發しさうな相手の不機嫌を子供のやうにあやしながら、彼は轉地療養をすゝめた。むづかる相手をやつとすかして、石蠟のやうに透明に痩せた妻を自動車に移すと、彼もそれに附添つて葉山まで自動車を走らせた。膝の上に抱き上げた妻を紙幣のやうに感じながら、彼は痩せ細つた妻の面に亂れる髮を撫で上げてやつた。そして、彼自身もレウマチの足を緩くりラヂウム温泉に浸す機會を欲した。

葉山の別莊へ靖子の寢臺を調へると、彼はぢつと別莊へ落着いてゐるには餘りに事態が急迫してゐるので、翌日又東京へ引返すことにした。靖子は廣澤の義眼と別れることを別に悲しまなかつた。それで却つて廣澤の方が心を殘しながら別莊を去らねばならなかつた。

會社へ出て行くと、專務が、上半期の決算報告書を作つて待つてゐた。彼と卓子を挾んで、廣澤は決算報告書へ老眼鏡を通して行つた。專務が傍から口を差添へて云ふ。

「御覽の通り、今回は株配當を年七割の半分――三割五分から、三割二分に繰り下げねばならなくなりました。何しろ、國内市場が丸で不況なものですから、それに輸出は支那が全く駄目だし、印度へ行くのもダンピングを行ふので採算は甚だ不利です。」

廣澤は一應丹念に眼を通した決算報告書を卓上に投げ出して、專務の垂れた眼尻を睨んだ。

「いかんね、減配といふことは。どうしても慣例の三割五分でなくちや。今株主の信用を落すと、かねて社長の椅子を覗つて株の買占めを盛にやつてゐる重役の山田君に蹴落されてしまふしね。もつと

緊縮する方法はないかね、社の會計の方を。」

専務はハンカケのやうに白い手を揉みながら、

「えゝ、この三割二分といふのも、この間の爭議を口實にして、職工等の給料を削減し、或は馘首して、やつと苦策を講じて得た結果なんです。この上は唯、後期繰越金と役員社員にやる賞與を削るばかりです。」

廣澤はこの時だといふやうに卓子を打つた。

「直接勞働する者でさへ賃銀を低げるなら、社員の賞與を減らしたつて好いさ。配當の三割五分を缺いてはいけないんだ、看板だからね。それに深夜業を廢止し、職工の數を減らしたから、今一層能率を高めて減產を極力防がなくちやならないね。僕は今、印度市場を我社の品で獨占して見せると意氣込んでゐる。現在の缺損は獨占した將來で取り返すから、ま、默つてゝ與れ給へ。まだ英國や印度の紡績總罷業は片附かないからね、はははは……」

14

素張しい綿布の進出

英品を驅逐して印度及蘭領印度を席捲

上半期の仕向け地別輸出高

（單位千圓、千平方ヤード△印減）

		四年上期	前年同期比較
支那	數量	三二四、五九〇	△四一、四七九
	金額	八四、六七〇	△一三、二四四
印度	數量	二六六、〇〇三	一三一、二〇九
	金額	五一、七〇九	二五、二〇四
蘭領印度	數量	一一一、〇〇三	一五、二〇四
	金額	二三、四九五	一、七三九
その他	數量	一七八、五七三	六四、〇四六
	金額	三八、四一二	一三、一〇六
合計	數量	八八〇、一六九	一六八、九八〇
	金額	一九八、二八八	二六、七〇四

綿糸の輸出高

（單位梱△印減）

	四年上期	前年同期比較
支那	一二、三九八	△三、三〇一半
香港	三、六一六	△六八、七三〇
印度	一二、五四〇	五、五三五
南洋	二、八一一	△三、〇九五

その他	二、四七二半	△	四八二半
合計	三三、八二八半	△五、三七六半	

――紡績聯合會の調査による

15

街路に鈴が亂れる。それに續く慌しい足音、空氣が炸裂して氣分が尖る。號外だ！　同じ狢の穴から發した一發の巨彈は見事に內閣を倒壞せしめた。燃え上る贋造紙幣の政策。ばらばら火の子となつて散る號外。市中に湧上る歡呼の聲。滿洲某重大事件に就いてかねて雲行を惡くしてゐたS內閣は、掌中の帝國主義と支那の新興ブルジョア政府とを傀儡に使はうとして、却つて自ら悶死してしまつた。

廣澤賢三は晴氷みたいにひつきりなくかゝる電話の應接に、てんてこ舞だ。金魚鼻が荒い毛孔を閉き、レウマチの足がしきりにラヂウム溫泉を望む。倒壞したS內閣政黨系に屬してゐたT・S紡績はこれから又運命の定石を辿らねばならない。(一體S政黨は紡績業者と深い關係を持つてゐたので、織物業團體が紡績會社の暴利を鳴らして輸入關稅撤廢を迫つたが、政府はそれを有耶無耶に葬つてゐたのだつた)

どの電話も皆悲觀の風を吹き入れる。廣澤はもはや電話を外づしてきくことを止めた。頭を抱へてソファの中に身を投げ込んだが、やがて、ばたばた机上の書類を積み重ね、引崩し、又積み重ねる。

「自分は一體、何をしてるんだらう。」

彼は自分の行爲に氣附くと、頭に打ちかゝる鐵槌を感じた。今まで彼を支へてゐた柱は、根こそぎ引き拔かれたのだ。ソファに深く沈り込んで呆然としてゐた彼は、やつと意を決して、內幸町のS政黨本部へ御機嫌伺ひに出かけた。否、未練の多いうらみを述べに。

S政黨本部は弔詞を捧げに來る人々の往來で、葬送行進曲が始まつてゐた。內閣二年半の生命に軍略のヴイタミンを取つてゐたS政黨も、今は乾いた海藻のやうに、喪を垂れてゐる。眞夏の猛暑は自ら散つて、此處許りは蕭條として石に陽の入る多野だ。

廣澤賢三はS政黨總裁のへの字を作る眉に、三割引のお辭儀をすると、S政黨本部を出た。市中は、市街戰の後のやうに、人々は固つて昂奮し、紙片は散亂し、ビラは到る所に赤線をひいて貼りつけてある。忽ち遠い歡呼の聲が湧き上つて崩れる。廣澤は自動車の中で幻覺かと頭を傾けて見る。電柱や建物の壁に貼られた新內閣の顏ぶれ。巨頭ライオンの顏が民衆に微笑みかける。靑服の失業者の一團がその前に立つて頭を抱へてゐる。獅子に喰はれる野兎のやうに。

新內閣の決定と共に、廣澤賢三の鐵石心も、吉野紙のやうにへなへなになつてしまつた。先日の株主總會で、やつと切り詰めた三割三分といふ株配當の減少から頭を叩かれ拔いた彼は、今又內閣の變遷と共に多大の打擊を受けねばならない。それに、彼の憂へてゐた

金解禁は、早晩新藏相によつて實現されるに違ひない。

一方、新妻の靖子は、葉山へ移つてから一際症狀を崩して來た。果物の汁も殆ど彼女の口を濕し得ない。彼はいらいらする氣持から運轉手を激しく罵つて車のスピードを速める。火の車を廻して會社へ着くと、專務のへちま顏が、廣澤の金魚鼻に白い眼を剝いた。先日の爭議について一働きした彼は、社長からの賞與がまだ現れないので、この頃は全く機嫌を落して來たのだ。仕方なく廣澤は專務を伴つて築地の精養軒へ午餐をとりに出かけた。寒暖計は三〇、六度を昇つてゐるのに、彼の心には大きな氷柱が立つてゐる。二人は扇風器に粟立つ膚をひきしめて、涼しい食事をとつた。

「君、君、今度の藏相ぢや、金解禁の實行は早いだらうかね。」

午餐位で額の皺を伸さない專務は、橫を向いて嘯く。彼は新藏相花井氏なら、金解禁はまだ延びると觀測してゐたが、わざと先方の鼻柱を碎く。

「勿論ですよ、花井藏相ぢやね。」

「すると、M內閣ぢや、愈々輸入關稅の撤廢も行はれて、內地市場に於ける我々は慘澹たるものになつちまふね。」

廣澤の顏を走る恐慌が電氣廣告のやうに靑ざめ、赧らむのを、冷かに流し見て專務は鼻の孔を手でこする。

「無論ですよ。今では、滿洲からの逆輸入は愚か、高い關稅を拂つて上海から綿絲の逆輸入される狀態です。これといふのも、我々があまり高値で內地市場を維持しようなんて、汚い意地を持つてたからなんですよ。內地の綿布機業家は、徹底的に我々をやつゝけると意氣込んでゐますよ。それに印度の方では、關稅引上げを策動してるといふぢやありませんか。」

廣澤は思はず、ナイフを皿の上に落してしまつた。コーンビーフを載せた皿は、諷刺的な響をたてると、二つに割れて鎭まつた。彼は思慮の統制を亂して、フォークまで投げ出して卓子を叩いた。

「君、君、そいつはあまりに情ない言ひ方だ。利害を共にしてゐるお互ぢやないか。もつと、何とか溫い言ひ方が出來はしないかい。」

だが、專務は割れた皿よりも白けた顏で、オイルで固めた頭髮の櫛目を一糸も亂さない。

「何も、さう周章てるには及びませんよ。私は思ふのです、資本主義は今自ら沒落の道を辿りつゝあるといふことをね。我々が事ある毎に恐慌するのは、一體何處から來るんでせうか。賢明なあなたがそれにお氣附でないことはないでせう。內地市場に破れ、海外進出ダンピングを行つて、何が資本家の手に殘るでせう。出來るだけ行つて來た産業の合理化も、今は資本家の命を保つ方策ではなく、彼等勞働者の反抗心を煽る好材料に過ぎないのです。勞賃を下げ、固定失業を殖やすのは、國內の購買力を減殺するので、資本家それ自身の骨肉を削ることになるのです。勞働者が放擲つといたつて、我我は自滅するのです。唯、我々が明日の命を豫想することが許され

るのは、少し許り我々に策略と武器があるからなんです。」

怒りと恐慌の電氣廣告を顏に走らせ、唇を慄はせてゐた廣澤は、ナフキンを取つて投げると立上つた。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿！　俺は斷じてさう信ずることは出來ない！」

見上げてゐる專務の眼に廣澤は氷山を感じ、去らうとして足を動かすと、食卓の角に突き當つて角度を生じた。と見る間に、彼の豪壯な腹は、もんどり打つて打ち倒れた。

16

十五日目の留置場の朝が明けると、十七人の者は娑婆の塵埃の中に追ひ出された。各人個別に出されたが、一同は警察の門の外で待ち合せて、一應組合へ引上げた。

娑婆に出て先づ愕いたことは、ひどく暑さの上つてゐることだ。途で、電柱や建物の横に貼られたビラで、內閣の更迭を知つた。だが、彼等の顏には歡びの線が浮き立たなかつた。それは彼等にとつては對岸の火事であり、更に彼等の頭上を抑へる鐵板に重量を加へるからだ。そこにも彼等の望む光は見せないばかりか、益々堅固に敵の牙城を守つてゐる。それに今度の傳統的不景氣內閣では、ひどい失業恐慌を出さないとも限らない。

組合へ着くと、馘首された淸水が來て、一同を待つてゐた。一同は飢えた者が食を貪るやうに、淸水の報告を次から次へと聽いて行つた。靑島の紡績工場全部が結束して爭議を起した報はいたく一同を欣ばした。だが、今回の爭議の結束――警官の白い刄にかゝつて死に到つた米田、買收された高級職工、馘首者百五十名を出した等をきゝ終ると一同は唸つた。齒軋りをした。緒方がその橫鬢の疵を撫でて腕を鳴らした。

「まだ、奴等の買收に動くやうな奴がゐるんだなあ。だが、俺等はも一度やるんだ。やられえでゐるもんか、米田の靈に對しても。」

「我々が今やつたことは、ほんの口あけに過ぎなかつたんだ。我々はやるとも、大いにやるとも。」

濱松は、短い首の上に据つたいが栗頭を振り〳〵叫んだ。そこで一同は、死に到つた米田の爲に、壯大な勞働者葬を營むことを決議した。

留置場から出て來た者達は、みんな皮膚が黃色くだぶだぶになりどろんとした眼はしきりに平たい疊の上で眠ることを欲してゐたので、その日は早く打切り明日を約して別れた。

岡村ハツは爪の伸びた兩手を揃へて骨張つた指を眺めながら、縁の柱に凭れてゐた。彼女の腐つた肺ばかなりひどくなつてゐた。後藤ミヤはその傍で、圓らな眼だけは小聰しく輝かせて、ぐつたりと脊を曲げて頰を抱へてゐた。一同が歸りかけるので二人も腰をあげると、今日、七月一日から法令で實施された深夜業廢止記念デーのあること、安井カヨの出產などを淸水が報せて吳れた。意識の益々

冴えるに反して、看守に虐待された肉體は頗る疲弊し、力なく肩を垂れてゐた二人は、この報に接すると飛び上つて手を拍つた。娑婆へ出て來るとそこにも隷獄が控へ、明い光は强烈な威嚇に過ぎないと感じてゐた彼女等の心に、これで一脈の光明がさし込んで來た。

それから二人は安井カヨを見舞に行つた。亜鉛葺長屋の端の家へ來ると、二人は中からの返事も待たず這入つた。狹くて薄暗い屋内の隅で、一塊の黒い塊が蠢いてゐた。アンモニアを含んだ臭氣が鋭く鼻を打つて來る。その黒い塊は安井カヨだつた。勝手を知つてゐる岡村ハツは、どんどん上つて行つて、産婦の傍に寢てゐる嬰兒の顔を覗き込んだ。後藤ミヤもそれに續いた。初産だのに前髪が薄くなる程窶れはてて襤褸にくるまつてゐる傍の母親に比して、嬰兒は赤くて丸々と肥つてゐる。

「おめでたう。」

岡村ハツは元氣に餘つて、思はず大聲で産婦の眞上から浴びせた。安井カヨは靜脈の透きとほつた細い手を浴衣の袖口から出して頰を撫でつゝ、

「とにかく、無事に身二つになつたのが、有難いの。初産だから一寸心配だつたけれどね、最後の日まで働いたといふことが、お産には却つて好いんですつてね。」

嬰兒の口に泌ふ乳臭い香を嗅いで、後藤ミヤは家内を見廻した。

「どうなすつた、あの人、安井さんは？」

「あ、あれ、私が休んでちや家計がどうにもならないので、一週間前から自由勞働者になつたの。一日、七十錢あるかなしよ。夏枯れでね。でも、坐つてるわけには行かないんだから……」

「先づ、先づ、おめでたいわ、何よりも。こんな好い子供が生れたんだもの。私達プロレタリアにとつて子供が生れることは目先の苦しみだけど、ブルジョアには將來の怯えになるんだからね。」

さう云つて、岡村ハツは朗かに笑つた。忽ち小蒲團の中で眠つてゐた嬰兒は、顔中に波動を押し擴げて泣き出した。自分の子供をいとほしむやうに、後藤ミヤは嬰兒を抱き上げた。母親の洗ひ洒した浴衣で作られた初衣に包まれた嬰兒。抱き上げると眼をあけようともせずして顔中の皺を小鼻をめがけて引寄せ、足でミヤの胸を潑溂と蹴つて嬰兒は泣き續けた、未來につゞくプロレタリアの凱歌のやうに。

17

投機と利慾の火花を散らす、近代的な賭博場たる兜町。その株式取引所の白い建物は、七月の炎天のものとも似ず、さびれた隈どりを施してゐる。新内閣の樹立と共に、新藏相花井氏は穩健な經濟政策をとるだらうとの民衆の豫想を突如破つて、前藏相で一旦取消しになつた金解禁を愈々實現すると聲明したので、その影響を受けた市場は早くも恐怖ぶりを示したのだ。

買方も賣方も陰鬱に眉をひそめて、生氣のない呼聲が玉數をせり下す。その中で、四十年配の細面の婦人が、透徹した鼻にインスピレーションを受け乍ら、しきりに紡績株の賣方を牽制してゐる。どうやら彼女の透徹した鼻に來るインスピレーションも封建制度的な臭味を現して、賣方の景氣を吸收して行く。次第に、賣方の玉數は減つて來た。T・S株は六・四圓安、K・F株は五圓安、A・N株は四圓安、綿糸綿布は三圓安といふ破綻を示すと、細面の婦人の透徹した鼻が朗かに緩んで大引の幕が下ろされた。

外へ出ると彼女は爲替市場の前に立つて、紐育市場から報じて來た爲替相場表を手帖に書きとつた。

七月×日　四四弗 $\frac{3}{8}$
七月×日　四五弗 $\frac{3}{8}$
七月×日　四五弗 $\frac{13}{16}$

そこへ、彼女の肩を叩く手を感ずると、強いバスが彼女の鼓膜を壓した。

「奥さん、これからの綿業界は、どう落着くとお思ひになりますか。」

強いバスは、カラーの白さが目立ちすぎる程色の黒い男だつた。彼は内外經濟新聞の記者だ。細面の婦人は手帖を疊んで、色の黒い男と並んで茅場町の方へ歩き出した。自分の卓見を誇るやうに、彼女は得意にその透徹した鼻を蠢かし、事業家らしい型に篏つた口調で、新聞を讀むやうに語り出した。

「先づ、望みはありませんね。こんなに激落を辿るんですもの、前途は暗澹たるものですよ。妾はまだまだ紡績株を叩き落します。輸出は爲替高によつて不振へ逆戻り、内地の需要は依然として不況を極めてゐますしね、これまで紡績會社があまり暴利をしめすぎてゐた爲、今では機業地ばかりでなく、その間に介在する大口問屋も營業困難に陷るのが多いでせう。そこで、紡績會社も遂に自分から沒落を招いて、自業自得に陷つたのね。今後だつて、假令輸出が多少の活氣を示して來ても、内地の需要は到底喚び起されないと見てゐますよ。」

細面の婦人はその後へ鈴のやうな冷笑を附加へた。

「それに、今年は、米國では新棉作付反別を擴張したんですから、今後の天候によほどの變調が來ない限り、米棉の増收を見るものと思はねばなりませんしね……」

18

妻靖子儀永々病氣之處、七月××日永眠致候間
此段御通知に代へ謹告仕候
追而××日午後三時より四時迄青山齋場に於て
告別式相營み申候
猶時節柄質素を旨とし、御供物御贈與の儀は堅
く御辭退申上候

七月××日　廣澤賢三



健康な女の子

村山籌子

彼女は十歳であつた。年中汚れ切つた着物に、帶のやうに筋ばかりになつた兵古帶をしめてゐた。母は專賣局の煙草工女で、父は大酒呑であつた。兄弟は五人で、彼女は上から二番目の娘で、あとは全部男の子ばかりだつた。彼女の祖母が工場へ出掛けるので全部の面倒を見なければならなかつた。

彼女は少しばかり男の子のやうな顔をしてゐたが、それは彼女に女らしい性質が乏しいのと同時に、母親に左程愛されてゐないことを示してゐた。しかし彼女の目は厚くて豐かな愛情と感情的な性質が見えた。それは年老つた祖母のもろい愛のために培はれ、祖母の衰へに反比例して益々増大するやうであつた。彼女の一家を苦しめたのは父の飲酒と貧困と、一家の不和であつた。父と母とは年中喧嘩ばかりしてゐた。二人は、時とすると一ヶ月近くも一言も話をしないのであつた。母は子供の事などに充分氣を使ふ暇がなかつた。朝、子供達が目を覺すと、母はもう工場へ出掛けたあとであつた。部屋の中は父の口から吐き出される前夜の酒のリンゴのやうな匂ひでむれてゐた。祖母は隣の家へどぶ水を通さ

ツエ伯號：女人藝術・聯盟

ツエペリン伯號飛行船我が霞ケ浦へ來る――。このニユースはかなりにセンセーショナルな響きをもつて人々の耳を搏つた。フリードリヒ・スパーフエン――ロシア國境――ウラル山脈――シベリアの曠野――とこのニユースは前人未踏の處女航空路である。一切の整備したゴンドラと六十餘の人間の生命と、三町にあまる巨體を五箇のエンヂンに委ねて、一萬キロメートルの空を一息に飛んで來やうといふのだ。

ツエ伯號はほんたうに飛んで日本へ來た。日本におけるこの大げさな歡迎が、たとひ國家的なミリタリ臭いものであつたとしても、また捲き起されたセンセーションが、大新聞社の持つ資本の威力の競爭の現れであつたとしても、その故をもつて吾々ばこの壯擧を白眼視するほど、それほど狹量ではあり得ない。またある筈もないのである。科學者の冷厳な姿に向けられる世界ぢうの眸、神祕と冒險に對する絶大な魅力。この魅力は完全に人々を捉へた。

うと家の前のくさいどぶをつゝいてゐた。

「ようお父さん　五錢。帳面がなくなつたんだから、今日買はないと叱られるんだよう。」

彼女は、父を布團の上からゆするのであつた。外の子供達に聞えないやうに、押へつけた聲を出したが、父がぐつすり寢込んで返事もしないのであつた。彼女は父のづるづると光つて硬ばつた額を目近く見てゐるとそれは全く不思議な塊の樣うに思へた。そこには、色の深い皺が波のやうにきれぎれに凸凹してゐた。目を近よせればよせるほどそれは益々わけのわからないものになつた。突然彼女は學校の砂利の一杯つまつてゐる運動場を思ひ出し、その隅にある滑つこい遊動圓木を思ひ出した。彼女は早く學校に行つてそれに乘りたいと思つた。そしていつものやうに、父の布團の下に手を入れて、財布を引つ張り出して、音のしない樣に用心しながら五錢白銅を一枚つまんだ。そしてそれをかたく握りしめてあたりを見まわした。誰も見てゐなかつた。彼女は自分の床にもぐり込んで白銅をくらやみの中で調べて見た。それは指輪のやうに輕すぎて、いつ彼女の掌から飛んで出るか分らないやうに思へた。

彼女は今日こそは自分は級長に任命されるにちがひないと夢のやうに信じ込んでゐた。學期の初めであつた。自分の成績が申し分のないものであることに確信を持つてゐた。教室の前に整列して手をあげて間隔を取つた。彼女の頭ははつきりしてゐたにもかゝらず、たつた一瞬間左の手をぶらぶらさせた。何か彼女の心を躍らせるやうな考へが子供らしく彼女を宇頂天にさせなのであつたが、それは何であつたか彼女自身も氣がつかない内に、左の手を厚い木綿の手拭で眞赤にはれ上る程打たれた。彼女は痛さを忘れて落膽した。そして受持教師の顔を見つめた。牛窪といふ彼女の受持教師であつた。その顔は激しい怒りのために、角ばつて彼女に黒い毛の生へた手を思ひ出させた。「牛窪先生と牛」彼女け成長し切らない頭でこれを考へてゐるうちに、說明し難い不思議さに打たれた。あらゆるものが混鈍とし、九月の太陽がちりぢりになつて頭に降りかゝつたので、彼女は眠氣と吐氣を催してそこへ倒れた。心臟がピアノのやうによい音をたててゐたのを彼女は聞いた。

女人藝術社はこの壯圖を記念して總司令エッケナー博士と、唯一の同乘の女性ドラモンド・ヘイ女史に女人聯盟の名で花束を贈る事になり、日日新聞の與へてくれた便宜であすは晴れの着陸場に待ち構へるといふ事になつたのである。花束もあつらへた。徽章もある。やけつく町には街路樹をぬふて、ひつきりなしに號外賣りの鈴が亂れ飛んでゐた。

めづらしく薄曇りの、當日であつた。午前十時ごろ社の前を滑り出した自働車は腹いつぱいにガソリンを呑んで、左内坂を下ると忽ちフルスピードで、濠端を疾走する。時雨さんと、中學生の長谷川仁さん、尾上菊子さんと私との四人、それに仁さん愛用の寫眞機水筒、飴ちよこ、箱入り花束とも同乘する。車は本郷三丁目から上野驛前、坂本通りから千住大橋といふコースで忽ち荒川放水路の鐵橋を後にしてしまつた。自働車はスチュードベーカーの新着もの、時速三十八哩といふ御自慢のスピードで、古風な松並木や昔乍らの驛路を風の樣に彈き飛ばして行く。

埼玉縣は一面に青い五十號の畫布だ。青田と畑ばかりが展がる。利根の渡しを避けて少し遠廻りで

彼女は教員室の前の病室のベットの上で目を開いた。物音のしない靜かな部屋の中で手足を伸ばしてゐることは何と氣持のよいものだらう。しかし、何と又硬い細長い枕であらう。彼女はこんな靜かさにも、こんな硬さにも馴れなかつたので恐ろしさを感じてベットからにじり下りた。埃だらけの床であつた。彼女の帶はいつの間にか解かれて着物はお尻の重みで細くよれてゐた。暫く呆然とつつ立つてゐるうちに彼女の頭はいきなりはつきりと我に返つた。

「五錢白銅！　どこへいつちやつたんだらう。」ベットの中に手を入れて布團をゆすつて見た。外では何の物音もせずに、軒場の右側には煙のやうな、夕飯の湯氣のやうなくらさが落ちて來たが、左側の教員室の窓硝子の一二枚に黄金色の日の光が激しく突き當つてゐた。

彼女は足の指に力を入れて病室の中でとらはれた小さな獸のやうに歩きまわつた。窓は四つあり、出入口は二つとも開いてゐた。が、彼女は誰かを待つてゐた。

やがて足音が聞えた。彼女は大急ぎでベットの傍へ驅け寄つて、それにもたれかかつた。そして顔を眞赤にして下を向いてゐた。這入つて來たのは牛窪先生であつた。右の手は何かを持つてゐるやうに固く握つてゐた。が、この老孃は滅多に右の手の指を伸ばさなかつた。

「もう直つたか。」牛窪先生は叱り付けるやうに言つた。彼女はうなずいて見せた。そして、出口の方へ段々足をにじらせて行つた。細かい砂埃が足の裏で鳴つた。

「まあ、そこへ腰掛けなさい。お前はどうもお行儀がわるくて困る。」牛窪先生は禮も言はずに突立つて逃げ出しさうにしてゐるうす汚い女工の娘をにらみ付けた。彼女は前をかき合はせて帶を探した。牛窪先生は窓ぎわに吊してあつた彼女の兵古帶を遠くから引きづり下して投げ出した。

彼女が帶をしめると牛窪先生は彼女の左ゞ腕をつかんだ。彼女は握りしめてゐた先生の右の手の中から五錢白銅が落ちはしないかとびくつとした。しかし、何にも握つてはゐなかつた。そして彼女は引きづるやうに教室へ連れ込まれ、扉はぴたりと〆切られてしまつた。

はあるが栗橋をめざす事にした。吾々は勿體ないやうな涼風に姿を思ふさまゆだね、そして風景と速力を滿喫する。だが、ツエペリン伯號の一時間百キロメートルといふ速力から思へば、まさに天と地の相違である。幾臺かの自働車を追ひぬきながら、吾々はこゝに東京府、埼玉縣茨城縣三縣を横斷──とまではいかないが、走破しつゝあるのだ。ぬかれる自働車の腰には、神奈川縣、栃木縣などから、兵庫縣のマークすら見られた。

野の末に紫の筑波山が秀麗な姿を見せた。自働車はその裾野に添ふて走りながら吾等に親しき筑波山の美しい線をまぢかに、つくづくと見るうち、空は何となくひろがつて海近いいろを思はせた。

土浦の町はお祭りの娘のやうに着飾り、人待つたよりなさで落ちつきを忘れてゐた。軒さきからいくつもの額がのぞく。やがて吾々は町を出ぬけた電車線路の向ふに畑の中の屋根に赤い日日新聞社の社旗がヘンポンと飜るのを見て、車をすてた。まさに二時半、丁度四時間半のドライヴだつた。

二階に招ぜられて古い階段を上つてゆくと、座にはスマートな一對の──谷讓次氏夫妻であつた。

先生のテーブルの上に彼女の失くした五錢白銅が乘つてゐた。彼女は又吐氣を催して來たが足の先でつつぱつた。

「これはお前のだね。誰から貰つた？」

「お父さんから。」彼女は小さい聲で言葉をにごした。

「お父さんから貰つた？　うそだらう？」

「ほんとです。お父さんから。」

「お父さんを呼びますよ。いゝか？　きつとさうだね？」

彼女は多少榮養不良的體質だつたので、先生に固く握られた左の腕にはまだ壓迫感を先生の手の形のまゝに感じてゐた。そして半ばそれに氣がとられてゐたので呆然（ぼんやり）してゐたが、彼女は突然泣き初めた。

「泣いたつて分らない。言はなくちや分らない。と言ふのです。」

「先生　お父さんに默つて持つて……」彼女は恐ろしさで一杯であつた。

牛窪先生は五錢位のことで何にも腹を立ててゐたのではなかつた。彼女が父親の財布から盜み出して來たことは何の感動も起さなかつたが、的がはづれたのでがつかりして腹を立てた。小さな娘の無抵抗な恐れを見てゐると、これは馬鹿ではないかと思はれるのであつた。そして益々圖々しい小犬のやうな彼女に腹を立てた。うす汚い小娘は涙をこねまわしたので何とも言へない臭氣をたててゐた。周到に疑り深いこの老孃は自分のテーブルの引出しに入れて置いたやうな記憶のある五錢白銅が紛失したことを彼女に結びつけて盲信してゐたのであつた。何の信念も持つてゐない自分をやつと慰め、そして益々頑固にしてゐるものは「自分には非常に確かな直覺力がある」といふことであつた。男性によつて啓發されない限り、かういふ傾向を持つた女性はヒステリックに益々脂肪分が缺乏してくるのであつた。彼女の心はひからびて來て年毎に乳房一面が煙草のやにのやうな匂ひを持ち初めた。

「あんたは盜棒だね。今迄ちよいちよい物がなくなつてゐたのもあんたのせいだね」

空を厭するやうな爆音が頭の上にはね返る。ツエ伯號は四時ごろでせうとの事に、私達は悠々と食事をいたゞくことにする。——霞ケ浦のハゼ佃煮、鯉のアラヒなど——まろうどを迎へるいそいそとした氣分で妾などほして見るとまあ、菊子さんの美しいこと、紫絽お召の振袖がしんなりと疊の上に波をひいて——一輪の花である。時雨さんのすらりとのびた肩から膝には歸去來が飛んでゐる。

と、先ほどから庭前の櫻の木によぢ登つて空をにらんでゐた歩哨の役目の人が、突然、

——オイツ！　きたぞ、きたぞうツ！　と叫ぶ、電車道は忽ちの人垣だ四時十分前——。

見よ、北東の空、雲煙のかなたに一點、眞珠の小さい粒が——はつきり眸にはゐつた。よろこびのこゑが、いちどに湧きおこつた。

わたしはこの瞬間の感激が今も瞭つきりと鼓動のやうに胸に生てゐる。蜻蛉のやうな歡迎飛行機十機を周圍にまつはらせて、悠々と空を厭し近づいてまた銀灰色の偉容を、明朗として音樂的な爆音を——それはあまりにも均整された線のふくらみ、機械の美觀とする正確と階調——あまりにも、それ

小さい獸のやうな娘は激しく頭を振つた。

「こつちへ來なさい。こつちへ。」老孃は窓の外を盗人のやうな目で見まわした。誰もゐなかつた。敎室の中は〆めきつてあるので適度以上の温度と少々刺激性の雑巾のしめつぽい香ひに滿ちてゐた。掌や足の血管が痲痺し初めた。そして急激な快感のために沈鬱になつて顔をしかめた。老孃は小さな娘に突然に飛びかかつて左の腕を掴んで引つ張つた。小さな娘は倒れたが立ち上らうと身體をくねらした。老孃け娘を二三度ねじ伏せたかと思ふと四列に並べられてある椅子と机の細い通路を引きづつて 屋の隅へ行き、部屋の四隅を目がけて娘を引きづり初めた、老孃の袴は色のさめた紫で、色のあせた桃色のメリンスが縫ひ付け てあつた。それが花のやうに開いたり散つたりした。娘は時々激しい音をして自分の手足と肩にふれる椅子や机で身體を支へやうとしたが、その度に椅子や机が横倒しに崩れてしまふのであつた。

老孃は娘の重さを感じて來た。若い女のやうに輝やいて赤くなつて ゐた頰つぺたで汗が冷たくなつた。娘を突き放して叫び初めた。

「泥棒! さぎ、いんちき、馬鹿! 大酒呑!女工の娘! 落第生!」そして敎室から驅け出して行つた。

小さい娘は恐ろしさのためにがたがたふるへ、急激な運動で汗をたらし乍ら帶をしめ直してコンクリート塗の廊下を裸足で歩いて行つた。彼女は悲しみと怒りで一杯であつたが、時々しやつくりをした。すると、その度に彼女の心の中に子供の無心な呑氣さと朗らかさが戻つて來るのであつた。彼女は投げすてられたやうに育つたために男の子のやうに、健康であつた。

「先生の馬鹿野郎!」

彼女は下駄をはくのを忘れてゐたのに氣がついて敎室へ引き返した。そして先生のテーブルにとび上つて散々ふんづけて足の裏の泥をこすり落した。

は大きかつた。

悠々として巨鯨は眞上にきた。ゴンドラの窓に歡びが踊つてゐる五つの發動機は健康な廻轉を恣に腹にさらして。この時、一切の感動詞は地上に沈默した。人は自分の小ささを思つた。そして――ある人は寂しかつたであらう。

雲の中に姿が消えても人々は去るのを惜むやうに、まして唇も忘れたまゝ立ちつくした。丁髷の、ひとりのお爺さんの頭が少しうごいた。

だが、私はツェ伯號が東京横濱の空を訪問して再び暮れがたの飛行場に姿を現した時の、あの空と地上との交驩の愉快さを忘れることが出來ない。巨容が靜に土と接吻した刹那! そして肅然とつゝましく格納庫にかくれてゆく姿をも――。獨逸人の男女はゴンドラの窓からふるハンカチの雪に狂喜して躍り、咽んだ。三十米に下降してハタと一切の音響の死んだ刹那、あの巨きな船首からスル〱と地上に落ちた二條のロープ! と忽ち配列された海軍兵の白いラインがくずれてロープに亂れ飛んだ。つゞいておちる液體瓦斯の絲ロープのいく條。巨船は船尾を格納庫に向けて靜に動き出した。船



逆修養

葵イツ子

家を出ると、外は誰一人歩いて居なかつた。二列に並んだ僅かばかりの家は、ずつと向うの野原まで一緒に、總てが靜止して居る。今日はこんなに變つて仕舞つてゐる。自分ばかり歩いてゐることもよく無いやうで、小谷は家の前の道を避けて、斜めにスケート場の脇を通つた。だが、自分の一歩一歩の響きへ淋しい答を聞くやうに、氣持の中へ沁み込んで來る。こんな時間は倶樂部へでも行つて過すより仕樣がない。

たつた二十二軒のこの村から、七軒の家族が數日のうちに去つて行くのだ。皆遠い內地へ歸されて仕舞ふ人だつた。こんな草も木もない野の果てで長年一緒に暮して、それもあんなに賑やかに毎日よく遊んだのだ、それに隨分意外な事になつて仕舞つた。

倶樂部へ行つて扉を明けてみると、此處さへ人は居ない、ゲーム取りの小孩(ショウハイ)が一人つ切りで居る。淺黄の支那服を着た小さいからだを、いつぱいに背伸びをして右手を高く上げて、黒板に何か戯書きをして居たが、人の氣配を知ると狼狽てゝそれを消して置いて、此方の方へ飛んで來た。

「今朝から誰も來ないのか」

尾は一番高い頂である。格納庫の高さはわづか牛米をあますにすぎない。しかし、見つめる幾萬眸の中に、船尾は庫の天井にからまる鐵骨の影を斜にひいて、緩かにたしかに、進行しつゝあるのを認めた。ウラー、ウラーのこゑは平野の夜をふるはせた。

巨體がその脚を土においた時、廣茫八十萬坪の平野のはてに、赤き月がポッカリ浮び上つた。――そのいろも忘れられない。サーチライトの光り！ 描きだされた野の草！ 夜の微風――。

格納庫の扉の方がざわめき出して、エッケナー！ エッケナー！のこゑが濤のやうにひゞいてきた卓上につつ立つたこの科學者の面貌には、自信と精力と、子供の天眞さがあつた。

エ博士は背後をふり返つて、菊子さんを認めると一瞬、眼を大きく睜つた。そのおどろきの表情はしかし、忽ちにしてこの美しい日本娘への感謝と變つて、花の上から眞に溢れるやうな溫顔が、微笑し、そしていく度となく言葉がくり返された。この夜の熱狂的感激は會場の秩序を完全に無視し、抛り出して、ビール瓶は卓上に倒れ皿は落ちても誰一人ふり返るもの

「はい」

廣い室内は、綺麗に掃除されたまゝで、窓もまだ明け放されてゐる。どうしやうかと思ふ。此の小孩は可なり球も撞くから、いつもなれば小孩相手に球を撞いてもいゝが、それも何處からか抑へる心地がある。だが、座敷の方へ上つてみても、蓄音機を掛けることも到底出來ないし、考へて唯立つてゐた。小孩は機敏で、新聞のある卓子の前に椅子を直して、もう默禮をして待つてゐるから、彼も漸く笑ひ乍ら、それに掛けた。然し彼はいつも、新聞は一つ見れば可かつた。幾つも見るのは、結局種々な風潮に誘れることになる。それよりも、純日本の味を持つたものを深く讀んで居たかつた。斯うして居ても詰らないから、寧そ千金True金へ出掛けて、圖書館へ行つてみたなら、また巡回文庫が來て居るかも知れない何か新聞書でも借りて來やうかと思ふ。帶出證は袂によく入れて居たから手を入れてみたが無い、考へると上着のポケットに入れてをいたやうだ。一度家へ歸つて持つて來やうかと思ひ乍ら、時計を見ると八時になつて居る。時間が無い。十時五分に立つ尾崎を見送りたい。此處は終點だつたから、電車で行けば片道に四十五分も費さなければならない。

やつと買物を思ひ出したから、立つて電話口に行つた。龍鳳の配給所を呼び出す。

「什麽(シュマ)」

と聞く。また支那人が出たのだ。石鹼と黑い靴下を註文した。すぐ次の電車で持つて行きますといふ。

小谷は下駄を履いて入口の扉を明けて、其處に佇んだ。住居より他には何も無い村、訪れるものは、遠くの村の支那人が放し飼ひにしてゐる子馬や驢馬が、村の後の木の無い丘の邊りを駈けることがある位である。家の形も皆同じやうに、赤い煉瓦に包まれて寒い冬の零度下廿五度の日を防がうとして居る。皆社宅であつた。

すぐ前の弓技場を横切つて、白衣を着た朝鮮人の女が三人來た。各々大きい籠を二つ持つてゐて、そ

もない。この中で、だから博士が日本の土へ下り立つて最初に受けた花束は、女人藝術の聯盟大衆の名によるものであつたのだ。

軍樂隊の爽かな樂器が獨逸國歌を奏しはじめた。博士をとりまいて湧き上つたコーラスの怒濤だ。

書きながらも、私は自分の記憶の中で昂奮の吐息をする。あの夜白つぽい埃をあげて霧地に歸る車の中で、私はこんなことを思つた——と記憶する。

「將來は科學の世界であらう。そして、世界は、時間と空間と國境に對する觀念をすべて置きかへなくてはならない必要を感じるにちがひない。だが之等の輝かしい科學の將來はあらゆる國際間の慾望や鬪ひの使命を失つて、世界民衆の日常の現實となるであらう。」と

（八月三十日　秋子）

◆

群集の一隅からおこつたどよめきにふと空をみるともう格納庫の上には、Graf Zappelin の文字も鮮やかにツェ伯號がうす桃色の夕日に照らされ一層美くしい姿を表してゐました。そして皆の歡迎の叫びに對して手をふる人影がゴンドラから見えはじめたとき私は急に「乘つてみたいなア」と思ひ

れには芹がいつぱいに這入つてゐる。彼の前に來た。買つて下さいと言ふ。

「いらんよ」

「どうぞ、こんな良い芹」

「いらん」

横を向いて默つて了ふと、逐々行つて了つた。それから、すぐ隣りへ行つた。其處へは間も無く數人の主婦が集つた。芹籠を引き寄せて、手に取つては根を裂いたり、葉を落したりなどして雜談をして居たが、そのうちに買ふ人が二人出來たらしい。籠は二尺に一尺位の大きいものだが、それに一杯を二錢だといふと

「高いよ、もつとお入れ」

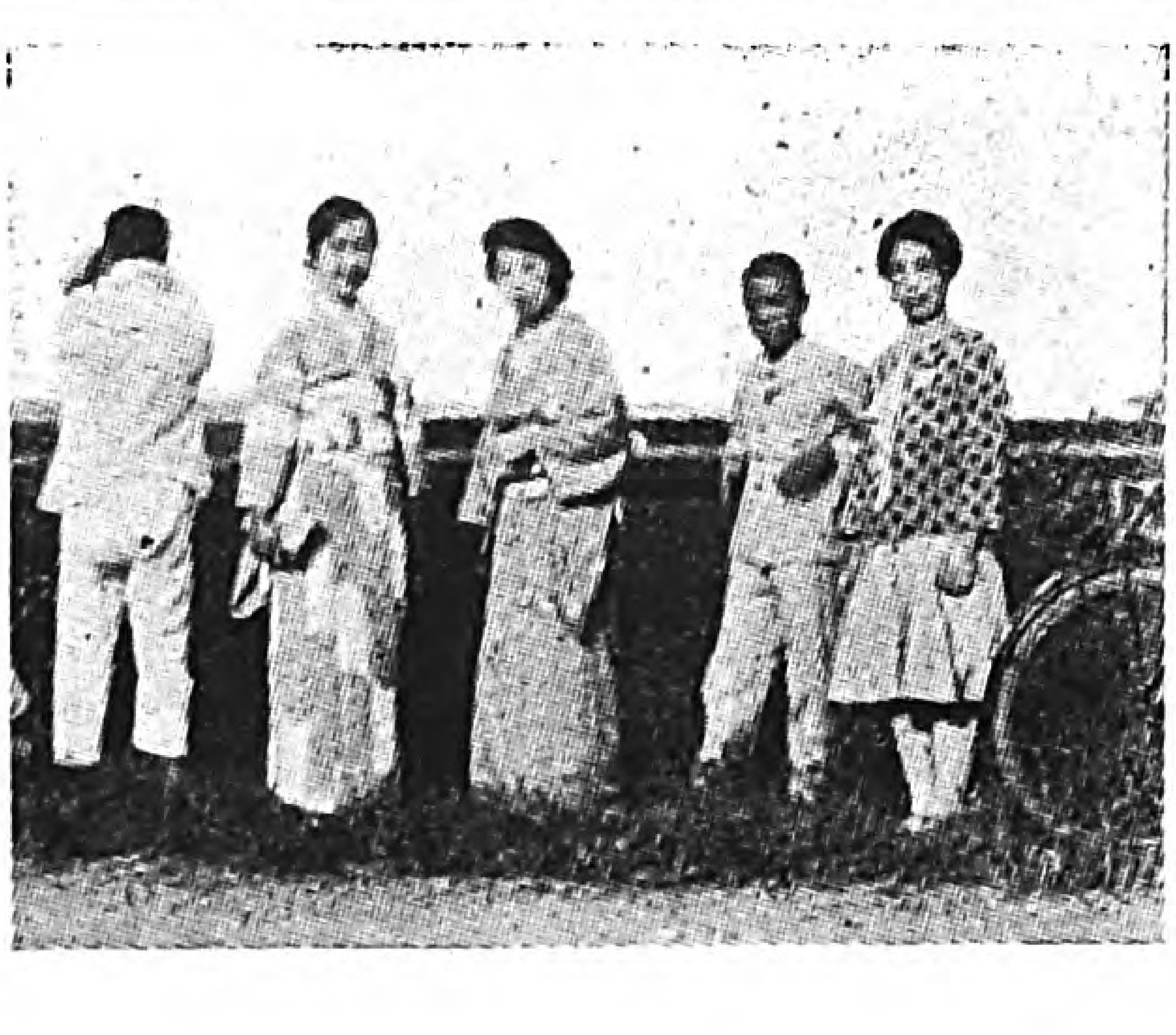
と言つて、勝手に他の籠のを取つて入れたりなどして、終には三つの籠を空にして四錢に買はれて仕舞つた。

朝鮮人の餓死はよく聞くことであつた。小谷は眼が熱くなつて來たので、また倶樂部へ這入つた。あんなに澤山に摘むには一日かゝつたかも知れぬ、さうしてあゝ安く賣つて仕舞つてどうなるだらう。だがこんな考へも物數奇だつた。毎年凍死する數十人の支那人も、斯ういふ朝鮮人も、自分が心配しても仕樣が無い、種々な境遇のあるのは自然のことであつた。

明けた窓に凭れて、外を見ながら想像を走せてゆく。何處にでも盛衰はあつたのだ。百年の後には地下の石炭さへ掘り盡されるといふから、此の村も、矢張り、どんなに榮へてもその日までゝあつた。あの大都會の千金甕さへ來年は取拂はれるのだ、此頃は、地下千尺の下を掘つて居るので毎日五六回宛ダイナマイトが使はれる度に、どの家の棚からも瓶が轉げ落ちる、連續の地震のやうで神經が焦立つと言はれてゐるが、兎も角あれほど完備した公園も道路も大建築も智永安臺に移されてゆく。さうして、あの華やかな土の上が、すつかり掘り返されるのだ、唯石炭の層が上にもあることが解つた爲に、地上の

ました。するとそばにゐたとても可愛いドイツの七・八歳位の男の子も流暢な日本語で「ねえ飛行船のりませうよオ」と。そしてあたりの人々も「ほんとうにねエ」と云ふやうにこの子をふりかへつてほゝえみました。

さて、いよ〳〵着陸です。兩國歌のひゞき、群集の熱狂。規律正



しく勇ましい水兵の姿。空と陸とのめざましい作業。間もなく着陸しました。いつの間にか都會では見られない美〳〵しい大きな月が船體の前方を照らして居ました。まるで繪です。

格納作業、一歩々々と格納庫に

榮華は消されるのだつた。總ては止むを得ない。物に動じない、正しい穩やかな心で居たい。

今日二回目の電車で立つ、多田のことも心に浮んで來る。あれは去年結婚したばかりだが、今度の陶汰に加へられてゐる、誠意のある人間だが所長の氣持ちを汲むことが出來なかつたのだ、會社に這入つて、上手に動けないのは怠け者より不幸になるのだつた。それに多田は美術も巧いし、日本畫がよく出來た。院展風の色をよく出して居た。こんなところで自生した芽が美事に育つて行かうとしてゐるのに惜しい。彼が去れば自分はもう畫に就いて語る友が無い。背の低い、色の黑い多田の眞面目腐つた顏がなつかしくなる。

まだ先月の園遊會の時には、彼も仲々はしやいだものである。村の後の丘へ寶探しに行つたり、村の眞中の運動場に種々の模擬店が出來て居ると、多田は少し醉つて來てから、すし店に這入つて襷まで掛けて半分踊り乍ら、皆の給仕をして廻つたものだ。それも何だか昔のことを思ひ出してゐるやうな氣持ちがする。今時分はどうしてゐるだらう、多田はもう仕度をして仕舞つて居るだらうか、多感な男だから種々のことを考へて居るであらう。多田とはもう一度逢つてみやうかとも思ふが、顏を合せると息詰るやうに言葉が無くなる。餘り今になつて幾度も逢ふのもと思ふ。最近は大分洋家具などを買入れて居たやうだつたが、昨日それを近所の人達に讓つてゐるのが痛ましかつた。

だが彼も、海外發展に盡したことは滿足して居るであらう。こんな廣い土地に來て、安く勞働する支那人を使つて、そして大滿鐵が富を吸收する。勇壯な事業では無いか。國の爲に働いてゐるのも同じである。だから我々は、優遇せられて居る。本も讀んだ、こんなに大勢が同時に馘首された時に、こんなに穩やかであるのは、養はれた人格の尊さである。寂として音も無い村、この運命を正視して、何處まで落されて行くのであつても耐へやう、從はう、永遠の生命のあるものは何にも無い筈である。

腹が空いた。背の高い配給所の支那人である。小孩は、その支那人から石鹸と靴下を受取つて持つ

近よると、どうも私達の目からはとてもうまくおさまりさうもないやうに見えるのです。もしもの時には日本の名に關するのかと思ふととても心配で專門家がちやんとしらべたあげくの事だから大丈夫だとは知りつゝもやはり人々——ことに日本の人の顏には憂ひがありました。

船體の一部分が格納庫の中へながれるやうにはいりはじめたときもう皆今さらのやうにその大きさに目をみはりそしてその成功をほめずには居られませんでした。われかへるやうな拍手、力强いさけびが一せいに起りました。

さて、私達の第二のよろこびは親しく空の勇士旅行者をおむかへする事です。「宴會場（清酒するめ勝栗等歡迎の準備がとゝのつてゐます）の方でおまちになつた方がよい」「いやそうでない方がよからう」等と場所がまち／＼でわかりかねてゐるうち、もうどつと大勢の關係者にとりまかれたエッケナア博士他一同の方々はテント（會場）の方へはいつておしまひになりました。

で私達は一生けんめいかけ出しましたが、もう中は滿足に歩く事さへ出來ない程の盛會、寫眞班の

て來た。

「これで宜しいか」

「あゝ可い。その邊に置いて吳れ」

小谷は別に手も觸れずさう言つた。小孩も去り、配給所の支那人も歸つて行つた。小谷は、隨分退屈になつた。立上つて窓から外を見廻した。だが矢張り靜かなまゝである。まだ一週間位前までは淘汰の噂さがあつて、不安は漲つてゐても、テニスコートはいつも使はれて居たが、今日は其處にも人影は無い。

不圖、自分の家の前の、スケート場の跡を見た。あんな無駄なものは無かつた。折角完全なものを拵へたが、誰かゞ使ふであらうと皆が思つてゐたのに、誰も辷ることの好きな者が無くつて、到頭冬中使はれないで春になつて仕舞つたのである。あれを拵へるのは大分大仕掛けであつた。初めに池を作るやうに周りを圍つた。それから、水を入れたのでは、先に入れたところが直ぐ凍つて凹凸が出來るから非常に澤山の湯を沸して、それを鐵管で一時流し込んだ、それでも、濛々と湯氣の立つて居た湯の池は忽ち平らに凍つて仕舞つた。夏になればあれは池に直して、魚を入れやうかなど言はれて居る。

スケート場の直ぐ前の穴倉は、小谷の家のであつた。あれは各の家に附いてゐる。唯一間ばかり地下へ堀り下げて小屋が拵へられてあるもの、それでも冬のうちに、玉葱や馬鈴薯がいつぱい貯へてあつたり、大きい肉片が吊り下げてあると、此處らしい生活の感じがよく出て居る。

漸く窓の外の道へ人が現れた。會社の支那人が七人ばかり、行李やトランクなど大きい荷物を擔いで停留所へ行く。二丁ばかりの眞直ぐな道を行、間も無く子供を連れた三人の女が來た。それから同僚の顏が二つ三つ見へると、今立たうとする尾崎と妻と子供と、それから四五人の姿が見へた。時計を見るとまだ廿五分ばかりあるが、これ位に行つた方がよいから、小谷も立上つた。外に出ると、どの家か

横暴に近い活やく。はちきれるやうな歡叫。その中にエ博士は旅づかれの色も見せずににこやかにゆうぜんと丁度ツエペリン號の精のやうな感じでした。むかへる人、むかへられる人の心持のよい親しみの挨拶と祝盃。

幸にも私は女人藝術からの花束をエ博士におわたしする事が出來ました。博士はロオマ字と日本字とで女人　術社としるされた美しいリボンでたばねられた蘭とカアネエションをとてもにこやかにおうけ下さいました。私はもうとても〳〵うれしうございました。(これは私達のジマンバナゝですが。日本ではこの女人藝術社からの花束が著陸後のエ博士への始めての贈り物です。――きつとさうです。間ちがひは多分ないはづです。)

やがて人々の喜びと滿足の中に會も終りました。この日たゞ殘念に思つたのはドラモンド・ヘイ女史にお會ひする事が出來なかつた事です。(女史は著陸後間もなく上京なすつたのです！　すぐホテルに花束はお屆けによつたのですが――。

私達の自動車がまたもとの筑波山のあたりへ來るまでつかれた事も忘れて唯もう「ツエペリン〳〵」

らも大人も子供も總ての人が一時に溢れるやうに出て來た。それが、一人、所長の顔が四十歳であるばかりで、皆廿代の青年とそれ以下の女や、子供である。先刻まで消へてゐた村が甦つたやうである。彼方此方と歡禮を交して道に出た。これで村中には人間は居なくなつた。どの家も留守である。だが、泥棒に來る人間なども無い孤立の村であつた。

話をしないで濟むやうに、なるべく人の無いところを歩いた。それでも停留所へ着くと待合室で尾崎に逢つた。尾崎も、其他の人達も、皆涙ぐんで居た。尾崎の妻も今日は存外地味に作つて温和しさうに見へる。彼女は四年ばかり町から師匠を招いて山田流の琴を習つて居たから、今歸れば師匠が出來やうと誰かゞ囁いてゐる。或ひはさうするかも知れないと小谷に彼女の變遷は想像せられた。

何にも無い遠い土の中から、小さく出て來た電車が、龍鳳へ停つたのが見へた。それからはもう大きくなつて此方へ向つて來た。電車が着いた、然し終點の塔連までは乘つて來る人も無かつた。尾崎の家族が乘ると、それから同僚も二人乘つて驛まで見送ると言つた。誰かゞ窓のところへ行つて話してゐる居崎の聲で、

「大連に明日着きますからすぐ船に乘つて、大阪までは五日で行きます」

いつもの荒い聲では無い、大阪が淋しい都に感じさせられた。

電車は出て行つた。また斯うして幾人も行つて了ふといふことが、小谷にも迫る淋しさであつた。皆はきた村の方へ歸つた彼もその群の中を一人で歩いてゆくと、いつとも無しに多田と一緒になつて歩くやうになつた。一時間後には、矢張り行つて仕舞ふ男だと思ふと心が重くなつて、何とか言ひたいやうにも思ふし、此方からは言葉が無かつた。多田が、

「昨夜の銃聲はお聞きでしたか」

と言つたので、

「あゝ眼が覺めました。五發位撃つたのぢやありませんか」

海の水のふえた話

どの新聞だつて、何だつてかんだつて、ツエッペリンの事で一ぱいだ。いよいよ今日の何時かに霞が浦につく、姿が見れる。大きさに感激させられる。語り草だ、科學だ、驚異だ偉人だ、英雄だ、で大騒ぎをしてゐる。私も心は空にとんでゐる。が、でもせつかくの夏、海、海、海と思つて待つてゐた夏休みなんだもの、口をあけて空をみて、かんげきするのはと思つてツエッペリンは振ることにしてその日は房州へとんできた。但し汽車で。夏の海はいいな、サンサンと輝く太陽、ジリ〳〵焼けた砂、蒼い空、白い雲、黄色い帆のヨット、そして藍碧の海。

飛込みのすばらしい魅力はいつも私をつかんでゐる。しかしおふろに入るように足の方からずぼ〳〵と入りこむのが、悲しいかないつものあたしである。

去年大磯で兄貴が先づ愛想をつかした。こいつ勇氣がなくてだめだ、何ともない死ぬ様な事はないといふのに、決斷力のない女だなそこで意を決して岩の上に立つた何を！　と、足が岩をけつたつも

「さうでせう、だが大分遠いやうでしたね」
「此頃また少し多いじやありませんか」
「だがまあ塔連は大丈夫ですよ。馬賊は自分の住んで居る町は荒らさないさうですからね、それに此處は支那町とはこんなに隔つてゐるし」
「遠いやうですね、此處の支那町だけは、まだ行つてみたことがありませんが」
「僕は行きましたよ。道が狭いし、山犬が澤山に居て危險です」
「さうださうですな」
道の左にはづつと畑がある。多田が立停つた。冬は土が凍つて何も出來ないので、毎年春になると、村中で籤を引いてこの畑の各の位置を定める。そして支那人を傭つて耕させた。多田は道に沿つた畑を指して、
「これが大崎君のでしたね、大分種々蒔いたぢやありませんか」
見ると一面に何かしら青い芽が出初めてゐた。
「僕のうちはあれです」
と多田はまた言つた。その方を見ると、其處は少し遠くなつて居るが、尾崎のよりももつと長い芽が伸びて居て、形の違ふのが二三種類生へて居た。
今年の冬に穴倉へ貯へるのを豫想したであらうが、これも空しく雜草と共に伸びるものになつて仕

りが、とびこんだはづが——兄貴にあとで云はせると、どうみてもありやあ落ちたかんじだね——鼻から一直線に水が上にのぼつてつんと目にぬけて、あつと息をした時にかぼつと、一のみ二のみ、涙も鼻も鹽水のいがらさも一緒とたになつて、死にそこなつた胃袋に水がボコ〳〵いつて——それでどうしてもあきらめられないのがとびこみである。
夕ぐれの色が濱をそめだすと、一ぱい群れ集つてゐた人達もいつか影少なくなつて、ひたひたにみちた潮が棧橋とすれ〳〵になつてくる頃をねらつて、とびこみのけいこをはじめる。
「飛びこんぢやいなさいよ新時代の女性らしくもない。それに今頃は人もいないし稽古には絶好のチヤンスよ」
ぢや、一二三、だめね。四五六ザブン、バチヤバチヤン——沈んだ——と思つた瞬間ポッカリ浮きあがつた。ぶるつと手で顔の水をはねながら考へると、決心より一足先に、自分から飛込んだのではなく誰かにつきおとされたのだ。ひどい奴め。グッと睨むと
「御免なさい、御免なさい、あんまりその大きい人がとびこまない



臥女像（院展）　藤井浩祐氏作

二科院展小感

熱田優子

美術の秋が來て先づ二科を見る。見渡したところ量に於ても質に於てもいかにも豐富である。その形式技法もあらゆる傾向を含んで先づ元氣旺盛な感がある。全般を通じてブラマンク——佐伯祐三氏の感化であらうか——、スゴンザック、ルオー等の影響の多い事は誰も認めて居る事實である。始めに新人及び、目新しい作品について小感をのべる事とする。

印象派以後佛畫壇に於て明滅しつつある多くの傾向の一つとも云ふべき超自然主義（シユールレアリスム）の一群が今年は觀者を誘惑して居る。新人阿部金剛をはぢめ東郷青兒、古賀春江の諸氏、それに中川紀元氏の「空中の感情と物理」の一點を加へる。觀者は先づこのむづかしげな題名に一種の眩惑を覺えるであらう。が作品は極めて簡單である。高いビルヂングから墜落しつゝある男とそれを見下して居るグロテスクな女とである。この畫面から何か引き出せそうな氣がしてちよつと眺めて見たが、そこに生じたものは單なる哄笑にすぎなかつた。そして下方に小さくなつて居る同氏の「K夫人の顏」を人々はあやふく忘れるであらう事を悲しむ。この小品にこそむしろ氏のよき素質を見出し得るであらうから。

古賀春江氏の畫面には同じシユールレアリスムの中に氏獨特の美を認め得る。大作二點の中「鳥籠」は內容に乏しく「海」は技術もコンポジシオンもとゝのつて居り機械の美の表現も明確である。私としてはこれ等の大作よりもむ

のでまちきれなくなつちやつたんです。でもさんばしが地震の樣にゆれて、夕立が下から降つたようにみんなぬらされたんですから、かんべんしてください」いたづらつ子でいつもみんなを笑はしてる中學三年の武坊が一生けんめおがんでゐる。

ばんのごはんをすました人達が三々五々うすあかりのしじまをそぞろあるきしながら棧橋に涼みに來る。見る人の方はもつと下手、つまり出來ない部類に屬するらしく、感心した樣な顏をしてみてゐる。とびこむたびに氣の毒な程棧橋がゆれる。ブルブル、氣がさす程しぶきがとぶ。くらげが、いい氣になつてさす。そのたんびにアレーいたい、やられたとどなる。おなかゞすいてさむくてつかれてへとへとになつてぐしよぬれの體にオーバをひつかけて濱づたひに歸る私たちを……元氣だなあ……といふ顏が見送る。夜は滿月の海でボートをはしらせ、キヤムプから洩れるチクオンキでおぼつかないチヤルストンが濱の砂をけたてる。

ひるまヨツトをはしらせてゐたら誰か「小池さん」と呼ぶ。みたら文藝春秋の長井さんだ。モータ

しろ「素朴な月夜」の如きを愛する。此の題に最もふさはしい作品で氏の牧歌的な詩が豐にたゞよつて居る。いかにも純朴な繪である。

次に阿部氏であるがこれ又命題の説明に惱まされる。裸體の女が冷藏庫（？）の中に立つて居る何やら英語の説明がついて居る。結局わからない——つかみどころのない繪である。強いて言へばわからない所がよいのだらう。これ等は結局指導的な傾向とは思はれないが、こう云ふ安易なものが若い人達の間に流行となる事を恐れる。東郷氏の作品は有名すぎてあまり努力が認められない。ローマンチックな夢も此の位できりあげて轉換されないと又かと云ふであらう。

古賀氏に似た傾向に二科賞を得た野間仁根氏がある。「ゼ・フールムーン」は力作であり、個々の表現も面白く、靜かな月影にさゝやく爽かな聲を聞くやうである。

フォービズムの先端をゆく二人を上げるならば、里見勝藏氏と川口軌道氏であらふ。里見氏は例によつて其大膽さに於て類がない。川口氏の立體的な色感も惡くない。

林重義は落付いた色調を持ち始められた。

兒島善三郎は形式にピカソを取入れた點をみるが「五人の女」等にしても内容に於てはるかに及ばない樣である。

中山巍氏は粗いマッスのうちに深みを藏して居る。多作にして力作の多いのに感服する。將來重要な地位を占むべき一人である。

高野三三男氏の作品は白を基調



脱衣（二科）高野三三男氏筆

ボートで走つてゐる。平行にならんだ時にはなしをする。「あのねー」「なに」「どこにいらつしやるの」「館山ホテル」「そをう」「中河さんが居ますよ」「どこに」「ここに」「船形ぢやないの」「北條ですよ」「いつかへるの」「今日の五時」「船」「汽車」「ぢやさよならあとで又濱でね」走る。ヨットが走る、浪をきるたびにピシャンピシャンと洋服がぬれる。はづかしくて之ぢや濱があるけない。館山のNⅡのヨットと競爭する。女ばかりのあたしたちの方が斷然はやい。なあ子のヨットの操縦手に入つてゐる。夕方中河幹子氏夫妻に濱でお目にかかる。夜マージャンしに伺ふ約束をする。

六軒町の灯のついたにぎやかな通りをキョロキョロ目的の家をさがしながら歩く。東京の夜の樣ににぎやかで美しい。お迎へが來て歸つたのが十二時すぎ、月の夜はあまりにあかるい。潮騒の音もないのが物足りない。

まつくろにやけて、目ばかり光らせて家に歸つてきたら「いやな子やね」つて母さんに叱られた。「こんちは」つて社にとびこんだら社長さんしばらくまじ〳〵とみつめて「おゝくろい誰かと思つた」

としたもので、悩しさを感じさせる。技術は優れて居るが尚望むならば厭類味を捨てゝ多少のほがらかさをである。

福澤一郎氏は奇才を持つて居る新人について書き過ぎた樣であるから會員にうつらう。

津田青楓氏と有島生馬氏が特別出品として一室づつを占領して居る。青楓氏は氏の日本趣味と油繪との調和に多大の努力をして居られる、そして其の努力は大分報ひられて居るがたまく調和が破れた場合には面白くないものになる恐れがありはしないか。大作よりもむしろ「湖畔の春」等を美しく思ふ。

有島氏の滞歐作品は老練の言葉につきる。唐紙に墨で描かれたデッサンは日本畫の技術を用ひながら立體感を充分に出して居て面白い。黒田重太郎氏の「綠陰裸婦」は隱やかな小品。安井氏の風景は獨特の樣式化と色彩の洗練を尊重する。


窓邊肖像（二科）

今年は女流もなかく力作を示して居られる。深澤紅子氏の優雅な二點、島あふひ氏の大作「家族の肖像」は暗綠色を多く用ひ、しつとりした作風を見せて居る。藤川榮子氏の「ヴイナス」は質實であり彫刻的な量のあるのは夫君の影響の多いところであらうか。佐伯米子氏の作品はブラマンクの手法を女らしく巧みにとり入れて居る。殖原氏の多作にも敬意を表する。西脇マヂヨリ氏の資生堂の繪の鳥瞰的な構圖は面白い。中尾一枝氏も次第に確りしたものを身につけて來られた樣に思ふ。いづれも男性の作品と比較して決して遜色のない事を斷言する。最後に彫刻に渡邊義知氏の裸婦をあげて院展にうつる。

「ツエッペリンを振つちやつて海へ行つてとびこみの稽古をして胸も脚も打つて、しまひにほつぺたまでうつてくちびるがしびれてさんばしがゆれて……」「さぞかし海の水がふへたゞらうね、その體でとびこんぢやあ」

でペシャンコ。（みどり）

二つ違ひ小話

圍爐裡ばたで萬助夫婦がお茶をのんでゐるところへ、村の駐在巡査が顏を見せた。

「まあ旦那、ちよつとおあたりなすつて、寒いに――」

「いやさうもして居れん。けふは戸口調査にやつてきたのだが、ええと……萬助、お前年は何歳だつたな？」萬助は女房の顏を見て、當惑さうにした。

「おい、俺あことしいくつだつたかなあ」女房は少時考へて、

「お前さんはわしより二つ上ぢやないか、たしか二つだよ」

「ぢやお前の年は、いくつだい」

「うむお前さんより二つ下さね」

「それだで、お前の年をきいとるんぢやないか。」

「妙なこんだなあ、お前さんが年を忘れるたんて。いつもぼんやりしてゐるもんだで……」

二科から院展に目をうつすといかにも靜寂そのもので感激する程の作品は殆ど見出し得ない。細々とした寫實上の努力は充分認めるが活々とした自由さが少ない。勿論既成大家はそれ自身としてよいものを見せては居るが。

前田青邨氏の「洞窟の頼朝」は歴史畫として描寫も色もよいものと思ふ。

大觀氏の「有明の月」は墨色の美しい作品である。

下村觀山氏の「しぐれ」は現實的な細密描寫に堕ちりすぎた感がある。元氣がないのが遺憾である。

郷倉千靭氏の「群童六題」は地道に描かれたもので觀察も正しいが色が少しくすみすぎて居る氣もする。「月夜觀樂」等よい。

近藤清一路氏のものには筆の自由さがあつてちよつと面白い。

安田靫彦氏の「雷神」はしつかりした線を持ち宗達のものとは大分趣きを異にして居る。いゝ意味で新らしい雷神である。

女流としては先づ溝上遊龜氏をあげる。「故郷の人達」は構圖もよく、描寫の形式も面白い。初入選豐島しま子氏の「草原」等もしつかりした描寫を見せて居る。

院展の彫刻は小品が多く、一體に悪趣味な寫實に堕して居るものがある。例へば佐藤朝山氏の「蜥蜴」の如きもので藝術的價値よりも實物感が先に來る。藤井浩祐氏の「脱衣婦」「髪」等の單純化された線の美しさ、内容の充實は魅惑の限である。已に紙數も盡きたので極簡單な感想に過ぎないが、これで許して戴くことにする。（九月八日）



故郷の人達　溝上遊龜氏筆

甲斐深澤兩氏特別展覽會

本誌にカットを寄せられる二科新進の女流畫家甲斐仁代深澤紅子の兩氏及び他一氏に依て十月五日より八日迄日本橋通三丁目丸善樓上に於て特別展覽會を開催される。

巡査は頤髯をなでながら

「だつて息子の年は判つてるだらう？」

すると女房は勢づいた。

「ええ、あの子はたしか、わしが廿二の時生んだ、それだけ違つてくる勘定だわな、ええと……」

そこで巡査は萬助に向つて

「誰かひとりのが判ると、みんなのがわかつてくるんだが……」

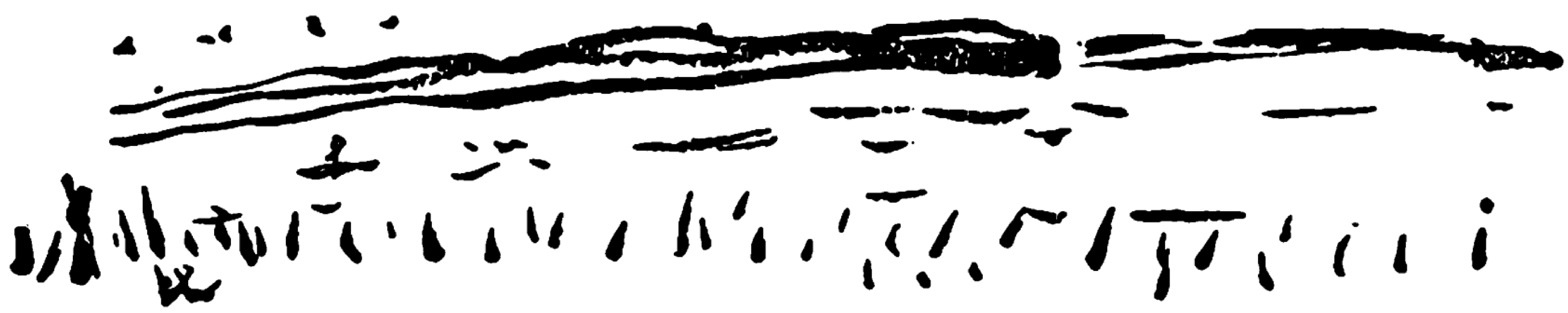
「旦那、それさへ判れあ何もこんな餘計な心配せんでも濟むがな」

巡査はそこを飛び出すと隣家の——役場の書記の家へはいつた。そこの妻君にきくと、すぐ判つた。

「へえ、萬助さんの女房ですか、あの人はわたしより三つ上の、四十八ですが、何か御用かな？……」

台中風物

植民地の田舎もやせがまんぢやないけどいゝものですよ。毎日くの土人の子と手まねで龍顴をちぎりに出かけます。最初はいやに血くさくて、どうしても食べられませんでしたが、今は餘程なれまして、毎日食べてゐます。臺灣でも南部の方ですから全くの熱帶地體中あせもどかりです。割合に原始林が多くて、何かしらもの怖ろしい樣でございます（日種明子）



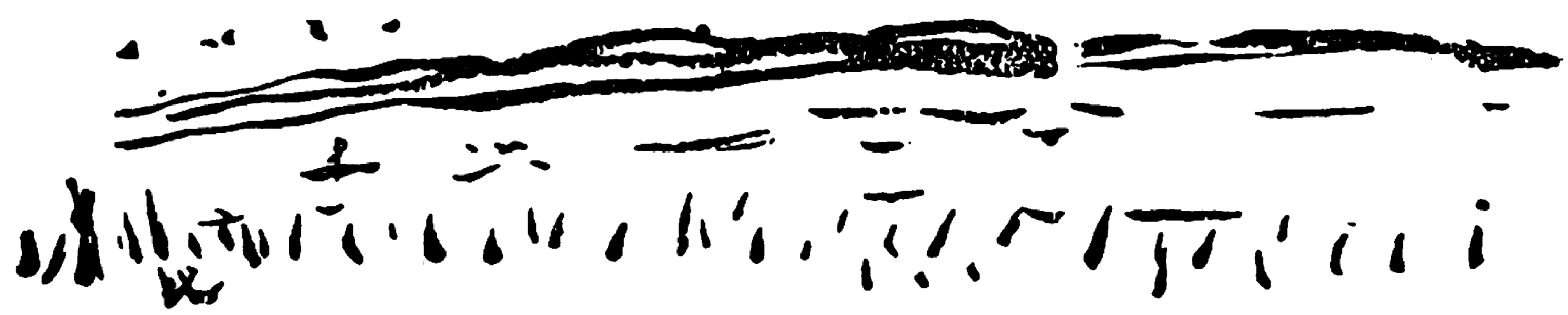
錦繪を洗ふ

長谷川かな女

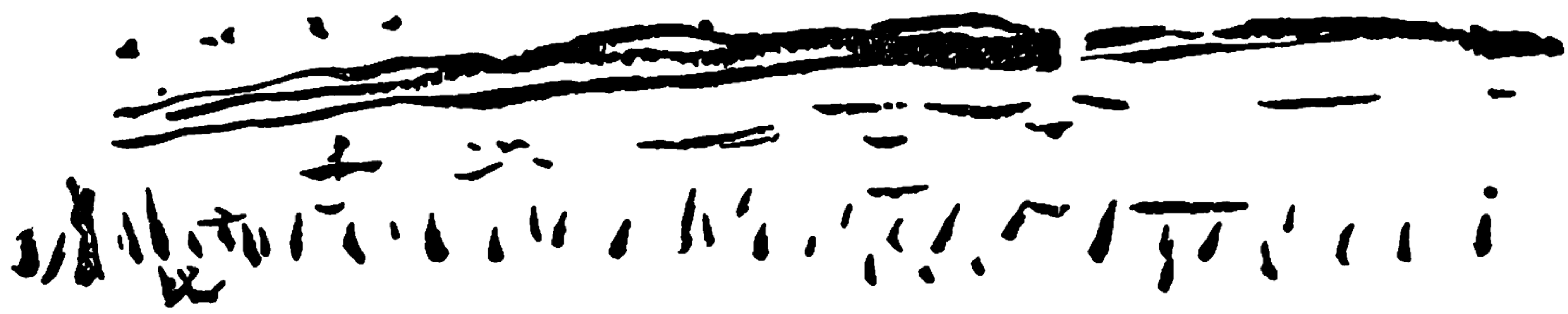
何も手につかない。と言ふやうな日を彼女が送り迎へるやうになつてから風の日も雨の日もあつて月日は用捨なく經つていつた。

雨が降ると楓の葉も薄の叢もまつ靑に顫へて居る。潦は縱橫に庭土を流して居る。彼女は茫然と彼の事を考へて居る。

雨の好きな彼だつた。雨の好きな彼が入院してからよくもあんなに雨ばかり降つたものであつた。彼にとつてはほんとうに慈雨であつた。お盆頃のかなりこたへる暑さも毎日の雨降りで十五日ほど入院して居るうちに汗を流した日はただ二日だけであつた。けれども彼には慈雨であつても彼女には何と言ふ鬱陶しさの雨だつたであらう。あの病院全體の窓といふ窓は又皆金網が張つてあつたので唯でさへ煩さいと思ふところを、重い雨空に壓された高い建物の間を落ちて來る光線を金網に遮られてしまふので、まるで蜘蛛の巢を顏に始終かむつて居るやうな日々を暮さなければならなかつた。其金網張りの病室も二人の最後の生活をいとなんだところであるのが呪はしくはあつたが懷かしく思ひ出せた。それは一とつには彼と彼女が起き臥してた住家が灰燼になつて彼の死と共に二人の思ひ出は影も形も現在では見る事が出來なくなつたゝめかもしれない。あの病院の一室ばかりは燒失しない限りは



薄暗い金網を被つて人の死を見守つて居るのだ。
彼は彼の母親や看護婦の姿を追ひ越して彼女の顔を朝に夜に探し求めた。彼女は殆ど一睡もしなかつた。二人きりで起きて居る時、彼女は彼の意識のない手を握つて、
「何卒生きて下さい。」と祈るやうに彼のベットに額をつけて願つた。彼女が傍に居る事だけ解る彼は如何にも朗らかそうな顔つきをして居るのだつた。
「此處は何處か。水がそこら中から噴いて居る。水の舘か。來たことがあるやうだが、一度來たかな」
三つもつけた氷袋の下から眼を上げて彼女に呟くやうに言つたりした。それは何と言ふいぢらしい事であつたらう。刻々と迫つて居る死期を知らない餘り安らかな言葉であつた。オレンヂの搾汁の甘さうに浸んだ舌を幼兒の如く唇の上にのせた彼、人懷しげに開いた瞳。彼女は堪へきれなくなつた。どうして一緒に死ねなかつたのであらう。
「雨よ。もつと降れ。もつと降れ。家なんぞ流してしまへ。私を一緒に流して下さい。何も。かも。」
さん〳〵雨の降る間夢中で居て、意識を稍とり戻しかけたと思ふとひよいとお天氣になつた夕間暮に病院の一室で彼は瞑目してしまつた。
それから始めて降る今日の強雨だつた。彼はしと〳〵降る小雨が好きであつたが彼女は夏のどしや降りが好きだつたので椽に出て居たのだつた。燒け殘つたものを持つて來ては此庭に置いてゆくので、本の頁のとれたのや衣類の裂れはしなどが雨に叩きつけられた佗びしい限りの景色をした庭であつた。彼女は彼を失つたその上に家も本も何もかも失つて完全な一人ぼつちになつたのであつた。汚ない椽側に蹲んで雨の庭を見て居る彼女の姿はほんとうに一人ぼつちの姿をして居た。
「あなたは今まで餘りお孃さん過ぎた。あなたはプロレタリアになつて。これからだ。」と或人が彼女に言つた。彼女は神妙に聞いて居た。けれどもこれからどうなつてゆくのか解らなかつた。芭蕉の裂けるのを茫然見て居たり、雨垂れの落ちるのを茫然見て居るばかりだつた。或人は又言つた。



「あなたはしつかりして居ます。それでなくてはいけません。實にゑらい。」と。

右をむいても左をむいても手馴れ古りたものゝ何一つ無い中に彼女は何を聞いてもじつとして居た。火事の夜、着て逃げた寢卷の浴衣と紐が二本、思ひ出であるばかりなのを。

然し彼女は未だすつかり貧乏ではなかつた。今彼女の居る家も彼女達の家であつた。けれども彼や彼女達の日々の糧の御飯を焚いてくれたお釜は破れた軒の雨水をうけきれないで土の上にころがつて居る。お釜へ落ちきれない水は庭土を少しづつ刳りひろげて行つて居る。彼女は堀りひろげられてゆく湊の底に非常に美しいものがあるやうな氣がした。どうしてそんな氣がしたのか解らなかつたが彼女は自分の考へた事を慥め度いと思つた。そうして彼女はほんとうに雨の庭へ堀れてゆく土の中へ指先を入れて見た。雨水は彼女の手の甲へばしや〱刎ね散つて顏までぬらした。柔らかになつて居る土は彼女の指先で雜作なく除かれた。そしてちらと美しい色がほんとうに目先を掠めた。彼女は全く美しいものが地の中にあるらしいのを知つて驚歎した。どうしてなどと言ふ理窟を考へるより早く見度かつた。忽ち拂はれた土中を彼女の指は細心に注意しつゝ一枚の錦繪を摘み上げたのだつた。

それは何といふ美しさ、鮮かさの色なのか。

紺青の地に濃紅の色が流れもせず盛り上つて居る錦繪であつて、今まで見た千枚の錦繪よりも美しく彼女の心を搏つたのであつた。一枚取り上げた其下にまだ一枚あつた。又下にもあつた。帙仕立の形のまゝ土中に埋つて腐れかけて居たのだつた。誰か燒跡から拾ひ上げて來たまゝ上へ上へ土が被つてしまつたものだつたのであらう。

彼女の眼には涙が溢れて來た。一枚、一枚、とり上げてお釜の水でびしや〱洗つた。黑い燒け屑が水の面にすぐ浮いた。水を捨てると雨水は又お釜に滿ちて溢れた。一枚一枚洗つては縁側に並べてゆくうちに彼女には悲しみも喜びもなくなつて居た。

いつまでこうして居ればこれからの彼女は物を思はない人になつて生きて行くのであらう。

街頭宣傳

松本勝枝

薄つぺらな　雜誌だけれど同志等は　元氣で今日も宣傳に行く

四十二部賣つて引揚げる同志の朗らかな笑ひが雨の中をばくはつする

俺もプロだしつかりたのむと勵まされ　思はず握つてしまつた勞働者の手

がぢ〳〵した手だつたらうと同志らに冷やかされながら囓る煎餅

留守の間に　同志の置いてつてくれた金を握り　夢中で飛込んだそばやののれん

今に見ろ！と　にらんだところでどうならう　ビクともしない高いビルデングだ

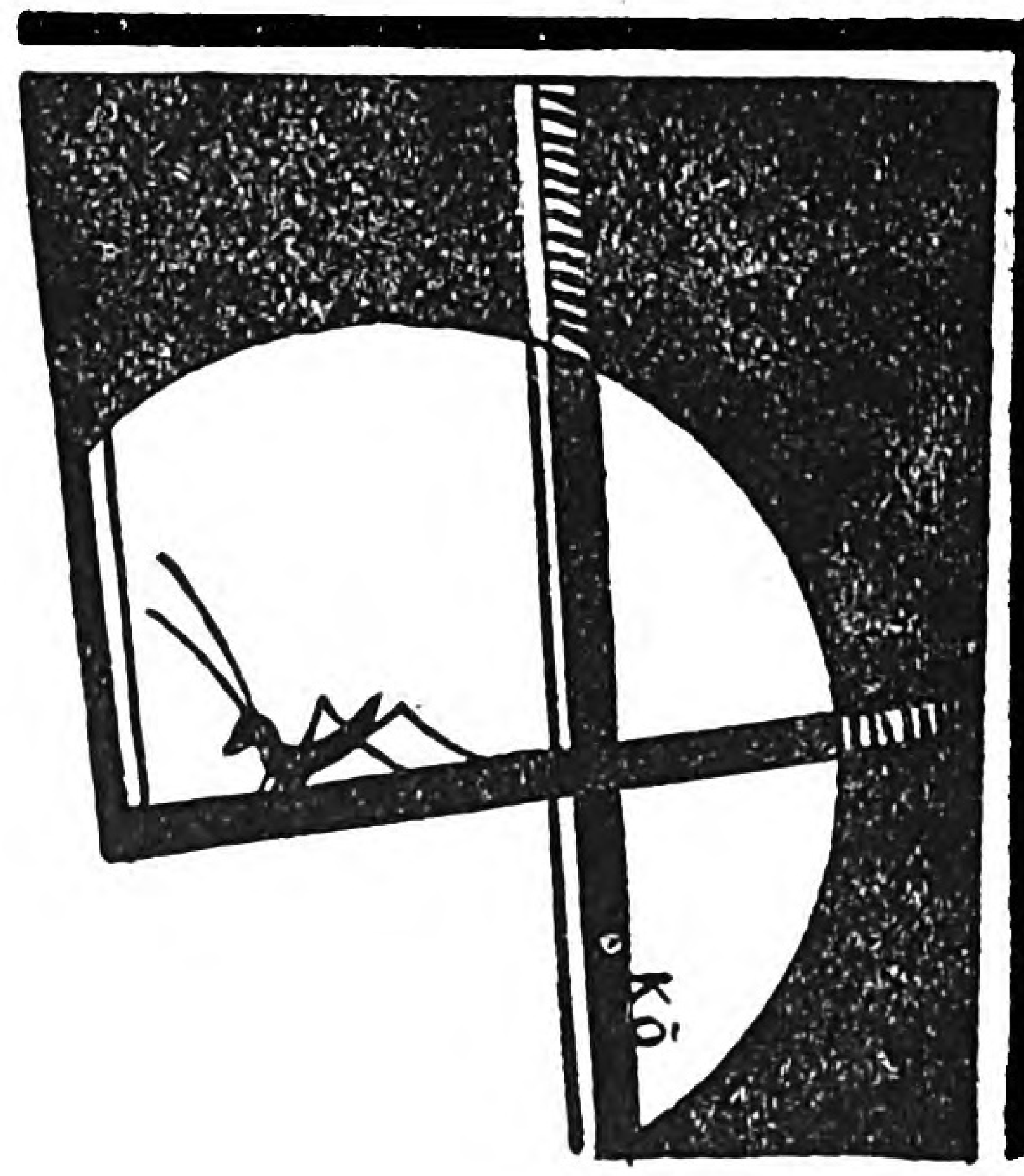
如何にして　生くべきやと惱んでゐる友と如何にして食ふべきやと苦しんでゐる我

何も食はず下宿の二階に轉がつたまゝ　豆腐屋のラッパをぢつときいてる

夕ぐれが一番辛い長屋街　もの賣りの聲のはげしい露路通りだ

ブルジョアの自働車にひかれ慰藉料を　とつてやらうかとも思ふ日本橋

空腹を抱えて歩いてゐるこの私に　神を信ぜよとわめく救世軍



丘の家

山川朱實

眞佐子が良人の山川の實家に歸つてから、既に一ヶ月過ぎた。

山川の弟の詮吉が呼吸器を悪くして床に就いてから、眞佐子は看病のために、遙々東京から九州の山の中に、これで三度目の歸國であつた。去年の年の暮れと、この春三月四月にかけて、でもいつも二週間か精々二十日位で歸京したのであつたけれど、今度はもう四十日に近かつた。それがもう三度も歸したので、さすがの山川もさう〳〵は眞佐子にも頼めない、と思つてゐるせいであらう、歸へつて來ていゝやうな事は少しも言つて來なかつた。長い呼吸器病などの看病が、一月や二月でさう急に治るものでないことは分つてゐても、山川に取つては唯一人の話相手になる弟で、何を置いても全力を盡して看病してやりたいのは山々であつた。出來ることなら眞佐子が、詮吉の治るまで田舎にゐてくれゝばいゝと思つてゐた。でもこん度歸したとき、眞佐子に

「私よりは詮吉さんが大事ですからね」

といはれたことがさすがに山川も氣の毒であつたのである。詮吉が病氣になつてからもう丸二年であつた。

詮吉は母家の西側の離室にひとり起き伏しをしてゐた。離室といつても家の半分を壁でし切つて板敷の米倉にしてあつた。其の半分の南の中窓を持つた四疊半が、詮吉の部屋であつた。

母家のだだつ廣い土間のついた百姓家に、長兄夫婦が小さい女の子と、男の赤ん坊の長男とをつれて住んでゐた。

いくら看病に歸つたといつても、都會の生活に慣れてゐる眞佐子

は、何時でも四五日すると東京にかへりたくなつた。何もかも侘びしい田舍の生活にはぢきあきるのが當然だと思つた。
田舍の十一月といへば野山の色もすつかり變つて、北から吹く風は少し寒い位であつた。眞佐子は

今朝は初めて下田の田圃一面に初霜が下りました。背戸の椎の木に吹く風も日ましに凄じい音をたてゝ來ます。

と山川に端書を書いた。そして冬の仕度もして來なかつたことも書き添へて、山川から「何日頃歸京ありたく候」といふ端書の來ることを心に思つた。別に山川の側に歸りたいといふ切迫つまた心ではなかつたが、たゞ無暗に東京がこひしくなつたのである。田舍での滅入るやうな生活にうんざりするのである。背戸の井戸の乏しい水を汲みあげて、藪蚊に刺されながら詮吉の汚れ物まで洗ふことがどう考へてもいとはしいものであつた。夜は夜で五分心の暗い洋燈の火かげで本も讀めなかつた。閑々に讀まふと思つて持つて來た五六册の本も、行李の底で汚れた足袋や肌襦袢と一緒にぐちやぐちやになつてゐた。未だ一頁も讀まない。
眞佐子はとり止めのないことを考へながら、今朝少し非度く吹いた風で、天井の煤の落ちたのをそつと古新聞に集めてゐたが、ふとさつき詮吉が
「ゆうべは冷(ひや)うて寢られざつた」
といつたことを思ひ出して、日の暮れぬ中に兄に火鉢を出しておいて貰はふと思つた。そして裏庭の方までさがして、信吉が珍らしく納屋の中で草鞋をつくつてゐるのを見つけ出した。
「これは失敗(しまつ)た。眞佐子さんに見られたよ」
と言つて笑つてゐる。眞佐子も笑ひながら蹲んで、器用に作つた五六足の草鞋を見てゐた。
「お兄さん隨分お上手ですね」
眞佐子は信吉が草鞋を作つてゐるのを見たのも初めてゞあつたし無論作つてあるのを見たのも初めてゞあつた。信吉は百姓の娘でない眞佐子に、こんな所を見せるのを、日常から恥しいことにしてゐた。
「上手も下手もあるもんか、これべえなもの」
信吉は若々しくはにかんだやうにしてさういつた。柔かく打つた藁が面白く繩をくゞつて草鞋ができてゆく。
信吉は何を思つたか、立つて納屋の隅からもろこし穀で拵へた箒を十本ほど出して來た。眞佐子は心から信吉が好きで親しめた。
「とうとう見られたけん、これも序にお前にみせう」
といつて、これを一本三錢に賣るのだといつた。眞佐子はこんな零細な錢でさへ尊くしてゐるのに、二人の弟に一月何十圓といふ大金を、氣持ちよく何年もつゞけて出してゐた信吉を、何といつて讃へていゝか分らない、何に向つてするとも知れぬ感謝の念が眞佐子を涙ぐくました。

其間に信吉は草靴を一足作り終えて、膝の藁屑をはたいて立つた。

眞佐子は思ひ出したやうにいつた。

「詮吉さんが寒いさうですの、あの春うちから持つて來た火鉢を出して下さいませんか」

「はてね、米倉ぢやろうか」

二人は連れ立つて米倉へいつた。信吉が一人で家に入つて、手さぐりで探してゐる音がしてゐる。

山高い丘に建つてゐるこの家では、冬になると下の縣道から吹き上げる風が、脊戸の大きな椎の木をゆるがして、朝から晩までうなりを立てゝゐた。

眞佐子は米倉の前に立つて、少し涼しすぎる風だと思つた。極端に貧血してゐる詮吉には寒い筈だとも思つた。

「何しよりますだ」

詮吉が倉の物音を聞いて、床の中から聲をかけた。

「あなたの火鉢を出してゐるところ」――

詮吉はありがたうとも言はず默つてゐる。

倉の中ではまだ探してゐる音がしてゐる。

「あつたかや？」

眞佐子は信吉の方へと一緒に、

「あつたでせう」

とやゝ大聲で答へた。冷たいと思ふほどの風が頰にあたる。

火鉢は中々出なかつた。暗い倉の中で何時までもゴト〱と言つてゐる。

「冷うなりや要るに定つてらあ、もつと早う出しておきやえゝに」

詮吉が何時もの癖で、だん〱氣短かに待遠うがつて來た。

「まだかや！」

「……………」

「日がくれるぞ！」

「そんげに忙しなくいふな！」

信吉も弟に釣り込まれて叱るやうにいつてゐる。

詮吉はじり〱して我慢しきれなくなつたと見えて、床から這ひでゝ來た。

「もう直きよ。風を引くから寢ていらつしやい」

「まだかあ兄さん！」

眞佐子には返事もしないで、信吉になげつけるやうに言つた。

信吉も手荒に何か放り出してゐる音をさせてゐたが、やがて埃まみれになつた黑柿の長火鉢を出して來た。そして默つて風かげになつた母家の庇の下に置いた。

信吉は無學ではあつたが、信實の强い人で、村の人々からは敬愛されて來た。善良で家の中でも、怒つた顏を見せたこともない程の人であつたが、二人の弟の學資に――眞佐子の良人の省作は三年前

に經濟科を出てゐた――祖先から傳つた田畑を一つ一つ手離し、今では小人數であるので食べてゆかれる、といふ程になつて了つてから、祖先に對してすまぬと思つてゐる所へ、詮吉が高等師範へいつてゐて、あと一年といふ所で肺病になつて心を落してゐた折に、十五になつてゐた長男と病身であつた次男とが流行り風でぽつくり死んで了つた。それからといふもの信吉は、すつかり生活力を失つてまだ拂はなければならぬ借金の、利子さへ拂へぬやうになるまで働かぬ人になつてゐた。

「なに、何んでもないことよ……」

「信吉は優しい笑顔をみせてゐる。

「兄さんら、田圃へもちつともいかんもの、火鉢出す位何んでもあるかえ、のう」

詮吉の言葉は皮肉にあたりにひびいた。

「倉の中あ水ぅ渡らいでもすむもん……」

信吉は默つて其所にあつた柄の短い箒を取つて、吹き寄せられた庭のゴミを掃いてゐる。信吉が何もいはないと、詮吉は餘計にじりじりした。

「新おぢの家でも、田圃は耕(かへ)して了ふつろ」

眞佐子は火鉢の堅くなつた灰を起しながら、聞くともなく詮吉のいふことを聞いてゐた。

「重作の家ら、夙(とう)からすんだ言ひよつたぜ」

「今まで耕(かや)さんうちがあるかよ！」

信吉は相手になるまいと思ひながら、つい棄て鉢な氣になつていつた。

「兄さんら二人とも極道といふたら、わしや毎日はがゆつたまらん」

「わし一人働いて、何になりや、なんぼ働いたら、利息の拂へんことあおんなじこつちや」

信吉はなげすてるやうにこゑをおとしていつてゐる。

「さう言ふて百姓が田圃に行かにや、來年は米は一粒もないぞ」

「どうでもえゝ。わしやもう成り次第ぢや、大井川流れ渡りよ」

「又なにを言ひよるぜ」

お松がさういひながら、いつもの事ぢや、といふ風に、笑ひながら子供を負つて歸つて來た。右手には空になつたざるを提げて。

お松はさつき人參の柔い葉を、小さな束にして、縣道に添ふた小さな町に賣りにいつたのであつた。

「お姉さん賣れましたか」

眞佐子は顏をあげてお松にいつた。

「賣れた〱。ぢきに賣れてしまふた」

といつて、少したゞれた眼をしよぼ〱させて笑つてゐる。

眞佐子はこの人達が無智であるだけに寂しかつた。この村の田圃は殆ど窪地で、雨さへふれば折角植えつけた稻が、一升の籾にもな

らずに腐つて了ふのが常であつた。そんな田を毎年作らなければならない人達のことを考へると、あはれみごとでなく、知つてゐるものは誰でもどうかしてやらなければならないと思ふのであつた。都の人の一日の小使錢はこの村の人達の一ヶ月分の魚類の錢にもなつた。都の人が避暑をしてゐる間に、籾になるかならぬかさへ分らぬ田の中に入つて、草をとらなければならなかつた。雪を踏んで麥の中も打たなければならない。それでなほ食べてゆかれない暮し向きを考へる。東京の貧民窟といはれてゐる所の小學校の小供の副食物が、お煮〆や煮豆であつたといつて、救濟方法を講じなければならない。などと新聞に出てゐた事を思ひ出した。この村の小學校の子供などは梅干二つ、たくわんの五つ切れもあれば澤山であつた。煮豆やお煮〆等と手のかゝるものさへもつてゆくことは出來ない有様であつた。都に住むものゝ貧しいながらまだ幸福であることをもつくづく思つた。夕餉に鯖の一切も食べやうとするには、畑から人參や大根をざるにいつぱい持つてゆかなければならない人達の生活を考へた。

そして錢の乏しい爲めに、兄弟の中まで不和になつてゆく世相を思つた。

「ちい？　何しよるぞ！」

三十七だといふ姉の暗い服裝、望みをもたず、快樂も知らない世界が、姉ばかりでない。隣の主人も妻も、其のとなりも、みんながこの土地の全部が。

眞佐子は胸に迫つて何もいふ事ができなかつた。

お松は太い聲を出して、やゝ下り坂になつてゐる前の小徑を見下ろして呼んだ。

とすぐそこの下で

「おつかあ！ 落した――」

お千代がしよげた聲で返事をした。

「なぜ落したぞ、馬鹿ぢやね、東京のおばさんが穢いといふぞ、馬の糞がつきやせんか」

お松は口小言をいひながら下りていつた。

「姉さん等のすることはみんなあれぢや。食ふものを五つや六つの子にもたして。落したもんが食へるかえ」

詮吉は何でも兄夫婦のすることには難くせをつけたがつた。

信吉は母家の向ふの方を掃いてゐた。

お松はお千代の手を引いて、あごに藁をさした五六尾の鯵を提げてかへつて來た。

眞佐子が重さうに詮吉の部屋の狹い緣側に火鉢をあげてゐるのを見て、

「あらや、火鉢のあるとこを、よう知つたこと」

「お兄さんに出して貰つたんですの」

「うむ、私でないとわからんかと思ふたに、お母さんの火鉢をわ

やにするといかんと思ふて、隅の方へ入れておいたから」
　お松はほんとに人のいゝ笑がほを見せて、立つてゐる。
「詮吉さんも今晩らぬくいこつちや…眞佐子さん、まあお前さん着物が汚れて了ふた」
　お松は眞佐子の白いエプロンの下からでてゐる着物が灰だらけになつてゐるのを見ていつた。
「いゝえ、ぢきおちますわ、お炭はどこにありますの」
「おゝそうぢや、炭もまだ町に出んよ。薪(たきゞ)をもやしなんせ詮吉さん」
「何でもえゝわ、ぬくうさへありや」
　眞佐子がこの春かへつたとき、三里離れた里の物置きに仕舞つてあつた母の火鉢を、母が朝鮮の兄の所へ遊びにいつて留守なので借りて來たものであつた。いゝものと悪いものとの區別さへ分明りしてゐないお松達は、赤のおとしの黒柿の火鉢で薪を燃すといふことが、ちつとも可笑いことではなかつた。
「縁(ふち)がこげやしませんの」
「こげたら買ふて戻さあ。」
　詮吉が吐き出すやうにいつた。黒柿の長火鉢が一圓か二圓で買はれるものゝやうに思つてゐる。
　眞佐子は母が大事にしてゐた火鉢を燒いて了はれるのは惜しかつたが、この上何もいふ氣になれなかつた。
「では薪をもつて來ませう、どこにありますの」
「矢張り納屋の南側につんであるのがえゝわ、枯れちよりますけん」
　眞佐子は厩の前をとほつて、庇に山のやうに積んである中から、五六本引きぬいたら、もう一抱へになつた。さみしいとも不愉快ともつかぬ氣持ちで厩の前をかへつてくると、中で黒駒のやうに痩せたのが、眞佐子を笑ふやうに、ヒヒーンと高くいないた。
「馬ぢやち可哀想なもんぢや、朝草も刈る人がないけむ、もう長いこと草も食ふまい」
　詮吉はねて山川の送つてくる東京の新聞をよみながら、今いなゝいた馬の聲を聞いて、そんなことをいつてゐる。
「そんなに何もかもつけ〳〵言ふものぢやないわ」
　眞佐子の心がだん〳〵詮吉に對して義務的になつてゆくのが自分でも不愉快であつた。
「これ程言ふたち徹しないんですよ、こゝの二人は。みなんせ、何も言はないでせう」
「言へば面倒臭いからよ、みんな」
　さうよ、面倒臭いからです。姉さんが東京からかうして歸つて來てくれてゐるときは、部屋も綺麗になつて、三度々々飯も食へます。けれど、ふだんは私やみじめなものですぜ、姉さんが歸つて來て見たとほりの豚小屋になりますよ。何しろ恐はがつてこの部屋に

入るものあありやせん」

こういつてなげいてゐる銓吉を見ると、心の底から可哀想にもなつた。がこんなに言つてゐてもこれが嘘が眞實かよわからなかつた。信吉の話に依ると、醫者の來る日などには故意に部屋の中に、穢いものを拭いた紙を散らかしてみたり、湯わかしの藥罐に放尿して、窓から外に放り出したりするといふことであつた。

眞佐子は病人にも同情したが、無智で善良な兄達にはもつと同情を惜しまなかつた。

眞佐子が薪に火を燃しつけるのに三十分もかゝつた。外はもうすつかり暗くなつてゐた。其の間銓吉は山川の話をしたり、しみ〴〵と

「姉さんももう東京に歸りたうなつたでせうね」

といつて、さみしさうにした。こんな銓吉をみると、どうしても歸京するとはいひかねた。が、銓吉の心はすぐ變つて了つた。そして一人で焦々するのがいつものくせであつた。

「まあ一時間でもえゝ。居つてもらうたゞけが儲けものよ」

「もつとゐてあげるといゝんですけど、寒くなつて多の仕度もしてないし…」

「重ね着といふことがありますよ」

銓吉は東京の言葉といつも眞佐子にはちやんぽんに使つた。

「……」

「姉さんが此前小包をくれたとき、兄さんの黒い足袋が何足も入つてゐたが、あれ位になつてもう穿かないんですか」

眞佐子は少しでも役立てやうと思つて送つたのであつたが、

「穿かないこともないのよ」

「あれ位はつくらうて穿かしたらどうです、そんぢやけん錢も殘らんし、借錢の利子も送れんがですぜ」

東京の生活を知つてゐる銓吉が、餘り無茶苦茶だと思つた。

「姉さんぢやち、繼いだ足袋は穿きやすまい」

投げつけるやうにいふ銓吉の言葉を聞いても、眞佐子は何もいふ氣になれなかつた。

さつき人參と代へて來た餅を、燒いてゐる匂がこゝまでも來て眞佐子のこの頃の粗食の食慾をそゝつた。

眞佐子は鼻緒のゆるんだ日和下駄を、わざとカラ〳〵音をたてゝ母家の方へゆつくり歩いていつた。

「お前も毎日たまらんのう。いやなことばかり聞かされて」

眞佐子が薄暗い土間に入ると、信吉は勞はるやうにいつた。

眞佐子の氣持は兄の感謝をしてゐる顔を一目見てからりとした。愉快に笑つてみたくさへなつた。山川の持つてゐる自分勝手な性質や、銓吉の傲慢な振舞も、この兄ら二人はもつてゐなかつた。いつも眞佐子はこの二人のゐる爲めに、少しなりとも自分を犧牲的にすることを喜ぶ氣持ちであつた。度々この山の中に歸つて來るのも、

詮吉のためでなく、眞佐子の心の底を劃れば兄夫婦の爲めであつたかもしれない。

煙草ものまない信吉は、火のけのない大きな圍爐裡に向いてじつと考へこむやうに坐はつてゐた。

子供達は火のよく燃えてゐる竈の前の板の間に坐つて、小さな丸い頰を眞赤にして、お千代が飴をつまんでは弟の實にたべさせてゐる。小さいふくれた手の甲で、落ちさうになる鼻汁を時々こすつては眞佐子を見上げて笑つてゐる。

「骨をたてちやいかんぞ、眞佐子さんも毎日のことで、も聞きあきたはのう」

お松は子供らへ注意した言葉で、眞佐子にいつた。

「でも私はぢきゐなくなるんですけど…慣れつこになつてらつしやいよ」

眞佐子はほがらかに笑つた。

「さう言ふて吳れると、わしや涙の出る程嬉しいけんのう」

信吉の眼が涙で光る前に、眞佐子は自分の落ちさうになつた涙をかくすために、急いで

「チイちやん、おばさんにも頂戴」

といつて板の間に腰かけた。

竈の前が焙りやきしてゐる飴は、少しかちかちになりかけてゐる。

眞佐子は思ひ出したやうに、土間の向ふ側の戶棚をあけて、みんなのお膳をだして、一つ一つ運んだ。

「さあ、千いも實いもこつちへおいで。まつとおとゝやるぞ、早う來い」

信吉も元氣づいて、眞佐子の運ぶ箱膳を、受取つて、中から茶碗やお箸をだしては並べながら子供を呼んでゐる。信吉は明日から田圃の仕事を初めやうと考へてゐた。眞佐子が自分たちに持つて吳れる心持を、いつでも有り難いことに思ふにつけ、信吉はおくれた仕事を明日から精出してやらうと思つた。

夫次第で何を考へることもないお松は、竈の下に大きな薪を一本放りこんでから、前垂で手をふき〳〵上り框に腰かけた。

眞佐子が詮吉の膳をもつて外に出たとき、信吉の掃いた廣い庭に宵月のあかりがあはくさしてゐた。

詮吉の部屋の障子に、とろりとろりと燃えてゐる火かげが、一層さびしげに映つた。



別離

眞杉靜枝

一

朝陽が、足許から、夜具の上に迄はひ昇る頃、絹子の心にも或る落着きが出來た。

かたはらの彰は、横にした巨木のやうに强張(かんば)つてねてゐた。

彼女は三ヶ月も前から、豫想してゐたけふと云ふ日の姿を、皮肉な想ひで眺めた。

どうせ別れねばならぬ、二人にとつては動かせない黒幕を背景にして、彼女は別れの場面を何十回となく豫想してゐた。

豫想では然し、二人共必らず泣いてゐた。別れねばならぬ必然さを、素直に認め合ひ、二人がよりよく生きる爲めに、以後は唯一の力になり合ふ友達になる爲めに、別れやう。

そうして別れたら、暗を貫く二人の愛は、屹度二人の生甲斐を作らずにはおかないだろう。

ところが、五日前に、いよ〱では××日に別れやうと、彰が日をきめた日から、すべて幻滅だつた。最後の亢奮や緊張は、絹子の方に加はる計りで、彰の態度には平常と異りなく、外泊や夜更しもした。別れると云つたのは嘘かしら？ 彼女の心の一方では嘘である事を望み、彰の本心は矢張り、別れ度くないのだ、と、認めたがつた。

すると、昨日の朝になつて

『あしただつたね、いよ〱お別れの日は。』

と、彰は云ひ出した。

『そうよ、何卒御用意を。』と半分冗談のつもりで云ふと

僕けふ、もうすつかり運送屋を賴んで來るから――。』云ひ捨てゝ出て仕舞つた。

彼女は祖母の家へ行き、どうしても駄目らしい、と話した。祖母は、では仕方が無いから一たん別れてみよ、と、賛成し、けふトラクタアをよこして與れる約束をした。

昨夜の彰は、十一時頃酒機嫌で歸つた。

彼女は本棚をまとめかけてゐた。

『僕は、當分Kで下宿する事にきめた。』と彰は、例の薄笑ひを見せつゝ云つた。

『そう、いつきめたの、以前からきめてたんでせう。けふきめたの？』彼女自身、別離の心用意に怠りなかつたくせに、彼女は彰の心の道程をさぐりたかつた。

それは、あれ程無感情のうちに、別れの用意が出來る人か、どうかを知りたい氣でもあつた。

『前から、方々へ賴んではおいたんだけど、丁度けふ電話をかけて與れた。』

『そう。お獨りで下宿なさるの？』こんな事も訊かねば疑はしかつた。

『あたりまへさ。』云ひつゝ彰は、薄笑いを故意に深めた。

彼女は泣きたかつた。無我夢中で手を動かし、本棚や机を片づけつゝ、裏切られた侮辱で、心が震へた。

彰は一人床に入り、直ぐに呑氣な鼾をたてた。

『惡魔だ――。』彼女は一人、青いスタンド・ランプの蔭に腰かけ、寢室の彰を眺めた。

これ程無關心で、最後の夜を過そうとする彰を、今更不思議に思ひ、同時に、この不思議さが卽ち、自分たちの背景にある黒幕だと思つた。思想や、目的の異ふ程二人は同時に神經の動作が全く異ふ。

それにしても、？――彼女は彰の冷たんさに苛立つた。

『ちよつと起きて頂戴、あなた、本當にあした別れるつもり？。』彼女は、わざとかうねばつてみたくなつて、ねてゐる彰に聲をかけた。しんとした夜更けの室內に、突然口から飛び出した彼女の此の時の異樣に尻あがりの聲が、四圍の壁や襖にあたつて、響きを倍にすると、彼女はその餘韻に殺氣立つ程、みる／＼亢奮した。

『ちよつと、起きてつてッ』彼女の聲はうわずつた。同時に彰の頭に飛びついた。

『うるさいッ。』彰は振り絞るやうに叫んだ。『あたりまへぢやないか。』云ひ放つと、彰は同時にくるりと彼女に背を向け寢返りをした。

彼女は、あふれ出る泪と、瘤張つた心のはけ口の爲めに、續けざまにわめいた。

あり丈けの惡口を浴びせかけると、少し片づいた心から、吐息を一つ吐き出し、彼女は云つた。

『それにしても不思議でならない。あなたがそんなに冷たんなのは

私たちの間にもう一人の女でも挟まつてゐるやうだ。そうでない限り、こんな別れ方と云ふものがある譯はない。』

けれど彰の岩のやうな背中は、矢張り動かなかつた。腹が立ち過ぎると、口の利けない彰である事に氣付くと、彼女は云ひ過ぎたやうにも思ひ、寢て仕舞ふ事にした。

彼女は、タイピストをして、ぐるりの腐つた中毒患者のやうな、刺戟ばかりを欲しがる男達を、多く見せられてゐなかつたら、無口で奥に重味のありそうに見へる彰を、あれ程かいかぶりはしない筈だつた。淺薄で無い丈けに、彰の心の在り場所がまるで解らない日が多かつた。

十時過ぎには、トラクタアが此處へ來るわけだ。――彼女は鉛のやうな頭をあげ、床を出やうとした。

壁掛けのペルシヤ布や、寫眞機、本なぞが隣室から枕元に迄雜然とひろがつてゐた。

彼女は、目を彰の顏にやつた。するとその角張つたアサ黑い腭が、岩のやうに强直したまゝ、呼吸を潛め、眠つてゐない事を示してゐた。そして、閉じた眼の睫に粟粒のやうな泪が、並んでにぢみ出てゐるのを見た。

『まあ、泣いてる。』彼女はそこへべたりと胸を落した。

彼女と同じく、彰も夜通し眠つてはゐなかつたのか？　と思ふと、彼女はまごついた。

昨夜の毒舌が、彰を傷つけたか？　亦は、矢張り別れやうなぞと云ふのは彰の虚勢で、それを無思慮に張り合つて出る彼女の態度を女らしくも無い、と不滿に思つてゐるのでは無いか？

『御免んなさい。私惡るかつたかもしれないわ。』彼女は云ひつゝ、觀察を働かした。

すると彰の目の泪は、突然瀧になつて、キメの荒い皮膚の上を耳の方へ流れた。薄い唇が幽かに震へ、互い胸の内部に、今破れそうな、むせび泣きが渦巻くやうだつた。

『馬鹿。』彰は、とう／＼聲を出して泣いた。

暫く、ぼんやりそれを見てゐるうちに、譯知れず、彼女も泣き度くなつた。

『あやまれ。昨夜云つた事をあやまれ。』彰は聲を波立てつゝ云つた。

『女と云ふものは、どうしてそんなに判らないのだらう。――別れのるが辛いのはお前丈けだと思つてゐるのか。――Ｋにきいてみて呉れ、俺が此の暫く、どれ丈け苦しんでゐたかと云ふ事を。――これ程はつきりしてゐる別れねばならぬ理由を、お前はまだ何度も復習したいのだ。』彰は云ひつゝ、益々亢奮した。

『判つたわ。判つたわ。私が惡るかつた。二人は別れさへすればいいのよ。判つた、あなたがそんなに泣いて下されば、私何にも、もう云ふ事無い。』

彼女も泣いた。彼女の胴に、彰は腕を伸した。

『俺の進み度い實業の仕事に、お前が全く理解が無いのと同様、お前のやり度い藝術の仕事には、俺は全くお役に立たない。』彰は、確めるやうに口の内で復習した。實際それは復習だつた。確め〳〵しなければ弱い堤防のやうに、その別れねばならぬ理由は、二人の感情で押流れそうだつた。

彼女の方は、既にそれを押流しかけた。

『私が、自分の仕事を捨てればいゝのぢやないかしら。』

『駄目だよ、そんな事駄目だ。』彰は癇をたてゝ腭を振つた。考へる迄もなく、それ丈けの理由は二人の間に、決して概念からあたへられたものでは無い、行き詰り切つた事實であつた。

仕事を捨てゝ仕舞へば、彼女の神經はこれ以上、ヒステリックに彰にからみつかねばならない。彰のやる實業の仕事では、彼女なぞの理解の行き屆かぬ、潜行が必要らしかつた。そこで、もつときたない破壞が生れさうである。――

二

二人は一緒に床を離れた。和かい冬日和であつたが、風が障子の破れめを鳴らしてゐた。

コンクリー仕立ての臺所は、幾日も手を入れぬ雜然さのまゝ、朝陽に蒸されてゐた。

彰は、ばけつの底を鳴らしつゝ、顔を洗つた。

彼女は、火鉢の代りに電熱機を臺所から持ち出し、小さいアルミのコーヒー沸しをかけ、昨夜とつておいた。フルッサンドキッチの皿を長火鉢の上へ置いた。

彰の目の縁は、泪でまだ赤かつた。亘きい軀を前へこゞめ、火の上に首と手を突き出して温まつた。

昨日迄、部屋の隅に落着いてゐた、大小の諸道具が、皆前へ移動して埃りまみれの背面を見せ、あたりをあわたゞしくした。

『これ丈けの道具、皆一臺に積めるかしら。』

云ひつゝ彰は、火をつけた煙草の先きで、道具を算へ初めた。その横顔から頭部へ目をあてつゝ、此の時彼女の心に或る不快が湧いた。

『お前、二階の鏡のついた簞笥いる?』

『いらないわ。私何にもいらない。持つて來たもの丈け持つて歸る。――それもあなたがお入用ならあげるわ、何でも――。』

から云ふ言ひ方で、彼女はいつも彰の欠點と、彼女の誇りとを併行させやうとした。

すると、斯ふ云ふ場合のいつもの癖で、彰は口許に薄笑ひを出し、目で睨む形ちをした。

物質上の事になると、彼女は彰と迚も一つになれなかつた。

八月程前、彰と結婚した最初から、彼女は殆んど彰の收入らしい

ものを見なかつた。

小さい雑誌の編輯を依托され、その仕事と方々へ書かしてもらふ雑文とで、彼女には最初から、女中を入れて三人の生活費に當てる丈けの收入があつた。彼女はそう云ふ稼ぎが、彰を悦ばしてゐると判ると、彼女は一層精を出した。

夏の終り時分、彰の留守に、無斷で彼れの洋簞笥の虫干をした彼女は、彰の洋服のポケットから、幾つも〱コロ〱と紙幣の束が現はれたのに、失神する程驚き、服を疊む手が震へた。

彼女は、彰のそう云ふ點を追及して、はつきり觸れてみるのは恐ろしかつた。彰の汚點を認識する勇氣も無かつたし、そう云ふ穴をのぞかうとする態度は、彼女の愛情が下落するやうな氣がした。

サンドキッチが、ゴムのやうに口の内でかたまり、咽喉をこさなかつた。彰も一片れをようやく喰べたやうだつた。いつの間にか彰は、目を疊に吸ひつけ、又泪をにぢませてゐるやうだつた。

彼女は甲斐々々しく立ちあがり、コーヒー沸しの中を捨て、茶器と一緒に、新聞紙に包み、彰の持つて行く茶箇笥に入れた。ついでに、片端からわれものを新聞でまいて彰の荷の中に重ねて入れた。

どんな女の手で此の瀬戸物がひろげられ、再度び家庭が初まるであらうか、なぞ、割に冷靜に想つてみつゝ、彼女は手を働かした。

『あッ。來たらしいな。』彰は聲と同時に立ちあがつた。

裏の方で、木車の音がした。郊外の墓地に近い田の中にある此の家に、荷車をつけるには、裏の廣場を使はねば、表の通りは二股程の小みちだつた。

彼女は、矢庭に目で彰の顔へとりすがつたが、彰は彼女に目もくれず、二階へ駈けあがつた。二階で裏向きの窓のあく音がして、其處から外へ向け、『此處だ。』と彰の呼ぶ聲がした。

木車の音が裏口へ迫ると、初めて彼女は立ちあがり、あわてゝ簞笥から着物を引き出し、寢間着をぬぎ替へた。

裏木戸を叩いて、人夫が叫んだ。彼女は細帯をしめつゝ、裏緣の硝子戸をあけ、濕つた黒土にスリッパの足を降して、木戸を開らいた。人夫は立ち入りつゝ大聲で、教へられた道が解りにくゝつて困つたと云ひ、荷物はどの位ひあるかと云つた。

『よし、待つて與れ。』彰が二階から駈け降りつゝ、そう聲をかけ、洋服の上着を着ながら出て來た。

『なんだ。お前一人か。――もう一人ゐる。よし、ぢやあね、大きいのは八個程だ。小さいのがゴダ〱とあるぜ、一つうまくやつて與れ。』

破れものは、あとで積む、と云ひ、人夫は、部屋の中に首を差し入れて、

『あの簞笥なんぞ布で一ぺん包んでもらはんと、傷つきますぜ。』と、彼女の簞笥を指さした。

『あれは運ぶんだ。トラクタアの方に積むんだ』と彰が云つた。人

夫は両方頼んである事に、別段不審も持たぬ風で、地下足袋を足からはがし、そろ〳〵あがつて來た。

彰は急に活氣づいた風で、二階へ又飛びあがつた。

彼女は着替へを終り、自分の簞笥に錠をおろすと、それにぴつたり身をあて、暫くぼんやり立つてゐた。斜めに疊へおちた冬陽の中で、煙のやうな埃が舞つた。人夫は手でまるめるやうに、大きい行李を縛つた。

彰の方は、どし〳〵荷を出して仕舞ひ、そして彰も行つて仕舞つたあとで、彼女のトラクタアが來る事になれば、――と思ふと、彼女は突然そこの首巻をとつて首に巻きつけ、あわてゝ表の戸をあけ濕つた枯れ草の小みちを駈け出した。廣い運動場の横を駈けぬけつゝ、彼女の目に泪が湧き出た。空には小穴程の青味も無かつた。

郵便局へ駈け込むと、電話を申込んだ。祖母に電話で、トラクタアはどうした、といきなり怒鳴り度かつた。

足が震へるので、彼女は郵便局の表で蹲んでゐた。市外から、町を隔てた向ふの市外へかける電話だから、十五分位は待たねばならなかつた。廣い從貫道路のわきに、喰いついたやうなわびしい郵便局であつた。

彼女は、祖母に對し目茶苦茶に腹が立つた。電話をかけてみたら矢張り本當に別れて仕舞ふのか、もうどうにもならないのか、と云ひそうな假定が、彼女の怒りを亢めた。すると彼女は、電話口で目がくらむ程怒鳴るであらう。――

低い郵便局の屋根を越へた太陽が、彼女の背後から、だるまのやうにつくねた彼女の影を地面におとした。目の前を空車をひいた馬が、煙のやうな鼻息きを出しつゝ、時々通つた。馬は半丁程向ふの、國境になる大川の橋の上を、朝陽を浴びつゝ渡つた。

彼女の心にも、やがて落着きが出きた。ゆつたりと流れる川、動かせないガンとした山、そう云ふ景色に會ふ旅行なら、彼女を癒やして呉れそうに思へ、今夜の汽車で、彰の居ぬ土地へ旅び立つプランをたてた。あすからの身や心の置き場所をきめると、彼女はやゝ朗らかになれた。

電話口で、祖母は今朝七時には、トラクタアは此方を出てゐると云つた。

家の廣場へ引き返してみると、其處にすわつた荷馬車には、もう高々と積み込まれてゐた。その片脇に、も早オーバアを着て靴をはいて仕舞つた彰が、積み込みを看視してゐた。

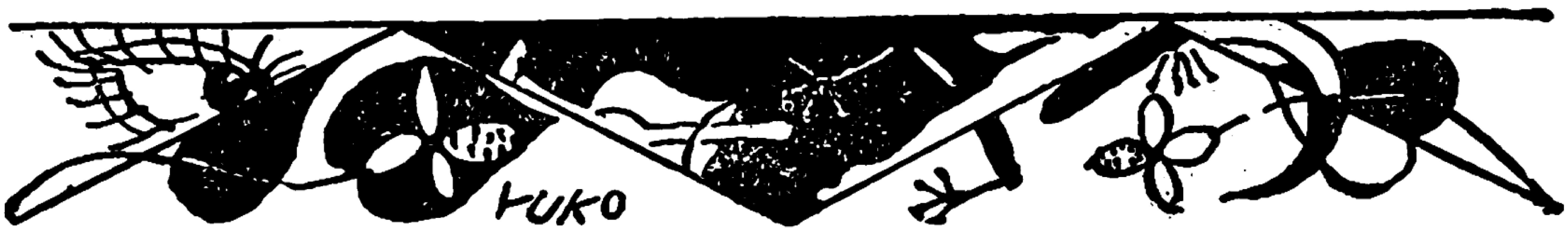
『どうしたんだ。』

『トラクタアがおそいから、電話かけて來ました。』彼女は立止らずに家へ入つた。

裏の椽には、それでもまだ彰の荷が大分殘つてゐた。

スリッパのまゝ二階へあがつてみると、紙屑と埃の埋つた中に、彼女の机と椅子一脚、本棚とが殘つてゐた。寢室の片隅に、彼女の

夜具丈けが、踏みぬいだ姿のまゝ敷放されてあるのをみると、彼女はいきなり、それに飛びつき、音をたてゝ一枚づつ疊んだ。
　トラクタアだ。と彰が下から聲をかけるので、窓へ寄つてみると廣場の果てにある農家の向ふあたりで、止つてゐるらしく、土を打つ爆音がきこへた。
　彼女は直ぐ、駈け出して行つた。
　椿の花のついた、靑い農家の垣根の前で、トラクタアはぬかるみにはまつてゐた。
　二人の助手が陷ち込んだ車輪の下に板をはさみ、掛聲と共に押しあげやうとしてゐた。
　彼女に、その板を押へて與れと云ひ、あとの助手たちは背中で押しあげる事にした。
　運轉臺の男の掛け聲と一緒に、皆は力を出した。彼女の肌着の下で汗がにぢんだ。首卷がとけて一方がぬかるみに屆いた。と、此の時、車輪は、くるりと前へ乘りあげた。
　子供が四五人、懷手してこれをみてゐた。彼女は手のよごれを叩いて落してゐた。するとその目の前に、彰が出て來た。
『どうしたんだ。』彼は手をポケットに差入れてゐた。
　彼女は陽をあびて、蜂の巣のやうによごれてゐる自分の頭の髮と近頃の衰弱と苦惱の上に、手入れを今朝は怠つてゐる自分の顏の、目もあてられぬ醜さを、その時彰の目色から、ぢり〱と意識させられた。
『僕もう荷物出來たんだ。』
『さう、ぢや何卒出かけて下さつていゝわ。』彼女は强迫觀念から云つた。
　彰は、彼女のあとについて、家の裏口迄來たが、
『ぢや、僕――、』と云ひつゝ立ち止つた。
『さう、――さよなら――。』云ひ捨て、彼女はついと家の中へ入つた。泪が目に突つかゝつて來た。
『事務所で、けふは急な用があるんで――。』
　彰は尙ほ云ひかけたが、彼女は家へ飛び込むなり、二階へかけあがつた。
　そこの椅子に身を打ちあて、そして思ひ切り聲をあげて泣くわけだつたのが、なぜか、いきなり腰をかけると、泪とは反對に、或る空虛な壓力がじり〱と胸を占めた。泪は一滴も出て來なかつた。
『二階にも荷物あるんですね。』ひよつこり此の時、助手があがつて來た。
『えゝ、これ丈け。』彼女は立ちあがり、道具を差し示しておいて、そのまゝ窓に身を寄せた。
　靑い農家の生垣の角を、今彰の茶色オーバアの姿が、脇向きつゝ曲つて消へるところだつた。



無生物がものを云ふ時

松本恵子

絞殺事件

赤坂溜池の電車通りに面して軒を並べてゐる商店の中に、K商會といふ罐詰の卸問屋がある。神戸に本店があつて、そこは支店である。店には代表者大川良治(五二)とその下に、田代六郎(二八)が働いてゐるだけで、他に店員はゐない。

八月三十一日午後二時から二時十五分の間に、大川は自身の手拭を以つて何者かに絞殺された。

最初死體を發見したのは田代である。彼は出先から歸つてくると、大川が心地よげに、椅子に凭りかゝつて、店の大金庫の前で假睡(うたゝね)をしてゐるのを見た。その日は特別蒸暑い日であつたので、月末の帳簿を調べてゐた大川は氷水を飲んで一息入れてゐるうちに、遂うと〳〵して了つたと見えて、頸に手拭をかけ氷水のコップを傍に置き、卓上には帳簿が擴げたまゝになり、インキ壺にペンが挿してあつた。その傍に手提金庫の蓋が開放しになつて、紙幣や、銀貨、銅貨などが見えてゐた。

田代は途中で腹痛を起してゐたので、夫等の光景をちらと見たまゝ急いで店を通り拔けて、長い廊下の端れにある便所へ行つた。それは丁度二時であつた。それから十分程して誰か便所の前を走り拔けて裏通りへ出てゆく氣配がしたので、しばらくして怪しみながら店へ戻つてくると、大川が椅子を枕にして仰向けに倒れてゐた。見ると手拭で頸部を絞められて顔が紫色になつてゐた。田代は慌てゝ大川の肩に手をかけて抱き起さうとしてゐるところへ、氷屋がコップを集めに來たので、「交番へいつて巡査を呼んで來て呉れ!」と叫んだ。

氷屋の陳述

大川さんは一時半頃、何處からかの歸途(かへり)に手前のところへお寄りになつて、「氷を一つ」と註文してゆかれました。これは毎度の事で、大川さんでも田代さんでも、よく通りしなに註文をしてゆかれるのです。それで私は直に「氷水(スイ)」を一つ御屆けしました。その時大川さんは手拭で汗をふきながら帳簿を調べてを



られました。そして、

「君、たゞの氷一つ位で足を運ばせては氣の毒だなア、生憎今日は田代が夕方でなくては歸らない……」と仰有いました。田代さんがゐるときつとアイスクリームの註文があるのです。あの方は氷は氣味が惡いといつて、召上らないのです。それから二時十五分過ごろに空いたコップを取りにゆくと、店の戸が閉つて內側から錠が下してあるのです。お留守かなと思つて中を見ると田代さんが大川さんの肩を掴んで椅子の上に押しつけてゐました。この暑いのに戸を閉め切つて變な事をしてゐるなと怪しみながらガラス戸を叩くと、田代さんが凄い形相をして飛んできて私に巡査を呼んで來ひと早口に仰有いました。私は慌てゝ岡持を投げ出して四ッ角の交番へ馳つていつたのです。

田代はその場から有力な容疑者として擧げられた。

警察で田代を犯人と目した理由

(一)現場の手提金庫の中にあつた二十何圓かの現金がそのまま遺つてゐる故物取の所業ではない。殺人の動機は怨恨である。ところが田代は大川からその月限り解雇を申渡されてゐる。而も表面は業務縮少といふのであるが、實は大川が自分の甥を店へ入れる爲なので、田代はその翌日から失職しなければならなかつた。これは表面に現はれてゐる有力な動機である。

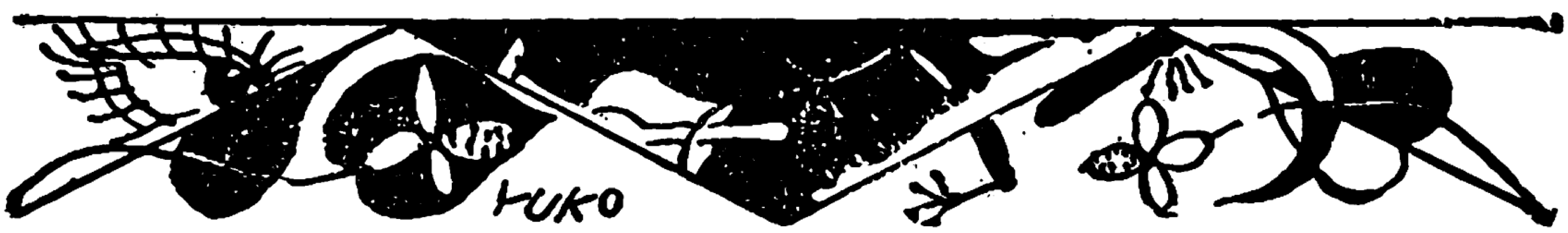
(二)彼は前述の如く十數分間、便所へ行つてゐる間に兇行があつたといつてゐるが、彼が便所にゐた事は誰も證明するものがない。又その日の二時には日本橋の某食料品店へ行く事になつてゐたにも拘らず、彼はその約束を破棄してその時刻に店へ戻つた。それに就いて彼は腹痛を理由にしてゐるが、彼が行つてゐた宇田川町の齋藤商店から、溜池へ歸る途中に共同便所はいくらもあるのに、何故わざ／＼店まで戻つて來たかといふ事が不審とされた。

(三)彼は二時に店へ戻つたと述べてゐるが、果してそれが事實か誰も知らない。事によつたら一時半、即ち氷屋が氷水を持つて來て後間もなく戻つて來て、大川と何か云ひ爭ひでもしてこの兇行を演じたのかも知れない。

(四)彼は店へ歸つた時に、大川が現金を出したまゝ晝寢をしてゐたので、無用心だと思つて入口の戸を閉ぢかけたが、すつかり閉めて了つては風通しが惡くて暑いからと思ひかへして、半分閉めかけたまゝにして、奧へ行つたのに歸つてきて見ると內部から錠が下してあつたと陳述してゐるが、これは彼ひとりの辯解で他に證明する者はない。兎に角氷屋が發見した時は內側から錠が下りて、田代が大川の死骸に手を掛てゐたのである

斯うして四圍の狀況が悉く田代に指をさしてゐる以上、田代が如何に頑強に無罪を云ひ張つたところで、彼が確に犯人でない事を裏書する者がなければ、どうにも遁れる途がない。他に動かすべからざる犯人の出ない限り、田代はこの嫌疑を負はねばならぬ。

警察では田代が解雇されるに就いて大川に怨恨を抱き、もう一つは月末で金庫に尠くとも五百圓の現金が入つてゐるのを知つてゐて不意に店へ歸つて來て、晝寢をしてゐた大川の頸を絞めて遺恨を晴らし、死骸を何處かへ隱匿して、店の金を攫つて



逃走する計畫であつた所、運悪く氷屋に發見されたので仕方なしに交番へ訴へ、便所云々の口實を作つたものと認定してゐる

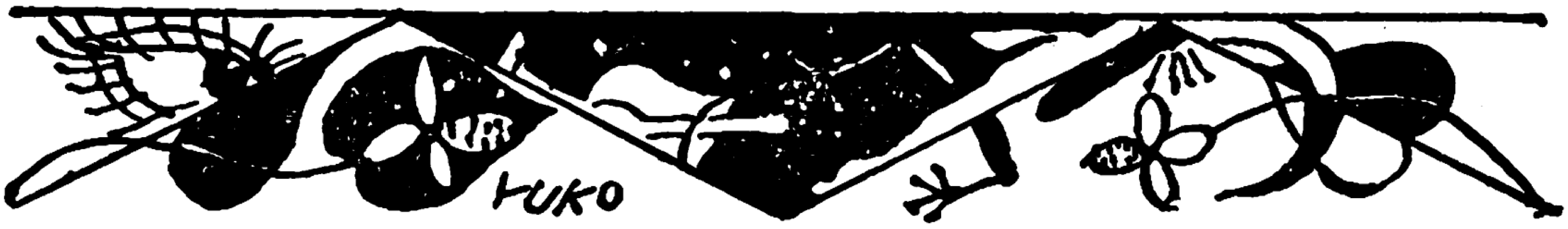
田代の妻より辯護士某に送りたる手記

私はこれで三度警視廳に召喚されて厳しい取調を受けました。田代が殺人犯人として拘引された事は、私をどんなに驚き悲しませたかといふ事は今更こゝに述べる必要はありません。それよりも私は如何にして良夫の無罪を證據立てたらいゝかといふ事に腐心しました。愛する夫を救ふ爲に、私は自分のもつ限りの智恵を絞つて考へました。先づ私は警察では、田代を犯人ときめて四圍の狀況を見てゐますから、私は最初から夫が犯人でないとして、この犯罪全證を冷やかに考察して見ました。

成程、前にあげた四個條を讀みますと、これ程明白な犯罪はありません。これではどうしても田代が犯人にきまつてゐます。此中で唯一つ田代を救ひ得べき途は、警察側の薄弱な點、田代が二時に店へ歸つて、二時十五分まで便所に行つてゐたといふ事實を證明する事です。どうしてもその十五分間、田代が大川さんと一緒にゐなかつたといふ事に就いて誰か證人を出さなければなりません。

私は最初警察に喚ばれて取調を受けた歸途に、夜中でしたが現場を見せて貰ひました。店は犯行發覺後、何一つ手がつけてないといふ事でした。私は旦刑事の監視の下に、陰慘な感じのする部屋の中央に立つて、部屋の中のあらゆる無生物に向つて呼びかけました。椅子、卓子、金庫、壁、ガラス戸、棚に並んだ見本品、牀につもつた塵埃、天井の蜘蛛の巣、それ等の無生物だけが、誰が眞犯人であるかを知つてゐるのです。私が三度悲痛な眼をあげて夫れ等の名を見廻した時、竟に私の叫びに應へて與れたものがありました。それは土足に踏まれた一枚の引札です。福寶館の活動寫眞の廣告ビラです。私は旦刑事の隙を見て、その引札を拾ひました。

私は土足に蹂躙られた引札を見た時、それは田代が店へ歸つて後に配られたものだと思ひました。何故なら田代は大變に几帳面な人で、どんな詰らない廣告ビラでも、自分の店の中に落ちてゐた場合には、決してそれを踏みつけて入る人ではありません。必ず拾つて卓子の上に置くか、折疊んで自分のポケットへしまふか、或は丸めて屑籠へ棄てます。日頃のさうした氣質を知つてゐる私は、その引札がきつと何かを私に語つてくれると考へたのです。それで私は翌朝起きぬけに溜池へ出かけていつて近所の店で聞合せましたところがそれは二時少し過ぎに配られたものと判明しました。更に私は福寶館の宣傳係りに訊ねてそのビラ撒を依頼した先を敎へて貰ひ、博信社といふその店を訪ねて、ビラを撒いて步いた老人に會ひました。老人はよく記憶えてゐました。ビラを配つた時に店のガラス戸が閉つてゐたから、戸の隙間から押込んだといひました。その答に私は胸を躍らせながら、もしやして其時、店の中を覗いて見なかつたかどうかを訊ねて見ました。店は少し薄暗いので、鳥渡前を通りかゝつた位ではよく見えませんが、ガラス戸に顔を寄せればはつきりと見えるのです。老人は暑いので何處でも戸が開放つてゐるのに、その一軒だけ閉つてゐたのでビラを差込みながら中を覗いたら、男が椅子にふんぞり返つて、前に氷のコップを



置いて晝寢をしてゐたと申しました。そして正面の壁にかゝつてゐた時計が、きつかり二時十分を指してゐたと答へました。どうしてそんな事を記憶してゐたかといふと、人が働いてゐる眞晝間、呑氣らしく晝寢などしてゐるのを鳥渡羨しく思つたのと、もう一つはその男が大變に行儀の惡い寢姿をしてゐたからだと申しました。

次に私は氷屋の主人に會つて昨日の出來事をもう一度精しくきゝました。氷屋は最初店の前を通り過ぎてそれから五六軒先の糸屋と自動車屋へ氷水の空コップを集めにゆき、歸途に店へ寄つてあの騷ぎを發見したのださうです。私は氷屋が何故店へ寄るのを後廻しにしたのか訊ねて見ました。氷屋のいふのでは店の前を通つたら大川さんが氣持よささうに眠つてゐたから起すのは氣の毒と思つて先に糸屋の方へいつたのだと申しました。そこで隙さず、最初に通つた時の店の模様をきゝました。第一に時間の事です。氷屋はラジオの演藝放送を聞いた後で、一休みして二時鳥渡過ぎ位に家を出たと申しました。氷屋から店まで普通に歩いて二三分でゆけます。そして其時は戸が半分閉めかけてあつたといふのです夫から大川さんは頸に手拭を垂らして背後の金庫に頭を凭らせて樂さうな恰好で眠つてゐたといひました。尙其時は決して何の異狀もなかつたといふ事を附加へて語りました。詰り氷屋が一時半に氷水を持つていつた時には大川さんは机に向つて仕事をしてゐたのです。夫から二時二分或は三分過ぎに前を通つた時、戸は半ば閉つてゐて、大川さんは金庫に凭りかゝつて假睡をしてゐたのです。其時はきつと田代が歸つてきて奥の便所に入つてゐたに違ひありません。そして老人がビラを配つた時は二時十分で旣に兇行のあつた後で老人が眠つてゐると思つた大川さんはもう死骸になつてゐたのです。恐らく田代が便所から戻つてきたのはビラ撒きの老人と殆ど入違ひ位だつたのでせう。そこへ糸屋から歸りしなの氷屋がきたのです。これで稍田代に辯護の余地が與へられました

若し田代が犯人で、內側から入口の戸に錠を下した程なら、何故窓かけを下して往來から店の中を覗かれないやうにしなかつたのでせう？　夫から氷屋が最初通つた時、大川さんはまだ生きてゐてビラ撒きが通つた時には死んでゐたとすれば、二時三分後から二時十分までの間に兇行を演じたものが、次に氷屋がくる二時十五分まで尙店にまご〱してゐる筈はありません。だから田代は決して犯人ではありません。

次ぎに田代が果して便所へいつたかどうかといふ事を證明する爲に、私は二つの事を提出します。田代は非常に神經質で決して他所の便所へはゆけない人です。況して共同便所へなど入る筈はありません。恐らく事情が許せば用便を足す爲に、大久保の自宅まで歸つてきたかも知れません。けれどもそんな馬鹿な事も出來ず、餘儀なく店へ戻つたのでせう。前日よそで出された麥湯が少し酸味があつたから、きつと腐敗つてゐたのだと神經を病んでゐましたから、腸を毀したものと見えます。それで出先から店へ歸つたのなら、何處かで落し紙を買つた筈です。幾度も繰返して申しました通り田代は潔癖で消毒紙でなくては決して使用しない人です。一帖づつロール紙に包んで賣つてゐる消毒櫻紙を何處かで購めたに違ひありませんから、田代が何處で買つたか訊ねてその店を調べれば大凡田代が店へ歸つた時



間も判明するでせう。

もう一つ田代が便所へ入つたかどうかは店の便所の窓を檢べて貰へば分ります。あの人はどんな暑い時でも、戸を全部閉切つて了ふ癖をもつてゐます。近頃のやうに暑い時節には何處でも便所の窓は上下開けてあるのが普通ですが、若し田代が店の便所へ入つたのなら、後で入つた人はきつと窓が全部閉つてゐたのに氣附いたでせう。

偖、最後に私はいくら田代が二時に店へ戻つた事を知る人がないとしても廣い世の中に誰か一人位はありさうなものだと考へました。それでもう一度店の前に立つて四邊を見廻してゐる時、ふと筋向うの足袋屋の店に小僧が五六人、表通りに向つて胡坐をかいてせつせと針を動かしてゐるのに目がつきました。私は好奇心の強い小僧達が六人もゐたら、其中の誰か一人位はK商會に田代が入る姿を見たかも知れないと思つたのです。それで早速店へいつて店の小僧達に必要な質問をしました。果してその中の一人が二時頃、黒い上衣に白ズボンを穿いた人が店へ入つたといひました。するともう一人が、黒い上衣ではない上下とも白い洋服だといふのです。夫から甲はその男が麥稈帽子を冠つてゐたといひ、乙は無帽であつたといふのです。私は二人の話から甲少年の見たのと、乙少年の見たのとは別人だと推定しました。即ち甲少年が見た黒の上衣に白ズボンを穿いて麥稈帽子を冠つた男は田代で、其後から白シヤツに白ズボン、そして帽子を冠らない男が店へ入つたのです。

これだけの材料を得て私は斯ういふ事を推定しました。それは田代が店へ戻つて現金の入つた手提金庫を出し放しにしてあるのに、表戸をまる開けにしておいては無用心だと思つて戸を半ば閉ぢて便所へいつた後で氷屋が店の前を通り、其次ぎに一人の浮浪人がぶら／＼やつてきて店の中を覗き、大川さんが眠つてゐるのを見て手提金庫に誘惑され、ぶら／＼と中へ入つて現金に手をかけようとした時、大川さんは眼を覺したのです。それで浮浪人は驚きの餘り、慌てゝ大川さんの頸にかゝつてゐた手拭を掴んで締めて了つたのです。それで兇行後初めて吾に返り、四邊を見廻すと、裏へ抜ける通路が目につく、一方往來には通行人があるので、表へ出る勇氣がなく、急いで戸を閉じて内から錠を下して裏口から逃走したものです。便所の中で田代がきいたのはその男の足音だつたのです。夫から間もなくビラ撒きの老人が戸の隙間からビラを差込んで、大川さんが椅子を枕に倒れてゐる姿を見て通り、その後で田代が便所から戻つてきて死體を發見したのです。

私が蒐めましたこれだけの材料を基に何卒良夫の寃罪をお雪ぎ下さいますやうに切にお願ひ甲上げます。

尚、同封致しました大阪の伯父からの手紙にございます通り田代は伯父の關係してをります大阪の鑄物會社へ入社する事に決定してをります故、田代はK商會を解雇されたからといつて決して生活に困るやうな心配はないのでございます。從つて大川さんに遺恨をもつ理由もございません。この事も御參考まで申添えておきます。

夫から一週間後、嫌疑の霽れた田代夫妻は大久保の家を畳んで、大阪へ旅立つていつた。(完)



ゆきの

劔羽

時雨

一

その日も暮れがた、下谷お成道を七軒町にちよつとはいつたとつつきの、鼈甲屋の店前で、主人は鼈甲仲買から仕入れる甲をしきりと鑑別してゐたが、店前を通る入亂れた通行人と、大通りから流れてくる喧騒を耳にして舌打ちをした。

「長崎屋さん、鼈甲を收つておくんなさい。もちつとほしいのだが、また亂暴者だ。」

膝の上や傍にとりのけてあつた甲を、周章だしく長崎屋に示すと、荷物を取りまとめる手傳ひまでして、大きな鼈甲ぶちの老眼鏡をはづした。

「全く、どうも商業も出來ない。」

仲買の長崎屋はそのそくさした中でも、主人がとりのけた甲を覗き込んで、腰から矢當をぬいて、覺帳に記入した。

「商業にならないのはお互ひだよ、屋敷方はすつかり上つたりだからな。」

「泣かされますなあ。一體、これあ、どうなるんでせう。」

「當分、髮かざりなんてもなあ、用のない時勢が來たんだな。だから、仕入れるには入れるが、まあ、はけはしないね。」

「でもね、お宅だから買つてくださるんですよ。正直のはなし、江戸中はおろか、京阪も、ガッタリです。」

「商業氣冥利でね、だからといつて手も空しくしてゐられないし、それに、なんといつても店ぢや廓がひかへてゐるから。」

「あすこはまた景氣が好いさうですね。」

「うん、だが、御代參歸りのお誂へがすつかりなくなつちやつた。」

「何しろから物騒では、お花見もなにも、さんざんです。」

職人の一人は、細工場でチャンカラ〳〵音をたてながら口をだした。長崎屋は空を見いみい、

「人はだいぶ出たが、晩まで空がもてばよござんすが――」

その時だつた。歩兵だ、歩兵だ、――錦裝だと罵る聲が擧つて、先刻の喧騒がまた盛りあがつた。

「また厭がらせをやつてやあがる、人困らせな。」



仲買商人は憎々しく罵つたが、美しい娘を引摺るやうに引張つてくる女達を見ると、

「お孃さん、お孃さん、お孃さん――早くこつちへ。」

と手招ぎして暖簾のかげに娘の一行を匿した。

「ああ好い鹽梅だつた。亂暴者はあつちへいつてしまつた。然し、なんだねえ旦那、上野の山下で、毎日あんな騷ぎをやられても手もだせねえとは、薩長の芋ほりどものさばり方はともかくとしてよ、平日威張りやあがる兩刀差はなにしてやがるんだと言ひてえや、ねえ親だつたらありやあしねえ。」

オットといつて止めた。工合の惡い、照れた顏を、頭から撫でおろして頸をつまみ、とつてつけたやうな笑ひが半分ベソになつた。

粹な一本ざしで、小褄をつまんだ素足の雪駄――すこしく下眼に、ぴつたりと鼈甲仲買人の前に立つて冷たく見おろしてゐる。青髯のあとがほんのりと、黒八丈をほぐしたやうな髮の毛で――グッと冷たく見詰めておいて、眞白な齒を見せて冷笑した。

一本獨鈷の博多の帶から鞘ごとぬいて、雪駄をぬぎすてると、店の奥へ、細工場へはいつて、いきなり三升の手拭で片襷。燒きを入れてあるのを試めすと、ジュッと水に入れて、器用にチャンチャラ、ラ、ラ、と道具に打ちをあてた。

「半さん、こんだのは、何處の誰女の思ひの種になるのです。」

氣の利いた職人が、機を見て敏活に口を入れた。

「聞いてどうする。」

「どうもかうもありやあしません、そつと耳打ちをして、ウイ奴とお褒めに預からうつてんで。」

「止めてくれ、おらあ、この頃ひとりだ。」

「何をつて、言ひたうござんすよ、ひとりがきいて呆れる。」

「ばか言へ、家のひとりぢやねえんだ。たつた一人に止めをさしてゐやすといふのよ、わからねえ奴だな。…の尻でもたたきや。」

「おおきに！　へげたれ――さんで」

拙な上方辯がみんなを笑はせた。仲買人長崎屋はヘドモドしてゐたが、手をもみすつて、しきりに臺へ額をすりつけた。亭主も同じやうに、膝がしらから幾度も手を辷らせ、振子のやうに頭をあげたりさげたりした。

「分つた、分つた。」

半さんと職人によばれた、一本差しの粹な男は煩はしげに、早口に、汚れたものを目から拭くやうに言つた。

「旦那、困らせちやいけねえ、この通り、お宅の職人だ。」

へへえと言つて、二人は改めてうやうやしく叩頭した。半さんは誰にいふともなく言ひだした。

「糞律氣にあつちやかなはねえ。この御時勢に貴樣はなアときやが

つた。斬死しろといふんだ。おらあ、なんのために鮪のやうにブッブッやられるのか、譯がわからねえから嫌だと斷はつたら勘當だ。俺あもう武士でねえんだからサバサバしたものだが、その伯父貴のところへよ、例の怖らしい浪人衆が押込んだのだ。――なあ、みんなきいてくれ、糞律氣にあつちやかなはねえといふのはここなんだ。押込みの中にも優しいのがゐて、鼓の秘曲をその頑固爺が、がらにもなく傳へてゐると知つて、それを聞かせたら命を救はふと言つてきかせたのだ。無論一子相傳ものだ、伯父は死にたくはないんだ、自分が死んでしまへば、その秘曲が絶てしまふので、どうにかして殘したいのだが、夷の耳に入れて曲を汚したくないと、强情はつてお陀佛よ。」

　彼は肩を張つて皮肉に唇で笑つた。

「ところで、鼈甲屋さん、かへんなすつてもよござんすぜ。」

長崎屋はもひとつ背中を丸めて額を疊にすりつけた。

　この時でないとといふやうに暖簾のかげに、かくしてもらつた女たちは出て來た。年増のなまめかしいのがお齒黒を見せて、紅の口で輕く長崎屋に禮をのべた。

「おかげさんでまあ、漸くあの人たちの眼をのがれましたよ、とりやあまあ、ほんのお禮のしるしばかりでござんすが……」

　辭儀するのを無理に押附けて――彼女は能辯だつた。

「なにしろ此お娘が怖いもの知らずで、平氣でそばへよつてゆくのだから困つちまひましたあね。でもまあ、おかげさまで。」

　小腰をかがめてにつこりした。町方の堅氣にはない姿體だつた。

「それにね、丁度鼈甲屋さんでようござんしたよ、このお娘の櫛を、人込みでおとしたので、お店さきをおかりしたお禮に、一枚お買ひもふしてゆくことにしましたから。」

　彼女は、長崎屋の顏もたて、主人へも好意を見せた。仲買人は思ひがけない首尾にホクホクして歸つていつた。

　桐の重ね箱に、黑びらうどで張つた中に、鼈甲細工の差櫛の種々なのがあつた。彼女が一々取上げては娘に差示したが、娘の見る眼はそこにはなかつた。細工場の中の男にばかり吸寄られてゐる。

「半さん――」

　鐵火に、おそろしく投やりに、年増女は彼に呼びかけた。娘の視線を嘲り追つて、白刀のような光りを、きれ長な目尻から、娘の横顏にぶつつけながら――

「半さん。」

「おい！」

　馴れきつた呼びかけに、馴れきつた返事だ。二人は眼をあはすと薄く笑つた。

「このごろは？」

「昨夜だけごぶさたよ、今日は持つてつてやる約束のものがあるので、とりに來たんだ。」

「迷はせちやいけませんよ。」

　彼女はチラリと冷たい眼を自分の連れに差した。男はそんな事はとりあはずに、自分だけの事にいつた。

「そんなんぢやないんだ。女房となると鼻につくやつさ。」

　だが彼が手にして、透して見てゐる櫛の素張らしさ――

「めつたにない出來でござんせう。古いけれど、水もたれさうだつて、それよりほか言ひやうがありません。手前でも惚れぐ\しちや

つたので――花魁がおさしになつたらすばらしいこつてせうね。」
「うん！」
めつたに見せない頷きようだつた。
「まあ、それが花魁のですか？　ちよいと拜見させて。」
「あれの手に渡すまでは、他の女の手にやあ觸れさせたくないんだが――なんて、洒落本のおつな兄さんならいふんだらうが、さあさあごらうじろだ。代價は後刻からだが、褒美はさきだ、松公手をだしな。他の者にもよくしてくんねえ。」
懷中の紙入れから職人の手へ一分金が幾個かおかれた。
「有難うございます、これで花見が出來ます。」
職人たちはよろこんだ。が、半さんはあはてた。



「そいつはいけない、おい、お咲さん。」
お咲――年増はニヤついて見てゐるだけで、口だけはお愛想にうごかした。
「だめですよ、半さん。このお娘ときたら、とても強いんだから、思ひ込んだらききやあしませんよ。」
「なんだ、お前までそんな事いつちやこまる。歯へ油がついたら持つてかれやしねえ、待ちきつてるのだから――困るなあ。」
當惑しきつた彼に、お咲は猶いやがらせをいつた。
「困るなあつて、これどころぢやありませんよ、今に、もつと困ることがありますから。」
「ぢようだんを言はないで――」
お咲が取りあはぬので、彼の手は、鼈甲の櫛を前髪にささうとする娘の手をおさへなければならなかつた。
咲亂れた牡丹の花がいま散るまぎはの如く、娘はみちこぼれる濃やかさで、あでやかに解けるやうに笑ひかけた。廿歳を越えた大娘が、派手をつくした振袖で、蝶の羽風にも花粉をこぼす牡丹花の嬌態だつた。
「およしなさいお春さん、そりやあ小夜衣花魁のですよ。櫛も、その男も――」
お咲は自分の嫉妬もこめて、痛くいつた。
「あなたのものになんかなりつこはない。」
お咲への反感がムラ〱と來て男は捨るやうに言ひすてた。
「お前さんとこの娘さんなら、小夜衣から進上する。」
お春の胸に押しつけると、お春はその手を振りはらつて、グッと櫛を睨み詰めてゐたが、店さきの小石を、めがけて投げつけた。
アッ！
先刻つから、美しい娘はものいはず、お咲が稍嘲笑したしぶりで、手眞似をまぜて話しかけてゐるのを、仕事の手をとめてぼんやり眺めてゐた店のものたちは、思はず押つぶした叫びを同音にあげた。
「なにしやがるんだ。」

職人の松さん、自分ながら滿足した仕上げの品を、誂へ主の前で微塵にされたのでおさへきれない疳癪が仕事場から飛上らせた。

「お孃さん、その品は安いものではございませんよ、十三兩二分で御座いますからな。」

主人は吐息と、兩手をひらいて指で三本を示した。

お春は不思議な聲で、咽喉で笑つた。懷紙をとりだすとその上へ、一兩小判をザラザラと並べて、ついと立つた。

「金ですむと思やがるのか、こん畜生。」

松さんはよつぽど腹に据かねてゐる。

「まあ好い、まあ好い。」

グッときたのは同じだつたが、半さんは通な人でとほつた不自由さに納まつてゐなければならない。彼は苦笑した。

「廓だけの中に育つたものだ、かんべんしてやれ。」

「浮世知らずの我まま一ぱい。親たちが不便がるので怖いものなしなんだから、どうにもなりやあしいせん。」

お咲はちらと廓言葉を出して、業々しく眉をひそめて見せた。

「歩兵もこはくなけりや、お旗本の殿さまにも此通り、此娘は樂な肉體をもちあつかつて、いつそ斬られて見たいのかもしれませんよ。」

「なあにお咲さん、松公にや氣の毒だけれど、どうせ納りのつかなくなつた櫛だ、さうやつちやつた方が好い。だが、好い度胸だ、不具には惜しい。」

お春がじれて手さきで物を言つてゐるのを讀んで、お咲は笑ひだした。

「まあ好かねえ、半さん、此娘はお前さんに思召があるよ、櫛をもらうと緣がきれるからいやだとさ。おほほほ、樓のおいらんのかんか、猶いやだと――そのくせ、お前さんはおいらんの情夫なのにね、その事はいはないからいい。」

「色氣がついてやがらあ。」

松さんは口汚なく罵しつた。他の職人や店の者も、半さんへのお追從に、その尾についた。

「可哀さうなは、この子でございか。」

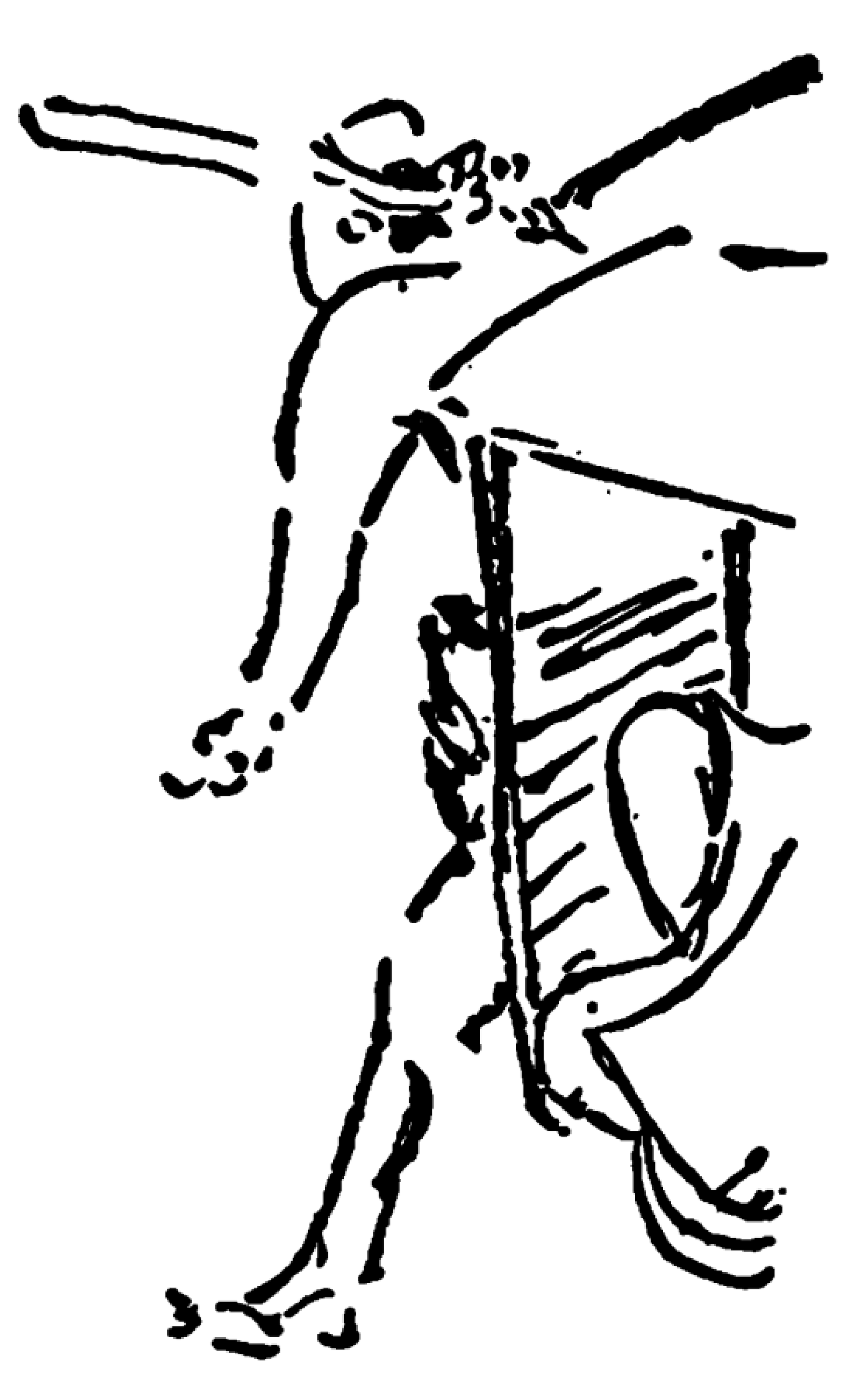
「親の因果が子に報ひ……」

だが半さんは腕を組んで凝とお春を見つめてゐた。

「こりや困つた雨になつてしまつた。お春さんお待ちなさいよ、濡れますよ。」

お咲のとめるのもきかずにお春は半さんを振りかへりながら店から出ていつた。

店の者はあはてて暖簾をとりいれる。辻駕籠を二丁つらせて、お春の樓の禿頭が來た。



「お咲さんどうも心配かけました。なんせ相手が悪いのでね。」
「駕籠が來て丁度よかつた。お春さんさあおのんなさい。——なんだつて？　あちきが歩いて半さんを乘せろつて？　お春さん、小夜衣さんの間夫をとつちやいけませんよ。」
「半さんがお出なさつてるんですか？」
髷頭は鼈甲屋の店を覗いた。
「丁度いい、雁鍋で傘をかりて來ましたからおいて行きませう。」
「さうしてくれ。」
「どうせ丁へおいでなさゐのでござんせう、そこらまでお出なさるうちにや、駕籠を拾つてよこします。」
「半さん、待つてますよ」。
お咲は駕籠の垂れをおろした。潮時の廓へゆく駕籠は、女子を乘せても景氣がいい、灯ともしごろの山下を、小雨に濡れて、柳をくぐつて、乘せた花の上へ、櫻の花片までのせて、ホイ、ハ、と好い聲で飛んで行く。
鼈甲屋の店のものの羨ましさうな顔を背にして、肩にかけた白張傘、半太郎もブラリと店を出た。片手を懐にして——

二

丁字屋の小夜衣が病ひついたのは葉櫻のころだつた。
いかに遊里でも、將軍家が御上洛になつたの、伏見がどうの、鳥羽がどうの、彰義隊がいよ〳〵上野の山内へ籠るのといふ噂が人の心をゆすると、おなじ遊びにくるものでも、明日を約束出來ない氣分の武家たちは、勢ひ金のきれはなれもよし、所作も彼等の恐怖と好奇心を突つついた。
「半さん、あなたは上野ですか？」
それは誰しもがいふ、彼等にすれば日常のお世辭だが、半さんの眉間の立皺は深く、頬はしげに、
「おらあ地廻りの町人だ。」
と返事がすげない。下根の者はふと見下げたら法圖がないから、
「半さんはおいらんに可愛がられてゐればそれで好いんでしよ。」
のうちはよいが、
「あんなにも命がほしいものかな、女の尻へへばりついてやがる。」
「今まで肩で風えきりやがつた直參面を、草鞋で蹴つてくれたいの」
と罵つた。
「おい〳〵、あの半的ぢやねえか、昨宵三の輪で、三人の浪人につかまつてた奴が、刀をぬいて、這ひつくばつて謝てたさうだが、その醜體つたらなかつたといふが。」とか、小夜衣が聞く影口は、彼女をとう〳〵病氣にさせてしまつた。
「寮へいつて、ゆつくり氣保養をしたら。」
といつてくれる樓主の言葉はわたりに舟だつた。人目を避けて——丁字屋のお職、小夜衣は仲の町一の全盛、たま〳〵の出保養で、吉原は月の夜が曇つたやうなと惜がられながら、情夫のためには、さびしい寮の明け暮れが心安かつた。
あけわたされた寮の住居に、のんびりと身も心も朗々したのはほんの一日か二日だつた。丁字屋の一人娘のお春が來てぴつたりと離れない。見舞ひに來てくれたものと介譯してあしらつてゐると、その日からお春も寮住居。
知らないのは小夜衣ばかり、他のものはみんな知りきつてゐる。あの多辯なお咲が、櫛の一件をいはないではおかなかつたから——

「お春さん、禿をそんなにいぢめてはいけません。」
もしお春が、禿の三夜をつかまへて、生皮をむいた蛙を、、、おかつぱの中剃りにのせたりして嫌がらせてゐる時に、誰かが、さうでもいはふものならば、お春は一層おもしろがつて、蛇をさがしだして禿の頸にまきかねなかつた。
お春がそんな悪戯をするのも、嫉妬からだつた。お春は小夜衣の絹糸のやうに細い、ゆきとゞいた氣持ちを知つてゐた。禿がお小用まで粗そうしてしまうほど嫌がる悲鳴が、三層倍も小夜衣の心をふるへさせる効果を知つてゐる。彼女の心はニツコリする。

徂春の雨がしと〱と、またしても彼女にやるせない悶えを教へる。花街に育つた廿二の彼女は、娘といふには生育ちすぎてゐる。彼女の不具は、僅に舌が釣るだけだつた。幼少のころのはげしい疳の病が、舌を釣つてしまつただけで、何處もかもがはちきれるほど健康で氣質も勝つてゐた。養子をする話も出たが、不具と財產一さいを釣りかへにするやうな言葉を、仲人がふと言つたので十七の時をの彼女がきかなかつた。
彼女は、傾城買ひの男をあんまり見聞きしすぎてゐた。婿に來てもらうのに美しい十七の自分と、この家の財產とを、すべて捧げて、九拜しなければならない譯はないと思つた。廿二の今日もその信條はかはらない。だが、ただ戀しい、なんとなく羨ましい。さほどでもない女が、舌が動いてものが言へるといふだけで、男たちにわい〱言はれてゐるではないか——その女たちのいつてる言葉といふのがなんだ、どんな價値があるのだ。
——おまはんに惚れたよ——こん畜生、迷はせるよ——ではないか。
お春はジリ〱した。たま〱流し目をつかうものは、慾と我のはつた、見るのも嫌な亡者たちで、お齒黒溝へでもたたきこんでやりたかつた。
お春は美しい——丁字屋に長く通ふ客で、ふとお春を見たものが、妓の前でお春が美しいといふと、妓たちは唇を曲げていつた。
「啞ですよ。」
微妙な女氣から遊女たちは、譬自身の方が、容貌はまさつてゐると信じても、彼女の處女美がもつ誇り强さをどうする事も出來なかつた。廓中の妓が、みんな自分の好きな男のために、とつておきたかつた何かしらを、お春だけが持つてゐるやうに思へて、羨ましさが憎ませたのだつた。
丁字屋の抱への妓のところへ通つてくる男の中に十八のお春に憎くない男があつた。中國邊の藩士だといつてゐたが、その頃のことゆゑそれが本當の事かどうかはわからなかつた。二十二三の嫌味のない男だつた。あんまり磨いてゐない底に光つたものをもつ人品が、ちらと摺れちがつた瞬間からお春をとらへた。男も、お春を見ると、こんな場所に入り込むことを許婚に咎められでもしたやうにギクとして面を染めた。
——初心な方！
お春は思はずニコリとした。富有に生れて、心からほしくてならないといふやうなものを知らない彼女は、心から滿ちたりたよろこびを知らなかつたが、その男を見て、ニコリとした瞬間に、今まで味はない氣持ちを經驗した。



戀しい――たゞそれだけではない。お春が十八のその日までに見た異性の顔には、情慾か物慾かの二種類の、そのどつちかしらの色を多く泛べた賤しげなものばかりだつた。それが、且て見も知らぬ輝きを、その男の顔に見てお春は打たれたのだつた。

お春はその男に逢ひたいために、幾度か摺れちがつた圍ひの露路を通つて見た。誰にも言へない智惠をしぼつて、その時男についてゐた禿のきくのを手なづけた。

禿のきくのは賢しげにいつた。

「あのお客さんはもう來やしやりません。世の中が騷がしいのにこんな場所へばかり來てゐては悪いと――」

それからまた、お菓子をもらつて考へ〳〵いつた。

「をしは綺麗だの、と、あのお客さんがいつたら……」

九歳のきくのは、目をクルクルとさせて、お春の顔を見たが、食べかけた蒸菓子を下において、兩手で口へふたをしてしまつた。お春にその手を離されると、

「ああさうだ、屛風の繪の鴛鴦はほんとに美しいと。」

賢しくいつて、落附かないお尻をモヂモヂさせた。

そのきくのが、二月三月たつてから、お春の顔を見ると何か言ひかけたさうにしてゐたが、内所へ使ひにきたついでに、お春が自分の居間に呼ぶと、

「あの人は、京都で斬られた。」

と、誰から聞いたのか敎へていつた。

お春はどかんと足の下の地が落ちたやうに思つた。一切が暗くなつて、一人娘には目のない兩親が、なんだかだと案じるほど人を厭つた。

やつと見つけた、たつた一人の男だのに――

お春の青春にすき裂れがして、なんとなく冷たく風も洩つた。

あの人も厭やこの人もいや。

なんだ小生意氣な、不具のくせに――資産と容貌を鼻にかけやあがるな！　父親の生てるうちだけだ、いまに見や、つまらないものに×まれて、田舎女郎にでも叩きうられてしまやあがるだらう。

ふられたのが――婿の志願者たちがそんな風に言ひ觸した。

お春の戀心こそ一時死んだが、芽立ち時に霜にあつた若葉のやうなもので、再び芽をふく日は來た。稀なほど壯健な肉體が、彼女の皮膚に四邊のなごやかな空氣を吸はせずにはおかなかつた。お春はもてあました日をおくつた。なにもかにも飽きて、ぼんやりしてゐる晝日中、虻がうなるのも二階のささめきかときいた。

色慾煩惱のこの廓、女、女、女と、小判が鉢巻をして飛んでくる。逢ひたい見たいで無理心中も絶えないに、金は山と盛つて、資産は廓

一番、店には全盛の妓を揃へて、しかもその跡取り娘の容貌は、親の慾目ばかりでなく、大名にも頭をさげぬ松の位の太夫たちを、目下に見た思ひあがり。その娘がいつまでも閨さびしくして、やがて萬年新造にならうとしてゐる——丁字屋夫婦は娘が不愍でならなかつた。人の娘の血を絞つて食つてゐる惡商業の祟りと思はないではゐられなかつた。このごろは、あけすけにふてゝきた不具娘の態度に、途方にくれて夫婦が額をあつめて嘆息することも珍らしくはない。

三

山吹が小雨に濡れてしづるる朝、濡れ緣で振袖新造の綾衣が、鶯の餌を摺つてゐた。

半次郎はまだ寢たまゝで人情本に讀みふけつてゐた。

窓の外の、蓮の葉がまだ茶卓ほどの葉を浮かせたばかりの池では蛙が鳴きやんで、魚が跳た。

「半さん、鯉がはねいした。」

綾衣はもの珍らしさうに叫んだ。

「後架でか？　きたねえな。」

半さんは時々そんな嫌がらせを平氣でいふ。

「おいらんは、なんて嫌な人を間夫にしいすのか。わからねえ。」

綾衣はむきになつて怒つた。

「わざと汚ない事ばかりお言ひなんす。」

「なんの、お前が汚ねえといいえる義理か、鶯の糞を大事にして、顏まで磨くぢやねえか、だからよ、さうしておまんまの世話までわすれずにしてやるのだらう。俺の朝飯なんぞは、いつになつたつて考へてもくれない。」

「鶯はなんにもいはないから、わちきが忘れたら可哀さうだが、主のことは、あんまり世話をするとおいらんに怒られるから、そつとしておきいす。」

「だがよ、小夜衣がゐなくなつたら誰がしてくれるのだ。」

「おいらんが居なくなる譯はありいせんが、お春さんが——」

といつたとたん、當のお春が緣さきにたつて——紫の野郎帽子、歌舞伎若衆の振袖姿で、紺蛇の目傘を背にして立つた。

「あでやかだなあ。」

と半次郎も目をみはつた。

綾衣はもの珍らしい年頃の、大籬は御殿女中よりも世間を知らない。ほんものの歌舞伎若衆かのやうに見とれた。

「お春さんお上り。」

半次郎は愛想よく言つた。

「もう下ざらゐはすんだのかね、先刻皷の音がしてゐたやうだつたが。」

小夜衣の屈托をなぐさめるために、お春が踊つて見せるといふ事を聞いてゐたので、半次郎はねぎらうやうに言つた。

「上つて話しておいでな。」

お春は濡れた足をあげて見せた。生姜のやうに、みづくしく濡れて、赤味のはしつた爪ぎはや踵に、細かい黒土が、しぶきに跳ねてゐた。

「綾公、拭いてあげねえ。」

綾衣はサッと血のひいた顏をして、歌舞伎若衆に見とれてゐた眼を、興ざめ顏に半次郎の顏にうつした。

半次郎はなだめるやうに綾衣を眼でおさへた。この妓も、男のなら、尻でも拭くが――と含み笑つて、
「かまはないよ、此處へ、此處へ。」
手招をして、自分の横の布團の上を叩いた。
お春はスーと上つた。綾衣があきれてゐる目の前で、はらんばいになつてゐる半次郎に汚れた足を突出した。
「まあ此處へ腰をおかけ、それともその足を、俺にかぢれとでもいふのかね。」
執拗にお春は足を突出した。半次郎はその方を見もしないでお春が開いたままおいた傘を眺めて呟くやうにいつた。
「まだ、櫻がどつかに殘つてゐるかねえ。」
花片がたつた一片、紺蛇の目に濡れついてゐた。
「ねえお春さん、お前に逢つたのは、お花見の時だつたねえ。」
お春はドカリと、半次郎の傍に腰をおろすと小夜衣の茵で足をこすり〱うなづいた。
「この氣がさものが、折角おれがやらうといふ櫛を折つてしまやがつて――」
半さんはお春が體をさゝへてゐる腕をグイと引いた。お春ははづみをくつて、わざとのやうに半次郎の上に倒れた。
綾衣はびつくりして見てゐたが、ガチヤ〱と手荒く鶯の餌を摺おはつた。綾衣はあの櫛の一件をくやしいことに思つてゐた。
「おいらんも半さんぢや苦勞する、可哀さうに――」
口へは出さないが綾衣の目頭は滲んで目を伏せた。お春さんも憎いが半さんもあんまりな――
十七の彼女は堪へきれなかつた。一ぱいの恨みを湛へて半次郎を見据えた。
「おや、この妓は、あんな目をして俺を睨んでゐる。歌舞伎若衆をとられて焼けるのか？」
「半さん。」
批難も怨言もこめた一言をツーといいなした。
「なんだ。」
「それぢや濟みいすめえ。」
「濟まざあお前も××てやる。こつちへ來や。」
綾衣は客でなければ蹴飛ばしてやりたかつた。急いで湯殿に附いていつてゐる、年上の新造に知らせやうと立つた。
「おい〱、お春さんだけ殘して、お前がたつちや、それこそお前の役が濟みますめえだ。」
半次郎はお春をつきのけて、起上つて安座をかくと大欠伸をした。
「宗師をかへてお春坊とでも暮さうか？明けても暮れても、男が立つの女がたたぬの、上野をたすけろの、會津へゆけのと、間夫を殺すことを屁のやうにも思つてゐねえ女にはあきた。ねえ、お春さんお前は生きた鯉だ、ピンと跳ねやがる、生作りにしてもピチピチしてるだらう。」
お春の手首を痣のつくほど強く摘んだ。
お春はククと聲をはづませて笑つた。お春は男を戰で殺すくらゐなら、自分で殺してしまはうと思つた。
廊下にしとやかな足音がした。三夜がスッと襖をあけると、後をふりかへりもせずに半次郎が言つた。

「おいおきぬ、お春さんの肉附きときたら、指のあとを跳かへすぜ。」

だが小夜衣は襖からはひらず、室内も見ないで言つた。

「寢あきたら廣間の方へおいでなんし。」

「違ひねえ、もう寢あきてもいい刻限だ。」

牛次郎は飛起きた。綾衣はお春へ面あてが出來たやうにいそいそと嗽ひの道具を揃へたり手水盥へ水を酌みとつたりした。

三夜がまた靜にはひつて來た。香盆をもつてゆくのを牛次郎は呼びとめた。

「三夜、おきぬはなにをしてゐる。」

「はい、道庵さまが見えて――」

と掛りつけの醫者の名をいつた。

「あいつも弱くつて――」

チラリとお春と目があつた。三夜がさかしくもそれを見てとつたので、牛次郎は態となほど陽氣に、

「おい、髮はなでつけておくのか結ふのか、どつちにするのだか聞いてきてくれ。」

「あい。」

三夜は香盆をもつていつたが、直にひつかへしてきた。

「牛さま、どちらでもよいやうに――」

「フン、勝手にしろといふのか。かまはねえといふのなら、もうすつかりがまつてもらひたくねえの。」

「何時からそんなに強くおなりなのだか、よつぽど主は今日は變だ。お醫者さまが來いしてゐるのに、そんな事を聞きにやるから――あちきがなでつけておいて……」

「お前にはたのまねえ。」

綾衣が直した鏡臺を、グイと振りむけてお春にいつた。

「お春さんなでつけておくれ。」

お春はにつこりして立つた。お春が小夜衣の櫛笥には手もふれないで、自分の前髪からさし櫛をぬきとり、鏡の中で男の目と笑ひあつたのを見ると、綾衣はグイと鏡臺をひつぱつて、鏡をふせてしまつた。

「三夜。」

綾衣はすつかり腹を立てゐた。思はず甲高く禿をよぶと、禿もすぐに來たが、牛次郎とお春は呆れ顏に綾衣をながめた。

「三夜、おいらんは風呂から上りなんしたばかりで、化粧することも出來なくて困つて居いすだらう、鏡臺をもつていつてあげや。」

「あい。」

三夜は言はれた通りにした。

「綾衣、妙なことをするな。」

牛次郎はひいやりと言つた。

「あとで後悔しなさんな。」

「おいらんの顏の、たたないやうなことは辛棒がなりいせん。もし爲にならなかつたら、あちきが死んで佗いす。」

「恐しい心中だてだな。」

牛次郎は苦つていつたが、お春の目で語りかけるのを讀んで、

「お春さんの居間でやつてくれようつて言ふのかい？　そいつはお添けだ。」

手をひかれて、牛次郎は――二人ならんでたつた。

「牛さん。」

「なんだ。」
「おまへ、おいらんにすみますか――」
「またか！　済むのすまねえのつて、惚れてくれたから惚れてやつたのよ。だからおんなじぢやあねえか、今度はお春さんが惚れてくれたから惚れてやるだけのこつた――なにしやがる？」
綾衣はいま、鏡臺から剃刀をとつておいた。おいらん思ひの彼女は、耐忍しかねて、及ばぬと知りながら突きかかつていつた。
「おいらんのかたき――」
「なにを吐かす。」
きき腕をとつて、すぐに疊に捻ぢふせられた。
「お春さん、お前にまかせらあ。」
お春は綾衣が横倒しにされて、セイ〳〵息をはづまし、胸で浪うつてゐるのを見ると、小氣味よげにほゝゑんだ。
「な、な、なにをするんだ、お春さん。」
それには流石牛次郎があはてた。お春は磨ぎすました剃刀で綾衣の鼻を、すでに剃がうとしたから――
「とんでもない事しちやあいけない、大事な商業ものではないか。」
お春は冷たく眼で賤しんだ。彼女はあからさまに勝ちほこつた態度で、傲然と手眞似で語つた。
――この女の親は、この女を金で賣つた。しかも有難い助かると拜んでまでいつた、この女が、こんな幼少いときに――
お春は肩をゆすつて笑つた。牛次郎がうつかりした瞬間に、今度は耳をそがうとした。綾衣が悲鳴をあげたので、牛次郎が危うくお春の手をおさへた。
「女が、そんな手荒なことをするものぢやあない。」
お春は綾衣の島田の髻をギッシリと摑んでゐた。
牛次郎はその手をおさへ、片手は剃刀をもつ方のを押へた。お春の强情が小面憎くもあつた。思はず激しく力まかせに指をしめると、お春の肥り肉の手首が充血してきて、握り締められて指のほとりが、眞白に血が逃げてゆくのが見えた。お春はそれを快よげに見詰めた。
綾衣は猫に鳥籠を抱へこまれた小禽のやうに細かく顫へてゐる。
その騒ぎをもよそに、鶯はのどかな音に谷渡りを囀りはじめた。
靜にお春の持つ剃刀をとつたものがある。流石に牛次郎も、お春も、小夜衣を見るとすぐに手を離した。
「お春さん、歌舞伎のお稽古ならば、もつと廣い場處で――」
小夜衣はほのかに笑んで言つた。
「わたしも見物しませう。」
お春は目を反してプンプン〳〵した。綾衣はほかの新造に助け起されて、怨めしげに言告けやうとしたが、小夜衣はとりあはうともしないので、泣くなくみんなに引立てられて去つた。
牛次郎はお春の方へ行きもならず、變な羽目になつて、
「素人の嫉くのはいいが、しつけが悪いやうでみつともねえから、よく言つてきかせておかなくつちやあ駄目だぜ。」
と野暮にいつた。小夜衣はそれも取りあげず、どこまでも靜に
「お春さんもさびしいでせう、よかつたら一所にお飯をおあがりなんし。」
「うん、そいつが好い。やつぱり俺の女房は練れてる。」
「素絹ではあるまいし、しがない女郎が……」

ふと口をつぐんだ。

鶯は、ゆく春をしきりと鳴く――

四

――その廣間で、競馬香の遊びがはじまつてゐた。

お春がいつまでも離れないので、小夜衣がだん／＼に勞れてくるのを、番頭新造の衣香が案じて、口の不自由なお春にも札をもたせた遊びをはじめた。

競べ馬の盤はもちだされた。遊び手は二手にわかれて、櫻花を挿した方と紅葉の組である。各自の前に裏に、雪月花のしるしのある小さな木札がおかれた。

香元が炷く幾種かの香木――火口にくゆりながら、手ごろな香爐が廻つてきた。心靜に、三度までは嗅くことをゆるされてゐる。片手を屏風にして、とつくりと嗅きおはると隣席へ香爐を廻して、自分は思ひのままの香木の名を――月は伽羅とか、花は佐曾良とかあらかじめ定められた記しの札を、これも順番に廻されてくる器のなかへ、そつと隣席から覗はれないやうに入れてゆく。

最初は一種の香木のかをりが室に滿ちるが、次々に炷かれてくると、ふくいくと紛糾してくる。香木によつては、炷ぎたての形體と最後では形ちもくづれ、炷きからが淺間しくなるのもある。香もさうであつた、最初と中ごろと終りとでは違ふのもある。

一順すると、香元の膝の前へ、香爐も札入れも歸つてくる。香元は中の札を見て記錄がかりに書き入れさせると、その點數によつて、盤の紅葉を挿した人形が、幾コマづつか進み、櫻の方もおとらずに進む。五種とさだめ、七種とさだめた香木を、一つの狂ひもなく入れたものは拔軍の進みかたをする。

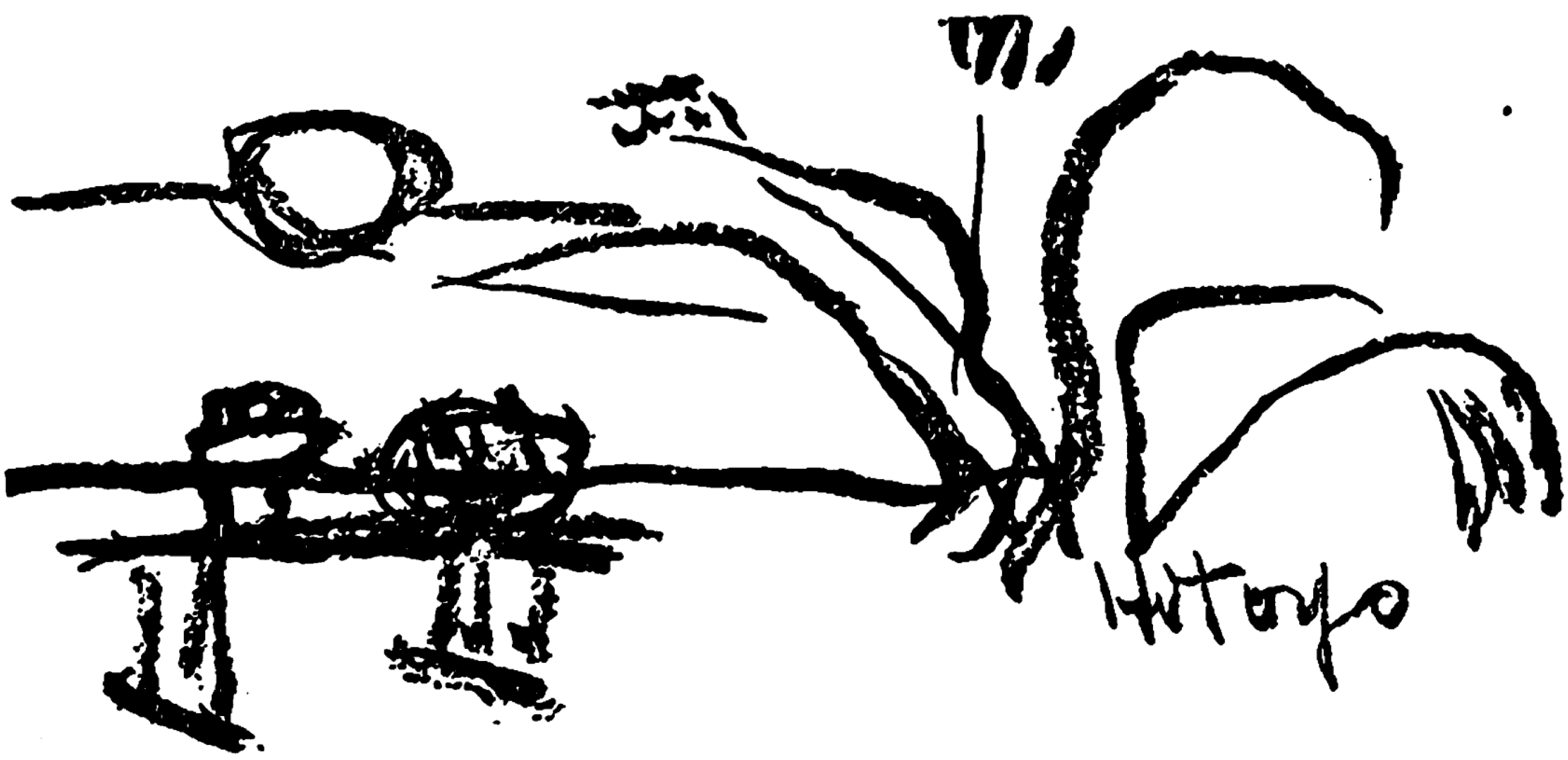
「一つも間違はないのは太夫ばかり。」

と來あはせて、その遊びの仲間にはひつてゐた、荻江節の家元が錆たものいひでいつた。その人は、もとは御家人衆であつたとかいふ美男で、年はとつてゐたが、ゆつたりと落付きのある上品なもの



ごしだつた。
「この炊きがらの姿のよき――伽羅はたいしたものだねえ。」
傍らにゐた一中節の太夫で男藝妓の吟中に小聲ではなしかけた。
「全く――伽羅は此處の太夫です。」
　小夜衣のお春に對するあしらひかたに、すつかり感心してゐた吟中は、思はずさういつた。
「師匠、えらいほめかただね、伽羅が泣くぜ。」
　半次郎はすこし厭味にいつた。
「戯談ぢやありませんよ、おいらんは伽羅にたとへたつて勿體なくはない。」
「ねえ、荻江の家元。」
　と半次郎は名を呼んで、
「あつしはさういふ方には委しくありませんが、伽羅は第一、上臈のもつものぢやございませんか、殿上でも、蘭奢待だとか、柴舟だとか、高名な名がついて、大切になさるとかいふのに、たかが女郎に――」
「いや、それは違ひます。」
　荻江の家元は、半次郎がわざとらしいほど矯激にいふのを、おさへるやうに言つた。
「吟中さんのもをしたのは、伽羅の氣品をおいらんに――」
「だからわからないといふのです。こんな、何處の馬の骨だか――」
「半さんそれはちつとおだやかでありませんね。」
　吟中はきつぱり言つた。
「あなたは、どんなにクサしても、腹ぢやまさかさう思つてお出ぢやないのは知れてるが、人間、生れや育ちや、境遇で、ねうちはつけられませんね。その人のもつてゐる氣品ですよ。よし、小夜衣花魁が、長屋女郎でいらつしやらうと、あたしは矢張り伽羅だといひます。それにひきかへて、お孃さんの、お姫さんのと呼ばれたつて、蹴轉居のふんばり女郎より見下げはてたものもゐる。ねえ、さういつたものぢやありませんか、荻江の家元。」
「と、もいえますね。」
「御同感でせう、甲のわるいもな、感じねえつていいやす。」
　吟中もムカ〳〵したので言ひすぎた。
「有がたうござんした師匠。」
　半次郎は居ずまゐを直して言つた。
「ねえ、師匠、そこで聞いておいておもらひもをしてえのは、花街へあつしや伽羅の燃えのこりを買ひに來て、感心してゐられるほど頭も禿げねえんだ。やつぱりふんばりがいいね、第一面白れえやねえ。この頃、面しれえことなんか探したつてめつからないんだ。そこで、廓でも御高名なお二人の前であつしは白狀しておきやせう。あつしは、此家のお春さんといふ、お孃さんだが、蹴ころ店の女より始末におえねえ代物と、今日から仲良くします。」
　鸚鵡の叫ぶやうな聲をあげて、體をゆすつてお春はよろこんだ。記錄の文臺から紙と筆をとると、
　今日から半さんをもらひますと――書いて、銀の矢羽根の簪で、壁へブツリとさした。

（つゞく）

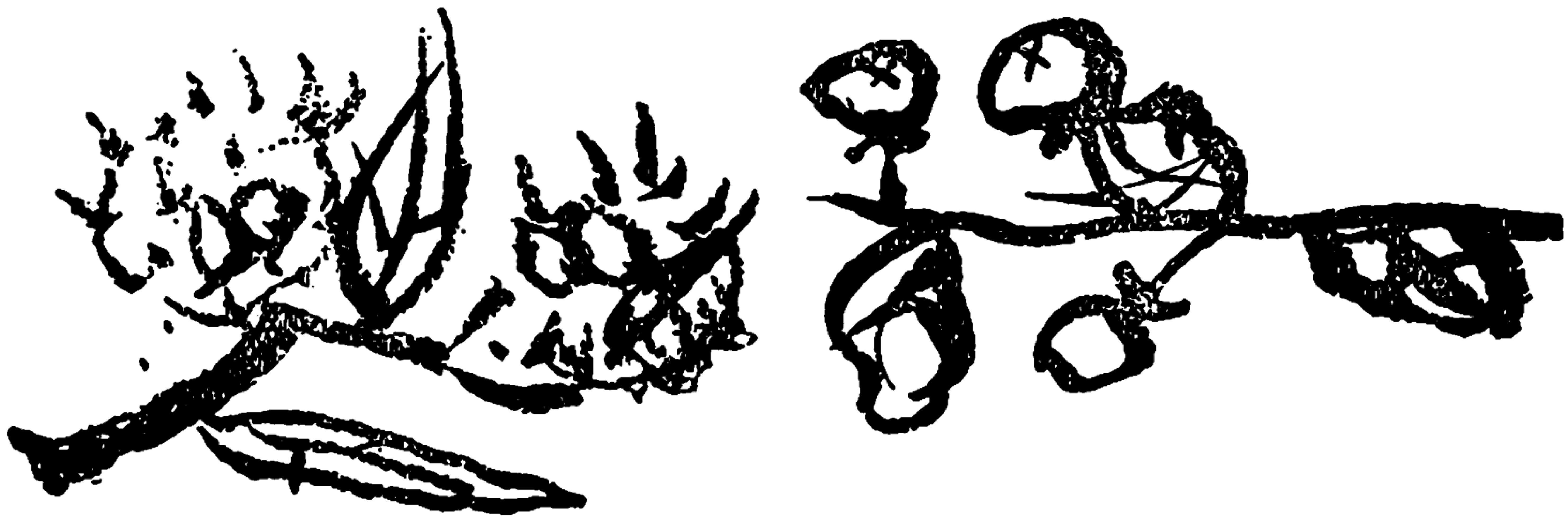


明日への祝盃

深町瑠美子

男が尾を振つた犬の様に
欣んでゐた時こそ
そした右傾的な野獸が現れたつて云ふ事に
氣を配るがいゝ
芯ばつかりの花と
黝い感情の繪の具は
みんな古びたマダムの玩具だ

エロチックな悲劇の倉庫で
わたしの願ひは羽搏きながら
解放の旗を求めた
——みんな知るがいゝ——
權力に依つて私は蔑まれ虐げられて來たつてことだ
虛僞で塗り固めた封建の壁土に滲む血涙！
この悲しい時代と共に



私は何處へ行くべきか！

明日の向日葵は踊つてゆく
健康と慧智によつてつちかはれた
愛の大ホールへ――
わたしのポケットは
高速度に不具な感情の清算帳だ……
わたしの心臓は廻轉扉の様に眩惑しい

――ヒス爆發地帶の整理
――經濟の獨立實行
だが母性と愛兒の消化不良をどうしたらいゝ
わたしは小脇にまだ
センチメンタルな樂器を隱してゐた

その代りにユーモリストの彈力に富んだ武器を取らう
愛の巣が烈しい爭鬪の古蹟にならうと
とらはれの檻を建てなほしたいからだ……
脚をさつと伸ばして踊りたいからだ！
わたしは壓迫された心臓の血潮を
明日の祝盃にして送らう――。



婦人インテリゲンチヤの問題

中島幸子

吾が國資本家的社會の現在の客觀的情勢は、安定の樣相を顯示してゐる。然し根本的には資本家的社會の經濟的基礎が矛盾を包藏しながら、自動的に腐敗しつゝあることには變りはないのである。一面、産業合理化の結果技術的經濟的强化が行はれてゐるやうであるが、反面、内的矛盾が激成し、階級鬪爭が尖鋭化され、産業豫備軍が增加しつゝあるのである。斯うした社會の實相は、インテリゲンチヤ層をして二つの類型に分裂せしめる。即ち、資本主義末期の陰鬱な空氣に醜き殘骸を曬らしつゝある虚無的インテリゲンチヤの型、及び自己批判しながら時代の先端に壯烈な戰士として進む所のインテリゲンチヤの型で是れ以外に中間層としての分化はあり得ないのである。

今對象となるのは絶望的な心理に、捨鉢的な生活を送るインテリゲンチヤ層ではなくて、或る意味で嚴肅なリアリズムに類似した生活行程を意欲してゐる後者の型のインテリゲンチヤ層である。インテリゲンチヤには、何等確呼たる階級的地盤は存在しない、そのため當然の歸結として彼等は、ブルジョアに隨行してのたれ死の過程を巡るものと、新興階級の運動に關聯を結んで變革の意志を表示しながら「生」を把握するものとに解體することは、不可避的な事象である。此の事は、インテリゲンチヤの外貌を具備してゐる男性にも、婦人にも差別なく妥當するものである。

成立及び滅亡の過程として現はれてゐる所の、諸社會形態の決定的な構成要素は、階級である。此の事項は、社會を衆個人の相互作用としか觀照せぬブルジョア社會學者にとつては、不可解な謎にしか思惟されぬ。

凡てのブルジョアの反動學者と同樣、社會學者も亦木を見て森を見ざらんとする類である。其れこそ眞性の科學の放棄を意味するのである。尨大なる不生産的階級の構成因子たるインテリゲンチヤの理解は、新興科學的階級理論の前提なくしては、本質內容を把束することは不可能である。

——過去の一切の社會の歷史は、階級鬪爭の歷史である——此の命題は、必ず在來の一切の社會は、支配階級と被支配階級との鬪爭

に依つて、該社會形態の推移發展が行はれたことを意味するのである。其れ故、社會の發展の決定的な要素は、當該社會の生産手段の獨占者と非獨占者との相互の闘爭にあつた。しかし乍ら、是等の對立關係にある階級以外に階級はないと謂ふことも社會現象に於いても、社會の現象が且つて生起したことはない。其れと同樣純粹なる二つの階級對立は、社會の一面性の顯現であつて、支配者並びに被支配者階級以外に身分及び職業團體の如き社會集團の存在が啓示されてゐる。即ち社會形態の基本的階級以外に、中間的階級或ひは過渡的階級がある。

私が問題として此處に提起せんとするところのインテリゲンチヤは、歴史的範疇としての階級の何れかに歸屬してゐるのでなく寧ろ相方階級に包攝されてゐる社會層なのである。其れ故に、彼等の社會的役割を槪說することは、重要性を帶びてゐる。尠くとも封建制度の崩壞期にあつては、インテリゲンチヤ（智識分子）は、絶大なる社會的役割を演じた。即ち當時の新興階級たるブルジヨアが、舊來の政治經濟の支配的努力を、自己のものとする變革期にあつては、ブルジヨアは、抗爭の觀念的武器として、智識分子の抱ける哲學や科學を利用したのである。例へば、フランス革命當時の果敢にして闘爭精神に豐富な百科全書學派（エンサイクロペディスト）の如きは、此等觀念的武器の主要なるものであつた。インテリゲンチヤ層の最も潑溂と實踐的に活躍した時代は、常に社會變革期であつた。吾々は、ブルジヨア經濟學者の創設者等が、如何にブルジヨアの理論供給者として又僕婢として役立つたかは、贅言する必要はないであらう。斯る事項は、我が國の資本主義勃興期にも妥當するのである。例證として、町人福澤諭吉等の理論が、如何に素朴であつても急激な發展過程を經驗したブルジヨア階級にとつては、物質力を培ふに充分であつた。特に我が國の資本主義の發展は、緩漫でなく、急激に成長したものである。此の特殊事情こそ、ブルジヨアが資本家的商品生産の社會組織を確立するため、法律・經濟・哲學・社會學等の觀念的學問の普遍化に努力した原因である。時代のテンポの急激性は、ブルジヨア擁護の理論的武器の發達を激成せしめた。此の理由にこそ、我々は、資本主義沒落期の我國にインテリゲンチヤの過剩生産の奇現象を誘致せしめたのである。且つて、我が國のインテリゲンチヤは、社會の指導者の地位にあつたものが、今は單に支配階級の從僕者として、從屬的に存在するのは當然な歸結である。そればかりでない、我が國資本主義が内的矛盾に惱む時、智識分子は、分裂の過程を展開し始めたのである。我々はインテリゲンチヤの分化過程に發生した三つの形相を認める。即ちブルジヨア・インテリゲンチヤ、小ブル的インテリゲンチヤ及び新興階級意識を獲得したインテリゲンチヤである。然し生産手段を獨占してゐるブルジヨア・インテリゲンチヤは、吾々の問題とする層と對照的にあるから論外に置く。興味ある事實として、爛熟した近代的社會心理の發生根據は、多くは信用制度の發達に依て派生した金利生活者に屬するインテリゲンチヤにあることである。此の事を理解せずしては、末期現象の説明は不可能であらう。利札切りなる有閑階級群は、生産過程の圏外に生活する所謂脂肪ぶとりの社會集團であつて、彼等の哲學は殆んど刹那主義的である。此の集團こそブルジヨア沒落期の副産物であるからして、近代社會の頽廢的事象は彼等の生活の物質的條件に還元できるのである。今茲に最も重要な問題とするのは、プロレタリアートに理論を提供するインテリ

ゲンチャである。此の階層に屬する多くは頭腦勞働力の販賣者であつて、過剩生産のために不斷に失業の脅威を感じてゐるからして、或る意味にプロレタリアート類似の關係にある。資本主義上向期にあつて、プロレタリヤは、その階級が未だ階級それ自身として、支配階級に反抗した時は、自然成長的な經濟鬪爭であつた。此の原始的な鬪爭を目的意識的な政治鬪爭、即ちそれ自身のための階級にまで轉化された要因は何か？ 即ち自意識を換起したインテリゲンチャー歷史の運動法則を科學的に理解把束した小ブル・インテリヂンチャである。進歩的インテリゲンチャの役割は、新興階級の自然成長性に目的意識性を外部から注入することにあつた。このことは、社會主義の敎養に、インテリゲンチャに依つて把握された所の哲學や、社會科學の理論體系が、結び付けれたことでも容易に理解できるのである。

勿論、インテリゲンチャ層をして、過重評價することに非常なる危險率のあることは、忘却してはならぬ。然らば、我國に於ける婦人インテリゲンチャの現在の情勢は如何？

資本主義の一環としての我が國は、既に帝國主義の段階に入り込んでゐる。換言すれば、資本蓄積過程は、自由競爭を必然的にその反對物たる獨占に轉化して了つた。帝國主義は經濟的には、進歩であつても、政治的には反動である。我が國は、他の資本主義國家と比較して早くから資本主義と、絕對主義とが抱合したゝめに、現在可成りの封建的遺制が、跳梁跋扈してゐる。此の理由で、完全なブルジョア・デモクラシーの實現は、確立されるところがなかつた。此の故に我が國プロレタリアートは、ブルジョア・デモクラシー獲得を當面の主要任務としてゐる。かくの如き事情なれば、我が國では婦人大衆に對し、政治的意識を高揚するための契機たる婦人參政權も許有されてないのである。又永き傳統と因習の巢喰つてゐる家族制度のために、婦人の心理的發達も隨分阻止されてあつた。此のために、婦人インテリゲンチャは、他の資本主義國家と比較して、政治經濟等の觀念學を習得する機會を全く喪失してゐる。我が國にも、女子高等敎育機關として一二の女大はあるが、所謂良妻賢母主義の名に於いて、微力なものであつた。宜しんば自由主義的色彩は無いではなかつたが、種々なる客觀的條件は、婦人の社會的進歩を中斷せしめた。又保守的になつた資本主義の現段階は、それを熾烈に要求することはなかつた。却つて、反動的學者は、家族制度の紐帶の弛緩を憂慮して、該制度を神秘化する程であつた。

然し我が國にあつても、家族制度はすでに存在理由を失して、單に名目論的に存續してゐるに過ぎない。故にその制度の維持を唱ふるが如きは、婦人を家庭奴隸の鐵鎖に永久につながんとするものである。又二三年前に、女子學生聯盟は、敎育の機會均等男子の大學の解放をスローガンにかゝげ、或る程度の運動を展開したこともあつたが、輿論を喚起することなく今は全く終焉してゐる。

然しながら、職業婦人の增大等に依り、覺醒した婦人インテリゲンチャは、漸次增加するに至つた。しかし彼等の意識標準は、どうであらうか？ 例へば婦人參政權運動家などは、吾々の考へてゐるが如く、婦人大衆の政治敎育に對する手段として參政權を觀察してゐるのでなく、參政權自體に盲信を抱いてゐる樣である。婦人インテリゲンチャの意識はまだ低い。玆に婦人インテリゲンチャに屬しながら、最も時代錯誤的な生活をしてゐるのは、婦人敎育家である。彼等は、何等自己批判することなく、又社會制度の矛盾を

曝露し、不合理を克服しやうとする樣な眞摯な意圖の斷片すらない、只支配階級の表象、意見、概念を傳達するの機械に過ぎない。此の意味に於いて、彼等の構成員は、今や過去の傳統を批判檢討すべき轉換期に立つてゐる時、永久に眞理を隱蔽せんとするのではなからうか？

婦人インテリゲンチャ層は、男子のインテリゲンチャに比較して、十年も廿年も遲延してゐる。我々は、量に於いて少くとも、高揚した意識を把束した婦人インテリゲンチャは、プロレタリア婦人と不可分離的に社會行動をなすことの義務を有する。夫れなくして、婦人インテリゲンチャの社會的存在理由はないのである。我が國にあつては、婦人勞働者の數は、工業婦人勞働者丈でも約百萬の多きに達してゐる。然しプロレタリア婦人層は、まだ自然成長的な時代におかれて、何等團結もなく、一定の鬪爭目標もない。だが、彼女達は各々何等かの型に階級意識をもつてゐる。それ故に、斯る意識への目的意識性の注入は、最も進歩せる婦人インテリゲンチャの主要任務としなければならぬ。

過去の婦人インテリゲンチャの社會觀の、內容を觀察するに、彼等の物質的基礎が、概してブルジョア的若しくは小ブル的であつたがために、保守的な思考、感情・意慾から成立してゐた。或時は、懷疑主義に意氣阻喪し、或ひは悲觀主義に自己を否定するが如く、ブルジョアジーの沒落期に對應した社會心理を赤裸々に表現してゐる。稍々進歩的な觀念を抱ける婦人すら彼等の社會觀は、アナーキズムの傾向を有するに過ぎなく、何等科學的な政治理論を確立しやうとは欲しない。

男子にあつて、アナーキズムの意識は、すでに批判、反駁しつくされたが、婦人一般のアナーキズム的意識は寸毫も批判されてゐない。尠くともアナーキズムの理論的歸結は新興階級の歷史的使命の否定にある。此の限りでは、アナーキズムは、プチブル的である。吾々は、社會民主々義に對すると等しく亞流のかうした諸思潮に容赦なき批判と、不斷の鬪爭を加へるとが必要である。だが眞正の社會的役割を、意識した婦人インテリゲンチャの社會觀は、小ブルの把握してゐるが如き形而學的なものであつてはならないのである。即ち、婦人インテリゲンチャに要請する社會觀は、資本主義的社會の自己批判から、生起したものたることを結論とする。

（一九二九・七・二五）

カルホルニヤーにて　上山浦路

日本はもうお盆ですね

もう一と昔も外國にゐますと、わかつてゐる筈の些事がわからなくなり、覺えてゐてよさそうな事を忘れてしまつてゐたりして、妙でございます。

毎々御誌御惠贈下さいます御厚情をあつくお禮申上ます、皆樣の御元氣の御樣子を拜し大變嬉しく存じ上げます、中には隨分お親しくして居つた方もお筆をとつておいでなのでなつかしさもどつちやになつて拜讀致してをります。どうか御社の皆々樣へ遠方からよろしく御傳へ下さい

日本でも隨分せわしい日々を送つてゐましたが、こちらへ來て又一層せか〳〵とそれは丁度同じせわしさでも人力車が自動車になつた程の感じで暮してをります。何を申すも外國の事逢ふ人々を先づドコの國人かと觀察するのでもくたびれる氣持です。何か雜誌などで、アメリカ相當のもの御註文下されば御送りいたします。

草人よりくれ〴〵もよろしくと申し出てました。大陸的氣候とて朝晩は秋のやう、日中もごくしのぎよい夏です。ごきげんよう。



凡人の抗議

八木秋子

一

藤森成吉氏へあてた私の公開狀が機緣となつて、當の藤森氏からは短い駁文を、高群逸枝氏、中島幸子氏がそれぞれの立場から批判し論爭を展開された。アナキズム對マルキシズムの問題は第一インタナショナル以來對蹠的存在として鬪爭を續け、今後ますますその對立は深められる。それは、今日無產大衆の決定的貧窮の生活現實と、大衆が無產政黨による政治鬪爭に幻滅を感じ、次第に政治的無關心の傾向にあり、新な××への道を探し求めつゝある事によつて點頭くことが出來る。

中島氏はクロポトキンを共產主義的無政府主義者といつておられるが、これは誤りである。アナキズムと普通は言はれてゐるけれども、正確にいへばアナキスト・コムミユニズム（無政府共產主義）といふのが本當で、字義通りアナキズムは決定的な一個の共產主義であつて、共產主義的といふ言葉は當らない。さういふ相似的な曖昧なイズムではないのである。

クロポトキンの相互扶助論は決して社會生活の歷史的過程、若くは流動の法則を無視した一個の觀念的な思惟や、或は形而上的道德ではない。彼は人間生活の過去現在にわたる長い歷史の中に起伏發展する、眞實の社會的基礎を探索し、そこに相互扶助の「事實」を認識した。それは、進化論から抽出し把握した理論ではなく、たゞ進化論の實證的觀察方法を、研究方法として取り入れたにすぎないのである。マルクス主義の歷史觀が、單に經濟關係の推移によつて社會の諸相を理解しやうとする狹溢な歷史觀であるに反し、クロポトキンの相互扶助論が、いかに全面的な觀方の上に立つものであるか。彼はいふ。

「われ等をして文明國を觀察せしめよ、森林は開拓され沼澤は塡められ、これを橫斷する數千の道路と鐵道は凡ゆる方面に發達した。河川は航海に適するに至り、港灣は近づくに便利となつた。運河は海と陸とを接續し、岩石は碎かれ、製造物は陸に充ち、科學は人間が如何にして慾望のために天然力を利用すべきかを敎へ、都市は次第に發達して、科學と藝術の寶はこれ等の文明の中心に堆積されるに至つた。一瞥、誰がこの奇蹟をつくつたのであらうか！」

家も街も運河も鐵道も、一切の科學も藝術も、これ悉くすべての過去、現在の人類の長い努力によつて作られたものである。生產、それから悉くの人類の需要を滿すべき手段は、すべての協同の努力によつてのみつくられた。それは實に萬人無數の協力の總和である。ゆえに「凡ての人々は富の生產者、及び消費者として同一の立場に立たねばならない。」クロポトキンの格言は、萬人は能力に應じて働き、必要に從つて消費せよ、である。これは吾々の最高の理想、徹底的な共產主義である。

二

共產主義をもつて自負してゐるマルクス主義は、眞の共產であらうか。もつと的確に言へば、マルクス主義は眞の共產に到達する筋道であらうかといふ事である。マルクス主義の經濟學說の根底になつてゐる勞働價値論は、これに濃い影をなげかけてゐる。

勞働量——勞働時間——勞働力によつて價値の大小が測定されるとする考へは、能力に應じて勞働し、勞働の結果に應じて消費せよ、といふ結論以外には到達しやうが有まい

もともと個人の能力は千差萬別であつて、決して同量ではあり得ない。右の考へ方からすると各人の需要は欲望によつて自由に消費する事は許されないことになる。欲しいと思ふものがあるにしても、さうした希望は、少ししか能力をもたない個人にとつては、決して滿されない。萬人の間には分配の大小、滿足や不滿足の不平等が、必然的に生れるのである。若し、このやうな不平等な不滿を忍ばなければならないとしたら、それが眞の共產であるとは、いひ得まいと思ふ。

將來社會に生れる勞働の意義は、報酬といふやうな、義務權利の觀念によつてゞはないであらう。かゝる資本主義的な觀念を抹殺することによつて、無意識のうちに、自然になされる行爲である。

革命の動亂時代、物資の窮乏する時にあつては、民衆は平等に貧窮の生活に、滿足の昂奮で耐えてゆく。パリ市民が、フランス大革命の時に、馬齡薯と水だけで飢を凌ぎながら、愉快にバリケードを守つたことによつて見ても點頭ける。政治的目的から、ロシア革命の時、特別に多く給與されたクロンスタツトの水兵が、自發的に、吾々は庶民と平等の少ない量を與えらるべしと議決したといふ挿話を想ひ起す時、民衆の心理の崇高さに打たれないではゐられない。

能力に應じて報酬を、——この不平等律を守るマルクス主義は、ソヴエートにおける、產業部門が違つてゐるといふ理由だけから、同じ能力を持ちながら、不同の報酬を與えられてゐる現狀に對して、如何に辯明するのであらうか。

例へば、直接消費される、食物、衣服、その他の日用品を生產する勞働者が、生產機械などを作る基礎的勞働——炭鑛夫、機械製造者、等の勞働者に比べて、より良い條件を與えられてゐる、といつた事實に對して、何う說明するのであらうか。即ちこゝでは、直接消費者に渡つて資金の運用のつく物品の生產者が有利で、金の回收には直接關係のない生產の從業者が不利な立場といつた樣に。

三

勞働を賃銀に代える事が出來ない、小農者は一番不利であつた。かつて、そして今日も、ロシアが經濟的に資本主義へ後退し旋回した事の責任を、すべてのソヴエートの指導者達は、農民の小ブル性、反革命——の名に歸せしめた。

「國家權力をプロレタリアートの手中に握

社會時評

永島暢子



新勞農黨樹立の提案について

昨年春、初めての普通選擧で世間のごつた返しの最中、突如として○○××黨が大衆の面前に表はれ、判然たるプロレタリヤ解放のための行動綱領を示して以來、左翼陣營内には、二つの相入れざる潮流は模糊としてながらも去來してゐるかの觀があつた。それが、三月十五日共産黨員の檢擧、四月十日の勞働農民黨その他二團體の解散、さては新黨準備會への結成など、運動の起伏につれて、その二つの潮流が漸次判然たる形をとる樣になり準備會をも解散されるまでには、大道憲二、水谷長三郎氏等の脱落者を出して遂に「眞實なるプロレタリヤの黨は唯一つである。勞働者農民はこの黨を前面に押し出し、擴大强化する事によつてのみプロレタリヤ並に全被壓民衆の解放は可能である」ことに統一さるゝに至つた。而してプロレタリヤは二つの黨を必要としないが故に、恒常的なる政黨を放棄し、カンパニヤを遂行するための鬪爭體として勞農同盟（詳くは政治的自由獲得勞農同盟）を結成した。この同盟は言ふまでもなく、黨の發展に伴つて當然解消するべき動員鬪爭體としての使命を持つものであつた。

この運動は左翼戰線には、何等の支障をも來さなかつた。かへつて舊勞農黨の持てる如き小ブルジョア的色彩を喪失した事によつて三、一五事件以來千に近き指導者を奪はれたにも拘らず、ますく大衆の支持顯著なるものがあつたやうに見うけられた。

けれど支配階級の彈壓も亦一層の速度を加へた。傳單ニュースの撒布、乃至は機關新聞に對する極度の彈壓は元より、集會演說會、時には單に、左翼團體の支部に寢泊りしてゐたといふだけの口實を以て拘留檢束に處するなど、常識では考へられない程の××振りである。この××下にあつては、曾ての勞農黨、又は社會民主々義政黨に比較すれば、當然鬪爭はより困難であり、潛行的であり、非合法的であらねばならなかつた。然り！ いつの世にあつても、支配階級への强き抗爭は、非合法の血みどろの鬪爭を經ぬものはない。

けれど、合法、非合法は力の問題である。非合法性を合法化する事こそプロレタリヤの任務であり、要求である。非合法性を飽まで永遠の彼方に押しやる鬪爭こそ、階級的裏切りであるといふべきであらう。

然るに曾ては左翼戰線の輝ける委員長であり「吾等の行く所常に戰場であり、墓場である」と喝破した大山郁夫氏は、去日細迫、上村氏等の連名に於て、今更再び「合法的なる新勞農黨樹立」を提案し、既に統一せられたる筈の左翼戰線に波紋を描きつゝある。蓋しこの新黨樹立の提案は、いかなる意義を社會に投げたであらうか。

暫く大山氏等の云ふ所を聞かう。氏等はまづこの提案を、多少の同志の意志は反映してゐるといふも、個人的のものである事を斷り現在の勞農同盟は正式なる決議機關が缺けてる故に、單獨的にこの私案を大衆の前に提出し、大衆の批評を乞ふの序言のある事を、つけ加へておかう。

即ち氏等はいふ。「我が國全左翼の戰線は、最近の大××の下に、容易ならざる一大打擊をうけた。それは今や擴大强化されるべきかよりも、如何に再建されるべきかをまづ第一着手の問題として取りあげなければならない樣な、慘ましき狀態に陷つてゐる。」「かくて全左翼の戰線の上に一地位を占めて來た我が勞農同盟も、折角勞農黨以來、不斷の試練に鍛ひあげられた幾多の精鋭鬪士を、その陣營の內部に持つてゐながら、しかも全國の戰鬪的なる勞農大衆の熱烈なる精神的支持を克ち得て居ながら、それが曾つて一時的に階級的必要を充たすために取つたその現在の變則的な形態故に、今やその形態のまゝでは、最早や强力なる鬪爭を展開する事が出來ない」即ち動員する活動體としての勞農同盟を直ちに解體し、獨自の指導部を持つ所の恒常的政黨を結成せよ、といふのであるが、これを端的に言へば、支配階級の狂暴なる大彈壓の下に於ては、プロレタリヤ黨の確立など思ひもよらず、支配階級に屈服を餘儀なくするも、合法政黨を作れ、といふにある。

三、一五事件以後引きつゞいて起つた四、一六の大檢擧、その他日々の暴壓の爲に左翼陣營が、諸種のカンパニヤを强力になし得なかつた事は事實であるかもしれない。また淺野ドック、橫濱市電、沖電氣等の爭議を有力に指導し得なかつた事も嘘ではなからう。だからといつて、それは直ちに合法政黨を必要すると斷定する事は出來ない。打ちひしがれてはその何倍かの力を加へては盛れ上り、より巧妙なる戰術と着實化せる行動とは、かへつて以前の如き若き焦燥性を振り落し、選擧戰に於て、或は反戰その他のカンパニヤを漸次强力に展開して行つた事はまた氏等も認むる所であらう。且日本勞働組合協議會、解放運動犧牲者救援會、その他の友誼團體との聯關的活動は、刻々に勞農同盟をして必然的解體に導きつゝあつた事は、ブルヂョア新聞雜誌を通じてもわかる事であり、支配階級の狂暴的にする一彈壓を以つても判斷出來る事ではないか。かくの如く鬪爭實體の既に備はれる具體的事實に對して故意に眼を覆ひ、今更に夙の昔に解決されたる疑問を再び持ち出し、勞農大衆を一時にしても動搖せしむる事は、輝ける指導者の任務であらうか。

プロレタリアートが一步退却すれば、支配階級は二步前進する。これはもう言ひ古された言葉ではないか。一度實體が結成された上は、外少の屈伸の戰術こそ使へプロレタリアートは進む事を知つて退く事を知らぬ階級なのだ。現在獲得せる些少なる勞働組合の合法性にしろ、政治的權利にしろ、幾多の犧牲を踏み越えて非合法の火

の試錬をくゞつて漸くにして克ち得た所の權利ではないか。いふまでもなく、勞働者農民は、合法政黨を要求してゐる事は事實である。けれどそれが社會民主々義的な混合黨ではなくて、決定的なプロレタリアートの解放を期し得る、强固なる唯一の黨の合法化をである。

かゝる見易い道理をさへ忘却し、鬪爭の困難を持ち出す如きは、階級的顚落でなくて何んであるか。大山氏等は、戰場であり墓場であると觀じた階級鬪爭よりも、銀座街頭で亂舞したくなつたのか。しかも此等は何等の機關も經ず、陣營內に如何なる波紋、如何なる結果を齎らすかさへ深く顧慮せず、自らその責任の地位にありながら、正式の機關がないなど公言してゐるは、あまりにその階級的良心の缺如に驚かざるを得ない。よし暴壓の打擊は、正式の機關を一時失つたといふも、左翼勞働組合、その他の友誼團體が立派に確立されてゐるではないか。それをしも無視したのみならず、この提案が未だ一般に行き亘らざる前既にプロレタリヤ黨を支持せんとする人達をして、大衆より孤立せしむる如き言辭を弄して中央公論、改造等に寄せ且勞働農民新聞が細迫氏の名儀なるを利用して、無產者新聞その他が、新勞農黨樹立に意見を披瀝せざるに先だち、全紙面を埋めて同紙並に組合協議會の態度を批難してゐる。これが階級的裏切りでなくてなんといふべきであらうか。

氏等の言はるゝ如く言ふまでもなく、具體的事實が、抽象的一般原則の適用性を決定するものである事は疑ひない。けれど具體的事實を故意に歪曲し、また事實に基いて遂行しつゝある行動を、殊更に放棄する必要はないではないか。氏等の言はるゝ客觀的狀勢とは決して勞働者農民の要求にあるのではなく、暴壓また暴壓に脅えたインテル層の泣き言とのみしか感じる事が出來ない。

之に對して、左翼陣營の指導的立場にある人達、組織の中に訓練を經つゝある大衆の中には勿論微動だもなかつた事は、轟々たる反對聲名によるも推察する事が出來やう。けれど之が今後の鬪爭進展上に些の障害をも來す怖れはないであらうか。常に反動化せるブルジョアジーの意志を代表し、闇雲に新興階級に對して反對してゐる新聞「日本」は、氏等の今度の蹶起を好機となし、盛んにデマゴーグをとばし、この際徹底的に、戰鬪的左翼陣營を壞滅せしめよと、彈壓をより鞭撻し、××は所謂×合法運動を更に彈壓せん事を命令した。氏等の行動は氏等の思ふ如く「われ等の主張は、鬪爭の中から生れて來た點に於て、又無產大衆黨系の人は、之から大いに意氣込みを以て進出し樣とする際に、分裂して戰線を攪亂したに對して我等は最後まで戰ひ、然る後に全體として、更に進出の方策として主張してゐる點に於て、彼等とは決定的に異る」（細迫・改造）ものではなくて、同じく階級的裏切りであり、卑怯者である事に變りはない。いや更に、水谷長三郎氏、大道憲二氏等の當時取りたる行動よりも、客觀的狀勢より見て、更に〳〵許すべからざる裏切り者である事は誰が眼にも——支配階級やその加擔者を除いて——映じる事であらう。

氏等の此度の擧は、決して革命的陣營の進展强化に資するものではなく、最後的に、資本家地主に勞働者農民を賣り渡すの行動であるのだが、それが內々解黨派と目さるゝ獄中の××××氏、××××氏等と官憲の手引きにて數次連絡をとつたといふ事實に基いて判斷するも、這般の轉向が、少しく運動の推移を看觀する者にとつては、難なく窺はれる事である。

されば彼等のこの擧は、ブルジョア自由主義者、社會民主主義者等には喜こんで迎へられた。政府も亦一應の考慮を拂ふものゝ如くである。新勞農黨樹立はかくして具體化するであらう。今よし假に濱口內閣が、××化せる勞農大衆を收拾する爲の睡眠劑として、一時新勞農黨の樹立を許すとするも、官許黨である限り、その鬪爭は不徹底を免れない事は、從來の無產政黨の活動經驗に照してもわかる事である。プロレタリヤの權利は、與へらるゝものではなくして、鬪爭の中に戰ひ取るべきものである。この强き認識の下に行動せざる限り、鬪爭の埒外に脫落する事は、また當然の事と言はねばならぬ。

貞操是非

「現代婦人は貞操の危機にある」「婦德は廢頽した、歐米の流行思想は、日本の醇風美俗を失ひつゝある」などと婦德、主として貞操に關する慨嘆の聲は、もう隨分前から私達の耳をついて來る。けれど一向に破壞されつゝある婦德は舊に復する事もなく、新らしき貞操觀が確立されるでなく、若き人々は、一層のスピードを以て本能の動きに從つて、自分自身の好む行動をとつて行く。

このさ中にあつて、夫と二人の子供を捨て、愛人藤原義江氏の後を追つて海外に渡つた松永あき子夫人の戀愛行動は、名門の出であると、相手は世界的歌手である事と夫人の美貌である事とによつて人々は興味に驅りたてられた。されど一切の毀譽褒貶には少しも耳を藉さず、本能の赴くまゝに、行動をとつた松永夫人は、今また愛人の後を追ふて故國に歸り、勇敢に愛の生活を營んでゐる。この事實をまた目ざとき婦人雜誌は見逃しはしない。即ち「婦人公論」は松永夫人自身の戀愛紀行で讀者の興味を煽り、「主婦の友」は、彼女の行動に對しての所謂名家の批評を揭げて讀者に向つた。この兩社の企ては、單に松永氏自身の行動のみが、讀者の興味をそゝるとは考へなかつたらう。現今起つてゐる所の貞操問題、その聯關に於て宣傳的價値を生ずると考へたであらう事は滿更邪推でもなからう。

しかもこれと時を同じうして、陸軍中尉寺內毅雄氏の愛妻、「若く美くしきあや子夫人」が、夫の病死の後を追ふて、美事にピストル自殺を遂げた。この事實は、松永氏の行動を、衰微せる貞操觀念の象徵的のものと觀て居た人達にとつては、正に一個の淸凉劑であつた。その故にかあや子夫人の行爲は悉く激賞されたのであつたがこの相反せる二つの行動が相からんで、貞操觀念を中心として回轉し、それに、媒酌結婚可か、戀愛結婚否かまでを附隨させて、新らしき婦人道德の基準の曙光をでも得やうとねらつてゐる。

一體婦德といひ貞操といふはなんであるか。何故にそれは守らねばならぬであらうか。まづかうした疑問は湧くであらう。婦德とは？

之に對して菊池寬氏は「婦人サロン」に於て面白き比喩を示してゐる。「フランス人は言つた、フランス婦人を妻にすれば、一人ですむが、日本婦人を妻にすれば三人を要する。家事上の妻、夫の仕事を手傳ふ妻、散步用の妻、これはあまりな酷評だが、滿更の噓でもない」即ちこれを飜譯すれば、婦人は男子の爲にあるのであり、婦人の價値は、男子に充分に用に立つか否かで定まるのだ。婦德とは「女大學」を持ち出すまでもなく、男子のためになる婦人の道德的基準である。

なるほど、これを松永、寺內の兩夫人の行動に當てはめて考へるならば、一見前者は婦德の破壞者であり、後者は典形的人物である

事が背かれる。しかし物體をはかる物さしさへ變る世の中だ。社會の尺度のみが變らぬ筈がない。資本主義の發展に伴つて、個人的自由思想が發達しつゝある事は事實である。資本主義的經濟認識の發達は既に沒落過程を辿りつゝあるに、そのイデオロギーはいまだ、封建的遺制にこびりついてゐる程の、おそい速度であるとは言へ、既に自由に目覺めた婦人は、婦人が男子のためにあるばかりでなく、自分自身の爲にもあり、且男子として婦人自身のためにもあらしめやうとする欲求を知つて來た。一度自身の意志を凝視する事を知つた婦人にとつては、從つて、結婚も決して義務ではなく本能であつた。戀愛は本能であると共に、結婚はその戀愛を、社會に表明する一種の聲名に過ぎない。若し結婚が、本能に基くものであり、自分自身を生かす爲のものであるならば、一人の男子に對して、永久に僞りの貞操を守る必要が何處にあらうか。結婚は愛と共にあり、愛の消失と共に消失すべきものである。そこに多少の綾があつても、自由主義の洗禮を受けた夫人の結婚觀の根本はこゝにある。不幸にして一度結婚した夫人の自分の虛僞の生活である事に氣付いた時、そこに二つの感情ののた打ち廻つてゐる事を否む事が出來ないであらう。愛それ自身にまつはる感情はおき、道德的感情のその二つとは封建主義の殘滓的感情と、自由主義の洗禮を受けたその感情である。

しかし現在の批判者は大抵封建的制度を以て金科玉條としてゐる輩である。試みに主婦の友のその批判者を見るも、いづれもコッコッの老人、封建的遺物の典形的な人達であるばかりでなく、既に戀愛感情の枯渇したやうな人達のみではないか。この人達の標準を以てするならば、必ずや松永夫人の行動は破廉恥であり、寺内夫人の行爲は美德の極致といふべきであらう。曾て有島武郎氏の自殺の批難の的は人妻と情死をしたが爲であつた。九條武子夫人の令名はその美貌と才華とにもよるであらうが、良人良致男と長の別居生活におとなくし耐えてゐたからである。けれど愛を自分におく、と思惟する者の眼より見れば、婦德の破壞者であると言はれる松永夫人の行爲必ずしも責むべきにあらず、婦德の典形的人物と言はるゝ寺内夫人の行爲も、別して賞むべきでなく、共に、自己に目ざめたる人達の行爲として觀るのみである。寺內夫人は書おきでいふ。

「──最後の我まゝをお許し下さいませ。只今喜こんで死なせて頂きます事を思ふと本當に嬉しうございます。──一時に二人の子供をおなくしになる苦しみをおこらへ下さいませ。」これが愛を全うし樣とする、芳醇なる情緒なくしてどうして出來る事であらうか。私達をして、瞬間的に、感傷的にせしむるものは、この芳醇なる情緒と死そのもの、爲であるが、封建的遺物の老人達に、典形的婦人に見えたのは、自殺の型が昔の武士の妻を聯想せしむるからである。松永夫人の批難は、夫人の行爲にあるのではなく、言へばまづ、その境遇が惡く、夫人の性格が封建的遺制に殉ずべく、あまりに理智的だつたといふ事が出來るであらう。寺內夫人を激賞するに當り、媒酌結婚を附隨的に賞めたり、結婚前の戀愛を否定したりしてゐた人があつたが、そんな事は、夫人の行爲には何等の關係もないのだ。

變形的に發達したる我國資本主義は、イデオロギイの上にも反映し、充分その自主主義的傾向をさへ見られないうちに反動化しつゝあるのであるが、婦人の貞操觀念も亦、一方ます〳〵反動的となると共に、一方極端なる自由主義者が表はれ、戀愛度數最高レコード

の保持者、纖細なる戀愛の技術者、室内より街頭への戀愛行進など、面白い種々のエピソードを私達に提供してくれる事であらう。

震災記念日

大正十二年九月一日の關東大震災は、幾億萬の富と數萬の生靈を失つたばかりでなく、その稀有の慘害の中に起つた慘ましい諸々の事實は、あの當時に直面した者にとつて、實に肉體的な記憶となつてゐるであらう。過日、少しばかりの强震に、寢てゐた子供を逆さに背負ひ、遂に死に至らしめたその母親は、かの震災に於て、やはり我が子を失つたのであり、當時の恐怖がいまだ拔け切れなかつたによる過失であつた。忘れるたもあまりに生々しきは震災の記憶である。

然るにこの考へるも淚の記憶を、更に强く思ひ出させ殆ど鐘太鼓入りでその記憶の上に亂舞せしめんとするのは、所謂震災記念日である。私は震災記念日また惡いといふのではない。しかし現在、行はれる所のその日の催しは、一體何の意義を含むものであるか？その徒なる回顧は、本當に民衆の爲であらうか。

震災記念日の催し物と言へば、まづ當時を忘れず、麥飯を食へである。スキトンに舌鼓を打てである。今年各團體で催すといふ新聞に發表されたのを試みにあげて見る。

▲非常呼集並に握飯日を行ふ△奢侈贅澤を戒める△震災當時の服裝にて百名程記念行軍する△講演、默禱、明治神宮參拜△酒なし日、麥飯粗食勵行△震災當時の服裝で「火の用心」と大書した大うちわをかざし、目ぬきの場所を練り步く。

これ等が所謂お歷々の智慧を絞づた揚句の記念日催し物である。復舊でなくして復興、殆ど昔日の面影もなき大東京の大通りを、土にまみれた浴衣姿で裾はし折り、大うちわかざして街を練り步いたら、當時の慘害を忍ぶことよりも、その異樣さに、觀衆は、お祭り的興味を持つであらう。子供達は、チン／＼ドン／＼より賑やかなのに喜びの眼を見はるであらう。震災當時を飽まで戲畫化しやうとするなら知らぬ事、眞面目にその日を記念するなら、あまりに冒瀆的なる行爲と言はねばならぬ。講演默禱等の普通の催し物についてはまづいふまい。麥飯粗食勵行、酒なし日など、今殊更にかう事を騷がずとも、一般の無產大衆は、この狀態を往來せざるを得ない有樣である。更に失業軍の續出、產業合理化等による勞働條件の改惡は飯なし日の時をさへ無產大衆に强要してゐるのだ。それなのに尙も民衆に儉約の餘地でもあるといふのか。その宣傳は有產階級に一齊に鉾をむけ、一日に限らず我が國何處の隅に至るも、或階級のみ甘き晚餐、豪奢な生活を送らない樣にこそ轉化すべきである。

この震災記念に對して、私達は決して見逃してはならないのは、支配階級の大きな僞瞞である。それは大震災の自然的脅威に人心をあつめ、自然對人類鬪爭とし、階級鬪爭を忘れしめ樣としてゐる點である。その限りに於て前の各團體の催し物、精神復興の運動等は立派に御用を果してゐるのかもしれない。

けれどかの震災當時、眞實に塗炭の苦しみに逢ひ、愛する肉親を奪はれ、家を燒かれ財を失ひ、生命から／＼に生の絆に取りすがつた者は誰であつたか。湘南の地に、豪奢の夏を送りつゝあつた多少の犧牲者をおき、大震災に奪はれた生靈の多くは、プロレタリア階級、働く階級の人達であつた。無產階級の生活は、現在の經濟的、社會的制度により、常に不測の天災に對しても常に恐異に直面してゐ

る。被服廠後の慘狀は、狹い町に多くの人々の住んでゐたに起因してゐるし、或は水害に、或は流行病に苦しむも、勞働者町、貧民街の別名である本所深川の地ではないか。支配階級有產階級は、經濟界の安定につれて、一時の握り飯より粗食へ、粗食より飽食へと市街の復舊に先立つて復興して行つたのであるが、無產階級のみは相變らず取り殘されてゐるのである。否益々生活の窮迫に迫られてゐる。且支配階級は、當時のドサクサに紛れて××的勞働者を虐×しまたあらぬ流言非語を流布して×鮮×を仇敵の如く思はしめてその虐×を許し、食物の窮乏、極度の不安等のために騷擾に陷りたがる人心を收覽せんが爲に、狂奔した如きは、人々の腦裡に深く强く、震災の慘害と共に殘つてゐるのだ。それ故にそれを塗りつぶさうとして、種々の子供だましの催し物を行ふ事は、充分見えすく事である。かの小倉右一郎氏が、本所被服廠跡の大震災記念堂に納むべきものに、少年少女の悲しき群像をものして、一般の批難を買つた。死んだ子の位牌を前にしても涙にくれるは親の常である。まして當時を彷彿せしむるものは、如何に殘酷なものであるか。この彫刻に對して市當局の反對なく、かへつて子を兄弟を亡くした人達より反對の聲の聞こえたのは當然すぎる程當然であらう。

震災の事實は忘れんとしても忘れ得ぬ事實である。民衆は必ずやこの日を記念する事を望むであらう。けれどこの尊き日を天下り的な愚かしき催しに甘んじてゐるべきではない。この日の記憶を强く思ひ出し、細かく分析したならば、如何に無產階級は、正しき要求を要求して行かねばならぬかを知るであらう。生活權確立の要求、これに含まるゝ種々の要求を揭げて支配階級に鬪ふ事は、最もよき震災犧牲者への追悼といふべきであらう。

讀者通信

聯盟レポート、ありがとうございます。

千駄ケ谷　前田　夏江

女人聯盟といふ一つの立場から一貫しての藝術界、文壇、劇壇、畫壇等この展望、まことに有意義な企てと存じます。

秋と共に誌上に飛躍する活字以上の元氣を以て編輯室に頑張られることを女人藝術のために、聯盟のために、又多くの讀者のために心からおよろこび申上ます。

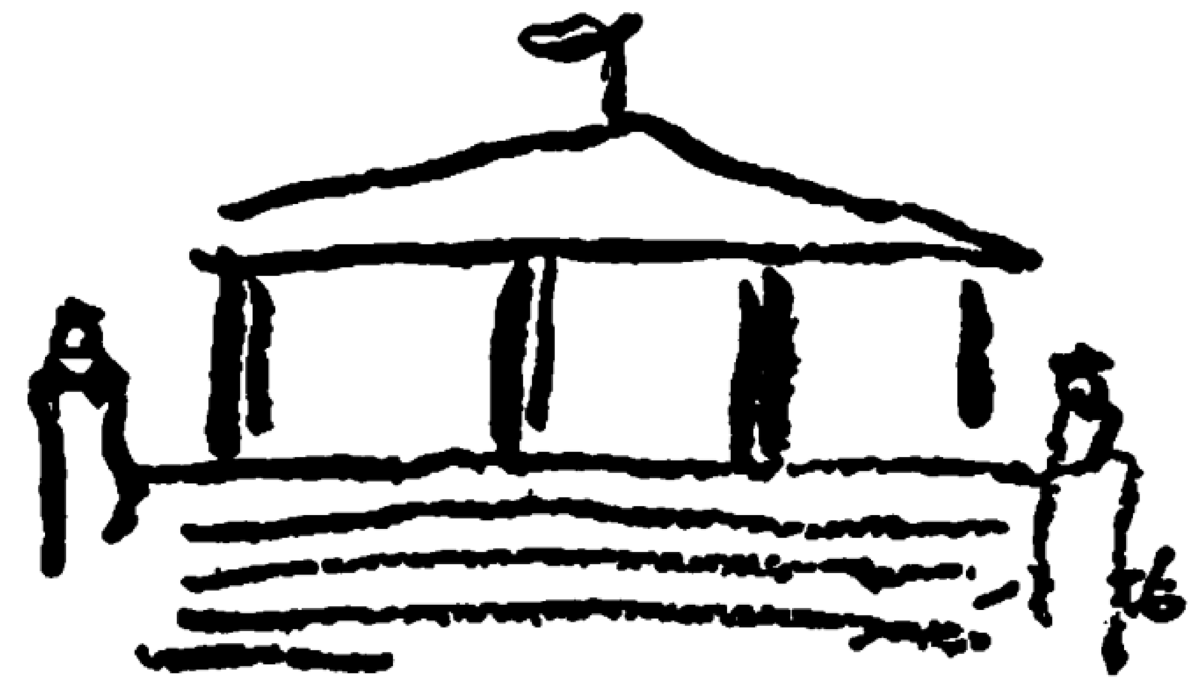
女人藝術の讀者層が少數女學生、インテリゲンチャ女性群の手から漸次擴大されて下へ、底へ、大衆へと堀り下げられていつたらどんなに愉快だらうとそんなことを夢みてをります。最早私どもも書齋から街頭に、パンのために働らいて働らいて、殘つた時間で更に仕事を、更に仕事をと叫び或は求めてをります。ビラ撒き、宣傳、勸誘何でも女人聯盟のためによろこんで參加したく存じます。

次に一讀者の希望として

政治的背景を持つ婦人團體の紹介、職業婦人群をめざす團體訓練の機關の紹介、目下のプロレタリヤ藝術運動の實際的活動狀態及びその方向、分裂に分裂を重ねてゐる左翼文藝陣の各綱領理論の解說等、に關してその方面の方々に書いて頂けたらと存じます。

聯盟レポートをいたゞいた機會に何か申上げたくてペンをとりました。

編輯室のゲンキ旺盛を祈ります。



演劇時評

上田文子

1　小山内薫全集第三巻を手にして

今月中旬、「小山内薫全集」の第一回配本を受けた。先生が突然物故されて以來、既に半歳を經過し、文字通り又、追補される新稿の有得ない全集が公刊されて、今手にあるのかと思ふと、又しても、愚かな時間的錯覺に迷はされて、私の思惟は兎角、感傷に溺れやうとする、にもかゝはらず、現在の我々にとつて先生の全集に對すに必要な態度は斷じて、感傷といふ如き、個人的、感情的な狹い情緒であつてはならない。反對に斯くの如き末梢的情感のすべてを、理性的思惟から切り放して、過古の文學的――演劇的遺產の一として これに向ふことこそ、現在のわれ〳〵の義務であり、演劇の革新者として、廣義な意味の社會進化に貢獻された先生の文化史上の役割を整理し、闡明する一助ともなるであらう。

斯ういふ考へから前に大方讀んでゐたにかゝはらず私は、全集第三卷、――即ち先生の全生涯の戲曲の殆ど全部を收集した一冊を更めて讀破した。

戲曲の數は全部で三十二編、編輯者水木京太氏の正當な整理によつて、「創作戲曲と外國戲曲のアダプテーションと日本古劇のアレンジメントの三部に分類されてゐる。

若し一般の戲曲家の作品に從來の目をもつて對するなら、第二部、第三部の翻案、改訂物を措き、第一部の創作戲曲をもつてその戲曲家の眞骨頂となす見解が成立するであらう。しかし、小山内先生の場合はこの尺度に當てはまらない。先生は、戲曲家であつた、と同時に優れた演出家であつた、――演劇學者であつた。要するに生涯先生の仕事、先生の藝術、先生の學問は、演劇を繞つて展開されてゐたが、その中軸となる所のものは、雜誌でもなく、學校でもなく、常に、劇場であつた。從つて先生自身、優れた戲曲家、優れた演劇學者である以上、優れた演出家である事を喜びとされ、その演出慾の故に、愈々、戲曲に、演劇等に精進されたものと思ふ。文學的價値に暗に多分の魅力を感じてゐる書齋の戲曲家の一群と相對時して

——さう言つても過言ではないと思ふ。——先生はその點、深辯すぎる程徹底した劇場主義、舞臺主義の戯曲家であつた。何よりも先づ演出家であつた先生の目からは、演劇そのものこそ信捧すべき神證であつたであらうが、それを構成するすべてのもの——俳優、劇場メカニズム、戯曲、觀客の如き——はその綜合藝術を組織する爲にのみ有効な、——換言すれば、素材的藝術として一様に同じレベルに見られてゐたことと思ふ。こゝに演劇を文學の附屬的地位から救出してそれ自身の發展の過程を辿らせた先生の演出家として、劇場人としての進歩的功績があり、同時に、文學から剝脱した王座を抽象的な演劇それ自身に與へて、これを綜合するすべての藝術——及び觀客に至る迄を、よい芝居といふ相言葉によつてその前に臣從せしめ様とした點に、先生といふより、先生の時代の藝術至上主義が反映してゐる。今後の我々が先生の生涯から學ぶべきものは、勿論、後者の唯心的立場にはなくして、前者の科學的な、進取的な、破壞的な同時に建設的な、——要するに革命的態度であらねばならない。

話しは脱線したが、以上述べた様な見解から私は先生の戯曲に於いて、殊更に創作戯曲に重心を置き、アダプテーション、アレンヂメントの如きを輕視することは可成り重大な過誤であると思ふ。むしろ飜案改訂の中に我々は、——我々の時代が、藝術の分野にいよいよ多く要求するであらう鬪争性、巧利性、大衆性の故に——良き様式、良き表現の明確な標本を見るであらう。何となれば、斯ういふ種類のよき標本は極めて稀であり、同時に原本と對照する便宜のある點で、尤も、直接な教科書となり得るから「國性爺合戰」「傾城淺間嶽」のアレンヂに於いて、綠の朝、息子の飜案に於いて、われわれは古劇を、外國劇を如何に現代に——勿論そのアダプト、そのアレンヂの發表された年代を考慮に入れて——表現すべきかについて多くのことを學んだ。同じことは創作戯曲の大部分についても云ひ得る。即ち、作者は常に素材を如何にして舞臺に表現せんかを示す爲に筆を取つてゐられる。素材を如何にして表現するかは如何なる書齋戯曲家でも考へることに違ひないと讀者は笑ふかも知れない。爲に私は圏點を附した。先生の場合には、全くこの圏點の部分即ち「如何にして舞臺に表現するか」が前の「素材を」に比して、フォルテで呼ばれていゝのである。全く、先生が、創作戯曲に於いてもアレンヂ、アダプトに於いても、エンファシスをもつて說かうとしてゐられるところのものは、素材となる一箇の現象それ自身といふよりもむしろ、與へられたその現象を如何なる様式、如何なる表現に於いて尤も適確に尤もエフエクテイブに舞臺に表現し得るかといふ問題にかゝつてゐる。この意味に於いては先生の戯曲は森鷗外博士等と共に戯曲を小說の一部から解放して新しい様式を與へた革新的なものであり、同時に演出者の手になつた日本最初の戯曲として明記せらるべき特長を有してゐる。私の誤認でないならば、先生の戯曲中、最初期の作品非戰鬪員等除いては殆ど全く、人物の動作以外・心理的な、ト書きといふべきものを見ない。戯曲はセリフで表現すべきだといふモットーを先生の戯曲は實に完全に遂行してゐる、戯曲の様式と建築とはその組織が複雜でしかも合理的な點で、幾何學的均勢を要す點で、又最も人間と密切な實践的な立場にある點で、要するに綜合藝術の持つ合法則性故に近似してゐるものであると常に私は思つてゐるが、戯曲をかりに演劇の制圖とみれば先生の作品の如き最も完全なものであらう。このことは全集の末

に水上瀧太郎氏も記してゐられる。氏の云はれた「工學的戲曲」といふ言葉は全く、先生の戲曲を規定するに剴切な用語だと思ふ。工學的戲曲——さうだ、この定義の中に先生の戲曲の眞髓があり、唯物史觀に立脚する今後の藝術の學び取るべき發展性が藏されてゐるのだ。

2 築地小劇場の本鄕座公演をみる

築地小劇場の殘留組の全部が、地主との訴訟による同劇場の取りはらひを契機として松竹合名會社と提携するに到つたことは近時の劇壇で一の注目すべき事象であると思ふ。

小山内先生の沒後、分裂した築地の二派が共に、左翼的イデオロギーに立脚する演劇の大衆化をスローガンとして活動して來たことは、分裂後の兩派のプログラム、——築地の「ブブス先生」、「磔茂左衛門」、「母」、「故鄕」、「新築地」の「飛ぶ歌」「生ける人形」「母」「何が彼女をさうさせたか？」、「蟹工船」等、——をみることによつて闡明されてゐる。この意味に於いて過去五年に於ける築地小劇場の實驗室的運動は現在、完全に解體し、これから分裂した二つの新劇團は、過去に於いて收得したところの技術をもつて、直接に大衆に呼びかけ、社會進化に貢獻すべく努力してゐる樣に見える。これらの小ブルジョア劇團を構成してゐるところの要素は、元々それが小劇場時代に「良き芝居」なる藝術至上主義的モットーによつて召集され、同じモットーのもとに構成されたものである丈に、今日となつてみると、技術上に一の相通ずる樣式なり技倆なりをもつてゐる割に、思想上の立場に於いては可成り混成的狀態にある。この點、左翼劇場の如きイデオロギーによつて一致してゐる劇團とは色彩を異にする所以であり、プロレタリヤ運動の前衞的任務を努めるに、殆ど當分の弱味と强味とを有してゐる。弱味とは何であるか。即ち、この混成的狀態がある種のイデオロギーの明確な作品に對する場合、技術丈で彌縫することの出來ない破綻を生じる點である。新築地の「母」「蟹工船」に於いて、築地の「母」「故鄕」に於いて、われ〳〵は既にこの實例に接し、多少の憂慮すべき豫想を抱いたのであつた。幸ひにして、今度の築地の本鄕座公演に於いてはこの弊害を殆ど感じることがなく、私の前述の如き豫想を、「レーニンが書いたらもつとよく書いただらう」といふ程の技術と思想を混同した笑ふべき單純さに引き下げてくれたことは慶賀に耐えないが、しかし、この單純な懸念は、今後共、これらの新劇團の內部に於いて、技術的勉强と、思想的前進によつて、常に愼重に吟味され、淸算されて行かなければならない可成り困難な仕事の一であらうと思ふ。プロレタリヤ運動の如き主觀的な、普遍的な階級鬪爭に役立ち得る藝術は同時に又、客觀的游離性を——私としては現在、藝術の游離性を殆ど認めてゐないが——排除するものだからである。

しかし、斯ういふ混成的狀態にある丈に、イデオロギーが露骨に表示されてゐない丈に、一方、これらの新劇團は、左翼劇場などと違つた意味で前衞的活躍をなし得る多くの便宜を有してゐる。即ちその混成的色彩が一種のカモフラーヂとなつて、資本主義の大劇場に浸入し、これを利用することによつて、資本主義社會の小ブル勤勞階級を含む都會の大衆を——現在、モップに近い未組織な大衆をリードし、一歩一歩、眞の組織的大衆に訓練してゆく便宜を有するからである。斯くの如き役割こそ、それが假令、一時的なものであるとしても、純左翼劇團によつてはなし遂げ得ない、これら轉換期

の新劇團に割り當てられた役割であらねばならない。
　この點に於いて、斯くの如きセミ左翼劇團の一として築地小劇場が、資本主義の王國松竹合名會社と完全に手を握つたことは、新築地が帝劇を背景として發展してゆくこと以上に興味と期待をもつて見られるのである。一歩、目を轉じて資本家側を見樣、乃木將軍、楠正成を上演し、「戰艦三笠」に、「九條武子」に、軍國主義、宗教主義の宣傳を努め、「彌次喜多」のくり返しに、ナンセンスの笑ひをモップに強いる反動的劇場當事者は何が故に彼らの最も忌避する左翼的傾向の劇團と握手し、進んで彼らの左翼的演劇の上演に助勢しやうとするのであるか？　彼らも又、一般、讀書階級の靑年子女の如く、根底なき流行的左翼の虛榮的、假面を冠らうとするのであるか？　否、否、彼らはそれ程單純な愛すべき童心を持ちあはせてゐない。彼らを支配するところのものは徹頭徹尾打算的である、——商品の市場的價値である。もし、それが、彼らに多くの利をさへ與へるなら、如何なる有害物も喜んで彼らは商品として賣るであらう。英國が支那にアヘンを賣つた樣に。劇場資本家が、左翼的新劇團と握手したのは、一に近時に於ける階級闘爭の劇鋭化と、それによつて來るジャアナリズムの左翼的迎合の流行的現象が、演劇の廣野に汔滲透し、左翼的演劇が商業價値を有し得る打算が彼等の間に成立した故に外ならない。だから彼らはこれらの團體と提携した以上、當分充分にその左翼的色彩を發揮させて商業價値をあふるであちう。唯時代が一層尖鋭化し、階級的對立が一層露骨になつて、より酷烈な第二の反動時代に入る時こそ、勿論、興行主は一般ジャーナリズムと共に、左翼的演劇を放棄するであらう。この過程は極めて自然な過程であつて、斯くの如くして放棄されることはこれらの新團劇として別に悲しむべきではない。彼らの體驗しなければならないクリシスはむしろそれではなくして、興行主が何らかの理由で彼らから左翼的色彩以外の興行價値を引き出し、それによつて彼らを大衆化し反動化する如き場合にある。時代によつて立場は違ふが、過去の劇壇に於いてこの弊は往々に行はれ、進歩的な幾多の藝術家を反動化し、資本家の奴隷とした。左團次でも勘彌でも猿之助でも乃至澤田正二郎でも、資本家と提携し、それを利用しやうとして、大方はそれに利用され、資本家的宣傳によつて、名聲を博し、大衆的になればなる程、反動化して、皆が皆ミイラ取りがミイラになつてしまつた。この同一手法がある時、必ず資本家と提携した新劇團を襲はない筈はないのである。勿論、過去の人々と現在の團體とは環境に於いても、組織に於いても違つてゐる。しかし、現在の築地の如き混成狀態に於いては比較的かういふ誘惑に陷り易い可能率があり得る。この意味に於いて、これらセミ左翼劇團の人々は、もしその意向がプログラムの示す如く左翼的前衛にあるならば、常に、資本家を利用する事を知つて流行的左傾の假面を脫いだ素面の資本家に斷じて利用されてはならない。經濟的には凡らく容易になつたであらう築地の前途に私はこの對資本家の問題を眞面目に眺める。純左翼演劇が「農村へ、工場へ」のスローガンをもつて移動劇場的に發展してゆかうとする時、これらセミ左翼演劇が資本主義の中心に浸入して、都會的に、大劇場的に左翼的立場を樹立してゆくことは甚だ當を得た興味ある問題であるから。
　前提が長くなつて肝心の劇場ノートを短縮しなくてはならないのは遺憾である。以上細評を略して氣づいたこと丈簡單に記して置く。
　築地の本鄕座公演の演目に江馬修氏の作村山知義氏改補阿片戰爭

と、トレチヤコフの「吼えろ支那」を取つたのは妥當である。しかし、慾をいへば、二つとも帝國主義の暴威を主にして扱つた作品である爲——不愉快なカットで作品を歪め、稀薄にされることの渺かつた代り、左翼的訓練を經てゐない一般見物には視野が廣すぎて、人種的階級に對する憎惡を感じても、それから直接な階級鬪爭への關心へ迄行き得ないのではないかと懸念する。今日の日本の狀態では、帝國主義の曝露を見せるのは未だ早い、惡くするとそれは妙なパトリオテシズムを刺激する結果になる。殊に「吼えろ！ 支那」はエレンブルクの「歐洲の滅亡」などと共にソビエト露西亞の作家でなければ書けない作品であり、露西亞に於てこそ必要な作品——資本主義烈强の中に立つ唯一の共產主義國として帝國主義を批判し曝露することは目下の急務である故に——であるが、現時の日本プロレタリア演劇としては「長し短し」の感じがする。成程、今度の築地のこの芝居の演出は、樣式に於いても、內容に於いても、見事な出來榮えであつた。我々はメカニズムの上に於いて、——裝置、配光等、——多くのものを得たし、セリフの活かし方、群集の動き、等に於いてもテーマにふさはしい活潑なテンポを學んだ。しかし、一般觀客が帝國主義暴戾の犧牲となつて殪れる二人の苦力に對する同感は、大部分あの靑い眼のイギリス人に向けられてしまつて、そのイギリスが支那に加へると同樣の搾取、暴壓を自國の被搾取階級に加へてゐる同國人のブルジョアの存在を忘れはしないか。斯ういふ意味から私は、今日の日本のプロレタリア演劇として帝國主義の曝露をさう緊要なものとは感じない。阿片戰爭についても同じことは言へるが、これはレアリズムに立脚してゐるのと、阿片といふ特種な題材によつて、帝國主義の概念を通俗的に啓蒙出來るのがいゝと思つた。

私はこの二つの芝居を通じて「吼えろ！ 支那」の苦力の妻としての田村秋子氏の演技に感激した。「第九景」に於ける彼女の英人に對する呪咀には、單なる虐げられたもの丶反抗、恐嗟でない階級的な憎みが燃え上つてゐた。プロレタリア演劇に適する女優の殆ど皆無な今日、田村氏の如きを得ることは心から喜ばしい。技術的にも思想的にも今後益々前進されることを深く要望する次第である。

（一九二九、九、三）

讀者通信

堺市　角野シゲ子

拜啓　わたしは今月號の女人藝術を手に入れるとガツ〳〵と貪りよんでしまひました何と云ふ感慨でせう秋風にふかれてやゝ整頓しかけた腦の中に刺戟が浸透して行くと眼前に成大な新らしい世界が判然と展開されました。讀む所も讀む所も私にとつては敎へられる事ばかり、それはむづかしい社會學であり未知の事件であり驚嘆の世界でありみんな强く〳〵私をうつものでありました、一定の見識もなくプロだのブルだのゝ何であるかも知らず只女學校時代から藝術と云ふものに甘い憧憬を抱いてゐたにすぎない私ですが今こそ女人藝術の全紙面に漲つてゐる力强い生命が私の進出への魂を快よく鞭打てくれますおくればせではありますが女人藝術が萬事私の爲に最良の指導者であつてくれるのをもつけの幸に、努力しやうとしてゐます每號〳〵の女人藝術が無智なわたしの爲に新らしい生きる力と智識を與へて程よく私を導いてゐてくれましたが今月は特別强く悟らされました、

今月少しの金の融通がつきましたので誌代を送つておく事にしました、觀世撚りをした十錢白銅を二十四枚ぬきとつて局員に手渡したとき「あゝ之で半期は何の屈托もなく讀書出來る」私の氣持は實に爽快でした。

婦人彙報

◇製糸女工の屑繭賣り

信州岡谷の西部座繰工場組合では繭屑が減るので取調べ中の所、右は十餘工場の女工さん達百五十八人が結束して工場の屑繭を仲介人に賣り、秘密な取引ある事が知れて女工百五十八人、仲買人九人は檢事局へ送られた。所が調査して見ると、女工の賃銀があまりに廉く、屑繭を賣らなければ到底生きてゆけないといふ事實が判明、警察署長が自發的に工場主等を說いて待遇改善をさせる事にし、値上外三箇條を誓はせた。

◇三錢の賃銀で酷使

これも製絲の話、信州下諏訪町國用製絲工場では一老職工の虐待事件の起つた事から、上諏訪署で調べて見ると、同工場の瀧澤菊江といふ女工は四日働いて四十九錢田中あき子は十五日で三圓九十錢長坂とみ子は七日半日で一圓二十一錢といつた調子で自宅で食事をしお辨當を持參して中には十二時間働き僅に三錢餘といふ恐らく全國何處の工場にも例のない程の待遇が判つた。工場法によると最低賃銀三十錢で保證すべしといふ規定になつてゐるのにこの有樣である一方同縣小諸町の淸水製絲工場の女工さん達三百餘名は、今度改正されたセリプレーン制度が女工を搾取する以外の何物でもないといつて、一齊に荷物を纏め、歸省したり歸宅してしまつた。

◇片山潜氏と愛孃

六つの年に別れたぎりの父親に會ひたい一心からはる〴〵モスクワへ獨り旅でいつた片山潜氏令孃千代子さんは、八月一日に露都について父親を訪ねた。片山氏は手携鞄を抱えてすた〳〵と入つて來、「千代子かよく來た……」と矢庭に千代子さんを抱きしめた。お父さんの片山氏は千代子さんの豫想よりずつと頑丈で若く、元氣だつた片山氏は新聞記者に語つた。「故國が懸しい？……それあ娘もこんなに大きくなつたし、家内や子供……それに世話せにあならぬ親戚まで次第に遠ざかり、家内や子供まで經濟上の迫害を受けるのを思ふと考へる。總ては諦めだ。それにまた此頃は忙しいので何もかも皆まぎれてゐる。」

◇素晴しい私設局

若い日本の發明家がツエペリン伯號飛來を機會に無線電信の實驗上驚くべき世界的記錄を作つた話――ラヂオの天才的發明家として有名な安藤博氏は今年初め洋行しドイツでツエペリン會社を訪ね無電の機械を十分硏究して歸つた。歸朝後市外千駄ケ谷の自宅に氏が苦心の受信機を据えつけ、今回訪問のツエ伯號を待ちかねてゐた。ところがこの精巧な受信機は期待に背かず驚くべき性能を發揮し、十五日にはすでにモスコーにあるツエ伯號の所在を確め、翌日にはウラルの險を越えつゝあるツエ伯號からの發信を完全に受信した。これは大每國々傳へられた落石無電局が最初に受信した時より早いこと二十四時間、正に世界的レコードである。氏は晝夜の別なく英獨文、和文、の無電を捗受すること三百語に上つたといふ。

◇キモノの奇蹟

今回のツエペリンが米國のシカゴ市の上空へその雄姿を現す前、早くも同市へセンセーションをひき起したのは、ツエ伯號より一足お先にといつた形で彼等のいふ「日本衣裳」が表はれた事だこの衣裳は霞ケ浦からロスアンゼルスまで同飛行船で二十六日朝同地に到着すると、直ぐに米國郵便飛行に移されシカゴへ先着――今やショーウヰンドに陳列され、滿都のモガ、モボを驚かせたが、東京からシカゴまでの時間が驚く勿れ四日と十八時間、正に飛行輸送の驚異的レコードとあつて、ショーウヰンドの前にはおそろしい人の山、誰の手に渡るだらうとすばらしい評判。

◇新學士が巡査志願

大學出の就職難はます〳〵ひどくなり、最近小學校出の人々と競爭して巡査を志願する者が多くなつた。本年になつて三ケ月の練習期間を經て巡査になつた者、帝大出身が四人、明大九人、關大一人、法大二人、中大一人、國大一人で合計十八人。そのうちには高文にパスした立派な學士先生が、四人ゐるといふ有樣だ。この十五日採用試驗を行ふ大阪府の試驗應募者中大學出身が二十九人もありその中には本年の卒業生が十九人もゐる。いかに就職難が深刻であるかが判るが、今日では小學卒業だけの應募者は、全體の三十人に對する三、四人の割にしか當らないといふ。大部分は中學、乃至專門學校出身者なのである。大學卒業生が自由勞働者にならうと何にならうと不思議はないが、警察官といふ職業をとる所に注意の點あり。

◇貧ゆえに追返す狂妻

長野縣諏訪郡平野村大工職島村豐一(四四)の妻えい(同)は三年前子供を生んでから生活苦のために發狂し、豐一は九歲を頭に三人の子供を抱え氣狂ひの妻があつては、さなきだに生活が苦しいからと妻を實家へ歸しておいた。同女は八月末家出して野宿中を見出され、岡谷へ行き度いと口走るので巡査が岡谷署へ照會、署では豐一を呼出して引受り方を勸めると、豐一は三兒の養育すら充分出來ず、職にあぶれ昨日は自分の着物を質入して四十錢で味噌を買つた始末、この上狂妻を引取つては親子餓死の外ないから妻を實家へ歸して貰ひたいと、岡谷署で聲を放つて泣いた。

◇發行は七世紀半の未來

ドイツでいま編纂されてゐる動物百科大辭典は、同國の動物學の泰斗といはれる學者五六人がそれぞれ分擔して執筆中である。ところが現在の進行程度ではこの大辭典が完成されるのは今後七百五十年のとほき未來だといふことになる。でも編纂員の學者諸君はそんなことには一向無頓着な顏つきでコツコツと根氣よく筆を進めてゐるのだと。

◇米國婦人の放れ業

何事にも人をアッといはせたい米國人娘、ツェ伯號がレークハーストを出發して獨逸に歸還しやうと離陸した時、人々をヤンヤと喝采させた婦人は伯母さんの見送りにきてそのまゝ大西洋を一またぎといふ放れ業。この人ホブソン夫人といひツェ伯へ同乘する伯母のパーカー夫人を見送りに來、客室の空席ある事をきいてそのまゝゴンドラに乘りこんだ。ほんの體一つ、旅劵も間に合はないので電報で手つゞきしてくれと呼んでサッサと舞ひ上つてしまつた。

◇女飛行家墜落重傷す

米國クリーブランドに開催中の全國女子飛行競技に參加中の有名な英國女流飛行家メリー・ヒース女史は飛行中機體と共に墜落大破、頭がい骨を碎き頭部にひどい裂傷を、その他澤山の負傷を受け重態である。女史は男勝りの評判で英米切つての名物女である。

◇數奇な運命の男

甲府市大宮町鈴木藤次郎養子自由勞働者鈴木猛(二四)は九月一日麻布區谷町赤間方で重クローム酸加里を飮んで自殺を圖り生命危篤。原因には小說以上の數奇な運命が織りこまれてゐる。猛の實父は陸軍豫備中將大野豐西(六二)で二十四年前府下淀合深本ふさが大野方に女中奉公中中將の胤を宿し猛を生んだが中將は世間體を憚つて里子に出し、轉々と流浪の末徵兵檢査の時戶籍謄本を見て知つた猛は以來自棄自棄になつた。ひそかに父中將を訪れて金をひき出した事もあつた。

◇鈴木常務の辭職勸告

東京瓦斯の紛爭は會社側から調停者として賴んだ澁澤子、大橋新太郎氏を市會一致で斷り、今以て續行中だが婦人市政研究會ではこのほど澁澤子爵を訪れ問題の中心たる瓦斯會社の鈴木重役等に辭職の勸告をして頂きたいと嘆願、更に瓦斯會社に鈴木常務を訪ひ、鈴木氏以下重役等に對する辭職勸告書をつきつけて迫る所あつたが、尙ほ俵商相を訪ふて今回の擧に出た事の事情を述べ裁きを促進して下さるやうと陳情した。市が一致して澁澤氏の調停を斷つたのは、「時代の力」だと新聞紙は書いた。

◇大山氏等の新黨樹立

昨年四月舊勞農黨が解散されて以來政治的自由獲得勞農同盟の名を以て潜行的な非合法運動をつゞけてきた黨主大山氏細迫氏、上村氏等は八日突如として全國各地に散在する同志へ合法政黨としての新勞農黨樹立に關する提案をした。「合法政黨の必要絕對になし」と豪語してゐた左翼陣營内に起つたこの急角度の方向轉換は注目に値する大山氏等を支持するのは勞働組合であり、ナップ、無產者新聞及び學生等は今度の擧に對して反對を聲明した。

◇鑛主が指名する勞働市議

山口縣宇部市會は議員の改選期十一月だが工業都市なのに一人も勞働者の市議がなかつたので今度の改選には市內の三大炭鑛の勞働者中から各一名宛とし鑛主が指名推薦して當選させる事に決した。萬一指名を受けた勞働者が鑛主の推薦に背いて斷つた場合には勞資協調を破るものとして直に首きる筈であるさうな。こんな御用候補が立つてどうなるものかと世論は鑛主側の腹の中を冷笑してゐる。

石井小浪孃獨立舞踊會

永年よき提携者であり指導者であつた兄漠氏の手元を離れて、石井小浪孃が最初の獨立舞踊會を、日本靑年館で催すことになつてゐる。時日は九月二十日、(金)午後七時。

因みに、今後、高勇吉夫人ヘテイ氏と提携するといふ評もある。

編輯後記

　女人聯盟地方支部の活動はめざましいものがある。どうして謝意を表してよいかとまどうほどである。力强き支持――全國いたるところに、この確固たる柱がうたれて愛讀網が張りわたされた時女人藝術は燦たる光圓に耀やき、女人大衆は手を開き胸を張つて、新興階級のため女人解放のため力强き叫びをあげるであらう。弱き肉體が堪得ずほろびるならば滅びよ、まつしぐらに進めと私の魂はささやく。一日も早く基礎をかためるためには、現在の讀者の培數を得なければならない、愛讀者諸氏のいやが上の御聲援を乞ふ。

　一にして二なき全國女人聯盟の支持に生きる本邦唯一の最高女人思想藝術雜誌「女人藝術」の盛衰は新興日本婦人全般の意氣の象徵であらねばならぬ。各階級にわたつて、廣邁なる智識を蔵される婦人は少なくないと思ふに、此唯一なる機關を利用して各々所信を述られる人の僅少なのは殘念である、寧ろあまりに生るに冷淡であるとさへ怨まれる。猶又、女性の動きに重きをおく男性は恒に決して本誌をひもとくことを忘れはしないであらう。

　十月十八日の金曜日に東京朝日新聞社講堂に於て多分「女人藝術」講演會が開催されるであらう。委しくは十月發行の本誌十一月號誌上にておしらせする。（時雨）

　私は時々妙な錯覺を起します。一月中、若しくは半月も、あくせくして一體何をしたんだらう、等と。雜誌が出來て見ると、おやこれは誰が作つたんだらう。自分たちの他の印刷所の職工さんか、製本屋のおばさん達が作つたやうな氣がするんです。これは秋風の故か、嗜眠性腦炎の徴候かも知れません。皆さんがこの小說號を愛して下すつたら、お正月には飜譯特輯號を出して女人の氣を吐かうと今から計畫してゐます。（素子）

　やつと暑さが退却したやうですね。いよ〳〵讀書の好季節です。そして小說號が出ました。實つた葡萄の房のやうに美くしくも新鮮なこの一粒づつをよく味はひつゝ讀まれんことを望みます。（優子）

　海でこげた肌の色がうすれて、こほろぎがないて秋になりました。小說號の校了まぎはの忙しさで、編輯室は、蟲の聲と、しゆんとつめたい秋の夜氣の中に浮いてゐます。疲れて、ねむくなつて、でもみんなは喜んでこの小說號を讀んでくれるだらう。そしたらずい分いいな、私達は嬉しいぞ、など思ひながら夜おそくトコトコと左内坂を降りて歸ります。（緑）

　本誌で女人新興勢力を示す創作、評論に親しむことは何といつても大きい喜びである。本號の充實は博くこの喜びを分ちあへる點に新秋第一の感銘がつよいと思ふ。私は不圖おもひついて伊豆の大島へ行つたあの噴火の島にあつてつよく『女人藝術』を思ひ浮べてその存在を祝しもし、末長き大發展をも祈られた。舊文藝と異るものは新興文藝のもつ力である。その力がこゝに湧かねばならない。

（花世）

　爽かな風がいつか、季節の頬を新しく見せ、女人藝術はこの時「小說號」で秋の花をひらきました。すべてのよきものがみのるやうに、女人聯盟も日に日に充實してゆきます。大阪支部、德島支部、の設置も近く、神戸、兩丹、關門などの支部の生れる日も待たれます。名古屋支部は誕生後、順潮に育つてゐる――かうした歡びのおとづれが日毎に編輯室へ、はいつてくるのです、岡山縣で非常な努力をして下さる西井智惠子氏に、この事をお知らせしませう。聯盟レポートは九月初旬に普く皆樣のお手許へ屆いた筈ですが、左記の方々から返送されましたから御住所を詳しく本社までお知らせねがひます。大阪市織本喜代子氏。岡山市信原愛子氏、宇都宮市山田きよみ氏。東京麹町區小谷市代氏。東京府下井荻町永松操氏。東京府下松井締子氏。二伸――支部へは直接本社より纒めて送本いたします。聯盟員の皆樣よ、先づ「誌友倍加」をスローガンに揭げて下さい。力づよく。（秋子）

昭和四年九月十五日印刷
昭和四年十月一日發行（毎月一回一日發行）

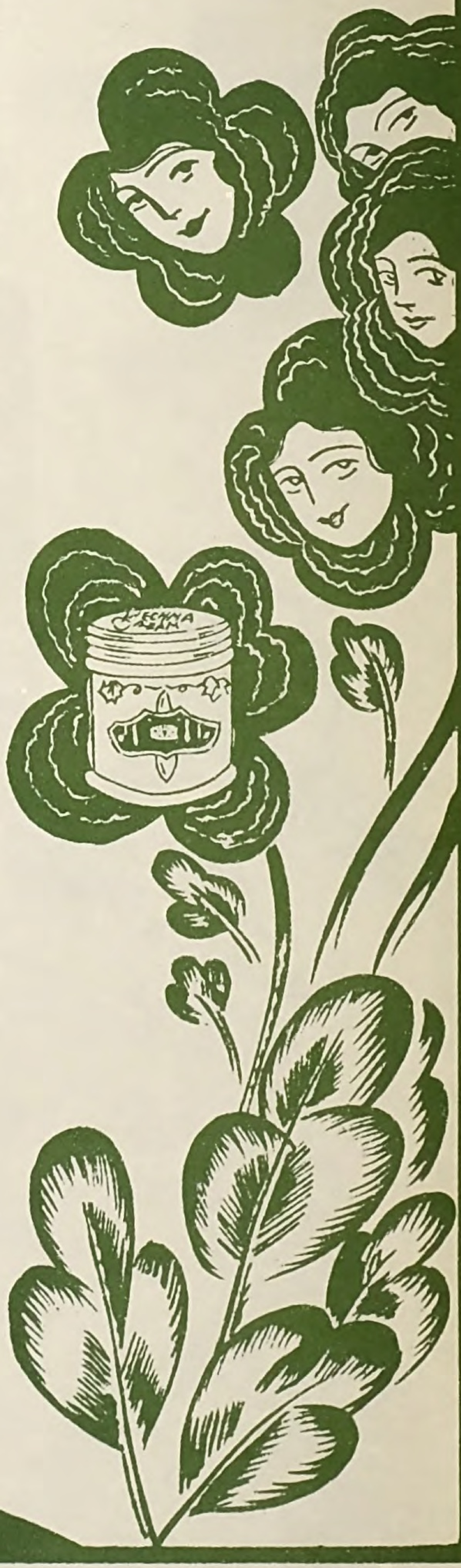
送料一部壹錢五厘

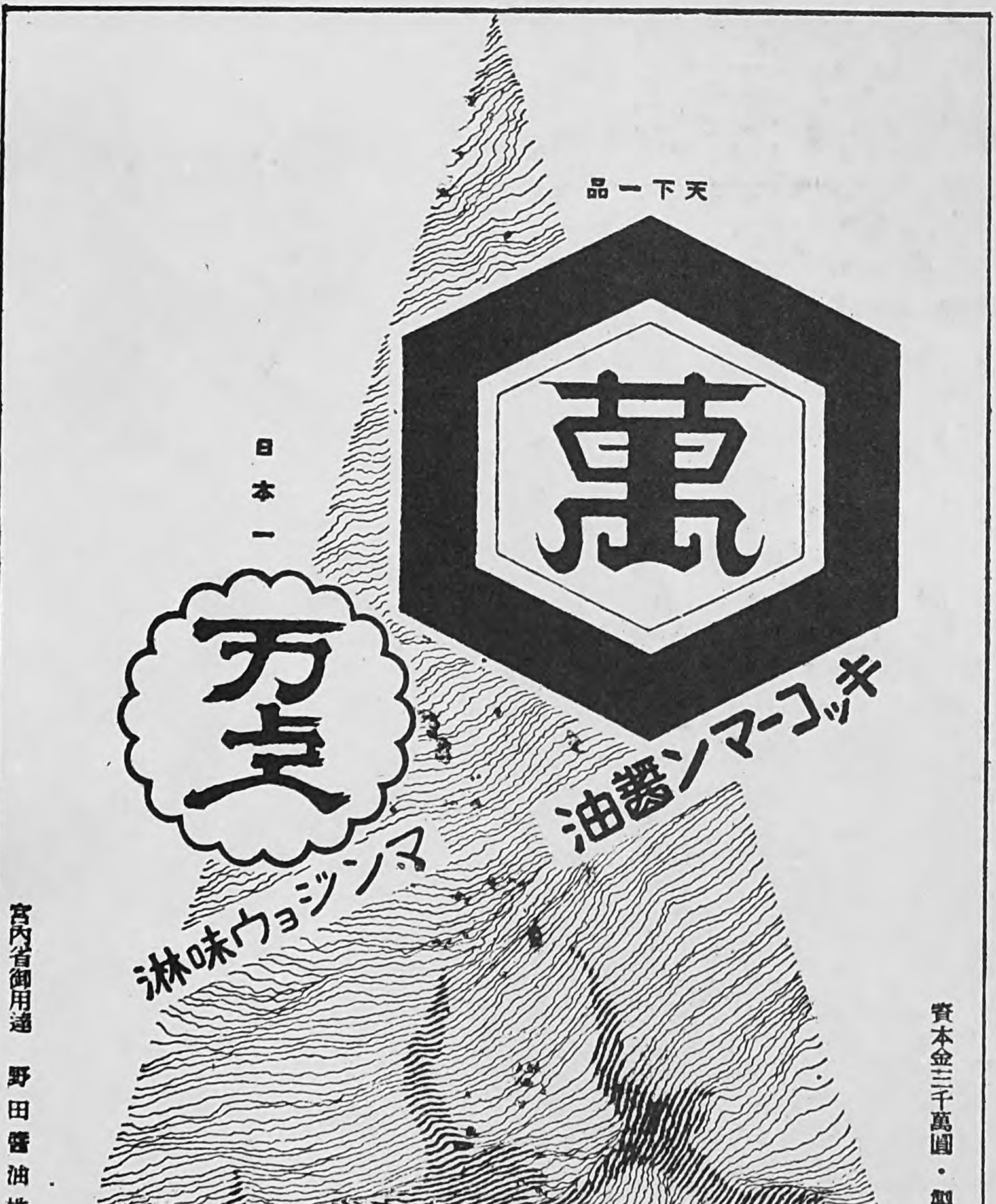
定價	
1部	40錢
6部	2.30錢
12部	4.50錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割增の事。

發行兼印刷者――長谷川時雨
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂　北隆館――大東館　東海堂

發行所　東京市牛込區左内町三十一地番
女人藝術社
電話牛込（24）一七八九
振替東京　七五八二五




天下一品
萬
キッコーマン醤油
日本一
万上
マンジョウ味淋
宮内省御用達
野田醤油株式會社
資本金三千萬圓・製造高五十萬石